

令和元年度  
山口大学の FD 活動

山口大学 教育・学生支援機構  
山口大学 教学委員会

## 第1部 全学FD活動

第1章 大学教育機構主催等のFD活動	1
第1節 大学教育機構主催等の講演会及び研修会一覧	1
第2節 大学教育機構主催等の講演会及び研修会の概要・報告	9
第2章 共通教育授業科目別部会のFD活動	81
第3章 学生授業評価及び教員授業自己評価	84
第1節 実施方法・実施状況	84
第2節 授業評価の結果について（全学）	91
第3節 学生授業評価の結果について（共通教育）	102

## 第2部 学部・研究科のFD活動

第4章 人文学部のFD活動	111
第1節 授業公開	111
第2節 学部・研究科主催FD研修会	113
第3節 教育改善に関する活動	117
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価	118
第5節 FD実施経費報告書	122
第6節 来年度の課題	122
第5章 教育学部のFD活動	124
第1節 授業公開	124
第2節 学部・研究科主催FD研修会	124
第3節 教育改善に関する活動	128
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価	128
第5節 FD実施経費報告書	129
第6節 来年度の課題	129
第6章 経済学部のFD活動	130
第1節 授業公開	130
第2節 学部・研究科主催FD研修会	130
第3節 教育改善に関する活動	132
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価	132
第5節 FD実施経費報告書	134
第6節 来年度の課題	134
第7章 理学部のFD活動	135
第1節 授業公開	135
第2節 学部・研究科主催FD研修会	143
第3節 教育改善に関する活動	147

第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	149
第5節	F D実施経費報告	151
第6節	来年度の課題	151
第8章	医学部のF D活動	153
第1節	授業公開	153
第2節	学部・研究科主催F D研修会	154
第3節	教育改善に関する活動	166
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	172
第5節	F D実施経費報告書	172
第6節	来年度の課題	173
第9章	工学部のF D活動	175
第1節	学部・研究科主催F D研修会	175
第2節	教育改善に関する活動	182
第3節	学生授業評価・教員授業自己評価	183
第4節	F D実施経費報告書	188
第5節	来年度の課題	188
第10章	農学部のF D活動	189
第1節	授業公開	189
第2節	学部・研究科主催F D研修会	189
第3節	教育改善に関する活動	193
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	193
第5節	F D実施経費報告書	198
第6節	来年度の課題	198
第11章	共同獣医学部のF D活動	199
第1節	授業公開	199
第2節	学部・研究科主催F D研修会	202
第3節	教育改善に関する活動	206
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	207
第5節	F D実施経費報告書	208
第6節	来年度の課題	209
第12章	国際総合科学部のF D活動	210
第1節	授業公開	210
第2節	学部・研究科主催F D研修会	212
第3節	教育改善に関する活動	217
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	217
第5節	F D実施経費報告書	217

第 6 節	来年度の課題	218
第 13 章	人文科学研究科の F D 活動	219
第 1 節	授業公開	219
第 2 節	学部・研究科主催 F D 研修会	219
第 3 節	教育改善に関する活動	219
第 4 節	学生授業評価・教員授業自己評価	219
第 5 節	F D 実施経費報告書	221
第 6 節	来年度の課題	221
第 14 章	教育学研究科の F D 活動	222
第 1 節	授業公開	222
第 2 節	学部・研究科主催 F D 研修会	222
第 3 節	教育改善に関する活動	223
第 4 節	学生授業評価・教員授業自己評価	223
第 5 節	F D 実施経費報告書	224
第 6 節	来年度の課題	224
第 15 章	経済学研究科の F D 活動	225
第 1 節	授業公開	225
第 2 節	学部・研究科主催 F D 研修会	225
第 3 節	教育改善に関する活動	226
第 4 節	学生授業評価・教員授業自己評価	226
第 5 節	F D 実施経費報告書	228
第 6 節	来年度の課題	228
第 16 章	医学系研究科の F D 活動	229
第 17 章	創成科学研究科の F D 活動	230
理学系		
第 1 節	授業公開	230
第 2 節	学部・研究科主催 F D 研修会	233
第 3 節	教育改善に関する活動	233
第 4 節	学生授業評価・教員授業自己評価	233
第 5 節	F D 実施経費報告書	234
第 6 節	来年度の課題	235
農学系		
第 1 節	授業公開	236
第 2 節	学部・研究科主催 F D 研修会	236
第 3 節	教育改善に関する活動	237
第 4 節	学生授業評価・教員授業自己評価	237

第5節	F D実施経費報告書	242
第6節	来年度の課題	242
第18章	東アジア研究科のF D活動	243
第1節	授業公開	243
第2節	研究科主催F D研修会：その1	243
第3節	研究科主催F D研修会：その2	244
第4節	教育改善に関する活動及び教員による授業評価	245
第5節	学生授業評価・教員授業自己評価	246
第6節	F D実施経費報告書	246
第7節	来年度の課題	246
第19章	大学院技術経営研究科のF D活動	247
第1節	授業公開	247
第2節	学部・研究科主催F D研修会	249
第3節	教育改善に関する活動	259
第4節	学生授業評価・教員授業自己評価	259
第5節	F D実施経費報告書	267
第6節	来年度の課題	267
第20章	共同獣医学研究科のF D活動	268
2019年度	山口大学 教学委員会 名簿	
2019年度	山口大学 学部・研究科F Dコーディネータ 名簿	
2019年度	山口大学 大学教育センター 名簿	

## 第 1 部 全学 F D 活動

# 第1章 大学教育機構主催等のFD活動

山口大学のFD活動は全学レベルと学部・研究科レベルで実施されている。本章では、全学レベルのFD活動として大学教育機構および事務局が主催するFD活動の報告を行う（一部にSD・TAD活動を含む\*）。  
 ※FD(Faculty Development、大学教員の職能開発)、SD(Staff Development、大学職員の職能開発)、TAD(Teaching Assistant Development、大学院生が行うTAの職能開発)。

## 第1節 大学教育機構主催等の講演会及び研修会一覧

以下の表は2019年度の大学教育機構主催FD講演会・研修会の一覧である。講演会は新型コロナウイルス感染症により資料配布のみとなった。また研修会は計16回開催され、参加者は計778名であった。また、各学部・研究科と大学教育機構が共同で実施する「教育改善研修会」への参加者は合計387名であった。延べ1,165名が本年度はFD活動を行った計算となる。多くの教職員は自主的に、また職務上の必要性から参加し、積極的にFD活動を実施した。

I 講演会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	高大接続改革について～高校教育改革と大学入学者選抜を見つめて～	2020年3月2日(水)	13:30～16:30	吉田地区・常盤地区・小串地区	メディア棟情報メディア講義室 工学部E31番教室 医学部総合研究棟多目的室	松村直樹(ℓリアセック取締役)、平井利文(下関西高等学校教諭)、高田裕治(野田学園高等学校教諭)、林寛子(山口大学アドミッションセンター准教授)他	本学教育職員ほか及び県内他大学関係者	高大接続改革をテーマに、高等学校教育における生徒育成の現状と課題、これまでの大学入学者選抜に関する各種分析と今後の対応方策、さらには、将来を見据えた大学教育のあり方などについて話題提供するとともに、フロアとの意見交換を通して、みんなで考えていく。	43名 (新型コロナウイルス感染症により資料配布のみ(人数))
									参加者

II 研修会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	新任教員研修会(第1回)	2019年4月3日(水)	13:30～17:00	吉田地区・常盤地区・小串地区	メディア講義室 工学部D11講義室 医学部総合研究棟多目的室	岡正朗(学長)、堀憲次(副学長)、田中和広(副学長)、根ヶ山徹(副学長)、福田隆真(副学長)、木村友久(知財教育センター長)、菊政勲(大学教育センター長)、林透(大学教育センター准教授)、岡田耕一(大学教育センター講師)岡田菜穂子(学生支援センター准教授)	(1)前回の研修会(2018年9月27日)以降に本学の教育職員(附属学校を除く。)となった者。 (2)上記の日以前に本学の教育職員となった者で本研修未受講者のうち受講を希望する者。	新任教員を対象として、本学において教育活動や研究活動を実施していく上で必要な知識・情報等について説明し、本学の教育職員として相応しい認識を高めると共に、大学運営に関する理解を深める。	教員37名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
2	共通教育TA・SA研修会	2019年4月5日(金)	13:00～15:00	吉田地区・常盤地区・小串地区	共通教育1番教室 工学部E31番教室 医学部総合研究棟多目的室	菊政 勲(大学教育センター長)、岡田菜穂子(学生支援センター准教授)、森本宏志(保健管理センター准教授)、岡田耕一(大学教育センター講師)、	共通教育においてTAに採用された大学院生、SAに採用された学部生、およびTA・SAを採用する教員	TA・SAの役割や責任、また、各分科会に分かれて、それぞれの授業におけるTA・SAの仕事の確認と留意点などについて理解を深める。	教職員18名 学生188名
3	各学部・研究科FDコーディネータ研修会	2019年5月8日(水)	17:40～18:30	吉田地区・常盤地区・小串地区	各地区第1テレビ会議室	菊政 勲(大学教育センター長)、林透(大学教育センター准教授)	各学部・研究科のFDコーディネータ	各学部・研究科のFDコーディネータを対象に、本年度の機構主催のFD計画について説明するとともに、各学部でFD計画を立てる際に注意すべき点やFD予算要求の際の注意点などについて研修を行う。	教職員15名
4	情報セキュリティ管理対策とその実装について～ISMS構築事例の紹介～	2019年7月17日(水)	15:00～15:40	吉田地区	教育学部21番教室	王躍(メディア基盤センター准教授)	希望者	ISMS(情報セキュリティマネジメントシステム)の国際規格ISO/IEC27001:2013(JISQ27001:2014)に基づいた情報セキュリティを管理する仕組みをできるだけわかりやすく紹介する。そして情報セキュリティ目標を達成するための対策とその実装を山口大学におけるISMS構築の実例を用いて解説。	教職員77名
5	FD・SDワークショップ 「学生調査」入門講座～学生調査の見方、活かし方について考える～	2019年7月19日(木)	16:10～18:00	吉田地区	教育学部26番教室	林透(大学教育センター准教授)、高林友美(大学教育センター助教)	希望者	「学生調査」の作り方、分析や活用の仕方の基礎を学ぶとともに、参加者が抱える諸課題について対話しながら解決に繋げる機会を提供する。	教職員30名



	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
6	新任教員研修会(第2回)	2019年9月25日(水)	13:30～17:00	吉田地区	事務局2号館4階第2会議室	菊政勲(大学教育センター長)、静屋智(教育学部教授)、王躍(メディア基盤センター准教授)、林透(大学教育センター准教授)、藤原勇(大学教育センター准教授)	(1)前回の研修会(2018年9月27日)以降に本学の教育職員(附属学校を除く。)となった者。 (2)上記の日以前に本学の教育職員となった者で本研修未受講者のうち受講を希望する者。	新任教員を対象として、本学において教育活動や研究活動を実施していく上で必要な知識・情報等について説明し、本学の教育職員として相応しい認識を高めると共に、大学運営に関する理解を深める。	教員18名
7	障害等のある学生への支援シミュレーション	2019年10月16日(水)	13:30～14:00	吉田地区	農学部・共同獣医学部大会議室	岡田菜穂子(学生支援センター准教授)、田中垂矢巳(学生支援センターカウンセラー)	希望者	これまで学生特別支援室で対応してきた事例を参考に、支援ニーズのある学生を想定して、学生特別支援室の利用の仕方や、他の相談窓口との連携要領、授業中の支援の実施について、シミュレーションしながら説明する。また、学部特性を踏まえた修学支援の難しさなどについて情報・意見交換を行う。	教職員26名
8	FD・SDワークショップ 第3回ALベストティーチャーによる模擬授業	2019年10月29日(月)	16:10～18:00	吉田地区	共通教育26番教室(アクティブ・ラーニング教室)	中溝朋子(留学生センター教授)、霜川正幸(教育実践総合センター教授)	希望者	昨年度アクティブ・ラーニング・ベストティーチャーに選ばれた先生から授業設計や授業実践の手法を学ぶ	教職員21名 学生4名
9	大学生・大学院生の抱えやすい課題と学生相談の現状	2019年11月20日(水)	15:00～15:30	吉田地区	教育学部21講義室	春日由美(学生相談所長・教育学部准教授)	希望者	①学生相談とはどのようなものか ②大学生の各時期(入学期、2年・3年、卒業期)や大学院生の時期に抱えやすい課題や危機 ③本学の学生支援の体制、学生相談所の概要や利用状況 ④教職員の立場での一般的な対応や守秘義務等の注意点、効果的な学生相談所の利用方法 ⑤外部の専門機関の紹介 以上のことについて学生相談所担当者から説明。	教職員72名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
10	2019ラーニングアドバイザー養成講座	①2019年11月21日(木) ②2019年12月19日(木)	13:30～ 17:00	吉田地区	共通教育棟2階会議室	我妻鉄也(千葉大学アカデミックリンクセンター特任助教)、中嶋克成(徳山大学特任講師)	希望者	学修支援の担い手(ラーニング・アドバイザー)にとって必要な基礎知識と実践力を身に付けることを目的とした養成講座(2日間プログラム)。	教職員14名
11	障害等のある学生への支援シミュレーション	2019年12月11日(水)	14:00～ 14:30	常盤地区	工学部D11講義室	岡田菜穂子(学生支援センター准教授)、田中亜矢巳(学生支援センターカウンセラー)	希望者	これまで学生特別支援室で対応してきた事例を参考に、支援ニーズのある学生を想定して、学生特別支援室の利用の仕方や、他の相談窓口との連携要領、授業中の支援の実施について、シミュレーションしながら説明する。また、学部特性を踏まえた修学支援の難しさなどについて情報・意見交換を行う。	教職員36名
12	大学マネジメントセミナー2019 in やまぐち	2019年12月20日(金)	14:30～ 16:30	吉田地区	大学会館2F会議室	吉田富士江(大阪大学共創機構特任専門職員)、平山喜雄(法政大学教育支援統括本部長・学務本部長)	希望者	組織経営に関する専門家を招へいした基調講演を行うほか、参加者によるグループワークを通して、各大学共通のテーマやノウハウの共有を図りながら、山口地域の大学職員の人的ネットワークづくりの強化を促進することを目的とする。	教職員77名
13	学生の主体的な学びを引き出す授業デザイン～シラバス点検からはじめてみよう！～	2020年1月21日(火)	13:30～ 14:30	小串地区	医学部保健学科第2研究棟HD1-1教室	林透(大学教育センター准教授)	希望者	シラバス入力はもとより、各記載項目の意味を再確認しながら、シラバス記載内容の点検を行い、学生の主体的な学びを引き出す授業デザインのヒントを紐解く。具体的な実践事例や教育効果を紹介し、シラバス点検に立ち返った授業デザインの有用性を共有する。	教職員38名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
14	大学生・大学院生の抱えやすい課題と学生相談の現状	2020年3月10日(火)	15:00～15:35	吉田地区	人文・理学部大会議室	春日由美(学生相談所長・教育学部准教授)	希望者	①学生相談とはどのようなものか ②大学生の各時期(入学期、2年・3年、卒業期)や大学院生の時期に抱えやすい課題や危機 ③本学の学生支援の体制、学生相談所の概要や利用状況 ④教職員の立場での一般的な対応や守秘義務等の注意点、効果的な学生相談所の利用方法 ⑤外部の専門機関の紹介 以上のことについて学生相談所担当者から説明。	教職員59名
15	大学における授業のあり方を考える～高校までの卒業、教育改革の動向を踏まえて～	2020年3月19日(木)	14:30～15:00	吉田地区	人文・理学部大会議室	和泉研二(教職センター副センター長・教育学部教授)	希望者	高校までに行われている授業、「主体的で対話的な深い学び」を掲げる新しい学習指導要領、最近の教育改革の考え方などを踏まえながら、これからの大学生に対する授業づくりについて、ともに考える。	教職員38名
16	山口大学 共育ワークショップ 2020代替企画 (第16回YU-APアドバイス会議) 直接評価×間接評価のチャレンジ～どうすれば、学生の自己評価能力が高まるか～	2020年3月23日(月)	13:30～16:30	吉田地区	大学会館2階会議室	山田礼子(同支社大学社会学部教授)、斎藤有吾(新潟大学経営戦略本部准教授)、木村友久(山口大学知的財産センター長・教授)、佐藤晃一(山口大学共同獣医学部長・教授)、林透(山口大学大学教育センター准教授)	希望者	YU-AP事業最終年度に当たり、本事業目標の特徴の一つである「直接評価×間接評価活用による学修成果可視化」をテーマに、これまでの取組を振り返り、今後に向けた課題等について考える。 今回は、新型コロナウイルスの関係で、自由参加によるワークショップ形式での開催を中止にせざるを得ず、YU-AP事業成果報告を兼ねたアドバイス会議という形式での開催となった。	教職員・学生 10名
									参加者 計778名

Ⅲ 教育改善研修会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	大学教育センターと理学部、創生科学研究科(理学系)との教育改善FD研修会	2019年10月9日(水)	15:00～15:30	吉田地区	人文・理学部大会議室	林透(大学教育センター准教授)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会は「学修ポートフォリオ」をテーマに実施する。修学支援システムにおいて運用可能な「学修ポートフォリオ」の機能や意義を説明し、意見交換を行う。	教員47名
2	大学教育センターと教育学部・教育学研究科(教職大学院を含む)・東アジア研究科(教育系)との教育改善FD研修会	2019年10月16日(水)	15:00～15:40	吉田地区	教育学部21番教室	林透(大学教育センター准教授)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会は「学修ポートフォリオ」をテーマに実施する。修学支援システムにおいて運用可能な「学修ポートフォリオ」の機能や意義を説明し、意見交換を行う。	教員80名
3	大学教育センターと共同獣医学部、連合獣医学研究科との教育改善FD研修会	2019年10月23日(水)	13:40～14:10	吉田地区	共同獣医学部本館2階大会議室	林透(大学教育センター准教授)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会は「学修ポートフォリオ」をテーマに実施する。修学支援システムにおいて運用可能な「学修ポートフォリオ」の機能や意義を説明し、意見交換を行う。	教員18名
4	大学教育センターと工学部、創成科学研究科(工学系)との教育改善FD研修会	2019年11月13日(水)	14:20～15:00	常盤地区	工学部D11教室	林透(大学教育センター准教授)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会は「学修ポートフォリオ」をテーマに実施する。修学支援システムにおいて運用可能な「学修ポートフォリオ」の機能や意義を説明し、意見交換を行う。	教員24名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
5	大学教育センターと経済学部・経済学研究科・東アジア研究科(経済系)との教育改善FD研修会	2019年11月20日(水)	15:00～ 15:30	吉田地区	経済学部第1会議室	林透(大学教育センター准教授)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会は「学修ポートフォリオ」をテーマに実施する。 修学支援システムにおいて運用可能な「学修ポートフォリオ」の機能や意義を説明し、意見交換を行う。	教員56名
6	大学教育センターと医学部保健学科、医学系研究科との教育改善FD研修会	2019年12月4日(水)	13:00～ 13:40	小串地区	医学部本館6階第1会議室	林透(大学教育センター准教授)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会は「学修ポートフォリオ」をテーマに実施する。 修学支援システムにおいて運用可能な「学修ポートフォリオ」の機能や意義を説明し、意見交換を行う。	教員36名
7	大学教育センターと農学部、創生科学研究科(農学系)との教育改善FD研修会	2019年12月18日(水)	13:30～ 14:00	吉田地区	農学部大会議室	林透(大学教育センター准教授)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会は「学修ポートフォリオ」をテーマに実施する。 修学支援システムにおいて運用可能な「学修ポートフォリオ」の機能や意義を説明し、意見交換を行う。	教員26名
8	大学教育センターと人文学部・人文科学研究科・東アジア研究科(人文系)との教育改善FD研修会	2020年1月15日8(水)	14:30～ 15:10	吉田地区	人文・理学部大会議室	林透(大学教育センター准教授)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会は「学修ポートフォリオ」をテーマに実施する。 修学支援システムにおいて運用可能な「学修ポートフォリオ」の機能や意義を説明し、意見交換を行う。	教員41名

	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
9	大学教育センターと技術経営研究科(MOT)との教育改善FD研修会	2020年2月12日(水)	15:00～16:00	常盤地区	大学院技術経営研究科棟1階会議室	林透(大学教育センター准教授)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会は「学修ポートフォリオ」をテーマに実施する。修学支援システムにおいて運用可能な「学修ポートフォリオ」の機能や意義を説明し、意見交換を行う。	教員12名
10	大学教育センターと医学部医学科、医学系研究科との教育改善FD研修会	2020年2月12日(水)	13:00～13:40	小串地区	医学部本館6階第1会議室	林透(大学教育センター准教授)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会は「学修ポートフォリオ」をテーマに実施する。修学支援システムにおいて運用可能な「学修ポートフォリオ」の機能や意義を説明し、意見交換を行う。	教員27名
11	大学教育センターと国際総合科学部との教育改善FD研修会	2020年2月19日(水)	15:00～16:00	吉田地区	国際総合科学部2階大会議室	林透(大学教育センター准教授)	各学部・研究科の全教員	今年度の教育改善FD研修会は「学修ポートフォリオ」をテーマに実施する。修学支援システムにおいて運用可能な「学修ポートフォリオ」の機能や意義を説明し、意見交換を行う。	教員20名
									参加者計387名

## 第2節 大学教育機構主催等の講演会及び研修会の概要・報告

### 1. 研修会

#### (1) 2019年度「新任教員研修会（第1回）」実施報告

1. 主催 山口大学 大学教育機構および総務企画部人事課
2. 日時 2019年4月3日（水）13:30～17:00
3. 会場および実施方法（各地区の遠隔講義室を利用し、研修会を実施する）  
吉田地区：メディア講義室（主会場）  
小串地区：総合研究棟多目的室（8階）（遠隔中継）  
常盤地区：工学部 D21 講義室（遠隔中継）
4. 対象者  
(1) 前回の研修会（2018年9月27日）以降に本学の教育職員（附属学校を除く。以下同じ。）となった者。  
(2) 上記の日以前に本学の教育職員となった者で本研修未受講者のうち受講を希望する者。
5. 参加者数：37名《昨年度37名》  
(内訳) 吉田地区：15名《昨年度12名》、小串地区：15名《昨年度15名》  
常盤地区：7名《昨年度10名》  
アンケート回収：35枚（回収率94.6%）

#### 6. 内容

本研修の目的は、新任教員を対象として、本学において教育活動や研究活動を実施していく上で必要な知識・情報等について説明し、本学の教育職員として相応しい認識を高めると共に、大学運営に関する理解を深めることにある。年2回（第1回目4月、第2回目9月）開催されることとなっている。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	4	11.4%
良かった	23	65.7%
どちらとも言えない	6	17.1%
あまり良くなかった	2	5.7%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	35	100.0%

具体的には、第1部および第2部の2部構成となっており、第1部では総務企画部人事課が提供するメニューとして、大学の経営方針や新任教員として知っておくべき基礎知識を中心に説明を行い、第2部では大学教育機構が提供するメニューとして、授業運営や学生対応において知っておくべき基礎知識や注意点を中心に説明を行った。

まず、第1部では、岡 正朗 学長より山口大学の経営方針、現状と課題、さらには、2019年度に取り組むべき重要項目について講話があり、新任教員に向けて期待を込めたメッセージが送られた。その後、学術研究担当、人事労務担当、学術情報担当の副学長（堀 憲次 副学長、田中 和広 副学長、根ヶ山 徹 副学長）より新任教員として知っておくべき基礎知識を中心に説明があったほか、大学研究における知的財産の留意点や個人



情報の取扱いについて担当教職員（木村 友久 知財教育センター長、河上 喜弘 総務企画部 総務課法規係長）から説明があった。

次に、第 2 部では、福田 隆眞 教育学生担当副学長及び菊政 勲 大学教育センター長から大学教育機構の組織や共通教育の特徴について説明があった後、林 透 大学教育センター准教授より「授業の設計と実施方法について」、岡田 菜穂子 学生支援センター准教授より「障がい学生支援について」、岡田 耕一 大学教育センター講師より「修学支援システムの使い方について」と題して、授業運営や学生支援において知っておくべき基礎知識や注意点について説明を行った。研修会の途中では、参加する新任教員自身が「授業において大事にしていること、大事にしたいこと」をペアで話し合うワークを取り入れながら、新しく担当する授業に向けた心構えを共有し、参加者同士の意識を高め合った。



参加者は前年度並みの参加者があり、参加者アンケートについては、満足度 78.1%（非常に良かった+良かった）であり、自由記述では「山口大学の方針や授業の取り組み方について、確認できたのが良かった」「授業、AL の実践などについて役に立ちそうなことがありました」といった肯定的なコメントが見られた。





## (2) 2019年度「共通教育TA・SA研修会」実施報告

1. 主催 山口大学 大学教育機構
2. 日時 2019年4月5日(金) 13:00~14:30
3. 場所 全体研修：共通教育1番教室、  
工学部D棟21番教室(遠隔中継)、  
医学部総合研究棟8階多目的室(遠隔中継)  
個別研修：共通教育棟(分科会ごと(吉田キャンパスのみ))
4. 対象 共通教育においてTA・SAに採用予定の大学院生・学部生で今回初めて採用された者、およびTA・SAを採用する教員
5. 参加者数：206名(学生188名, 教職員18名)《昨年度173名》  
(内訳)  
吉田地区：155名(学生138名, 教職員17名)《昨年度171名》  
小串地区：4名(学生4名)《昨年度2名》  
常盤地区：47名(学生46名, 教職員1名)《昨年度0名》  
アンケート回収：114枚(回収率55.3%)

### 6. 内容

#### (1) 第1部 全体研修 13:00~14:00

最初に、菊政 勲 大学教育センター長より「共通教育の特徴とTA・SAの職務内容と注意点」と題して、現行の共通教育カリキュラム編成と特徴、さらには、TA・SAの基本的な心構えについて説明があった。

その後、岡田 菜穂子 学生支援センター・学生特別支援室 准教授より「障がいを持つ学生の対応について」、岡田 耕一 大学教育センター講師より「出席確認システムと修学支援システムの宿題提出機能の使い方」、森本 宏志 全学労働安全衛生管理室主任・保健管理センター准教授より「大学の授業における安全衛生」と題して説明があり、TA・SAとして知っておくべき個別事項について学んだ。最後に、野村 治宣 教育支援課教育企画係長より「TA・SAの諸手続について」説明があった。



設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	20	17.5%
良かった	67	58.8%
どちらとも言えない	25	21.9%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	2	1.8%
無回答	0	0.0%
合計	114	100.0%



(2) 第2部 個別研修 14:10～

吉田地区のみの開催であった個別研修として、「情報処理」、「生物学実験」、「多人数・講義系授業科目」、「実験系安全教育」の分科会に分かれて研修を実施した。なお、実験系安全教育の分科会を今年度から新たに開講した。

今年度は、常盤キャンパスでの受講生が例年並みに回復し、3キャンパス合計で200名を超える大勢の参加者があった。また、参加者アンケートについて、満足度76.3%（非常に良かった+良かった）となり、前年度の65.5%を大幅に上回り、満足度の高いものとなった。



### (3) 2019年度 各学部・研究科 FD コーディネータ研修会 実施報告

1. 主催：山口大学 大学教育機構 大学教育センター
2. 日時：2019年5月8日（水）17:40～18:30
3. 会場および実施方法（各地区の遠隔講義室を利用し、研修会を実施する）  
各地区第1テレビ会議室
4. 対象者：各学部・研究科 FD コーディネータ

#### 5. 内容

本研修の目的は、各学部・研究科が FD 計画を策定時に、大学教育機構が企画・提供する各種研修会（全学 FD・SD 講演会，講師派遣型アラカルト研修会，教育改善 FD 研修会など）を組み込む際に、それぞれの研修内容や FD 経費の予算について理解を深めることにある。

具体的には、「1. 本年度の大学教育機構が企画・提供する各種研修会の概要について」「2. 各学部・研究科の FD 計画の立て方について」「3. FD 経費の予算について」「4. 意見交換」の順序で、同研修会が進められた。

まず、本年度の大学教育機構が企画・提供する各種研修会の概要について、林 透 大学教育機構 大学教育センター准教授より説明があった。具体的には、本年度の各種研修会の方針として、大学教育の入口に当たる「高大接続」と出口に当たる「社会接続」を意識した内部質保証の整備が求められている状況を踏まえながら、授業を中心とした教育と学生自身の主体的な学修の質的充実に力点を置きたい旨、説明があった。その後、本学の FD 研修の3本柱である「Ⅰ. 全学対象の講演会・研修会・ワークショップ」「Ⅱ. 講師派遣型アラカルト研修会（学部・研究科の FD 活動に大学教育センター等から講師を派遣し実施する研修会）」「Ⅲ. 教育改善 FD 研修会（学内統一テーマによる学部・研究科主催 FD 研修会）」の具体的な研修メニューについて説明を行った。

次に、各学部・研究科の FD 計画の立て方及び FD 経費の予算について、同じく、林 透 大学教育機構 大学教育センター准教授より説明があった。具体的には、「2019年度 各学部・研究科 FD 計画の策定について（依頼）」に基づき、各学部・研究科における FD 計画及び所要経費を所定様式にとりまとめ、5月末までに提出するように依頼を行った。併せて、当該 FD 計画を策定する際の留意点について詳細に説明を行った。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	2	15.4%
良かった	6	46.2%
どちらとも言えない	5	38.5%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	13	100.0%



最後に、FD コーディネータとの意見交換において、菊政 勲 大学教育機構 大学教育センター長から、本年度のFD活動を効果的に進める上で、各学部・研究科FDコーディネータの先生方の存在が非常に大切であり、ご協力とご支援いただきたい旨の発言があった。その後、本年度の教育改善FD研修会の開催時期や所要時間に関する質疑のほか、教育改善FD研修会のテーマである学修ポートフォリオに関する大学の基本的考え方の提示の要望があった。

学内のFD活動を行っていく上で、大学教育機構と各学部・研究科FDコーディネータとの連絡調整は大事な機能であり、本研修会を契機に、お互いの役割を明確化しながら、FD活動の継続的な充実を図っていきたい。



#### (4) 教育学部 FD 研修会「情報セキュリティ管理対策とその実装について～ISMS 構築事例の紹介～」

日時 令和元年 07 月 17 日(水) 15:00～15:40

場所 教育学部 講義棟 2 階 21 番教室

参加者 77 名 (アンケート回収 24 名)

担当者 王 躍 (メディア基盤センター准教授)

##### 内容

はじめに教育学部 FD コーディネーターの飯寄教授より講師紹介があり、その後講演に入った。

王准教授からは、情報セキュリティ管理対策に関して ISO / JISQ 270001 で定められた国際規格である ISMS (Information Security management System) の紹介があり、情報セキュリティの 3 要素 (機密性、完全性、可用性) を維持する事の重要性をはじめとして、ISMS の構築手法(トップダウンによる体制の構築、適用範囲(組織、資産、技術、サービス等)の決定、リスクの洗い出し、リスクアセスメント、適用宣言書による対策方針の決定、リスク対応計画の策定)や、実際の運用、パフォーマンス評価(管理策の有効性測定や、内部監査、マネジメントレビュー等)、指摘に対する改善等々に関するこれまでの経緯や状況、平成 20 年 10 月に初めて ISMS の認証を受けた際には、国立大学として 3 番目の認証取得であったこと、メディア基盤センターだけで始めた当初はセンター系で 20 名規模の組織としては初めてのケースであったこと、現在は工学部の技術部、理学部の web サーバー、教育支援課(修学支援システム)等も ISMS の適用範囲に入っていること等が紹介された。

ISMS とは別にもう一つ CSIRT (Computer Security Incident Response Team) 対応に関する活動の紹介もあった。NII-SOCS からの通報や山大独自のログ監視による不審な通信の検出、自己申告等を起点にウイルス感染に関する調査を行っている状況について、どのような事象が発生していて、どのような調査を行っているのか等について実例を交えながらの注意喚起が行われた。

情報セキュリティ管理の課題としては、組織的な取り組みや、CSIRT の取り組みが必要だが、課題が山積しており、十分な管理がなされていないケースも散見されるとのことであった。これに対して、講師の王先生からは「私見ではあるが」と断りを入れたうえで、情報処理安全確保支援士という国家資格の制度もあるので積極的に利用されてはどうかと提案もあり、それぞれの組織に人材を確保できれば、楽に対応が出来るようになるのではないかとコメントされていた。

##### 質疑応答

特に質問等はなかった。

##### 設問1

##### 研修会に参加した感想はいかがでした？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	0	0.0%
良かった	9	37.5%
どちらとも言えない	9	37.5%
あまり良くなかった	1	4.2%
良くなかった	3	12.5%
無回答	2	8.3%
合計	24	100.0%



## アンケート

以下のような内容が見られた。

### 感想

- 16 枚目以降の研修をもっと詳しくやって欲しい。どんな画面が出たらどこに連絡すればよいのかなど具体的な指導が必要。
- 15 名目以前の内容は不要と考える(学部教員には直接的には不要、部局のセキュリティ委員会等の特定メンバのみで十分)。
- 具体的な内容(対策)がほとんど紹介されていない。何度も同じ話を聞かされている。
- 情報セキュリティ管理対策の具体が効きたかったが、そのような研修内容ではなかったと思う。
- 何についての話か分かりませんでした。
- 時間を守って欲しいです。
- 情報セキュリティについて理解を深めることが出来た。馴染みが薄い用語も多く、やや抽象的で分かりにくい箇所があった。もう少しだけ具体的で身近な例などを用いて説明して頂いたら、さらに理解が深まったかもしれません。セキュリティの専門家の数が不足していることが分かった。

### 希望の研修内容

- ネットワークフォルダの組織的な活用方法、及びセキュリティ確保についての研修(具体的な内容、すぐに活用できる内容が望ましい)。

- 教育・研究の役に立つ実践的な内容の堅守であれば参加したい。
- ホントに有効な会ギや委員会の運営ノウハウ
- 組織として諸業務を整理する(新たにプロジェクトに取り組む際には本当に必要でない仕事はやめてしまう)。
- 合理的配慮の実施例の紹介
- 授業の評価方法
- ネットワークにかかわるセキュリティ情報は変化の大きい領域だと考えられますので、対策は知っておきたいと思っています。
- はじめに流れと目的を明確に示してくれると集中して聞けると思えた。やや受動的な研修だったので、集中力がつづかなかった。
- ICT を用いた Active Learning 的活動のアイデア
- わかりやすい話し方
- 大学運用や諸問題について

### 実施時期

- 別の日程で全学的に行う。
- 月 1 回の会議なので会議を優先すべきと考えます。

以上



(5) 山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)  
FD・SDワークショップ  
『「学生調査」入門講座  
～学生調査の見方、活かし方について考える～』開催報告

**日時**：2019年7月19日(木) 16:10～18:00

**場所**：山口大学 共通教育棟26番教室(吉田キャンパス)

**参加者**：30名(学内16名、学外14名)

**主催**：山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)

**対象**：学内外の大学教職員、高等学校関係者ほか

**構成**：

16:10～16:15 開会挨拶・趣旨説明

16:15～17:15《レクチャー & ミニワーク》

『「学生調査」の設計・分析・活用の基礎を学ぶ』

高林 友美 山口大学 大学教育機構

大学教育センター(YU-AP推進室)

助教(特命)

17:15～17:55《ダイアログ・セッション》

『「学生調査」の見方、活かし方について話し合ってみよう!』

ファシリテーター：

林 透 山口大学 大学教育機構

大学教育センター(YU-AP推進室)

准教授

17:55～18:00 クロージング・閉会挨拶

[総司会・進行：山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透]

**到達目標**：・学生調査の基礎知識と意義を説明できる

・学生調査の設計のポイントを踏まえたアンケート立案ができる

・学生調査の複数の分析方法から文脈に適したものを選べる

・学生調査の活用について、ロジックモデルに基づいて議論できる

**内容**：

2019年7月10日(木)午後、山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)FD・SDワークショップ『「学生調査」入門講座～学生調査の見方、活かし方について考える～』を開催し、学生・教職員 計30名が参加した。当日は、大学リーグやまぐちの関係者や、大阪・神奈川など他大学関係者にも足を運んでいただいた。

当日は、冒頭、山口大学 大学教育機構 大学教育センター 林 透 准教授より、間接評価の代表的手法としての学生調査について、説明が行われた。学術的背景として、直接評価との違いやその特性について図示して共有されたのち、文部科学省主導で全国の大学における統一学生調査についての動きが本年度から計画されていることについて説明があった。

更に最新事情として、AP採択校に対するアンケート調査からも、データを取ったものの分析・活用の仕方について対応に悩んでいる大学が多いことが示された。これらのことを踏まえ、今回のワークショップを通して学生調査についての理解を深めるきっかけを掴み、かつ今後の大学運営・教育改善に活用してほしいとの旨が話された。



その後、山口大学 大学教育機構 大学教育センター 高林 友美 助教（特命）より、学生調査の基本として「設計・分析・活用」の3点に注目したレクチャー&ミニワークが行われた。学生調査の目的として外部評価対応だけでなく、教育改善、学術的研究なども言われており、その目的に基づき調査されるべきであるとの説明に対しては、気づきを得られた・やらなければいけないので対応するのではないと改めて確信したとの声が返ってきた。

設計に関しては、特に質問項目の設定について具体的なポイントが共有された。信頼性・妥当性のある項目を作るために必要な知識については、参加者がグループになって用意された質問紙を改善するというミニワークによって確認が行われた。実際に具体的な改善策を考えることで、学生調査の対象しうる範囲の幅広さにも気づきが指摘された。分析については、統計分析だけでなく基本的な数値まとめにも意味があることが社会調査の実例を通して語られた。また、山口大学のAP事業で行われた分析を参考例に挙げながら、統計分析の手法についても簡単に説明が行われた。実際にデータから分析手法を考えるワークでは、無目的に集められたデータを分析する難しさと、仮説の重要性について共有された。最後に活用に関しては、1度のアンケート調査では限界があることを示しながら、経年比較や質的データと合わせて、学生の成長を多角的に確認し議論していく材料になることが語られた。



ワークショップの最後には、学生調査の設計から活用までを各自の組織の文脈に合わせて体験し、課題を共有するためのワークとして、簡易的なロジックモデルを用いながら①学



生の現状、②各人の思う理想的な状態③その途中に見ることのできる指標、という3つについて考えてもらった。本学教員からは、後輩やTAからの評価も含めて学生の伸びを見ていく可能性が共有された。また、他大学教員からは、あいさつなどが出来ているかを尋ねることも、組織の教育目標によっては重要であることが示された。これらのように教員が実際に成長した学生を見ていて感じられる指標は、具体的な調査改善につながる意見共有となった。今回話し合われた指標が組織全体ですぐに採用できる訳ではないが、教育の目的を設定し、そのための評価が必要であることについての気づきが得られた様子が伺えた。



#### **アンケート結果：**

ワークショップ参加者によるアンケートについて、21名（回収率70.0%）から回答を得たイベント全体の満足度については、「強くそう思う・そう思う」が85%を超え、今後も興味ある研修会があれば参加したいとの意見が95%を超える回答となった（図参照）。また、今回のFD・SDワークショップの到達目標については、特に学生調査の基礎知識と意義の理解について深める結果となった。

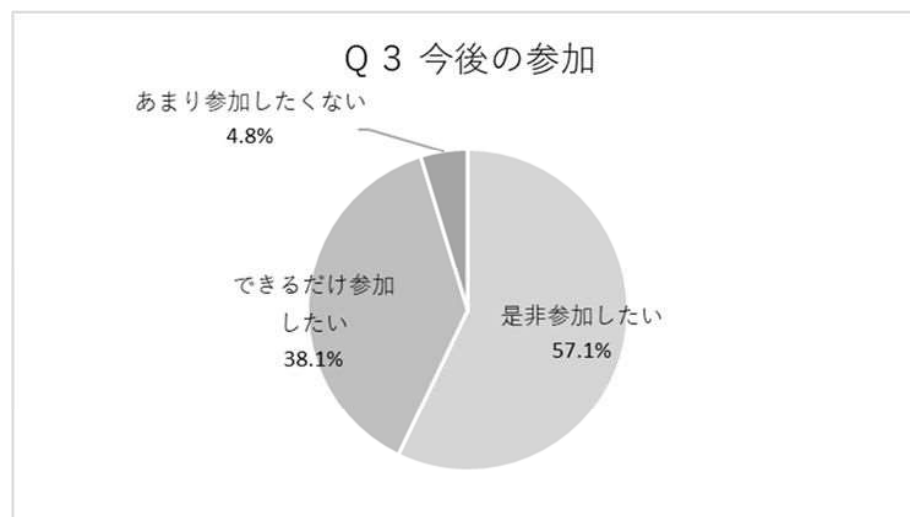
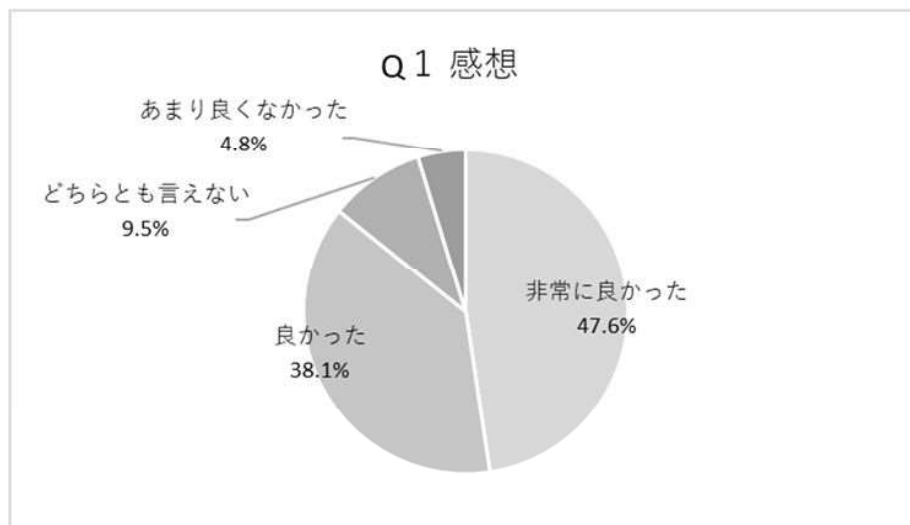
以上、今回のワークショップを通して、参加者が新たな気づきを得、今後対応が必要となる学生調査についての理解を相互に深め合う場になったことが言える。

#### **まとめ：**

学生調査は、これまでも様々な形で行われてきており、今後どの大学でも何かしらの学生アンケートは行われ続けるだろう。しかし、多くの学生の時間を費やす調査である以上、大学の教育改善に活かすことが必要であり、そのための課題を共有することのきっかけとなるワークショップになったと考える。

最後のロジックモデルに従ったワークでは、各組織の目的と、それに即した学生調査の姿が垣間見えるワークシートが参加者それぞれの手によって作成された。当然この通りに学生調査が行われるわけではないが、調査の目的と仮説を持って、目指す学生像を実現するための調査には丹念な話し合いが不可欠であることを実感していただけたことと思う。教育

改善のために、組織の全員が注目して追ってみたいくなるような調査が山口大学や他機関において実施されるための一歩として、本ワークショップが役立っていることを願う。



## (6) 2019年度「新任教員研修会（第2回）」実施報告

1. 主催 山口大学 大学教育機構および総務企画部人事課
2. 日時 2019年9月25日（水）13:30～17:00
3. 会場 吉田キャンパス 事務局2号館4階 第2会議室
4. 対象者
  - (1) 前回の研修会（2018年9月27日）以降に本学の教育職員（附属学校を除く。以下同じ。）となった者。
  - (2) 上記の日以前に本学の教育職員となった者で本研修未受講者のうち受講を希望する者。
5. 参加者数：18名（アンケート回収：15枚（回収率83.3%））

### 6. 内容

本研修の目的は、新任教員を対象として、本学において教育活動や研究活動を実施していく上で必要な知識・情報等について説明し、本学の教育職員として相応しい認識を高めると共に、大学運営に関する理解を深めることにある。年2回（第1回目4月、第2回目9月）開催されることとなっている。



具体的には、第1部および第2部の2部構成となっており、第1部は講義形式で、本学の教育の特徴や新任教員として知っておくべき基礎知識を中心に説明を行い、第2部は新任教員同士によるグループワークを通して意見交換する内容を提供した。

第1部前半では、菊政 勲 大学教育センター長より「山口大学の教育について」と題して、本学の教育理念や教育改善PDCAサイクル、さらには、共通教育の特徴について説明があった。その後、静屋 智 教育学部教授より「大学における授業のあり方を変える～高校までの授業、教育改革の動向を踏まえて～」と題して、昨今の高校教育改革の状況を説明するとともに、新しく入学してくる学生に対応した大学側の授業のあり方の見直しや改善の必要性について説明があり、改めて、授業づくりの大切さを新任教員に伝える内容であった。さらには、王 躍 メディア基盤センター准教授より「情報セキュリティガイドラインについて」と題して、情報セキュリティの注意点について説明があった。

第1部後半では、林 透 大学教育センター准教授より「三つのポリシーとシラバス～大学教育の内部質保証のために～」と題して、大学教育の内部質保証における三つのポリシーの重要性やシラバス作成のポイントについて説明があった。その後、藤原 勇 大学教育センター准教授より「大学の環境安全（安全教育）を考え

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	3	20.0%
良かった	12	80.0%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	15	100.0%

る」と題して、実験室内での安全管理だけでなく、キャンパス内でのリスク管理の重要性について説明があった。さらには、岡田 菜穂子 学生支援センター准教授より「障がい学生支援について」と題して、学生特別支援室の業務内容や障がい学生対応の基礎的情報について説明があった。

第 2 部「グループワーク～本学での教育・研究活動に関する抱負や期待について話し合ってみよう」では、参加した新任教員 5～6 名が一グループとなって、各人が本学赴任後の教育・研究活動の内容や今後に向けた期待について紹介しながら、意見交換を行った。バックグラウンドや大学教員経験の度合が多様なメンバーが集まる中、新任教員という同じ境遇という親近感から、日頃聞けないことや相談してみたいことなどを気軽に話し合う光景が印象的であった。特に、後期の授業に向けた準備のこと、多様な学生への対応の仕方、さらには、多様な業務がある中で研究時間を確保することの難しさなどについて意見交換が行われ、参加者にとって有意義な時間となった。



前年度並みの参加者数が集まり、参加者アンケートについては、満足度 100.0%（非常に良かった+良かった）となった。自由記述では「グループワークが良かった」「他分野の話が聞けて良かった」など、新任教員同士の意見交換に対して肯定的なコメントが見られた。

(7) 令和元年度 アラカルト FD 研修会「障害等のある学生への支援シミュレーション」(農学部 FD 研修会)

日程 令和元年 10 月 16 日(水)  
 [吉田地区] 13:30~14:00  
 場所 農学部・共同獣医学部大会議室  
 (吉田キャンパス)  
 講師 岡田 菜穂子  
 (学生支援センター 准教授)  
 田中 亜矢巳  
 (学生支援センター カウンセラー)  
 参加者 26 名(アンケート 24 枚回収)



内容

研修会では、本学における障害学生の修学支援について説明があった。本学では平成 28 年度から、障害学生が大学に対して支援を要請できる制度を導入している。学生特別支援室 (Student special Support Room。以下、SSR) は障害学生修学支援の拠点として、学内の様々な組織と連携しながら、障害学生の支援とコーディネートを行っている。

SSR では、障害学生だけではなく、障害が疑われる学生、障害の傾向が強い学生の支援も行っている。学生からの修学支援の申し出には、学生本人が支援を希望する意思が明確であること、支援の根拠となる書類 (診断書、障がい者手帳など) を持っていることが必要となる。SSR への相談件数は、平成 26 年度は 326 件であったが、平成 30 年度は 2,669 件に急増している。これは、潜在するニーズがあること、支援の仕組みを利用する学生が増えているためと考えられる。近年は障害の種類や相談内容が多様化する傾向があり、支援対象者に占める申請者の数が増加する傾向にある。日本学生支援機構では高等教育機関における障害のある学生の在籍・支援状況の実態調査を毎年実施しているが、その結果によると障害のある学生の在籍率が増加しており、障害種では特に精神発達、病弱・虚弱が増えている<sup>1)</sup>。これらの障害のある学生の増加傾向はしばらくの間続くと考えられる。本学の月別の相談件数については、修学スケジュールとの連動が見られる。これは修学と関係のある相談が多いことによる。

本学では、支援を申請した学生からの要望に応じて、授業の担当教員に対して、学生が抱える障害の内容と授業中に必要な支援について情報提供をするために、配慮願を配布している。これは担当教員が授業の目的や形式に合わせて支援の内容を検討する際の参考にしてもらうことを目的としている。

次に、障害学生の修学支援のシミュレーションとして、診断の有無、支援を希望する意思の有無による支援の利用の仕方を、よくあるパターン 3 つに分けて紹介された。まず、大学入学以前に診断を受け、本人の障害理解が進んでいて、支援を希望する意思が明確な場合である。このようなケースでは、修学や就職についての的確かつ円滑な支援を行うことができる。次に、大学入学後に初めて支援を希望する場合である。これに該当する相談件数は比較的多い。例えば、大学の授業でグループワークやプレゼンテーションに困難を感じてチューター等に相談して、SSR への相談を勧められて来訪するケースがある。このような場合、SSR では面談を通じて、修学上の問題、得意分野等について整理を行う。その過程で、本人がこれまで必要と思わなかったことについて問題点を発

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	8	33.3%
良かった	16	66.7%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	24	100.0%

<sup>1)</sup>病弱や虚弱の増加は、精神障害による 2 次障害による可能性もある。

見し、有効な支援につながることもある。ただし、支援には診断もしくは障がい者手帳などが必要であるため、すぐに支援の開始ができないこともある。このようなケースでは、保健管理センターに相談することがある。また、必要に応じて、学期の途中から教員に配慮願を配布する。もうひとつは、診断を受けておらず、支援希望の意思がない学生の場合である。これについても相談件数が非常に多い。周りから見て、その学生が明らかに困っている状況にあっても、本人にその自覚がない場合は、本人の認識と周りの対応のずれがないかを見極めながら、支援を慎重に検討する必要がある。このような学生がいたら、SSRに相談してもらいたい。

農学部における障害学生への対応では、実験への対応がポイントである。これまでの実験における配慮の例には、実験室までのアクセス配慮、実験室内での導線確保、座席の位置の工夫、紙媒体での資料配布、重要事項の文字による共有などがある。これらはすべて必須とは限らないが、それぞれのケースに応じて検討する必要がある。SSRに連絡いただければ、支援内容の整理や検討などサポートを行うこともできる。その際には、支援に必要な機器についても貸出や助言をすることも可能である。

今後とも、教職員からもSSRを周知していただきたい。気になる学生がいる場合は、今後のスムーズな対応につなげるために、SSRにご連絡いただきたい。SSRから教員に授業等についてご相談させていただくこともあるが、その際は教職員のご協力をお願いしたい。

講演後には以下の質疑応答があった。

**Q1** SSRへの相談が増加する傾向は、今後も続くか。

**A1** まだ潜在的なニーズがあるため、増加傾向は続くと思われる。全国的な傾向も同様である。その一方で、支援が軌道に乗った学生については必要な対応事項が減るため、教職員とスムーズな対応ができれば、相談対応の負担は軽減できると考えている。

**Q2** 少し問題がある学生が居た場合に、相談窓口はSSRの他に、学生相談所や保健管理センターなど複数の窓口があるが、どの窓口を紹介すればよいのか。

**A2** 学生特別支援室は学生本人には紹介しにくいかもしれない。紹介しやすい窓口としては学生相談所ではないかと思う。睡眠の問題や気分の落ち込みなど医療的な内容であれば、保健管理センターが良いかと思われる。窓口は複数あるが、それぞれの部署で必要に応じて連携しているので、どちらの窓口にも相談されても構わない。紹介しやすい窓口をご利用いただければと思う。

**Q3** 視覚障害や聴覚障害の学生は、どのような支援が考えられるか。

**A3** 点字ユーザーの場合は点訳、読み上げソフトの利用や対面朗読による音声化や、指示や状況の言語化など様々な方法がありうる。個人によって障害の程度や種類が異なるため、支援の方法も異なる。

**Q4** 支援を受けた学生の就職活動や就業状況についてデータは蓄積して利用されているか。

**A4** 障害等のある学生の修学支援を主な業務とするSSRで全容を把握するには限界がある。今後、教職員や就職支援室と連携して、データを共有し、有効な支援につなげてゆきたい。

研修会後のアンケートには、「大学の取り組みの状況と自分の対応の方法が理解できた」、「SSRの支援体制が分かった」との回答があった。また、今後希望する研修会については、「SSR支援機器の紹介。就職に関するお話し」、「今回のような学生支援の内容で、実験やグループワークなどの理系特有科目での実際の対応例（他大学の過去の例）など知りたい」、「精神的な問題を持つ（または在学中に持つようになった）学生への対応。教員はどうすべきかについて」、「大学特有のしくみや情報についての理解が進むような内容（今回の内容はすごく合っていると思います）」、「学生対

応について」、「発達障害」、「具体例の紹介」、「学生の支援について」、「今回のような内容」、「障害学生支援」、「発達障害学生とのつきあい方」、「同一性障害といったもの」、「教育改善技術」との回答があった。

(8) 山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)  
**『アクティブ・ラーニング(AL)ベストティーチャー表彰記念  
 FD・SD ワークショップ  
 ～第3回 AL ベストティーチャーによる模擬授業～』**

**日 時**：令和元年 10 月 29 日（火） 16:10～18:00

**場 所**：山口大学共通教育棟 26 番教室（アクティブ・ラーニング教室）

**参加者**：25 名（学内 20 名（教職員 16 名、学生 4 名）、学外 5 名（教職員 5 名））

**概 要**：

16：10～16：15 開会挨拶・趣旨説明

16：15～16：55《模擬授業 Part1》

「反転学習やクリッカーを活用したアクティブ・ラーニング型授業

～語学教育における『完全習得学習型』を目指して～

中溝 朋子 山口大学 大学教育機構 留学生センター教授

16：55～17：35《模擬授業 Par2》

「チームによる授業づくり

～キャリア教育（教職キャリア形成科目）の実践を通して～

霜川 正幸 山口大学 教育学部附属教育実践総合センター教授

17：35～17：55 質疑応答・対話

17：55～18：00 クロージング・閉会挨拶

菊政 勲 山口大学 大学教育機構 大学教育センター長

[総合進行：山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透]

山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)  
**アクティブ・ラーニング(AL)ベストティーチャー表彰記念  
 FD・SDワークショップ  
 ～第3回ALベストティーチャーによる模擬授業～**

**【趣 旨】**  
 山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)では、共通教育・専門教育を通じたアクティブ・ラーニング型授業の充実に努めてきました。しかし、一方において、大学教育の現場では、「アクティブ・ラーニングを通して、学生の深い学びに結びついているのか」といった疑問や「自分の授業をアクティブ・ラーニング型授業として認識していない」といった実態が依然として見受けられます。  
 本学では、アクティブ・ラーニング型授業の優れた取組を讃える「アクティブ・ラーニング(AL)ベストティーチャー表彰制度」を2016年度に創設し、2018年度に第3回の受賞者(5科目・14名)を表彰しました。今回のワークショップでは、第3回ALベストティーチャー受賞者による模擬授業を体験し、改めて、「アクティブ・ラーニングとは何か」、「アクティブ・ラーニングを通じた学生の学び・成長」について考えてみたいと思います。

**【申込方法・問合せ先】**  
 件名)FD・SDワークショップ申込とし、「①氏名、②所属(学年)、③E-mail」を記入の上、  
 E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp(担当:YU-AP推進室)あてに、10月28日(月)までに送信願います。なお、定員に達し次第、申込を締め切らせていただきます。

山口大学 大学教育機構 大学教育センター (YU-AP推進室)  
 E-mail: yuap@yamaguchi-u.ac.jp

日時: 2019年10月29日(火)  
 16:10～18:00

場所: 山口大学吉田キャンパス  
 共通教育棟2階 26番教室  
 (アクティブ・ラーニング教室)

対象: 学内外の教職員  
 (定員 30名)

**Active Learning**

**【概 要】**  
 16:10～16:15 開会挨拶・趣旨説明

16:15～16:55《模擬授業 Part1》  
 「反転学習やクリッカーを活用したアクティブ・ラーニング型授業  
 ～語学教育における『完全習得学習型』を目指して～」  
 中溝 朋子 山口大学 大学教育機構 留学生センター教授  
 (※振り返りを含む)

16:55～17:35《模擬授業 Par2》  
 「チームによる授業づくり  
 ～キャリア教育(教職キャリア形成科目)の実践を通して～」  
 霜川 正幸 山口大学 教育学部附属教育実践総合センター教授  
 (※振り返りを含む)

17:35～17:55 質疑応答・対話

17:55～18:00 クロージング・閉会挨拶

アクティブ・ラーニング(AL)ベストティーチャー表彰とは、山口大学の共通教育におけるアクティブ・ラーニング(AL)実践に顕著な成果をあげた教員について、その功績を表彰するとともに広く周知し、併せて本学教員の意欲向上とALの推進に資することを目的としています。さらに、ALによる教育効果の共通理解やAL授業実践のグッドプラクティスを共有できる機会(FD・SDワークショップ)や事例集(Teaching&Learning Catalog)を提供することで、学内におけるAL実践の向上に資することが期待されています。



## 内 容：

令和元年10月29日（火）に、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）『アクティブ・ラーニング（AL）ベストティーチャー表彰記念 FD・SD ワークショップ～第3回ALベストティーチャーによる模擬授業～』は、学内外から大学関係者だけでなく、高等学校関係者を集め、計25名（学内20名、学外5名）の参加者により、本学吉田キャンパス共通教育棟26番教室（アクティブ・ラーニング教室）にて開催された。本ワークショップは山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）の一環として実施された。この模擬授業型ワークショップは平成29年度から続けて、今年度で3回目となった。

冒頭、林 透 山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授より、本学では、アクティブ・ラーニング型授業の優れた取組を表彰する「アクティブ・ラーニング（AL）ベストティーチャー表彰制度」を平成28年度に創設し、平成30年度に第3回の受賞者（5科目・14名）を表彰し、今回のワークショップでは、第3回ALベストティーチャー受賞者による模擬授業を体感し、改めて、「アクティブ・ラーニングとは何か」、「アクティブ・ラーニングを通じた学生の学び・成長」について考えてみたいとの趣旨説明があった。



まず、模擬授業 Part1 では、中溝 朋子 山口大学 大学教育機構 留学生センター教授より、「反転学習やクリッカーを活用したアクティブ・ラーニング型授業 ～語学教育における『完全習得学習型』を目指して～」と題し、アクティブ・ラーニング型授業『日本語Ⅳ』の模擬授業を行っていただいた。具体的には、全体の授業計画の概要説明があった後、事前学習のMOODLEでのビデオ視聴に始まり、授業時間内での日本語文法の基礎的講義の後、プリントによる選択式・穴埋め式の課題を小グループでの答え合わせをしながら理解を深め、授業の最後にクリッカーを利用した理解度チェックテストを行う授業一コマ分の構成の詳細について説明があった。途中、実際の演習問題について、グループでの答え合わせ、クリッカーでの回答などの体験を行った。反転授業を取り入れることで、各回の授業が計画通りに進められるようになり、かつ、受講生から質問が増えたという効果の紹介があった。また、数年前、授業最終回に理解度テストを行ったところ、完全習得学習型授業としての目標値である7割程度の理解度が得られていることが確認できたとのこと、さらには、事前課題の問題もテストバンクの形でストックを持たせながら運用している旨の説明があり、質の高いアクティブ・ラーニング型授業設計を実感させられる内容であった。



次に、模擬授業 Part2 では、霜川 正幸 山口大学 教育学部附属教育実践総合センター教授より、「チームによる授業づくり ～キャリア教育(教職キャリア形成科目)の実践を通して～」と題し、アクティブ・ラーニング型授業『キャリア教育(教職キャリア形成科目)の模擬授業を行っていただいた。冒頭、教育学部のカリキュラムにおける『教職概論』『教職キャリア形成Ⅰ』『教職キャリア形成Ⅱ』の位置付けやねらいについて説明があった後、『教職キャリア形成科目』で大切にしている4項目(①授業の意義(位置づけ)と目標を明確にし、学生と共有する(目指す姿を意識させる)、②学びの流れと教職へのつながりを大切にし、創意工夫する(学び育つ主体は学生自身)、③学生個人の探究、集団での切磋琢磨を大切にし、共に伸ばし合う集団を創る(指導方法の工夫改善)、④教職員間の共通理解、協働実践を大切にし、学部ぐるみで学生を育てる(全員が教え子))について詳細な趣旨説明があった。その途中、授業づくりで大切にしていることについて、ダイヤモンドランキングを活用したミニワークを行い、日頃の授業運営の雰囲気を感じた。



後半の質疑応答・対話のセッションでは、林 透 山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授のファシリテーションにより、参加者に事前配布したダイアログシートに模擬授業を受講して感じた気づきや疑問点を記入していただいた後、グループごとに、短時間の意見交換を行った。その後、全体の質疑応答に展開し、「クラスの学生全体のやる気を引き出し、伸ばし合う環境づくりをどのように行っているのか」「教職キャリア形成科目をどのように設計・構成していったのか、その経緯を知りたい」「反転授業の教材づくりの負担や具体的な作成方法はどのようにしているのか」といった質問があり、各参加者が日々のアクティブ・ラーニング型授業での実践や学修評価の参考にすべく、実際に役立つ意見交換が行われた。実践に役立てたい、実践での課題解消に結び付けたいという参加者からの真剣な思いが伝わってくるセッションとなった。



#### まとめ：

山口大学・大学教育再生加速プログラム(YU-AP)では、従来、アクティブ・ラーニング型授業に関する事例紹介を行ってきたが、事例紹介だけでは伝えられないコツや秘訣を伝える機会を提供したいという思いで、平成29年度から模擬授業型FD・SDワークショップに取り組んでいる。AL型授業実践集及びアクティブ・ラーナー記録集である『Teaching & Learning Catalog』作成取材において、ALベストティーチャーの先生方からお聞きした授業実践の話のインパクトは大きく、その素晴らしく、きめ細かい授業実践を、より多くの教職員の方々に体感していただき、大学全体の共有の財産としたいという思いで、今回の

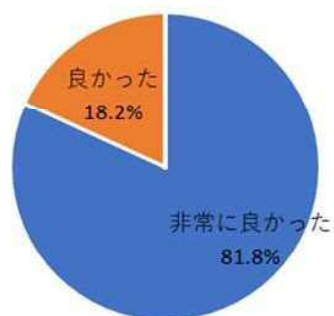
FD・SD ワークショップが行われた。

今回のFD・SD ワークショップでも、昨年度に引き続き、模擬授業を通して、実際の授業設計や学修評価のコツを学びたいという大学教員だけでなく、高校教員の参加が見られた。参加者アンケートからも非常に好評であったこと（下表参照）が分かり、来年度以降も、ALベストティーチャーによる模擬授業型FD・SD ワークショップを継続的に実施していく予定である。



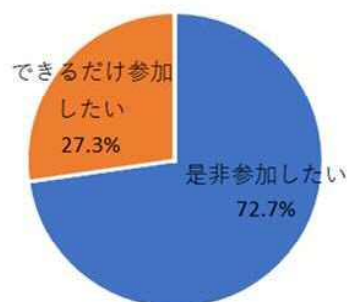
設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

(N=11)



設問3 興味ある内容の研修会があれば、今後も参加

したいとお考えですか？ (N=11)



(9) 令和元年度 アラカルト FD 研修会  
大学生・大学院生の抱えやすい課題と学生相談の現状  
(教育学部 FD 研修会)

日時 平成元年 11 月 20 日(水) 15:00~15:30  
場所 教育学部 21 講義室  
講師 春日由美 (学生相談所長: 教育学部准教授)  
参加者 72 名 (アンケート回収 29 名)



### 内容

はじめに教育学部の曾根教授より春日由美准教授の紹介があった。引き続き、春日由美所長の自己紹介があり、その後講演内容に入った。

#### 1. 学生相談とは？

まず学生相談に関する沿革が説明された。山口大学は日本初、東京大学と同時期の 1952 年に学生相談所が設置された。これは国立大学に保健管理センターの設置以前であること。学生相談のレポートとして「大学における学生生活の充実方策について」報告書(通称「廣中レポート」)が説明され、「大学は教員中心の大学から」「学生中心の大学へ」の視点転換として学生相談の大切性が示され、ハンドブックの作成、その後「大学における学生相談体制の充実方策について」の報告(通称「苔米地レポート」)がされた経緯について。また学生相談は単なる学生へのカウンセリングだけでなく、予防活動、予防教育、教職員に対するコンサルティング(助言)も含まれるため、取扱う内容が多いこと。また、大学生は自殺割合も高い事から、自殺のきっかけ(原因)を取除く事が大事であり、学生の大学での居場所の確保も大事である事が説明された。

#### 2. 学年毎の抱えやすい課題

大学に入学した 1 年生は、新しい環境への適応ができないと悩みを抱えていること。2、3 年生は生活の変化が比較的少ないものの社会の中での自分の存在を考えて自分らしさ、社会との繋がりを考えて悩んでいる。4 年生は学生(大学)生活の終点と社会への入口(将来の準備)において多くの現実的な悩みを持っていること。また卒業にあたり親子関係の振り返りの時期でもある。大学院生も、研究生活環境の変化等が伴う場合、対人関係から研究環境と不安の原因(悩み)が多いと考えられる。

#### 3. 本学の学生支援

山口大学の学生支援体制は①学生なんでも相談窓口(学生生活全般の相談が可能)、②保健管理センター(心身の相談、精神科医: 1 回/週、山口地区: 臨床心理士配置 4 回/週)、③学生相談室(臨床心理士配置: 5 回/週、居場所設置)、④学生特別支援室(障害等による修学上困難についての相談)である。学生相談所の利用は 4-6 月が多く、その後 7-10 月が少なく 11 月に再び多くなり、その後少なくなる。また延べ相談回数を見ると長期休暇中である 8-9 月は余り減っていない状況から学生の相談のよりどころとなっている事が考えられる。また相談の内容は心身的な問題多い。相談の傾向としては、教員との関係が、①対人、②修学、

③心身問題に挙げられている。また相談傾向のその他の分類として、教職員からの学生対応相談もあり、かなり困難な内容の相談を日々多く受け付けている現状であることが説明された。

#### 4. 学生相談所から教職員の皆様へお願い

学生相談所からの先生方へお願いとして以下の事が示された。①学生の命を守ることが大切であるため、気になる学生・院生については相談してください。学生相談に行きそうにない学生は教職員と一緒に来て頂いたほうが良いと思われます。②気がかりな学生については先生方と連携して学生相談をさせて頂きたい。③教員が思っている感覚と、学生が思っている感覚が随分異なっていると思われることがあります。これは世代や立場の違いにより受け取り方が違う。コミュニケーションの機会が少ないとずれが生じやすいと思われます。これらのことから、日々のコミュニケーションの機会をできるだけ作るようにして欲しい。

またこちら（先生から）の話を伝えるだけでなく学生の話聞くようにする。学生にとって先生と話すことは敷居が高いと感じており、先生から敷居を下げて学生の話聞いて欲しい。



#### 質疑応答

Q1:学生の相談が秋の11月に多いのはどうしてか？

A1:10月から新学期が始まり、11月になると多くの行事を乗り越えてきて、これまでの疲れがたまってきたり悩みも多くなり相談に訪れていると考えられる。

以上

#### 設問 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	16	55.2%
良かった	13	44.8%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	29	100.0%

## (10) 2019 年度「ラーニング・アドバイザー養成講座」実施報告

### 【概要】

大学における学生の「自主的な学び」「積極的な学習行動」の支援について重要性が増しており、授業内外における教員による学習支援に加え、教育支援・学生支援・就職支援・図書館といった部署では、事務職員や学生がその役割の一端を担っている。しかし、近年の学生の多様化に伴い、当該学生への指導助言に苦慮する場面も見受けられる。このため、可能かつ適切な範囲において、柔軟かつ積極的な学習支援ができる人材（「ラーニング・アドバイザー」）が必要となっている。山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）事業の一環として、「学生の学びの好循環」に資することのできるラーニング・アドバイザー養成講座を2017年度より企画実施しており、昨年度からは対象を山口大学及び大学リーグやまぐち加盟機関に広げ、研修内容を改善充実して実施した。

今年度は、2回シリーズとして、山口大学吉田キャンパス共通教育棟2階会議室を会場に、11月21日（木）に開催された第1回（知識理解編）では6名（職員6名）、12月19日（木）に開催された第2回（スキル修得編）では8名（職員7名、学生1名）、延べ14名の参加があり、3名の受講生が修了要件を満たし、「ラーニング・アドバイザー認定証」を授与された。これで、過去3年間のラーニング・アドバイザー認定者は24名となった。

第1回（知識理解編）では、千葉大学アカデミックリンクセンター 我妻鉄也 特任助教、徳山大学 福祉情報学部 中嶋克成 特任講師から学習支援の専門職化や教職員によるダブルアドバイザー制度における学習支援の実際や効果について事例紹介をいただき、先進情報を学んだ。後半のグループワークセッション「みんなの学習支援の課題について話し合ってみよう！」では、山口大学 大学教育機構 大学教育センター 林 透 准教授によるファシリテーションのもと、2グループに分かれて、学習支援者としての「今」を見つめ、学習支援者としての「未来」を思い描き、学習支援の「今」と「未来」を比較して組織レベル・個人レベルで足りないもの、必要なものをリストアップして模造紙にまとめる（見える化する）ワークを行い、全体共有・発表を行った。学習支援の専門職の必要性や学生の自主性を引き出すようなコミュニケーションの工夫、学習支援に関わる組織間の連携などの共通の課題が浮き彫りとなった。

第2回（スキル修得編）では、千葉大学アカデミックリンクセンター 我妻鉄也 特任助教のファシリテーションにより、学習支援のために必要なコミュニケーションスキルとして、「リフレーミング」「オープンクエスチョン」「アサーション」の意義を理解しながら、ペアによるロールプレイングを行って、実践的スキルを体得した。さらに、今回新たに、学習支援に関するケーススタディを通して、どのような支援が必要かといったグループワークを行い、受講生は一層の理解が深まったようであった。

ラーニング・アドバイザー養成講座では、第1回の講座終了後、レポート課題を課すことで、受講生個人が学習支援に対してどのように取り組み、どのような課題を抱えているかを自分自身で振り返るとともに、受講生全員で見直す機会を設けており、昨年度同様に有意義であった。また、2回それぞれに行った受講者アンケートにおいても満足度が高く、有意義な機会設定ができたように思われる。今年度の実績を踏まえながら、来年度以降の研修内容を更に充実させていきたい。

【対象者】 山口大学及び大学リーグやまぐち加盟機関の事務系職員  
(学習支援に関わる教員・学生も参加可) 【各回定員 15 名】

【到達目標】

- (1) 大学における学習支援の重要性について理解し、説明することができる。
- (2) 学習支援者に必要なスキル・態度について修得し、活用することができる。
- (3) 学習支援者としての目標を定め、実践することができる。

【日時・内容】

① 「第 1 回 (知識理解編)」

2019 年 11 月 21 日 (木) 13:30～17:00

13:30～14:00 開会挨拶・趣旨説明・チェックイン

14:00～14:30 「学習支援の専門職化

～千葉大学アカデミックリンクセンターの取組から～

千葉大学アカデミックリンクセンター特任助教 我妻鉄也

14:30～15:00 「学習支援の実際と効果

～徳山大学ダブルアドバイザー制度の取組から～

講師：徳山大学 中嶋 克成 先生

(休憩)

15:10～16:40 「みんなの学習支援の課題について話してみよう！」

(※所属機関・部署における学習支援に関する課題抽出)

ファシリテーター：

山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透

コメンテーター：千葉大学 我妻鉄也 先生

徳山大学 中嶋克成 先生

16:40～17:00 クロージングと次回に向けたレポート課題提示

(レポート課題は①自分が携わっている学習支援の取り組み内容、  
②学習支援に関する充実方策提案 (組織レベルと個人レベル)  
で、それぞれ 1,000 字以内でまとめること。)



第 1 回オリエンテーション 山口大学 林

第 1 回事例紹介 千葉大学 我妻先生



第1回事例紹介 徳山大学 中嶋先生



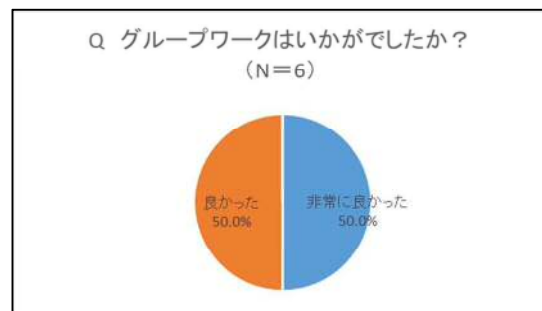
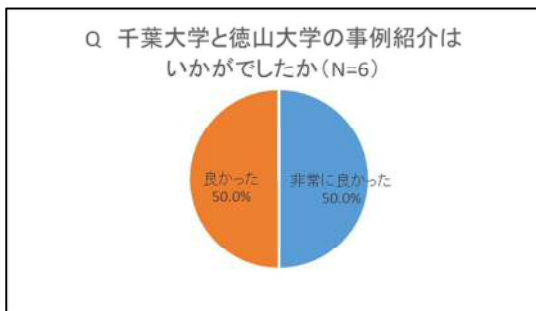
第1回グループワーク



第1回グループ発表



【第1回受講生アンケート】





②「第2回（スキル修得編）」※講師 千葉大学 我妻鉄也先生、山口大学 林 透

2019年12月19日（木）13:30～17:00

13:30～14:00 前回の振り返り・アイスブレイキング

14:00～15:30 「学習支援に必要なコミュニケーションスキルを学ぼう！」  
レクチャー及びグループワーク

（休憩）

15:40～16:30 まとめと振り返り・質疑応答

振り返りシート記入、グループ共有、質疑応答

16:30～17:00 チェックアウト・修了式



第2回講師 千葉大学 我妻先生



第2回 ロールプレイングの一コマ

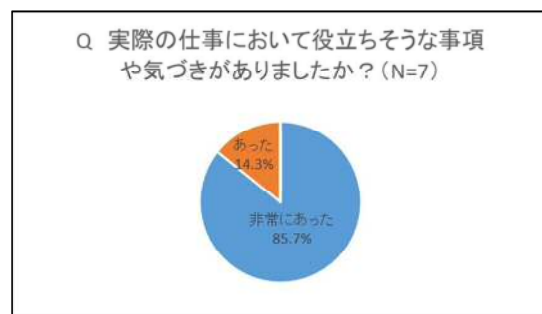
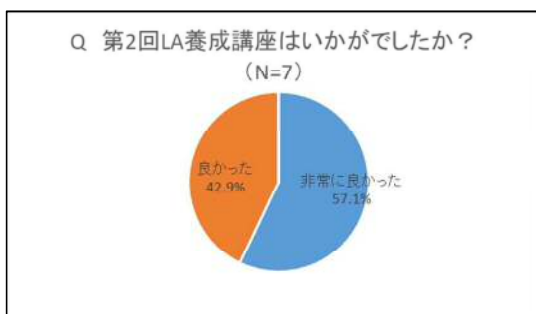


第2回 ロールプレイングの一コマ



福田副学長から認定証授与

【第2回受講生アンケート】



(11) 令和元年度 アラカルト FD 研修会「障害等のある学生への支援シミュレーション」(工学部 FD 研修会)

日程 令和元年 12 月 11 日(水) 14:00~14:30  
 場所 工学部 D11 講義室  
 (常盤キャンパス)  
 講師 岡田 菜穂子  
 (学生支援センター 准教授)  
 田中 亜矢巳  
 (学生支援センター カウンセラー)  
 参加者 36名(アンケート 22 枚回収)



内容

研修会では、本学における障害学生の修学支援について説明があった。

障害のある学生への支援は、倫理上、あるいは大学の教育機関として実施すべきことである。我が国では平成 28 年に障害者差別解消法が施行され、国立大学では合理的配慮の実施が法律で義務付けられている。この法律では、障害等による差別的取り扱いの禁止と合理的な配慮の提供の義務が明記されている。

本学では平成 28 年度から、障害学生が大学に対して支援を要請できる制度を導入している。学生特別支援室 (Student special Support Room。以下、SSR) は障害学生修学支援の拠点として、学内の様々な組織と連携しながら、障害学生の修学支援とコーディネート業務を行っている。

SSR では、障害学生だけではなく、障害が疑われる学生、障害の傾向が強い学生の対応も行っている。障害学生から大学への修学支援の申し出には、学生本人が支援を希望する意思が明確であること、支援の根拠となる書類 (診断書、障がい者手帳など) を持っていることが必要となる。SSR への相談件数は、平成 26 年度は 326 件であったが、平成 30 年度は 2,669 件に急増している。これは、潜在するニーズがあること、支援の仕組みを利用する学生が増えているためと考えられる。近年は障害の種類や相談内容が多様化する傾向があり、相談対応・支援対象者に占める修学支援申請者の数が増加する傾向にある。日本学生支援機構では高等教育機関における障害のある学生の在籍・支援状況の実態調査を毎年実施しているが、その結果によると障害のある学生の在籍率が増加しており、障害種では特に精神発達、病弱・虚弱が増えている<sup>1)</sup>。これらの障害のある学生の増加傾向はしばらくの間続くと考えられる。本学の月別の相談件数については、修学スケジュールとの連動が見られる。これは修学と関係のある相談が多いことによる。

本学では、支援を申請した学生からの要望に応じて、授業の担当教員に対して、学生が抱える障害の内容と授業中に必要な支援について情報提供をするために、配慮願を配布している。これは担当教員が授業の目的や形式に合わせて支援の内容を検討する際の参考にしてもらうことを目的としている。

次に、障害学生の修学支援のシミュレーションとして、診断の有無、支援を希望する意思の有無による支援の利用について、典型的な以下の 3 つのパターンに分けて説明があった。

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	4	18.2%
良かった	16	72.7%
どちらとも言えない	2	9.1%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	22	100.0%

<sup>1)</sup>病弱や虚弱の増加は、精神障害による 2 次障害の可能性もある。

- (1) 大学入学以前に診断を受け、本人の障害理解が進んでいて、支援を希望する意思が明確な場合。

このようなケースでは、修学や就職についての確かつ円滑な支援を行うことができる。

- (2) 大学入学後に初めて支援を希望する場合。

これに該当する相談件数は比較的多い。例えば、大学の授業でグループワークやプレゼンテーションに困難を感じて学生委員等に相談して、SSR への相談を勧められて来訪するケースがある。このような場合、SSR では面談を通じて、修学上の問題、得意分野等について整理を行う。その過程で、本人がこれまで必要と思わなかったことについて問題点を発見し、有効な支援につながることもある。ただし、修学支援の申請には診断もしくは障がい者手帳などが必要であるため、すぐに支援の開始ができないこともある。このようなケースでは、保健管理センターに相談することがある。また、必要に応じて、学期の途中から教員に配慮願を配布する。

- (3) 診断を受けておらず、支援希望の意思がない場合。

これについても相談件数が非常に多い。周りから見て、その学生が明らかに困っている状況にあっても、本人にその自覚がない場合は、本人の認識と周りの対応のずれがないかを見極めながら、支援を慎重に検討する必要がある。このような学生がいたら、SSR に相談してもらいたい。

特に理工系分野における障害学生への対応では、実験への対応がひとつのポイントである。

これまでも、工学部の先生方には適宜ご対応いただいていた。今後はさらなる対応の必要性が生じる可能性もある。個別の対応も必要だが、一般的な指示要領や実験の運用方法を工夫いただく方法もご検討いただきたい。

気になる学生がいる場合は、今後のスムーズな対応につなげるために、まずは先生方から SSR にご連絡いただきたい。SSR から教員に授業等についてご相談させていただくこともあるが、その際は教職員のご協力をお願いしたい。

講演後には以下の質疑応答があった。

**Q1** 日本学生支援機構の「障害のある学生の修学支援に関する実態調査」についてであるが、個人情報保護の関係で、学生本人あるいは保護者の承諾がないとデータの提供ができないと考えられる。この調査結果は実態を反映していると言えるのか。

**A1** この調査では、日本学生支援機構が各大学に障害学生の修学状況の提供を依頼して実施している。各大学による障害学生を把握する方法は、大学によって異なると思われる。本学では、学生に対して障害の有無を個別に聞くことはないので、基本的には学生本人から相談があったケースについて回答している。

**Q2** 合理的配慮の事例集については、本人または保護者の承諾が得られているのか。

**A2** 事例提供した大学の判断で、本人または保護者の承諾を得るか、もしくは本人が特定されないように配慮して取り上げているはずである。

**Q3** 就職活動における面接について、就職支援室もサポートを行っているが、発達障害学生に対してソーシャルスキルのトレーニングを行う必要があるのではないのか。

**A3** 発達障害の学生は、筆記試験には問題がなくとも、ソーシャルスキルが不十分で面談に失敗するケースが少なくない。また、就職後に職場になじめないこともある。大学としてどこまで対応するかは、全国の大学で課題となっている。本学では、障害学生に特化したトレーニングを学内で

行うのは難しいため。学外で行われているプログラムを紹介するしかない。しかしながら、山口県ではこのようなプログラムを提供する機関がほとんどないため、学生の郷里や就職先の地域に機関があれば紹介している。

Q4 配慮願で座席を出入口の近くにすることを求められるケースがあったが、座席の指定によってクラスの他の学生に障がいがあることを知られてしまうので、逆に配慮に欠けないか心配があった。配慮願対象の学生については、他の学生に障害があることを知られる可能性があることについて、了承が得られているのか。

A4 配慮願対象の学生によっては、他の学生に障害があることを知られたくない学生もいる。このような場合には、配慮願を他の学生に知られたくない旨を記載している。特別に記述がない学生については、できるだけ事前にご確認いただけると確実である。

研修会後のアンケートには、「これまでも SSR に支援してもらい、現在 4 年生になり、問題なく修学しています。来年 4 月から大学院に進学します」、「具体例があってわかりやすかった」、「A さん、B さん、C さんの事例でどんな支援が行われているのかが分かった」、「具体例があって分かり易かった」、「障害のある学生対応をもう少し詳しく知りたい」、「具体的な対策を聞きたい」、「SSR で障害のある学生の支援を行っていると知ることができた。今後何かあったときに相談したい」、「病気と障害の違いは？」との回答があった。また、今後希望する研修会については、「適応障害、特に理系研究室での適応障害」、「健康増進法の一部を改正する法律（受動喫煙防止）について校門周辺での喫煙（主に学生）があまりにもひどい。法律の趣旨（『敷地内で吸わなければよい』ではなく『受動喫煙をなくす』）が理解されていない。喫煙所が絶対必要）」、「事例を知りたい」、「情報化時代の教育・・・最近、時々聞くようになりました」、「すぐには思いつきませんが、興味のあるテーマの案内がきた時には時間が許す限り参加したい」、「メンタルヘルス」、「発達障害について、かわり方等」との回答があった。

**(12) 大学マネジメントセミナー2019 in やまぐち**  
**『大学マネジメントの新しい姿を求めて**  
**～第三の職種×教職協働～』開催報告**

**日 時：**令和元年 12 月 20 日（金）14:30～16:30

**場 所：**吉田キャンパス・大学会館 2 階会議室

**参加者：**77 名（うち、学内 63 名、学外 14 名）

**主 催：**大学リーグやまぐち、山口大学

**共 催：**大学マネジメント研究会、大学行政管理学会中国・四国地区研究会

**概 要：**

14:30～14:40 オープニング・趣旨説明 山口大学理事・副学長 田中 和広

14:40～16:25 基調講演

①「社会の共感を得る大学マネジメントの新しい姿

～ファンドレイジングが目指すもの～

大阪大学共創機構 産学共創・渉外本部 特任専門職員 吉田 富士江

（日本ファンドレイジング協会 認定ファンドレイザー・

大学チャプター共同代表）

②「大学職員から変える教学マネジメントの新しい姿

～内閣府「地方と東京圏の大学生対流促進事業」等を通じた教職協働～

法政大学教育支援統括本部長・学務部長 平山 喜雄

16:25～16:30 クロージング 山口大学総務企画部長 多賀谷 勇治

[総司会：山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透]

**内 容：**

2019 年 12 月 20 日（金）に、大学リーグやまぐち・山口大学主催 大学マネジメントセミナー2019 in やまぐち『大学マネジメントの新しい姿を求めて～第三の職種×教職協働～』を、学内外から 77 名（学内 63 名、学外 14 名）の参加者を集め、吉田キャンパスにて開催した。本セミナーは、大学リーグやまぐち、山口大学の共同主催、大学マネジメント研究会、大学行政管理学会中国・四国地区研究会の共催で、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）における教学マネジメント強化のための研修の一環として実施された。

冒頭、田中 和広 山口大学理事・副学長より開会挨拶があり、2017 年度から SD（スタッフ・ディベロップメント）の義務化に加え、大学経営における教職協働の重要性が謳われる中で、所属大学を超えた大学関係者の議論や情報交流に期待が寄せられた。

基調講演では、まず、吉田富士江 大阪大学共創機構 産学共創・渉外本部 特任専門職員より、「社会の共感を得る大学マネジメントの新しい姿 ～ファンドレイジングが目指すもの～」と題して講演があった。大学経営を取り巻く環境が一層厳しさを増す中で、財政基盤強化が重要であり、国から運営費交付金等に依存せずに、社会の共感を得ながら各種資金を獲得し、かつ、社会に研究成果や教育成果を還元する好循環の一役を担うファンドレイザーについて説明があった後、日本の寄付市場やファンドレイジングの要件などについて解説があった。さらには、大阪大学のほか、地方国立大学である山形大学や琉球大学の事例が紹介された。ファンドレイジングの意義やファンドレイザーの役割を初めて知る参加者も多く、大学マネジメントにおける新しい職種の存在を知るキッカケとなる講演であった。

次に、平山喜雄 法政大学教育支援統括本部長・学務部長より、「大学職員から変える教学マネジメントの新しい姿 ～内閣府「地方と東京圏の大学生対流促進事業」等を通じた教職協働～」と題して講演があった。法政大学では、1970年代からの沖縄県との関わりを基礎に、内閣府「地方と東京圏の大学生対流促進事業」（東京から沖縄へ、沖縄創生のための課題解決型人材育成プログラム）の採択を受けて、法政大学、沖縄大学、名城大学による短期フィールドワークや長期学生交流プログラムなどを構築し、各種取組を行っている具体的内容の紹介があった。この事業プロジェクトを教職協働体制で取り組む中で、大学職員に与えた影響などについて説明があり、教学マネジメントの強化に向けて、正課外教育だけでなく正課教育における教職協働の機能化こそ、これからの時代に求められるものであると力説された。実例を通じた新しい教職協働のあり方の提示には、聴く側にとって非常に説得力のある講演となった。

後半では、林 透 大学教育センター准教授の全体進行のもと、シンク・ペア・シェアの手法で、講師2名の基調講演について、まずは個人での振り返りを踏まえながら、ペアワークで対話した後、講師との質疑応答を通して全体共有を行った。参加者からは、「学生のためにどのようなことをしていくべきなのか」「大学として、今やっていることをどのように社会に向けて発信しているのか」といった質問があった。講師2名からは、「学生にアピールできる場を作ってあげることによって、結果的に大学全体への還元が生まれるのではないか」「大学職員の方々には、そもそも何のために大学で働いているんですかと聞きたい」とのコメントがあり、改めて、学生のための大学マネジメントのあり方という究極のテーマに焦点が当たる結果となった。

最後に、多賀谷勇治 山口大学総務企画部長より閉会挨拶があり、学内外の大学関係者が交流する素晴らしい機会となり、今後もこのような場づくりを行っていくこととした。



基調講演①（大阪大学 吉田氏）



基調講演②（法政大学 平山氏）



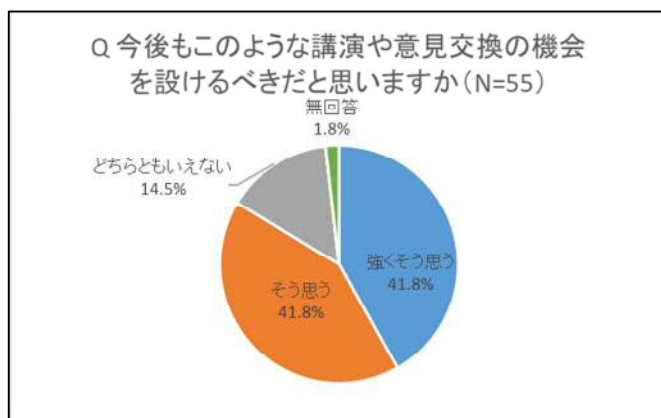
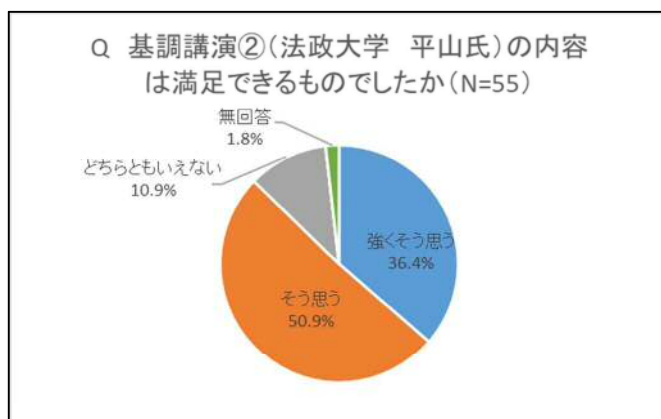
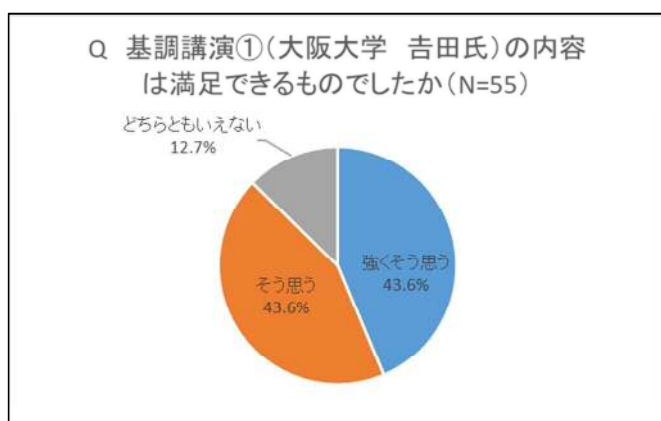
シンク・ペア・シェア風景



全体集合写真

参加者アンケートでは、二つの基調講演ともに、満足度（「強く思う」「そう思う」）が 85%以上であったほか、今後も継続的に開催することを望む声が 80%以上であった。自由記述において、「研究会レベルにとどまらず、所属する大学の潜在力、適正・ニーズを踏まえたフィードバックに持っていく取組こそが、教職協働として重要であると感じた」「成功事例だけではなく、失敗や課題も聞いてみたいと思います」といった積極的なコメントがあった。今後は、若手・中堅職員がもっと参加するような工夫を凝らしていきたい。

「大学リーグやまぐち」が結成されてから 3 年の月日が経つ中で、山口県内の高等教育機関同士、さらには、県外の高等教育機関の関係者との交流を得ながら、大学マネジメントセミナーの更なる充実を図っていきたい。



### (13) 令和元年度 医学部保健学科アラカルト FD 研修会

日程： 令和2年1月21日(水) 13:30～14:30

場所： 医学部保健学科第2研究棟HD1-1教室

講師： 林 透 (大学教育センター准教授)

参加者： 38 名 (アンケート回収 35 名)

#### 【研修内容】

最初に、医学部保健学科堤雅恵教授から医学部アラカルト型 FD 研修会の主旨の説明があった。つづいて FD の前半は大学教育センター林透准教授より「学生の主体的な学びを引き出す授業デザイン ～シラバス点検から始めてみよう！～」について説明があった。まず全体事項として、授業準備と授業設計の大切さを認識してもらい、これを充実させる事で授業目標が達成され、学習効果が明確になる事。達成目標、授業計画、成績評価が連動し重要である事。またシラバスは、契



約書、授業の計画書、カリキュラムに一貫性を持たせるツール、の意味がある事。個別事項の一例として2019年度の医学部・保健学科のシラバス授業計画を取り上げられた。この中で新しい項目として「授業外支持」の項目があり、予習・復習時間の目安を記入する事が必要である事。続いてシラバスは到達目標、行動目標を記入し、学生を主語として書く、カリキュラムと自分の授業の関係を考慮し、到達目標の記載方法を、知識・理解、思考判断、態度の観点から適正に記述すること。到達目標に対しての成績評価である事について確認する事。またルーブリック等の評価についても紹介された。その他として、最近の入力必要事項として、アクティブラーニングポイント、実務経験のある教員による授業科目、持続可能な開発目標(SDBs)についても説明された。さらに授業改善として学生の授業評価と教員の自己評価によるセルフチェック、同じ科目なら比較可能な成績分布の閲覧による評価も可能であり、ピアビューの制度の説明もあった。後半はミニワークとして、次年度に向けて自分の担当科目のシラバスを各自チェックした。最後は、今後に向けてシラバスのチェックは授業の質保証であることであるから、各教員によるチェック、また学部・学科でのチェックを行い、大学教育センター側ではシラバス関連のワークショップを継続的に実施してさらにマニュアルの充実をする、でまとめられた。



#### 【研修の感想】

1. 自分のシラバスを見て、授業外の支持が少なかった。反省している。またアクティブラーニングについてはデザインできるか再考したいと思う。



2. 私も授業の指示をシラバスに示していなかったので、入力したい。
3. 医学部医学科では eYUME がしっかりしている。学生は私の授業をチェックしている。厳しい指摘を学生から受ける。学外に向けた説明責任が必要であることがわかった。

**設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？**

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	13	37.1%
良かった	19	54.3%
どちらとも言えない	3	8.6%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	35	100.0%

## (14) 令和元年度 アラカルト FD 研修会 大学生・大学院生の抱えやすい課題と学生相談の現状 (理学部 FD 研修会)

日時 平成2年3月10日(火) 15:00~15:35  
場所 人文学部・理学部大会議室  
講師 春日由美(学生相談所長:教育学部准教授)  
参加者 59名(アンケート回収47名)



### 内容

はじめに理学部宮澤康行教授より春日由美准教授の紹介があった。引き続き春日由美所長の自己紹介があり、その後講演内容に入った。

### 1. 学生相談とは?

まず学生相談の歴史が説明された。山口大学は日本初、東京大学と同時期の1952年に学生相談所が設置された。これは国立大学に保健管理センターの設置以前であること。学生相談のレポートとして「大学における学生生活の充実方策について」報告書(通称「廣中レポート」)が説明され、「大学は教員中心の大学から」「学生中心の大学へ」の視点転換として学生相談の大切性が示され、ハンドブックの作成、その後「大学における学生相談体制の充実方策について」の報告(通称「苦米地レポート」)がされた経緯について。また学生相談は単なる学生へのカウンセリングだけでなく、予防活動、予防教育、教職員に対するコンサルティング(助言)も含まれるため、取扱う内容が多いこと。また、大学生は自殺割合も高く、自殺のきっかけ(原因)を取除く事が大事であり、学生の大学での居場所の確保も大事である事が説明された。

### 2. 学年毎の抱えやすい課題・危機

大学に入学した1年生は、新しい環境への適応ができないと悩みを抱えていること。2、3年生は生活の変化が比較的少ないものの社会の中での自分の存在を考えて自分らしさ、社会との繋がりを考えて悩んでいる。4年生は学生(大学)生活の終点と社会への入口(将来の準備)において多くの現実的な悩みを持っていること。また卒業にあたり親子関係の振り返りの時期でもある。大学院生も、研究生活環境の変化等が伴う場合、対人関係から研究環境と不安の原因(悩み)が多いと考えられる。

### 3. 本学の学生支援

山口大学の学生支援体制は①学生なんでも相談窓口(学生生活全般の相談が可能)、②保健管理センター(心と身の相談が可能)、③学生相談室(臨床心理士配置、居場所設置)、④学生特別支援室(SSR;障害等による修学上困難についての相談)である。学生相談所の利用は4-6月が多く、その後7-10月が少なく11月に再び多くなる。また延べ相談回数を見ると長期休暇中である8-9月は余り減っていない状況から学生の相談のよりどころとなっている事が考えられる。また相談内容は心身的な問題多い。教員との①対人、②修学、③心身問題が挙げられる。また相談は、教職員からの学生対応相談もあり、かなり困難な内容の相談を日々

多く受け付けている現状であることが説明された。

#### 4. 学生相談所から教職員の皆様へお願い

学生相談所からの先生方へお願いとして以下の事が示された。①学生の命を守ることが大切であるため、気になる学生・院生については相談してください。学生相談に行きそうにない学生は教職員と一緒に来て頂いたほうが良いと思われます。②気がかりな学生については先生方と連携して学生相談をさせて頂きたい。③教員が思っている感覚と、学生が思っている感覚が随分異なっていると思われることがあり、世代や立場



の違いにより受け取り方が違う。コミュニケーションの機会が少ないとずれが生じやすいと思われる。これらのことから、こちら（先生から）の話を伝えるだけでなく学生の話聞くようにする。学生にとって先生と話すことは敷居が高いと感じており、先生から敷居を下げて学生の話聞いて欲しい。日々のコミュニケーションの機会をできるだけ作るようにして欲しい。また、学生への対応に関して先生方の相談も学生相談所は聴くことができる。学生対応はかなり難しくなっているので一人で考えるよりも誰かと共有することで気持ちが楽になる可能性があるので利用して欲しい。

#### 質疑応答

Q1:数学を教えている物ですが、数学に人間関係を持たない数学を本気でやれ、と言った事があるが良かったのでしょうか。

A1: 状況に寄るの。人間関係に寄ると思われる。相対的に大学 3 年以上になると人間関係は重要になる。悩むことがあったら学生相談を利用して欲しい。

Q2:自閉症スペクトラムの学生が入学して来た時の学生への対応について、周りの学生また教員も傷つく事が多い。また本人進路の問題についても教員とトラブルが多くなる事が多い。結果として人間関係が傷つく事が多い。この場合は SSR に行くとか、学生相談所に行くことも考えられるが、どの順番で対応したらよいか教えて欲しい。

A2:発達障害等の学生により、周りの学生、教員が傷つく事はよくある。学生、教員も学生相談所で相談し愚痴を吐く事も可能である。SSR 担当から聞いたところに寄ると該当の学生に早めに SSR に行かせて相談させることが良い。入学後早い時期から SSR に行くと次第に落ち着いてきて相談回数が減る傾向がある。特に進路については早くから相談して親とも早く相談することが大事である。

以上

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	8	17.0%
良かった	30	63.8%
どちらとも言えない	6	12.8%
あまり良くなかった	1	2.1%
良くなかった	1	2.1%
無回答	1	2.1%
合計	47	100.0%

# (15) 令和元年度 人文学部アラカルト FD 研修会 大学における授業のあり方を考える ～高校までの授業、教育改革の動向を踏まえて～

日時 平成2年3月19日(木) 14:30～15:00  
場所 人文学部・理学部大会議室  
講師 和泉研二(大学教職センター：教育学部教授)  
参加者 38名(アンケート回収 18名)

## 内容

はじめに人文学部上田由紀子教授より大学教職センター和泉研二教授の紹介があった。引き続き和泉研二教授の自己紹介があり、その後講演内容に入った。

### 1. はじめに

最初に山口大学への合格者の出身校の内訳が説明された。県内の出身者が多く、次いで広島、福岡といった隣の県の出身者が多いことが示された。

### 2. 高校教育の現状から学生達への関わり

#### (1) 変わりつつある高校教育

高校教育の変化についての説明があった。教育改革に伴い、高校も教員研修の頻度が向上し、授業改善の意識が高まっている。これまで高校では①校内研修の機会が少なく、「授業改善等」という意識が薄かった。②授業の進め方は個々の先生に任されていた。③「教員の研修」の機会は限られ、教員個人が研修に参加し授業改善を行っていた。しかし、最近では高校自体が組織的に教育改善に取り組んでおり、校内研修時間が増え、授業改善に取り組み、授業自体が変化してきている。また新しい学習指導要領に示されている「主体的で対話的な深い学び」を意識して授業に取り組む先生が増えている。特に、教科指導、AL(アクティブ・ラーニング)を切り口にした授業改善が進みつつある。ペアグループ学習、ディスカッション、プレゼンテーションを行いながら生徒と共に授業をつくる、という意識が定着しつつある。これまでの「訓練重視の授業」から、「自主的・自発的な学習」を重視する授業になっている。生徒の学力向上の「できるようになる事」は、「確実な学力保証」から「主体的な学び」に移行している。授業改善の取組として、KJ法、ロールプレイ、ブレインストーミング等を授業に取り入れ、生徒が授業に慣れると、学習の仕方が分かってきたと感じ、授業中の表情に変化が出てきている。高校ではアクティブラーニングは単に他者との協働学習ではなく、受動的な学習を乗り越え、生徒自身の活動(書く、話す、発表する)を創り出せる学習を目指している。改革の結果、AL推進に肯定的な教員は増え、授業の内容も数年前に比べてグループ活動や発表が多くなってきており、日常的に行われるようになってきている。

#### (2) 高校の悩み

高校側の悩みとして、大学や社会からの要請と進学の為の学力保証の両立が求められている。このため受験対応と社会的要請のバランスをどう取るかが求められている。高大接続改

革、大学入試改革、学習指導要領改訂が高校教員の生徒指導に影響を与えており、高校が対応を迫られている。高校は生徒に求める姿としての「身に付けさせたい力」と現実のギャップに悩んでおり、生徒の強みを伸ばし、弱みを克服する姿勢で取り組んでいる。

### (3) 山口大学に入学する生徒たち

高校から見ると、山口大学へ進学する生徒は大凡全教科に渡って「基礎的学力」、「読解力」、「地道に真面目に学習しようとする姿勢」は身に付いていて、アクティブなグループ学習や発表等には慣れている。また「与えられた学習」はこなすが「与えられないとやらない」生徒、「自分から考えて」新しい物を創る、提案する、わかりやすく説明する、生徒が少なくなつたと感じている。また大学に対して敬意を持てる生徒であり、「法律遵守」は理解し、誠実に守る道徳心を持っている。山口大学へ進学する層の強み（生かす力）として「基礎的知識・技能」、「他者と協力して学ぶ力、読み取りの力」が挙げられ、弱み（今後伸びていく力）として「主体的に学ぶ力」、「理論的な思考力」、「わかりやすく話す・表現する力」の調査結果がある。

## 3. 大学の授業を通して人を育てる、人材を育成すること

### (1) 大学の授業作り

大学生は内発的に動機と知的好奇心を持っている、また学生が主体的に参加する授業が展開できる土台を持っている。教員が授業デザインやファシリテーションの力を発揮し、授業を工夫することで、授業が質の高い探求のプロセスになると思われる。また授業は教員と生徒と一緒に創る物であり、能動的な学びを仕組む事で探求が深まるはずである。

一例として教育学部 3 年前期で行われている「地域教育実践演習」の授業の狙い、授業の達成目標、授業における創意工夫（外部ゲストの活用、授業冒頭に行うショートスピーチ、少人ワーク、プレゼンテーション、地域授業での協働体験）の説明があった。

以上

#### 設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	0	0.0%
良かった	12	66.7%
どちらとも言えない	4	22.2%
あまり良くなかった	2	11.1%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	18	100.0%

(16) 山口大学 共育ワークショップ2020代替企画(第16回 YU-AP アドバイス会議)  
『直接評価×間接評価のチャレンジ  
～どうすれば、学生の自己評価能力が高まるか～』開催報告

**日 時**：2020年3月23日（月）13：30～16：30

**場 所**：山口大学 共通教育棟2階会議室（吉田キャンパス）

**主 催**：山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）

**構 成**：

13:30～13:35 開会挨拶 山口大学 理事・副学長（教育学生担当） 福田 隆眞

【基調講演】

13:35～14:05 「高等教育における直接評価×間接評価のチャレンジ

～日・米・英における大学生調査など～

同志社大学 社会学部 教授（YU-AP アドバイザー） 山田 礼子

【取組紹介・話題提供】

14:05～14:35 「知的財産教育科目における学習評価と学習成果

～文部科学省教育関係共同利用拠点の成果～

山口大学 大学研究推進機構 知的財産センター長・教授 木村 友久

14:35～15:05 「大学教育再生加速プログラム（YU-AP）における学習成果可視化

～山口大学生コンピテンシー、YU CoB CuS を通して～

山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透

15:05～15:35 「どうすれば、学生の自己評価能力が高まるか

～直接評価×間接評価の活用に着目して～

新潟大学 経営戦略本部 教育戦略統括室 准教授 斎藤 有吾

（休 憩）

15:40～16:10 「共同獣医学部の学位プログラムの質保証

～全国初、欧州質保証機関認証の取組紹介～

山口大学共同獣医学部長・教授 佐藤 晃一

【意見交換】

16:10～16:30 意見交換・クロージング

閉会挨拶

山口大学 大学教育機構 大学教育センター長・教授 菊政 勲

**内 容**：

2020年3月23日（月）午後、共育ワークショップ2020「直接評価×間接評価のチャレンジ ～どうすれば、学生の自己評価能力が高まるか～」の代替企画をYU-AP第16回アドバイス会議として、山口大学 共通教育棟2階会議室（吉田キャンパス）にて開催した。当日は、登壇者、大学教育センター関係者、学生スタッフ計10名が参加した。今回は、YU-AP事業最終年度に当たり、本事業目標の特徴の一つである「直接評価×間接評価活用による学修成果可視化」をテーマに、これまでの取組を振り返り、今後に向けた課題等について考えてみることにした。

冒頭、福田 隆眞 山口大学 理事・副学長（教育学生担当）より開会挨拶があり、YU-AP

事業協力への謝辞とともに、本企画が盛会となるよう期待する旨の言葉があった。

同志社大学社会学部教授 (YU-AP アドバイザー) 山田 礼子 氏より「高等教育における直接評価×間接評価のチャレンジ ～日・米・英における大学生調査など～」と題し、基調講演があった。学習成果に関する直接評価と間接評価のモデルや国際動向について概説しながら、山田先生が長年関わってきた学生調査 JCIRP から見られる分析結果や日米韓による大学生調査を通じたクロス・ナショナル分析結果が紹介された。その後、直接評価と間接評価を統合した試行的取組を通して、直接評価による能力測定と間接評価との相関傾向が見られる事例の紹介があった。最後に、直接評価と間接評価から得られた学びの実態を一つの教育情報と捉え、実際に教育改善に結び付けていくための課題は何かとの問題提供があった。



山口大学 大学研究推進機構 知的財産センター長・教授 木村 友久 氏より「知的財産教育科目における学習評価と学習成果 ～文部科学省教育関係共同利用拠点の成果～」と題し、取組紹介があった。2013年度から取り組んできた知的財産教育科目の1年次全学必修化や知財展開科目の開設、さらには、大学院共通教育科目の開設に取り組み、2020年度には33科目の設置が完了するとのことであった。特に、1年次全学必修科目「科学技術と社会」では、毎年度の授業理解度や学生授業評価・教員自己評価などの結果を検証しながら、授業構成の統一化、e-learning 活用による意匠制度・商標制度の授業時間拡充などを授業改善を進め、受講生の知識理解度をアップしてきた取組が紹介された。その過程では、担当教員間によるFDを徹底しながら進めてきたことも紹介された。本学における授業科目レベルでの組織的な改善充実取組として、大いに参考にすべき事例である。これらの取組は、文部科学省・教育関係共同利用拠点の取組の一環として、他大学への波及・運用も進んでいるとのことであった。



山口大学 大学教育機構 大学教育センター准教授 林 透 氏より「大学教育再生加速プログラム (YU-AP) における学習成果可視化 ～山口大学生コンピテンシー、YU CoB CuS を通して～」と題し、取組紹介があった。YU-AP 事業6年間での学修成果可視化の取組を振り返った後、「大学全体」レベルの取組として、学修行動・学修到達度調査による「山口大学生コンピテンシー」の可視化の自立化や1年生・3年生の経年比較結果などを説明した。また、「学位プログラム」レベルの取組として、YU CoB CuS の全学展開や学部教員インタビューなどを紹介し、国際総合科学部での学修成果のほか、国際総合科学部以外の学部の取組内容を説明した。さらには、これらの取組によって得られた学修成果に関するデータを活用し、高等学校や企業の関係者との対話の機会を設け、大学教育における学修成果そのものの相互確認などを行う取組を始めたことを紹介した。最後に、YU-AP 事業を通して学修成果可視化の基盤づくりができたことを踏まえ、今後は、直接評価・間接評価の活用や学生の自己評価能力の向上に繋げていきたいということであった。



新潟大学 経営戦略本部 教育戦略統括室 准教授 斎藤 有吾 氏より「どうすれば、学生の自己評価能力が高まるか ～直接評価×間接評価の活用に着目して～」と題し、話題提供があった。最初に、参加している学生スタッフに向けて、大学教育を通してどのような資質・能力を身に付けようとしているのか、ということを問いかけながら、学修成果の意義や価値について説明を行った。さらに、直接評価は根拠やエビデンスを伴った評価であるが、間接評価は根拠が伴わない評価であるとの解説があった後、新潟大学歯学部



「大学学習法」の授業実践を取り上げ、学生自身が書いたレポートを基にした自己評価（直接評価）と教員による評価に関し、ルーブリックにおけるレベル間の差異を丁寧に説明し、振り返りを行うことで、学生の自己評価と教員評価のズレが縮まり、学生自身の自己評価能力が高まるとの説明があった。個々の授業科目における学生の自己評価やリフレクションが大事であると述べた。今回の企画テーマに関し、大変示唆に富んだ内容であった。

山口大学共同獣医学部長・教授 佐藤 晃一 氏より「共同獣医学部の学位プログラムの質保証 ～全国初、欧州質保証機関認証の取組紹介～」と題し、取組紹介があった。まず、共同獣医学部の設置と獣医学教育改善に関する 10 年間計画の概要について説明があった後、欧州獣医学教育認定機構（The European Association of Establishments for Veterinary Education (EAEVE)）による国際認証に向けた教育課程や教育施設の改善充実の取組について詳細に紹介があった。また、共同獣医学部で学ぶ学生の学修成果として卒業時に身に付けておくべき獣医学スキルである Day One Competency やログ・ブックの運用について説明があった。さらには、学生やステークホルダーが関与した形での質保証の体制図について説明があり、これらの取組を通して、獣医学教育が確実に充実してきている実感を持っているとの言葉があった。本学における学位プログラムレベルの質保証の手本となる取組であり、大いに参考となる内容であった。



最後に、菊政 勲 山口大学 大学教育機構 大学教育センター長より閉会挨拶があり、盛り沢山の内容で充実したものとなり、外部講師の方々への労いの言葉があった。

#### まとめ：

今回は、新型コロナウイルスの関係で、自由参加によるワークショップ形式での開催を中止にせざるを得ず、YU-AP 事業成果報告を兼ねたアドバイス会議という形式での開催となった。しかし、学修成果の把握や可視化という今日的に非常に大事なテーマについて、YU-AP アドバイザーである山田礼子先生による基調講演、YU-AP 事業に加え、本学が誇る知財教育や共同獣医学部の取組紹介、さらには、本学の学修成果可視化の基礎づくりに貢献した斎藤有吾先生による話題提供があり、相互に意見交換できたことは大変有意義であった。今回の機会を通して得られた知見を事業終了後の継続的取組の中で有効に活かしていきたい。



## 2. 教育改善研修会

### (1) 理学部・創成科学研究科（理学系）

日程：令和元年10月9日(水) 15:00～15:30

場所：人文学部・理学部大会議室

講師：林 透（大学教育センター准教授）

参加者：47名（アンケート回収 41名）

#### 【研修内容】

最初、理学部宮澤康行教授から教育改善FD研修会の主旨の説明があった。つづいて大学教育センター林透准教授より「学修ポートフォリオ」について説明があった。学修ポートフォリオを行う事で、「学修者の振り返りと成長のために」として利用して欲しい。学習の3つのポリシー（DP、CP、AP）と内部質保証を高めることに利用する。学生の自律的な学びを推進するために、経験を振り返り、熟考する為の機会を作るために行って欲しい。その振り返りの起点として、また振り返りのツールとしてポートフォリオが利用できる。さらに電子ポートフォリオについての説明があり、入力データが卒業時までシステム上にあることで紛失しない、かさばらない。またLMS（ラーニングマネジメントシステム）と連動させて使う事ができる。教員が資料の検索ができる等の便利な点が紹介された。さらに新就学支援システムにもポートフォリオのメニューが用意された。まだ中身は不十分ではあるが、今後充実していき、活用しやすいようになる予定である。



#### 【質疑応答・意見交換】

1. e-ポートフォリオについて他学部の活用状況について聞きたい。

各学部・学科の使用状況調査を4-5年前にした。また運用の調査を2年前にした。

人文学部では組織的に学生との個人面談に紙媒体のポートフォリオを使用している。国際総合学部ではYU CoB CuSを使っていてメールを使って学生とやりとりをしている。医学部はeYUSDLを使ってポートフォリオを行っている。

2. e-ポートフォリオのデメリットはありますか？

e-ポートフォリオの利点としては、紙媒体は煩雑であるが電子媒体では引き出しに入っている。しかし面談の際には紙媒体が重宝されるため印刷物を用意しているとの意見が多い。電子上のデータを CSV 形式では吐き出すため不便を感じる。このシステムは学部単位、学科単位では運用できるが、個人単位（だれが見ることができるのか等）の個人のデータ検索については機能がないので使いづらいところがある。



またこのシステムを使うには、学生に書き込んでもらう工夫が必要である。システムに書き込んでもらうようにコア授業やオリエンテーションの機会を使うと効果があると思われる。

3. 自分の授業について、年度毎、学部学科上で指導に活用したいのでポートフォリオのカスタマイズはできるか？

担当毎に eYUSDL に備わっているので可能である。小テスト、設問も同様にできる。従来紙でしたものが e-ポートフォリオでできる。

#### 設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	8	19.5%
良かった	12	29.3%
どちらとも言えない	15	36.6%
あまり良くなかった	3	7.3%
良くなかった	1	2.4%
無回答	2	4.9%
合計	41	100.0%

## (2) 教育学部・教育学研究科・東アジア研究科（教育系）

日時 令和元年10月16日(水) 15:00～15:40

場所 教育学部 講義棟 D棟 2階 21番教室

参加者 80名（アンケート回収 24名）

担当者 林 透（大学教育センター准教授）

### 内容

はじめに教育学部 FD コーディネーターの飯寄教授より講師紹介があり、その後講演に入った。

林准教授からは、修学支援システム上でeポートフォリオが運用できる環境が整ったことに加えて、最近では学生の学修成果だけでなくプロセスもしっかり見ながら学生を育てていかなければならないという事が重要になってきているので、今回このテーマで、全学でFDをさせて頂いていると説明の後、3つのポリシーと教育の内部質保証の重要性等の背景などについて説明があった。更に、自発的な学びのサイクルの中で振り返りについて経験学習におけるKolbのサイクルやメタ認知等のキーワードを交えながらその重要性について確認すると共に、効果的な振り返りとして自己・集団・対話による3つの振り返りの紹介、振り返りのツールとしてのポートフォリオの位置付けの紹介等が行われた。

その後、eポートフォリオの特徴やメリットについて確認すると共に、本学修学支援システムにおける環境整備の状況、及び利用可能な機能や画面構成等について紹介が行われた。

### 質疑応答

Q：実は10年前に学生支援センター長をやっていた時にポートフォリオの導入で苦労した。これをかなり要求した、電子媒体で出来ないかと、当時予算ないので紙でやれと。電子媒体にするのは大歓迎のところ、自分自身が疑問になっているのは、もう10年になるが検証はされているか？センター長の時は効果があるよと言っていたが、内心どういう効果があるか、それは具体的な検証の中で証明されてくると思うがどうか？

A：量的な評価は難しいが事実確認はいろいろ出ている。各学部学科でポートフォリオを1～4年でどう使っているかは全部調べている。以前よりは組織的に使われている。定期的な振り返りの時に非常に大事だということ。教育学部は教職カルテベースでやられているし、人文学部で良く活用されている。それは学部学科で1年間何をやったか確認するという事が教員学生で大事だという事で浸透している。国際総合科学部はYU CoB CuSベースにやっていて、質的調査だが学生・先生へのアンケート取っている。学生もYU CoB CuSに基づいて振り返っているかは2、3年で有意差はないが数値は上がっていることを示しているし、国総のFDでもフィードバックし

### 設問1

#### 研修会に参加した感想はいかがでした？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	6	25.0%
良かった	11	45.8%
どちらとも言えない	6	25.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	1	4.2%
無回答	0	0.0%
合計	24	100.0%



ている。もう一つは、eYUSDL、eポートフォリオ化についても数年前に、教学委員会で各学部学科に要望は聞いている。その時もう既にeポートフォリオの方が煩雑にならない。保存するにも、閲覧するにも効率的だという話があったので、新しい修学支援システム乗り換えた2017年にすぐに運用したかったが、YU CoB CuSの運用も含めて時間を要した。我々が感じている肌感覚は、電子化の方が、紙でやっているより効率的だと言われている。全体的に先生方の声やアンケートを通して一定の有効性を感じている。

Q: アンケートが取れるのは分かるが、記録媒体で画像等は保存できるのかという事と、4年次、卒業後はデータどうなるか。

A: その議論もよくある。保存する物は先ほどのように設問設定してやり取りする以外に、学生が自分の学修成果、インターンシップした時のレポートや多分写真なんかも保存できるようなボックスの機能はある。それを振り返りの時に使うことは多分システム上は出来る。卒業後は、他大学や、看護分野なんかだと、大学出た後専門職として学んだこと生かしてキャリアをステップアップしていくと言うことで、学生時代のポートフォリオを落としてデータ持っていくと言うことをやっている大学はある。ただ、今のシステム上はそれが出来ない。物理的には改修していくとそういうことが出来るが、学内のニーズがあれば考えていきたいが、今のところはその機能もってない。その声はちらほら聴くので全体のニーズ聞きながら考えていきたい。

## アンケート

以下のような内容が見られた。

### 感想

- おっしゃっていることは理解できますが学生の自発的な学びを促すというのは口で言うほど簡単ではないというのが率直な感想です。
- 学習者の振り返りを促す指導のよさ、本当だと思います。振り返りの過程で、学習者の思い願いを聞くことが出来れば改善が進む。
- もう少し背景として、学術研究の成果(先行研究のデータ)を紹介して欲しい。
- 学修効果を上げるために大学教育センターが取られているアプローチが良く分かった。

### 希望の研修内容

- 具体的な実例があればわかりやすいかと思えます。
- 大学関係者以外の人のお話が聞きたいです

ね。

- e-ポートフォリオ、エビデンスに基づく X、e-X
- Society 5.0 への対応
- 大学運営システム
- 新しい情報について効率よく理解できるもの
- 具体的に学生の指導なりがやること
- 学生の学修効果を上げるためにはどのような授業が効果的なのか

### 実施時期

- 会議の前はよくないです。
- 拡大教授会の審議事項が多い時や実習事後指導とバッティングしている時などはやめた方がよいのではないかと
- 給与の話もある中で、わざわざこのFDを会議に合わせて行う必要があったか疑問。
- 事務職員の退勤時間などどう考えている

のか

以上



### (3) 共同獣医学部・連合獣医学研究科

日程：令和元年10月23日(水)13:40～14:10

場所：農学部・共同獣医学部本館2階大会議室

講師：林 透（大学教育センター准教授）

参加者：18名（アンケート回収13名）

#### 【研修内容】

最初、共同獣医学部下田宙准教授から教育改善FD研修会の主旨の説明があった。つづいて大学教育センター林透准教授より「学修ポートフォリオ」について説明があった。学修ポートフォリオを行う事で、「学修者の振り返りと成長のために」として利用して欲しい。学習の3つのポリシー（DP、CP、AP）と内部質保証を高める為に利用して欲しい。学生の自律的な学びを推進するために、学修を振り返り、熟考する為の機会を作るために、行って欲しい。その振り返りの起点として、また振り返りのツールとしてポートフォリオが利用できる。さらに電子ポートフォリオについての説明があり、データが卒業時までシステム上にあることで紛失しない、かさばらない。またLMS（ラーニングマネジメントシステム）と連動させて使う事ができる。教員が資料の検索ができる等の便利な点が紹介された。さらに新就学支援システムにポートフォリオのメニューが用意された。まだ不十分な所はあるが、今後中身を充実し、活用しやすいようになる予定である。



#### 【質疑応答・意見交換】

1. ポートフォリオについて他学部の状況について聞きたい。

基本的にはYU CoB Cus を用いてポートフォリオが行われ、学生は自己評価している。評価の可視化することで授業を振り返っている。教育学部では以前から組織的にエクセルベースでポートフォリオを行っており、結果のデータ解析を行い、自分の教師像としての評価等に用いている。人文学部では学生との個人面談に紙媒体のポートフォリオを使用している。国際総合学部ではDPを評価している。医学部はeYUSDLを使って国際認証資格の要件について可視化機能を使ってポートフォリオを行っている。また学年単位で設定を行っている。

2. 学習の成果についてはポートフォリオに載せることはできるか。

学生の実験レポート、教員が教育（例えば実験）しているところ記録としての写真、ビデオについてはデータとして載せることはできる。



設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	2	15.4%
良かった	6	46.2%
どちらとも言えない	4	30.8%
あまり良くなかった	1	7.7%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	13	100.0%

#### (4) 工学部・創成科学研究科（工学系）

日時 令和元年 11 月 13 日(水) 14:20～15:00

場所 工学部 D 講義棟 1 階 D11 番教室

参加者 24 名（アンケート回収 14 名）

担当者 林 透（大学教育センター准教授）

##### 内容

はじめに工学部 FD コーディネーターの柳原教授より平素からの FD 活動への協力についてお礼が述べられると共に、今回の FD 研修会の趣旨について DP による教育学習の徹底が求められており学生自身が学年進行に応じて自らの学び振り返りながら担当教員等の指導助言を受けつつ学修を進めていくというプロセスを明確化するツールとして学修ポートフォリオが欠かせないものとなっていると説明があった。更に講師紹介に続いて、学修支援システムにおいて運用可能な学修ポートフォリオの機能や意義を説明してもらうことになっており、学修ポートフォリオへの理解を進めていきたいと考えていると紹介が行われた後、講演に入った。

林准教授からは、第 3 期認証評価が迫ってくる中で組織での内部質保証が大学レベル、学部・学科レベルで非常に重要になって来ており、その起点となるのが 3 つのポリシーを軸とした内部質保証と教学マネジメントが非常に大事になってきている。その中で先生方の教育に加えて、学生がしっかりと学んでいけているかという事と、しっかりと学修成果が上がっているかが大事になってきている。特に最終的な学位プログラムの到達点である DP に対してしっかりと学修成果が上がってきているかが問われてきている。学習成果に加えて学習過程も非常に大事になって来ており、その中で学びを振り返るツールとして学修ポートフォリオが大事になってきていると、今回の研修会で紹介するポートフォリオの重要性について述べられた。

続いて、生涯学び続けられる力・態度を大学 4 年間で身に付けて出て行く必要があるという事について中教審の 2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン答申などにも触れながら言及すると共に、経験学習における Kolb の理論やメタ認知能力等のキーワード、更にはベネッセ教育総合研究所と東京大学社会科学研究所の共同調査(親子パネル調査)等のエビデンスも交えながら学びの振り返り・リフレクションの必要性について紹介された。また、有効な形態やアプローチとして自己・集団・対話による振り返りや、振り返りのツールとして学修ポートフォリオの紹介が行われ、これを電子化する事のメリットとして、紛失の防止や、情報の共有、検索やショーケースなどの機能を紹介され、本学学修支援システムにおける準備状況や機能、実際の画面等について紹介が行われた。

##### 設問1

##### 研修会に参加した感想はいかがでした？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	0	0.0%
良かった	12	85.7%
どちらとも言えない	2	14.3%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	14	100.0%





## 質疑応答

Q： 修学支援システムを使っているが、私の科目、工学部では何かのスキルと言うか工学の設計の基本のような勉強をすることが多くて、どちらかと言うと本人が理解度をもう少しうまく把握できるように出来ないかと思う。例えば中間テストの点数を入れられて学修者に見えるとか、それが良いかどうかはわからないが、そういうことは出来るか？本人が数値的に学習の達成度を把握できるもの。

A： システム的には eYUSDL で見える同じ画面となると改修が必要になるが、1つ1つの科目ではなくその期間で学んだものと言う理解で良いか？

であれば、セメスターや学年ごとにポートフォリオの中で〇〇分野の中でどのくらい身についたと思いますかと例えば択一や自由記述で書いてもらうことが出来ると思います。面談をしている学科もあると思うので、場合によっては面談の時にそこを更に深く聞いてみるという形で行えばよいと思います。今までは学生ポートフォリオの項目も割とおおざっぱに年間の学修目標を立てたり、学生生活がどうだったかと項目を立てていたが、そこは学科の裁量で、学修でどのくらい学べたかという項目を立てて頂いて書いてもらうというのが一つあると思う。自己評価するという。本当はこの画面の中で参照しながら出来るが良いが、改修が必要となる。LMS と連携することは出来る。

Q： 一つの講義の進捗度合いの中である程度理解出来たらと思って、というのは最後にアンケートを取ったときにあまりよく理解できなかったとかいう返事があって、途中でもっと聞いておけばよかったと思うことがある。どの辺が分からなかったかとか。いろいろ出来れば有効に使えるかなと思う。

A： 大教センターの立場から言うと、先生方は割と自分のカリキュラム上で担われている科目のところはどうしても執着するようなんですけど、最終的には年間でカリキュラムの中で科目も関連性があるって、その中で例えば電気電子に関する理解や力学に関する理解が身についたかとか、振り返る必要があると思う。各科目は当然先生方の到達目標に対してどれだけできたかについて、テストをやっていると思う。学修ポートフォリオでは、もっと長いスパンを扱うことになるので、もう少し抽象度が高くなる。もう一つ言うと、九州工業大学の話だが、本学でも JABEE を受けている学科もあると思うが、ポートフォリオシステムが凄く充実していて、ポートフォリオの中で自分がカリキュラムマップの中のどれが取れて、どれくらいの成績が取れたかを自己省察でき、かつ自己評価できるシステムを導入されている。また何かの機会に、先生方にご紹介出来たらと思っている。素晴らしいシステム入れてやってところが工学系でもある。

Q： 良く分からなかったところがあって、メタ認知の話のところ、何かについて分かることが分かることというのはあるが、学生の場合、何が分からないかわからない子がいる。そこを、解決してあげないといけないと思うが、それは振り返りのやり方で、上手くやるやり方あるのか、質問事項や設問変えてやってかないといけないのか。分かることを分かると言うのはいいが、分からないの、どこが分からないかわからない子いて、そういう子をどうしたらよいかなど。

A： 最終的に、分からないこと自体を、自分自身が自覚しないと次、主体的に動けないと思う。最終的に自律的な学習とか、自己調整をしていくのは、分かった人も分からない人も同じと思う。そこをファシリテートと言うか、支えることが、我々に求められている。今日、職員の方も聞いていらっしゃるが、職員もその一助を担わなければならなくなっている。

Q：そこが上手く、こういうのでわかればいいけど、今彼がどこで分からないのか分かれば指導の仕方もありますよね

A：面談は手数かかると思うが、ただ面談じゃなくて、記録、2年の1学期で何か不安ないですかと、対面じゃないと掘り起こせないと思うので、そこでポートフォリオがあるのかなと。

Q：面談も大変で、工学部は1科目必修なら90~100人になるので、研究室の学生くらいならいいが、そこを上手くやるのどうしたら良いかなと。

A：私立大学だとアカデミックアドバイザー多く配置されていて、何人単位で一人付けている。数が多くてもやっていかないといけなくなっているのは理系は一度躓くと困るから。全員じゃなくても学修の記録ありますよね、素点や、GPAで、ちょっとどうなのと言う人呼び出してくれない。

Q：工学部の場合、大学院に行く子がいるのでIDが代わる。4年間溜めて、紐付け、そこを連携しておかないと使いにくくなると思う。これは教育センターじゃなくてメディアとかかもしれないが考えて頂けると良いと思う。

A：それは認識してなかった。大事なポイントなので学内で、センターでも議論したい。

Q：最初は、理解と言うので授業の話かと思ったけどそうではないという話で、設問等を見ると達成出来ましたかとかあって、そういう話になっているけど、そうするとステップアップノートがあって、それを電子化すればいいのかなと思います。そういう問題なんですか？大教センターとしてどれくらいのスパンで使ってもらいたいのか、それを示していただかないと、最後のところで学科、部局となると結局、仕事増えるだけじゃないかと思う。

A：あくまで授業単位ではなく期間設けての学修ポートフォリオなので、まず学部レベルであれば当然4年間、刻みとしては1年単位とかセメスター単位で振り返りをしてもらおう事になる。なんでこういう話をしているかというと、YU CoB CuSを導入している国際総合科学部はYU CoB CuSのスコアを見ながらクォーター毎、セメスター毎で振り返っている。教育学部も最近、教育学部版のYU CoB CuSを作って運用している。学科でカスタマイズして使ってもらうことも可能ですが、eYUSDLでもデフォルトでこういう運用ができるので、設問項目だけ定めれば学科単位で求められているものについて、指導教員と学生のインタラクションができる。それをいろんな学部・学科、9学部あるので、学部・学科単位で運用して頂きたいというのが我々の希望ではある。

Q：その設問セットできればと言う所が凄く大事で、あなた達成出来ましたかとか、出来ませんでしたとか、まあまあとか書いてですね、それでインタビューしてまあまあじゃいけませんねとか、もうすこし頑張りましょうとか、そういう繰り返しだったら、何か偏差値のわかるところはそれが出来ているとかどういう風に近づけられるか、その設問を見ると申し訳ないけどがっかりするんですよね。

A：これは従来の学修ポートフォリオの学生生活面が充実しているかとか今年目標何を建てますかとなってますが、我々いろいろ話聞いていると学部学科の専門性によってどうポートフォリオの設問を立てるか、特に学修ポートフォリオとして運用していくにはかなり学習指導の形態も全然違うんですよね。私、9学部全部調べました。なので、そこはご相談に乗ります。逆に、学科としてこういう風に運用したいんだけど、どう運用したらいいかという事を逆にご相談に乗らせて頂く、ご支援させて頂くと言うスタンスかなと思う。もちろん元々の学生ポートフォリオ

のスタイルもあるので、これで運用してくださいと言うスタイルもあるが、そこは学科様で、ポートフォリオの項目について逆にご相談させていただきながらこちらでご支援するというスタンスで今日来ている。

Q：例えば、これを使ってくださいというときに、どういう使い方がありますかとか、これを使わないといけないんですかとか、という話にならないのか。

A：今のスタンスはYU CoB CuSの時もそうだったですけど、各学部環境に応じてYU CoB CuSもいろいろ使われている。我々はなるべく強制したくないというのが大教センターのスタンスです。こういう環境で使えるから、まずは学部さんのお声、今日もこれ初めてこういう形で使えるということを今回今年度初めて紹介しているので、ニーズを聞かせて頂きながら、運用検討してみたいとか、ご要望があればお聞きしますよと言ったのはそういう意味で、まずはシステムや環境があるという事を今日説明に参ったということです。具体的話になると当然ご相談させていただく。そういうスタンスでなるべく対話型でやって行きたいと思っている。どうしても、こういう形でやってくださいとやると、工学部は割と柔軟と思うけど、いろんな学部があって、いろんな反論があるわけです。その中でまずは大枠でこういうフレームでできるので、学修ポートフォリオ、学習過程見ていくこと大事ですよ。その中で運用されますかと、そういう相談できていると受け取って頂けると。

Q：お立場分かりました。

Q：学生にとって、私とかだと面と向かって話した方がフランクに話せるんじゃないかと勝手に思ってますけど、学生は多分そういうのが嫌でこういうの介してやった方がいいのかもしれないなと思ったので有効性はあるのかもしれない。ひとつ聞きたいのはこれ、匿名性はないということなんですよ？このシステムとしては、ある特定の指導学生と先生の間でと言う話があるということで、個人情報、学科で共有するかも学科の判断ということですか。

A：個人情報の扱い、大事になってきます。今のところ基本的に指導学生のものは指導教員しか見えないようにしようとしているが、学科で参照したいとかなると、またお話し聞かせて頂きたい。基本的にはポートフォリオは個人のものになるので、指導教員は指導学生だけが見える環境になると思う。指導教員も、主・副あって各学部学科で体制違うので、そこは運用し易い環境にしたいと思っている。

Q：最初にあったが、集団でというのは可能なんですか？何か共有するというシステムの。

A：これ前段の話は自己省察する際にそういうやり方で深まるという話をたが、修学支援システムでやるところは、集団でやるのが可能な項目とそうでない項目があると思う。今日やっている修学支援システムの対話のところのやり取りとなると自分の振り返り、それと後は先生との対話と言う所、ここの2段階かなとは思っています。あと、いろんな場面では集団で振り返る事、実験・実習、研究室単位でいろいろ学習の進捗や研究の進捗測るときにやられてますよねという話でちょっと言ったところがある。

Q：指導学生なら直接の方が手取り早い話で、こういうことやるの回りくどいのかなと。少し関係薄い学生と教員とも会えたほうが良い気が。

A：その辺りも誤解ないように頂きたいのですが、まず学修ポートフォリオは誰のものでしょうか？まず、一番起点は学生が毎年度の学習でどれだけできたか不安点があるかという点を、まず自分の学びの量を蓄積していく、まず見るのがまず一義かなと。学生のためのポートフォリ

オなので、まずそういう意味ではメリットはあると思う。あと、いろいろと指導するときの在り方は当然近くにおいて対面の方がいいですけど、学生のためにはこういう蓄積した物、1年2年3年と振り返るために必要だろうと言っているんだろうと。そこを上手く運用して頂ければと思います。

Q： まずは学科全体で、配属は4年生からなので、1年から4年生までは学科全体では学科長が旗振ってこういう風を書いていきたいと思います。自己でやって、もしかしたら面談するチャンスがあるかどうかという形で運用していくということですか？希望としては4年生までにある程度ポートフォリオの使い方が分かれば、そのまま使っていれば有用性あるのかなど。それで最終的に6年、学部と研究科をうまく繋がないといけないと言うのもあると思うんですが、そうすると学生にも有用、例えば書いてある目標とかが半年ごとにどう変わってきたのかとか、そういうのも面白いのかなとは思いました。

A： 目標の所も学科で定めにくいところあれば学科の学位プログラム単位で当然DPがあるので、そういうのを振り返るポートフォリオの目安として設定されて、毎年聞いてくというのも一つの方法ではないですかと提案させていただいて、またそれは学科で検討して頂ければと。

Q： 振り返りというのが凄く理解出来て非常に重要だとわかりました。個々の授業の、毎回の授業のデータを各学生が全部保存して行ったら、本当にずっと振り返ることが出来るなと思えました。

A： それも今の修学支援システムがユーザーサイドで使い易いかというところいろいろご意見あると思いますが。

Q： アイデアとして言わせてください。結構今の学生、黒板、白板を写真で撮ったりするんですけど、自分のノートを写真で撮ったりするから、しょっちゅうレポートを出させているので、それも全部保存して行ったら振り返ることが出来るなと思って。それで学習どのくらいしてるか学生見えるので、こっちからもみようと思ったら見えるようになると、どこで困り始めているかもわかるようになると。それだけのデータ保存できるような体勢になってきているのかなと？

A： 修学支援システム、授業単位では先生方も授業資料アップロードできますし、割と教員ベースになってますけどアンケートも授業単位で出来る。それを学習者側も保存出来ると思うので、そこに振り返ってみようとか確認してみようというのを入れると授業単位では。

Q： そうですね。学生の方で、自分のデータをその授業の個々の所に放り込んで行けるとすると、本当の意味の振り返りが出来るので、それを全部集めたら相当の量になる。それは凄く価値がある。自分のやってきた成果を見返すことも出来るので、そういうシステムにすると凄く良いんじゃないかと思えました。これはアイデアですが。

A： それも踏まえながら、1年終わってどうだったかというのをポートフォリオの所で自分で言語化させてみるというのもありかなと思うんです。そういう紹介だったんです。

以上のように活発な議論が繰り広げられた。

## アンケート

以下のような内容が見られた。

## 感想

- 前任の大学で WEB システムみたいなものがあつた。学生にとっては直接教員と話すよりは間接的に連絡する方がいいかもしれない。
- システムを作りましたので使って下さいが、いずれ、使って下さいとなりそう、もしくは、工学部でどこかで使って下さいとアリバイ？になりそうと思えてそもそもの必要性が感じられなかった。
- データの収集、集約の重要性は分かった。これを指導に役立てていくのか続編を楽しみにしている。
- ポートフォリオの定義について、ぼんやりではあるがりんかくが見えてきた。

## 希望の研修内容

- 学内・学外でケーススタディや事例(上手くいった)を聞きたい
- LMS について
- 教学マネジメント、教育の内部質保証
- 教学マネジメントのこれからと対応について

## 実施時期

- 年度の早い時期が良いと思う
- 新たな取り組みを始めにくい

## 参加したくない理由

- 時間がない

## 実施場所

- もう少し狭い教室の方が良いと思う

以上



## (5) 経済学部・経済学研究科・東アジア研究科（経済系）

日程 令和元年 11 月 20 日(水)  
 [吉田地区] 15:00～15:30  
 場所 大会議室  
 (吉田キャンパス)  
 講師 林 透  
 (大学教育センター)  
 参加者 56 名(アンケート 32 枚回収)



### 内容

本研修会では、修学支援システムにおいて運用可能な学修ポートフォリオの意義や機能について説明があった。

第 3 期認証評価に向けて教育の内部質保証が組織の各階層で重要とされている。それには 3 つのポリシーを軸とした内部質保証と教学マネジメントによって、教育による学修成果が上がっているか検証と改善を行う必要がある。具体的には、学習成果に加えて学習過程も重要視されており、学びを振り返る学修ポートフォリオが欠かせないツールとなっている。そこで、本学では e ポートフォリオを修学支援システムで取り扱えるように整備を行うことになった。その特徴やメリット、効果的な利用方法、システム環境整備の状況、及び利用可能な機能や画面構成等について説明があった。

講演後には以下の質疑応答があった。

Q1 e ポートフォリオでは、学生との振り返りのためのコメント欄には添付ファイルをアップロードできるか。

A1 現行では、文字もしくは選択肢にのみ対応している。

Q2 e ポートフォリオの公開範囲はどうなっているのか。

A2 現在調整中であるが、基本的には指導教員とその学生のみで考えている。

Q3 経時的に学生のポートフォリオの内容を確認できるのか。

A3 これから対応する予定である。

Q4 e ポートフォリオの導入をどのように進めるのか。

A4 各学部や学科の要望を聞いた上で、使用を希望する部局から利用を開始する。

Q5 大学教育センターでは良かれと思って進められているのだろうが、調査一般について審査が必要であったり事務作業が増える懸念がある。

A5 アンケートの重複を省くなど、検討を進めてゆきたい。

研修会後のアンケートでは、「意義がよく伝わらない。具体的でなく抽象的すぎる (reflection, portfolio)」、「今回、いいと思えなかったから (参加したくない)。本当に教育・学習効果があるシステムにしていきたい」、「時間 (30 分) や内容も良か

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	3	9.4%
良かった	19	59.4%
どちらとも言えない	7	21.9%
あまり良くなかった	2	6.3%
良くなかった	1	3.1%
無回答	0	0.0%
合計	32	100.0%

った」、「修学支援システムへの理解に資する内容であったかと思います」、「紙でやっていたことを電子的にできるようにするのはとても良い」、「学習ポートフォリオについては、良い使い方、効率的で効果のある使い方などの事例を提供していただきたい。また、現在各教員の事務量が大幅に増加している中、現場全体の作業量・事務量を考慮して導入等を進めて頂きたい」、「e ポートフォリオの存在をはじめて知りました」、「形式的」、「学生への効果が不明。すでに演習内で実質的に同様のことを実施している。ただし文書化はしていない。口頭でのやり取りを通じてのみ」、「内容に新鮮味が感じられない」との感想があった。

今後参加したい研修会については、「他学部のゼミ活動などを知る機会」、「障害学生のこと（支援）。情報セキュリティ、学生の事件関係」「『振り返り』とかは良かったと思います」、「学生からの授業や指導への要望をとりまとめた情報の共有を図る研修」、「修学支援システムの活用方法（事例）」、「教育関連」、「心の調子を崩している学生の指導方法」、「学生支援（若者支援）や組織運営について、学外の方の話を聞きたいと思います」、「初年次教育について」、「効率的な学生指導」、「授業改善に資するテーマ」、「非英語圏学生に対する英語を用いた授業」、「システムの使い方」、「e ポートフォリオについて」、「修学（学生）の具体的状況（データ）」とのコメントがあった。

## (6) 医学部保健学科・医学系研究科

日時 令和元年 12 月 04 日(水) 13:00～13:40

場所 医学部本館 6 階 第 1 会議室

参加者 36 名 (アンケート回収 34 名)

担当者 林 透 (大学教育センター准教授)

### 内容

はじめに医学部保健学科 FD コーディネーターの堤教授から講師紹介と概要説明が行われた後、講演に入った。

林准教授からは、まず 3 つのポリシーに基く教育の質保証が求められている背景があり、単なる学修成果だけでなく 4 年間の学修過程も無視できず見ていくツールとして学修ポートフォリオ利用して通じて振り返り先生方もそれを基に修学指導していくために、本学でも e ポートフォリオを運用する体制が整ったので紹介を行う旨が述べられた。

前半では、学修者の振り返り(リフレクション)の重要性について 2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)や、Kolb の経験学習の理論、メタ認知能力やベネッセと東大の共同調査(「親子パネル調査」分析結果, 2019)等を引き合いに出しながら解説された。後半では、それを効果的に行うためのツールとしてポートフォリオの機能等について確認が行われると共に、本学修学支援システムにおける e ポートフォリオの準備状況について画面等を交えながら紹介が行われた。

### 質疑応答

以上のように活発な議論が繰り広げられた。

Q: 学生ポートフォリオが作ってあってそれに保健学科なりのモディファイしたものを保健学科のポートフォリオとして検査の方でやっているが、我々独自の設問をここに反映することが可能か?

A: 可能です。

Q: 今、振り返りを 4 年間まとめてというのが出来てないので、こちらのシステムを使わせてもらったほうがそういうことが良く分かるかなど。

A: 学部学科によって温度差あって紙媒体使われている部局もあるが今はどういう形で?

Q: 修学支援システムのレポート機能でやっている。

A: 専攻単位で?

Q: 検査の専攻でやっている。

A: これでやって頂くと教員もコメント返して出来る。今日やってきたのは要望聞いているところがある。理学部も是非という話しがあった。来年 4 月から運用できるように準備進めている。

### 設問 1

#### 研修会に参加した感想はいかがでした?

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	4	11.8%
良かった	26	76.5%
どちらとも言えない	3	8.8%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	2.9%
合計	34	100.0%





Q: 相談させてください。

A: 是非。ありがとうございます。

Q: 看護は教員単位でやっていて教員の方針次第と思う。学科単位でという話あったが、科目のその日の振り返りを全学生の一覧で見ること出来るか？日々の授業の振り返りを。

A: 授業科目単位と、学位プログラム単位の話聞くが、授業単位については、修学支援システムの各授業でボックスができていると思うので、授業内アンケートやレポート、小テスト機能があるので先生と受講生の間で確認できると思う。今日話しに来たのは学位プログラム単位。学位プログラムになると保健学科は専攻2つあるので、看護学専攻と検査専攻では4年間で複数の科目を付けながら知識技能を身に付けていくと思うので、その相対的な振り返りの所で使ってもらえたら。今の学習ポートフォリオは1年間の学びの振り返りをしていると思う。カリキュラムを通して学生がどう学んだか。正課外、サークル活動もあると思う。

最後に、FD コーディネーターからは今日の話参考しながら活用を検討したいと思うと締めくくられた。

## アンケート

以下のような内容が見られた。

### 感想

- ポートフォリオの活用法が良く分かりました。
- 実践的な話で役に立ちました。是非活用したいと思います。
- 実際に活用している学生と教員をもっと見たかったです。
- もう少し具体的な話がききたかった。

### 希望の研修内容

- 学生の学修効果を高めるための具体例など。
- 授業準備の仕方

- ポートフォリオの実例と成果
- eYUSDL を実際に用いた研修
- シミュレーション教育
- 研究方法のお話
- 統計のこと
- 来年の4月前にもう一度、学修ポートフォリオについて聞きたいです。
- 3P と e ポートフォリオ、科目、各科目の中で各単元をどのように運用したらよいか。
- 教授法、教材開発について

以上



## (7) 農学部・創成科学研究科（農学系）

日程 平成 30 年 12 月 18 日(水)  
[吉田地区] 13:30～14:00  
場所 農学部大会議室  
(吉田キャンパス)  
講師 林 透  
(大学教育センター)  
参加者 26 名(アンケート 22 枚回収)



### 内容

本研修会では、修学支援システムにおいて運用可能な学修ポートフォリオの意義や機能について説明があった。

第 3 期認証評価に向けて教育の内部質保証が組織の各階層で重要とされている。それには 3 つのポリシーを軸とした内部質保証と教学マネジメントによって、教育による学修成果が上がっているか検証と改善を行う必要がある。具体的には、学習成果に加えて学習過程も重要視されており、学びを振り返る学修ポートフォリオが欠かせないツールとなっている。そこで、本学では e ポートフォリオを修学支援システムで取り扱えるように整備を行うことになった。その特徴やメリット、効果的な利用方法、システム環境整備の状況、及び利用可能な機能や画面構成等について説明があった。

講演後には以下の質疑応答があった。

Q1 農学部は e ポートフォリオになれば利用する。4 月から利用できるか。

A1 利用できる。

Q2 個人情報が含まれるが、研究に用いられる場合の制限はどうするのか。

A2 学内の教育目的のみの研究を想定している。個人情報への配慮を行う。

Q3 ポートフォリオの内容を閲覧できるのは学生本人と指導教員のみか。

A3 基本的に、そのように想定している。

Q4 メタ認知は向上させることができるのか。

A4 ワークを行うことでメタ認識を向上させることができる。

研修会後のアンケートでは、「e ポートフォリオの具体的な運用方法」、「ポートフォリオを活用します」、「する人はするので、しない人をどうするか。教員の努力以外のシステム作りが大事ではないかと思う」、「心に響かない」、「2040 年となると遠い未来に見えます。私を含め、それまで定年になる人は無関係のように見えます」との感想があった。今後参加したい研修会については、「学生に関するもの」、「授業改善」、「学生指導」、「大学の新ルール、教育技術に関する情報の共有」、「学生のやる気（特に研究活動に対する）を上昇させるためにはどうすれば良いか」とのコメントがあった。

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	4.5%
良かった	14	63.6%
どちらとも言えない	7	31.8%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	22	100.0%

## (8) 人文学部・人文科学研究科・東アジア研究科（人文系）

日程： 令和2年1月15日(水) 14:30～15:10

場所： 人文学部・理学部大会議室

講師： 林 透（大学教育センター准教授）

参加者： 41名（アンケート回収 22名）

### 【研修内容】

最初、人文学部上田由紀子教授から教育改善FD研修会の主旨の説明があった。つづいて大学教育センター林透准教授より「学修ポートフォリオ」について以下のような説明があった。教員に学修ポートフォリオを「学修者の振り返りと成長のために」、3つの学習ポリシー（DP、CP、AP）と内部質保証を高めることに利用する、学生の自律的な学びを推進するために、経験を振り返り、熟考する為の機会をつくるため、として使って欲しい。さらに振り返りとしてメタ認知をすること。振り返りの材料としては経験、記憶だけでなく、種々の記録物と同時に評価基準、同期の人、先生、先輩も含まれる事が紹介された。後半は、次年度4月から修学支援システム（eYUSDL）上にポートフォリオのメニューが設置され、運用可能な電子ポートフォリオについての説明があった。電子ポートフォリオの利点として入力データが卒業時までシステム上にあることで紛失しない、かさばらない。またLMS（ラーニングマネジメントシステム）と連動させて使う事ができる。教員が資料の検索ができる。また運用面として改善されているところとして、ポートフォリオの記入項目を柔軟に設定出来る。学科単位で設問の設定ができる。在学中のポートフォリオの記録を閲覧出来る。学生が作成したポートフォリオに対して指導教員がコメントできる。等の機能がある、事項が紹介された。



### 【質疑応答・意見交換】

**Q1:** これまで紙媒体でのポートフォリオを約5年間行っていて感じる事は、設問が適切でないため、設問に対する学生の回答が曖昧な内容である。その結果、学生とのポートフォリオと指導教員と薄い人間関係として構築していないと思う。以上のことからこれまでのポートフォリオの検証結果を聞きたい。

**A1:** ポートフォリオのアンケートは3年前に使われ方のアンケート調査をした。結果としてポートフォリオの電子化は賛成であった。また、人文学部はポートフォリオを細かく設定して運用されている。国際総合学部はYU CoB CuSを使用して振り返りは行われていて、学習成果と振り返り結果を毎年可視化している。ポートフォリオとDP等の相関分析については行っていない。学習ポートフォリオは学科毎にカスタマイズできるので必要な



効果は期待できる。本学の運用は学習ポートフォリオが目標であり、他大学はポートフォリオを DP 達成の観点で利用しているところもある。

Q2：電子ポートフォリオは AI 機能をのせれば 2-3 年すれば自動でデータが多量に集まるので電子ポートフォリオは良いと思う。その結果極端な場合として、試験をしなくてもよくなるのではないかと思う。

A2：コメント：学習目標が確定し、カリキュラムマップが学部・学科の中で合意されていれば学習が身につくと思う。AI 機能を使った自動データ収集によって、ポートフォリオを自動で行う事ができるとは限らないと思う。学生と指導教員の先生が対面でポートフォリオを検証する機会を設けることは必要と思う。

Q3：電子ポートフォリオの高大接続についての今後の動きはありますか。2020 年からの推薦入試にポートフォリオを活用して行うよう文科省に言われているが、ポートフォリオを使う事で信頼性があるのか。東大とベネッセが共同開発している高校のポートフォリオシステムについては、研究チームの一員だった早稲田大学側はこのポートフォリオを採用しないという情報がある。このシステムを使ったデータで大学推薦入試をする事に信頼性があるか。大学のポートフォリオの予算はどうなっているのか。

A3：高校にもポートフォリオは導入されているところはある。大学のポートフォリオは各大学で開発し、運用している。高校とのポートフォリオの連携はないと思う。

Q4：ポートフォリオ自体、本当に必要かどうか疑問である。ポートフォリオ以外の物に対しても何でも管理感がある。またポートフォリオが調査物のように定期的に行われている感がある。自分はとても疲れた状態で設問に対して入力するので、結果として設問に適当な表現で記入することとなる。もっとポートフォリオ自体を検証して、精査したら良いと思う。

A4：ポートフォリオの活用については、頻度、設問事項等は各学部で決めてもらって良い。学科単位で細かくカスタマイズできるので活用して欲しい。大学教育センターはいつでも相談になる体制である。

設問1	研修会に参加した感想はいかがでしたか？	
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	0	0.0%
良かった	12	54.5%
どちらとも言えない	5	22.7%
あまり良くなかった	2	9.1%
良くなかった	3	13.6%
無回答	0	0.0%
合計	22	100.0%

## (9) 技術経営研究科

日時 令和2年2月12日(水) 15:00~16:00

場所 大学院技術経営研究科棟 1階 会議室

参加者 12名 (アンケート回収 11名)

担当者 林 透 (大学教育センター准教授)

### 内容

はじめに技術経営研究科のFDコーディネーターの大島教授から講師紹介と趣旨説明が行われた後、講演に入った。

林准教授からは、最初に、本年度学修ポートフォリオをテーマに掲げた理由が紹介された。3つのポリシーに基づいた教育の内部質保証、教学マネジメントを言われていて、その中で特にDPで掲げられた資質能力に基づいてカリキュラムが運営され学生が成長し資質能力を習得しているかが求められており、そのなかで学修成果を具体的に求められている。それを学生自身と社会に対して見える化しなさいと言われている。大学のイベントからすると2年後くらいに認証評価を控えている中で、その辺りの事も非常に大事になってきている。学修成果だけでなく学修過程も重要になってきて

いて、そのためのツールとして重要になってきているのが学修ポートフォリオとなっているということが一つ目の理由。もう一つは修学支援システムでeポートフォリオを運用することについて部局に話せる状況になったので、出来れば各部局で運用して頂ければというのが本日の後段となると紹介された。

前半では、学修者の振り返り(リフレクション)の重要性について2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)や、Kolbの経験学習の理論、メタ認知能力やベネッセと東大の共同調査(「親子パネル調査」分析結果, 2019)等を引き合いに出しながら解説された。後半では、それを効果的に行うためのツールとしてポートフォリオの機能等について確認が行われると共に、本学修学支援システムにおけるeポートフォリオの準備状況について画面等を交えながら紹介が行われた。

### 質疑応答

以上のように活発な議論が繰り広げられた。

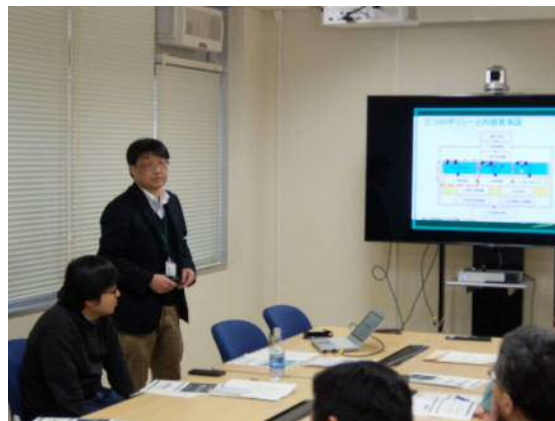
Q: 学生が強制的に書かされるのか自主的に書くのか?

A: 修学支援システム上の運用についてはまずこういう機能があることを説明させて頂いて、実際に運用したいとなった場合、少し要望聞いて部局によるカスタマイズが必要なので、そのためにまずご紹介に上がった。4月から運用できるようになった。世間的に言えば、学修のプロセスの中でポートフォリオが重要になってきているところあるので是非利用して頂きたい。

### 設問1

#### 研修会に参加した感想はいかがでした?

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	9.1%
良かった	9	81.8%
どちらとも言えない	1	9.1%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	11	100.0%



Q: 無理やりではないがやってもらいたいと？

A: 組織的には中期計画にもある事項なので、大学としては重要事項ではある。

Q: ポートフォリオの役割は振り返りであると。振り返りは何のためかと言えば、部局ごとに設定されている DP との比較をするためだと理解している。そうするとポートフォリオはある学部学科に属している学生が、出来ればと言ったが、理想的には全員参加していくという形ですね。それに対して指導教員は範囲が良く分からなかった。研究室配属なのか各科目担当の人は関連の部分見て行けるのか。要するに教員側の閲覧範囲だがどんな感じか？

A: 基本的には個々のクラスの先生が見えるわけじゃなくて、学部だとクラス担任とか研究配属になって研究室の教員が指導教員になっているが、そういう意味では学年全体で見ていく立場の方に設定する形になるかなと。大学院の場合は、指導教員決まるのでそうなるかなと。

Q: それは部局ごとに設定してくれという事ですよね？

A: そう。

Q: 閲覧権限決めるのは教育センターに申請するのか？閲覧権限の割り振りする権限は誰も持っていない。例えば A 先生の指導学生が B 君と C 君ですと言ったときに A 先生には出来ないはず。

A: 大学教育機構の方で、実際には事務方が入ると思う。

Q: それを研究科の範囲で研究科長に権限渡して頂くという事は出来ないのか？

A: 多分、修学支援システムの設定の運営上、その管理権限は…

Q: 修学支援システム全体はいらないけれど、うちの研究科内でのポートフォリオの管理権限、アクセス権限の紐付けについては我々の方でさせて頂きたい。

A: ルール作りは研究科でして頂いて。

Q: そういう相談を今後させてください。別件で質問ですけど、教員が指導している学生の閲覧できるのがメリットだと説明あったが、必ずしもメリットと思わなくて誰にも見せたくないもの上げている人もいる。なので、学生がこれは俺しか見られない、これは公開なり教員と共有してもいいと、2つのカテゴリーを学生自身に選ばせる機能が欲しい。

A: ポートフォリオの持っている機能 2 つある。今日話したのは割と組織的にやる話。部局が設定する目標決めてやる。それ以外に学生が学んだ成果物をアップするようなボックスの機能もこのシステム持っている。そっちの運用どうするかはまだ決まってないが、基本的にそれはクローズドで指導教員見られない形にする。

Q: それは両方とも一度に用意ドンで機能しないとポートフォリオとして片手落ち。もう一つ大事なところですけど、ポートフォリオに上げたファイルの所有権は誰のものですか？本来学生が自分で上げたものは元々自分の物上げているので僕の持ち物ですとそこまではいいです。でも卒業した後、このポートフォリオはどうなるのでしょうか？

A: それはさっき医学部でも同じ質問頂いたのですが、いくつかの学部でもその質問頂いていて、今のシステムでは在学期間中の運用になっている。本当は、学んだ履歴の所引き出して社会人になっても使いたいというのがある。そういう意味では CSV で引き出して学生個人が保有している機能は持たせたい。

Q: 今、完全な回答をくださいと言うつもりはないが、そこまで見据えた運用が必要ではないかと。一方で、大学としてもそれを教育評価データとして蓄積したいが、一方で学生は個人の物でしょうということ、卒業した後の運用の仕方というのは慎重に制度設計をしていかないと、

トラブルになるのではないかとという危惧を持っていて、最初からそういったところを視野に入れた制度設計を是非お願いしたい。

A: そこは考えさせてください。

Q: 基本的に知財上は創作した人間に電子的権利が帰属するので、学生に何らかの所有権が発生する可能性が高い。それを制限するためには明示的な契約、取り決めを持って大学と学生の間で規定を合意する必要がある。

Q: ややこしいですね？

Q: しっかりやらないと個人情報、人格権の問題も発生するのでリスクが。

A: 今のところは、冒頭にも行ったが、学修目標に対して学生がどう学んでいるかを大学に在籍している期間を見ているところがある。部局に行くと今の質問頂いているので考えて行きたい。

Q: 継続的に意見交換できると良いと思う。

## アンケート

以下のような内容が見られた。

### 感想

- Kolb の省察モデルを巧みに用いる企業は Toyota だと思います。企業で実践している case も検討されると良いと思います。
- 修学支援システムの新機能について知ることができた。

- テスト理論に関する研修を行って下さい
- 教育システムの AI かなど Digitalization に関わる
- 修学支援システムの有効活用について研修があると良い

### 希望の研修内容

- 社会人向けリカレント教育について特に留意すべき点など

### 参加したくない理由

- 時間的な余裕がないため

以上



## (10) 医学部医学科・医学系研究科

日程：令和2年2月12日(水) 13:00～13:40

場所：医学部本館6F第1会議室

講師：林 透（大学教育センター准教授）

参加者：27名（アンケート回収 17名）

### 【研修内容】

最初、医学部藤宮龍也教授から教育改善FD研修会の主旨の説明があった。つづいて大学教育センター林透准教授より「学修ポートフォリオ」について説明があった。教員に学修ポートフォリオを「学修者の振り返りと成長のために」、3つの学習ポリシー（DP、CP、AP）と内部質保証を高めることに利用する、学生の自律的な学びを推進するために、経験を振り返り、熟考する為の機会をつくるため、として使って欲しい。さらに振り返りとしてメタ認知をすること。振り返りの材



料としては経験、記憶だけでなく、種々の記録物と同時に評価基準、同期の人、先生、先輩も含まれる事が紹介された。後半は、次年度4月から修学支援システム（eYUSDL）上にポートフォリオのメニューが設置され、運用可能な電子ポートフォリオについての説明があった。電子ポートフォリオの利点として入力データが卒業時までシステム上にあることで紛失しない、かさばらない。またLMS（ラーニングマネジメントシステム）と連動させて使う事ができる。資料の検索ができる。また運用面として改善されているところとして、ポートフォリオの記入項目を柔軟に設定出来る。学科単位で設問の設定ができる。在学中のポートフォリオの記録を閲覧出来る。学生が作成したポートフォリオに対して指導教員がコメントできる。等の機能がある、事項が紹介された。



### 【質疑応答・意見交換】

**Q1：** 医学部は担任制による学生が割り振られている。次年度4月からe-ポートフォリオが稼働すると担任が閲覧可能である。また学生がe-ポートフォリオにデータを入力すれば見ることが可能である。一年、半期間と個々の授業でのレポートを保管することもできるのでいろいろな事が可能と思われる。YU CoB CuSとe-ポートフォリオを連動が可能であるのか。

**A1：** YU CoB CuSとe-ポートフォリオを連動できるようにすれば可能である。

**Q2：** 他大学ではe-ポートフォリオは長続きしないと聞いている。なぜなら所属が変わったとき



にそれば引き継げない。また大学内では、学部と大学院で学籍番号が変わるので対応が難しい。医療関連は所属を代わることが多いので、ポートフォリオを継続的に行ってキャリアを積んでいくことが望ましい。同様に看護師が病院をか変わった時に持って行くことはできない。

A2：現時点では、所属が変わったときのシステム上の対応がない。今後考慮して行く必要がある。

**設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？**

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	5.9%
良かった	12	70.6%
どちらとも言えない	3	17.6%
あまり良くなかった	1	5.9%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	17	100.0%

## (11) 国際総合科学部

日時 令和2年2月19日(水) 15:00~16:00

場所 国際総合科学部 2階 大会議室

参加者 20名 (アンケート回収 8名)

担当者 林 透 (大学教育センター准教授)

### 内容

はじめに国際総合科学部 FD コーディネーターの村井教授から講師紹介と概要の説明が行われた後、講演に入った。

林准教授からはまず、今年度のテーマである学修ポートフォリオの趣旨として、昨今、学位プログラム単位での教育の内部質保証が厳格にと言われてきていて、特に3つのポリシーや教学マネジメントの中で学生がしっかり学んでいるかが問われている。その中でも特にDPに対してどれだけ学べたかという学修成果、更にそれに至るまでの学修過程が大事だと言われている。学生自身と我々大学が確認していくツールとして学修ポートフォリオが改めて重要性を帯びている事が一点。もう一点は、修学システムがリプレースされて4年経つ。その中にeポートフォリオの機能があるが諸事情から実際の運用が出来ていなかった。今回4月から学科単位で組織的に運用して頂ける環境が整ったので学部で紹介してご希望ご要望があれば運用して頂ければという話をしに来たと紹介が行われた。

前半では、学修者の振り返り(リフレクション)の意味と効果的な方法について、2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)や、Kolbの経験学習の理論、メタ認知能力やベネッセと東大の共同調査(「親子パネル調査」分析結果, 2019)等を引き合いに出しながら解説された。後半では、それを効果的に行うためのツールとしてポートフォリオの機能等について確認が行われると共に、本学修学支援システムにおけるeポートフォリオの準備状況について画面等を交えながら紹介が行われた。

最後にYU CoB CuSを通した振り返り・自律的学習に関して2016、2017年度入学者の2、3年生時点での学生調査について紹介されて、講演を終えた。

### 質疑応答

活発な議論が繰り広げられ、内容は多岐に渡った。

リフレクションシートを学部としては今後修学支援システムの中に入れていく方法で考えているのか?という質問があった。これに関しては、同学部の教員より実際使ってみないと良く分からないと思っているとの返答があり、これに関して、教員も学生もいろんな改革進む度にやるこ

### 設問1

#### 研修会に参加した感想はいかがでした?

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	2	25.0%
良かった	3	37.5%
どちらとも言えない	3	37.5%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	8	100.0%



とが増えていて、シラバスも 1 科目見るだけで物凄く大変な量になっている。しかし学生に聞くと全然見てない。全然見てない物のためになんでこれだけ労力割くのかなと言う思いが正直ある。我々に散々 PDCA と言うのだから自分達で PDCA を回して、どれだけ効果上げているのか確認したほうが良い。特に最近の学生を見ていると本当にパソコンを使わない。UI (User Interface) が使い易くないと学生が見てくれないことは明らかである。教育改善の努力をするのが嫌だとは言っていないが、いくらやっても学生が使ってくれない物のために労力を割くのは馬鹿らしい。先生のせいではないがうちの学修支援システムはともかく使い辛い。学生が使って使い易いシステムだと確認できればうちも労力割きたくないとは思っていない。等々の意見が挙がった。

この件に関しては、授業評価アンケートについても教学委員会で議論しているが、答えてもらうときのデバイスは当然スマホをイメージしているという返答があったが、それに対して、スマホは当然想定しているが、スマホだとうちの学修支援システムはものすごく使い辛いという指摘があった。

講師からは、最近授業でも使うようにしているという返答があったが、使い辛く感じるのは歳のせいだろうかと疑問を呈せられる場面もあったが、出来る限りうちの学部も省力化できる部分は省力化するに越したことはないと思っていると、省力化が可能な限りにおいては利用に関しては前向きな姿勢であることの見解であった。

講師からは必ずしも 4 月からとは言っていないので、いきなりではなく、まずは先生方でいじってもらって。1 年間試行期間のつもりでやってもらいたいという趣旨のコメントがあった。

今回の本題ではないが、シラバスに関しては、とにかく長くて学生が見てくれないので、スマホでも見易いよう重要項目だけ出欲しいという要望もあった。

同学部の別の教員からは、今うちでやっているリフレクションシート 2 種類については、このシステムにすぐ載せられると思うとの意見も挙がった。おそらく他の教員はメールでやり取りしていると思うが、自分は面倒臭いので Moodle でやっていて、学生の書いた Word のファイルを登録してもらうことで、楽にチェックしているとの事であった。ただし、それをまたダウンロードしてメールで学務に送るという面倒臭い点があるので、学修支援システムに所に載せられれば楽になるだろうとの意見であった。

講師からは、確か 2015 年くらいに走り始めた頃の初期のリフレクションシート見せてもらったが大項目聞くようになっていて、そんなに設問複雑ではなかったと記憶している確認があり、それに対して、同教員からは、今年改定してかなりシンプルになっているので簡単に載せられると思うとのコメントが返された。

また別の教員からは、全体の使い方と言うよりも、こうやれば凄く良いですよと言うサンプルが欲しいとの意見もあった。全部独立しているように見えてしまっているため、どう使えば良いか、ペルソナではないが誰か一人、パターンを挙げてもらってトータルで説明してもらうとシステムとして使い易くなるのではないかと思うとの意見が述べられた。また、ポートフォリオの中身の話ではないが、先程の会議で学長からの外部資金獲得の話で、その評価項目中にカリキュラムに関する成果指標の話があったので、こういう事を工夫してやっていますと言ったら点数が上がるのか、上がるのであれば大学として一生懸命みんなが取り組むことで大学として運営資金を稼ぐことにもなるので、良いのではないかと思ったとの意見も述べられた。

講師からは、成果指標にはカリキュラムマップとか学修成果の可視化の項目がある。こういう

取り組みを行うと点数は上がる。これから認証評価もあるのでそれに関しても良い評価に繋がる。等々のコメントがあった。マニュアルについては業者の作った物はあるが分かり難いので、意見に感謝する旨が返された。

ユーザビリティについては他の教員からも意見があり、現在の修学支援システムには大きな問題があるとする不満が述べられ、これを改善するためには2人3人だけの意見だけではなく、大規模な意見交換が必要と思う旨が述べられた。

講師からは、eポートフォリオや学修成果の可視化の様々な取り組みで、フレキシブルに動いている大学はシステム自体が使い勝手が良くユーザーサイドに立っている。最近だと長崎大学が良い例である。ただ、会計の入札の条件があるため、なかなか使い勝手の良いシステムが入れられない。次のリプレースの時には決してこういう事がないようにしたいと思っているので、またお知恵を拝借したいという趣旨のコメントが返され、今の時点では基盤がこうなっているため、これをどう使っていくかという観点で取り組んでいる旨が伝えられた。

同教員からは、今年終了する Google+ を引き合いに出され、あれは Facebook よりだいぶ良いが全く誰も使わない、eポートフォリオには沢山機能があるかもしれないが、学生たちは簡単に使えなかったら内容的に素晴らしいシステムがあってもだれも使えないし誰も使わないとの意見が返された。

講師からは、そこは執行部にも言って行かないといけないと思う。こういう所で学生にディスカレッジさせてはいけない。私立ではこういう良いのをどんどんやっているところもあるので、お知恵を頂きながら頑張りたいとの返答があった。

現システムに関しては、前回のリプレースの時にいろんな業者や他大学のシステムを見せてもらったが、うちが採用したのはほとんど最低レベルではないか？入札の時も何社か見たが何でこんな一番酷いシステムに応札するのか全く理解できないとの意見も挙がった。

講師からは、Dream Campus は主要な国立総合大学の幾つかで導入されていて、逆に苦労されているという話も聞いているとして、徳島、金沢、愛媛等の大学を挙げられた。

これに対して、CoB CuS の参考にした NBAS の新潟にも行ったが、こんなに使い易かったら良いなと思うのを他大学に行くと散々目にする。前回も NEC をはじめ幾つかのプランあり、あちらの方がはるかに使い易かったのに、一番酷いのが入った。安いても使い辛いシステムと高くても使い易いシステムなら、高くても使い易いシステムを選ぶのが絶対に正解だと思う。学部内では教務委員長や私はいろんな先生方によろしくお願ひしますと頭を下げているので、振り返りは大事だと思っているし、先生が前段で言われたことは全部よく理解しているつもりなので、それはやらなきゃいけないという事は良く分かっている。ただやはり電子システムは学生さんに使い易くというのを第一に考えないとどうにもならないなといつも思っているとの意見が返された。

システムに関しては、学部でセキュリティの話で、なぜ Dropbox や Google 使えないのかと結構議論があるが、代わりが支援システムでみんな困っている。使い易さが良ければ Google 使えなくてもこのシステムで良いが代わりがない。それは凄く大事な話になるとの意見もあった。

講師からは、セキュリティも大事だが、大学全体に関わると思うので、あくまでも学生・学修者のためにと言う所を前に出しながら、そういう話をしていくようにしたいと返答があった。

ポートフォリオに関しては、良い所はある程度知っているが、4年間記録付けて行った最後の到達点は何かとの質問もあった。

講師からは、今日の話における到達点としては組織的には DP であると返された。

これに対して学生個人の到達点はどこかと言う質問があり、講師からは、DP も大事だが、人間としての学びは 4 年間だけではなく社会に出て学び続けなければならないので、自分がどこまで目標に対して分かったか分からないかという事を自己省察しながら自分の足で学べるそういう力であると説明された。

それに対して、それは分かっているが、実際 4 年間記録を付けて、学生が 4 年間で振り返るきっかけみたいなのを僕らは作らないといけないのか？振り返りと言うのは分かるが、ずっと付けて続けてそのまま放ったらかしで出て行くのか？と質問が返された。

講師からは、日本のカリキュラムの仕組みからすると、国際総合科学部だと課題解決の発表会であったり、他学部だと卒論や卒研だったり、日本のシステムだとそこにいろんなものが統合されるとの説明があり、それに対して、例えば PBL の最後に同時にポートフォリオを振り返ってみるような機会を設ければよいのかという質問が返され、是非やってもらいたいとの返答があった。

これに関連して、就活や大学院進学の間では、こういうフラットなポートフォリオではなく選択的に目的に従って作ることを求められる。選択的と言うのは例えば就活先や行きたい大学院に合わせて今まで自分がやってきた学修やプロダクトを選んで本当のポートフォリオを作るという事なのだが、学生はそこでどうやって作ればよいのか分からず躓くという話もあった。

講師からは、学部学科であったほうがベターだと思うとの返答があった。

これに関して、ポートフォリオでデータ蓄積するだけではなく、使う側がカスタマイズできるような機能はないのかと言う質問と、モチベーションの問題について、振り返りが大事だと言っても学生ピンとこないのだが、今の話はモチベーションに繋がると思うが将来これがどう生きてくるのかという質問があった。

講師からは、本来ポートフォリオは自分のために自分の成果物を蓄積する場面もある。ただ、manaba など他のシステムに比べると、このシステムでは自分でカスタマイズするのが難しいため、今日のような話になっている。モチベーションの話は、アセスメントをどうするかが重要である。私は初年次担当なので 1 年生の授業の中で学生調査活かしながら、山大生として求められるものを振り返りしている。そういうことを授業機会でするとよいと言われている。基礎セミナー等で、アセスメントは仕掛けていくのが大事であると返答があった。

これに関しては、我々がやっている振り返りも学生にとってはお仕事化しているという指摘や、モチベーションは大事だが大学の観点ではなく学生の観点からユーザーリサーチしたかことあるのかという質問があった他、学生たちには blog という別の名前でやっているポートフォリオが既にあるので、統合できるシステム考えるとモチベーション上がるかもしれないとの指摘もあった。

最後に、エクスポート機能についての質問もあり、生涯学習のような話もされたので、卒業後もこれを見られないと意味がないとの指摘があった。

これに対しては、大学院や社会に出た時にというのを半分くらいの学部から要望が挙がっている。今はないが、運用の時には入れようと思うとの返答があった。

## アンケート

以下のような内容が見られた。

### 希望の研修内容

- 今日のような話に加えて、修学不良学生の対応の話があるといい。
- 何でも(学習指導方法など)

### 実施場所

- 来て頂き、ありがとうございました。

以上



## 第2章 共通教育授業科目別部会のFD活動

### 1. FD活動を実施した授業科目別部会

#### (1) 情報処理部会（部会長：大学教育センター 木下 真）

本学のデータサイエンス教育基準に従って、令和2年度に向けて「データ科学と社会 II」の講義内容を改訂した。授業担当教員向けには授業内容の説明会を実施した。

#### (2) 運動健康科学部会（部会長：教育学部 青木 健）

1) の授業外学習時間の確保については、担当教員によっては授業間にレポート課題を出す場合や、問題基盤型学習による事前学習を課したりすることで、授業外学習の増加に多少の効果はあったと考える。今後、その他の取り組みとして効果的なものがあるか否かについては、さらに検討していく必要がある。

2) の教員による試験難易度や成績分布の違いについては、必ずしも一定の教員の担当コマのすべてについて成績分布が低い方によっているとは言い切れない部分もある。同一教員においても受講生の学部の違いにより成績分布に違いがある場合も見受けられる。なお、2020年度については教員の担当コマにもいくつか変更が生じており、これまでと同じ時間や枠（学部）とは異なっている部分があることから、その点を踏まえて引き続き検証していくこととする。

#### (3) 英語部会（部会長：教育学部 石井 由理）

1月末に非常勤講師も含めた授業担当者を対象とした、次年度のシラバス入力に関する変更点の説明と意見交換を内容としたFDを実施した。できるだけ多くの教員が参加できるように、2回に分けて実施したが、常勤教員は約4分の3が出席したのに対し、非常勤講師の出席者は4名と少なかつたため、参加ができなかった非常勤講師に対するハンドアウト配布と説明を、控室の訪問およびメールによって別途行った。特に焦点を当てたのは、オンライン学習を含む3時間というように授業外学習の時間を明記することと、令和元年度の成績評価方法が変更になること、SDGsの項目が追加となったことである。令和元年のカリキュラムでは、オンライン自習を成績評価に含めたことによって授業外学習時間を3時間行う学生が20%程度となったが、1時間以内ですます学生も同程度おり、今後は日頃から授業で言及するなど、さらに細かな対応が必要である。また、授業評価の変更は、授業を真面目に受けている学生に対して不公平だという複数の授業担当者の意見を反映して実施することになったものである。

#### (4) 数学部会（部会長：創成科学研究科（理学） 中内 伸光）

授業科目「数学I」および「数学II」については、「共通テキスト」や担当者間の共通認識など、意見交換を行いました。

## (5) 物理学部会 (部会長：創成科学研究科 (理学) 笠谷 裕修)

実験以外の講義 (物理学 I, 物理学 II) に関しては, 7 割以上の学生が 1 時間以上の授業外学習をしている。これは, 前年度比で 1 割増である。物理学の習得には自習が欠かせないので, 今後も引き続き担当教員に学生の授業外学習時間の確保を促していく。

物理学 I と II の成績分布はクラス間では違いは見られるものの, 学部・学科内では公正を欠くものではない。

大学教育機構内の予算で, 電子の比電荷の測定装置 6 台の入れ替えを実施した。また, 古くなって一部作動が悪くなっていたジョリーのバネばかりについても, ストックしてあった新品のものに交換を行った。

## (6) 化学部会 (部会長：創成科学研究科 (理学) 村藤 俊宏)

この 5 年間, 化学実験では, 保護メガネの着用の徹底と化学系学科は白衣着用を指導している。化学実験のテキスト改訂を長年非常勤講師が実質中心になってやってきたが, 令和元年度末で定年が適用されることから, 今回の改訂を最後に今後は常勤教員を中心に改訂していくことになる。

このような状況を鑑み, 実験担当の非常勤講師と現化学実験担当のマネージャーとの間で意見交換会を開催し, 使用する薬品や実験環境, テキストの改訂について意見交換した。

## (7) 地球科学部会 (部会長：創成科学研究科 (理学) 脇田 浩二)

地学教育の中でも重要な位置を占める野外実習に関して, 授業研究会の第 1 回目を 11 月 20 日に, 第 2 回目を 2019 年 11 月 27 日に実施した。具体的な内容は以下の通り。

- 「野外実習」は通年・集中の授業であり, 例年 25 名程度受講している。春および夏に 1 週間ずつ泊りがけの野外調査を行い, 地質調査の方法, 地層や岩石の観察法, データの解析法, 地質図の作成, 調査成果の発表, 論文の書き方等について基本的な能力を養う。本年度の実習地は山口県萩市須佐湾周辺であり, 班 (4~5 名) ごとに割り当てられた調査範囲を 3 月と 9 月とに踏査し, 共同作業を通じてグループ調査のやり方や協調性を身につける。各班による中間発表 (7 月) および最終発表 (11 月) が設けられており, 本ピア・レビューは最終発表会 (FAVO 2 階のワークショップルームで開催) を対象として行われた。
- FD では, 発表会に出席し, 履修生たちの発表を聞いた上で, 質疑応答が進められた。発表会 (ピアレビュー) 自体を第 1 回目の授業研究会と位置付けている。第 1 回の研究会では, 1) 発表技術, 2) 発表会の運営・構成, 3) 野外実習の目標に対する達成度や理解度, 4) 発表学生のまとめ方や聴講学生の参加度, そして 5) 実野外教育における注意点 など, あらかじめ提案された項目について各自 (レビューア) が評価した。
- 第 2 回授業研究会では, 学生アンケートとレビューアによるコメント (授業観察カード) をもとに授業研究会を開催し, 意見交換を行った。授業内容については, 新しいアイデアが評価された。例えば, 7 月の中間発表会では, 従来口頭発表だけであったが, 口頭発表とポスター発表にすることによって, 口頭発表では挙手できなかった学生でも, ポスター発表で質問ができるようにする仕組みにした。これにより, 学生の質問が少ない現状を改善させることができた。また, 班ごとにノートを配布し, 活動日誌をつけさせた。これにより, 分担を均等にする効果があった。さらに, 自己評価とそれに基づく個人面談を行い, 学生と教員の意思疎通を図ることができた。調査地域の住民との交流が学習において効果的であることが確認された。このように, 今年取り組みが一定の成果を上げたことに対して評価がなされた。他方で, 観察事実に基づいた議論ができていない班があること, 室内作業において分担が行われるため薄片作成ができない 4 年生が生じること, など意見があり, 今後の課題であることが確認された。以上のように, 多くの指摘と議論があり, 次年度につながる有意義な場となった。



### **(8) 日本語部会（部会長：国際総合科学部 山本 冴里）**

山口県内の大学で教える日本語教師の勉強会に、部会メンバーの約半数が参加した。（ただし、当該勉強会は、山口大学日本語部会として開催したわけではない）

### **(9) 日本国憲法部会（部会長：経済学部 石 龍潭）**

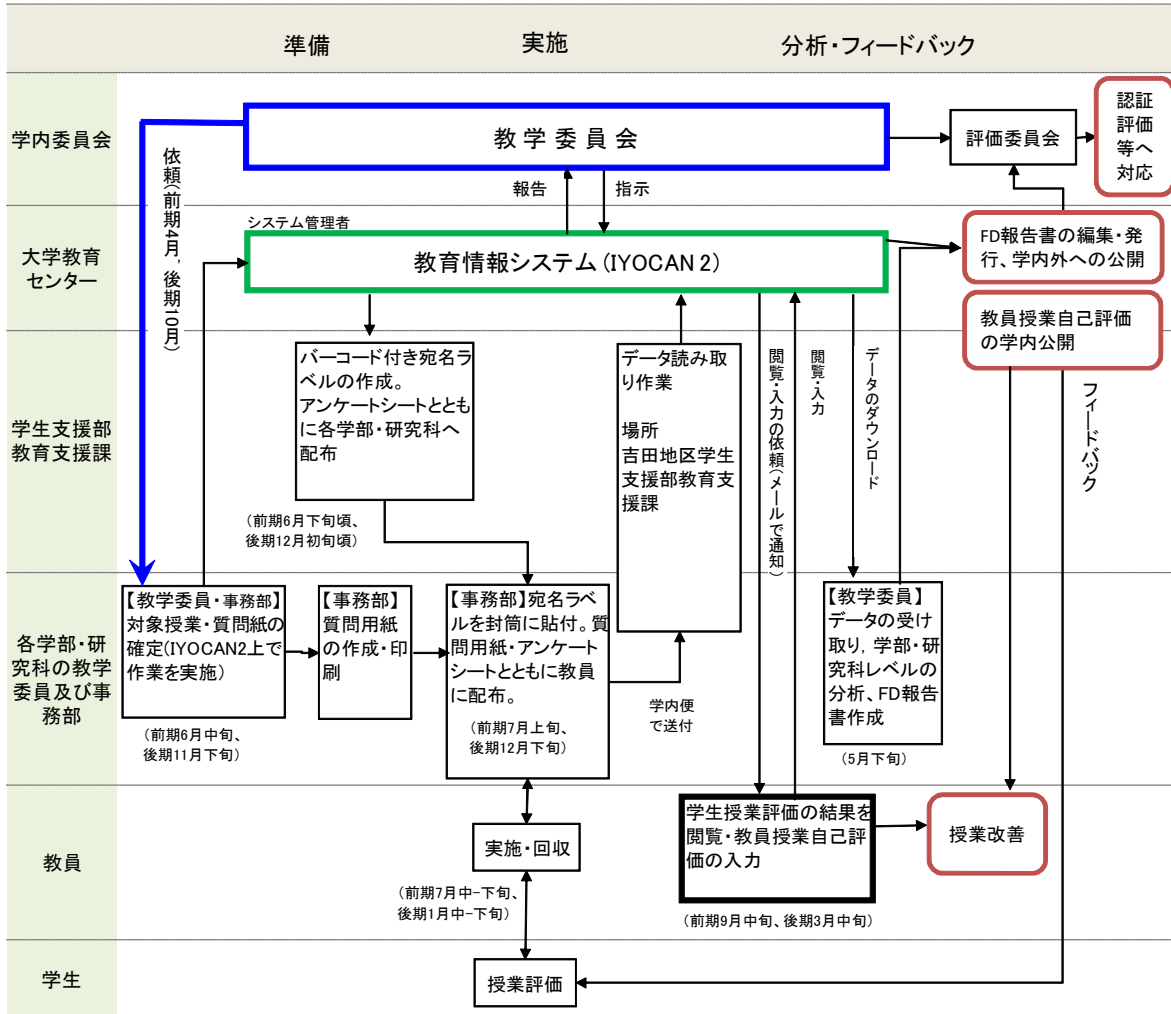
特記すべき FD 活動は行われなかったが、昨年度と同じ、学生授業評価のデータを見る限り、授業外学習時間の確保に向けた取り組みが、今後の課題として考えられる。

# 第3章 学生授業評価及び教員授業自己評価

## 第1節 実施方法・実施状況

### (1) 実施方法

#### 1) 教育情報システム(IYOCAN)による学生授業評価・教員授業自己評価



※教育情報システム(IYOCAN2)は授業評価のデータベースであり、共通教育、医学部の除く6学部、一部の大学院研究科の評価を扱っている。医学部は独自のシステムで実施しているためこれには含まれない。

山口大学では、平成17年度前期より、旧大学教育職員能力開発(FD)委員会(～2008年3月)。現在は教学委員会)のもとで、学生による授業評価(以下、学生授業評価)および教員による授業自己評価(以下、教員授業自己評価)を全学的にスタートした。平成16年度までは7学部・共通教育でそれぞれ独自に学生授業評価を実施してきたが、効率化・簡便化を図る必要性や、認証評価への対応の必要性から、大学教育センターがこの実施業務を引き受け、現在まで統一的に実施している(医学部を除く)。下図はその一連の流れである。マークシートに記入された回答は教育情報システム「IYOCAN」(Information of Your Course

ANalysis の略、いよかんと呼称)に蓄積され、教員は Web 上で結果の確認と自己評価を行っている。2010 年度からは新データベース「IYOCAN 2」を導入し、教務情報の新システム「修学支援システム」と連動することで様々な情報を授業評価に直接的に利用することが可能となった。

なお、以下に述べるように、医学部（医学科、保健学科）は全学に先駆けて Web による授業評価を実施しており、独自のデータベースを構築しているため IYOCAN は利用していない。

● 授業評価の閲覧・入力画面（大学教育センターホームページ上に配置）



2) 医学部医学科「医学教育総合電子システム eYUME」

平成 13 年度より、医学教育センターが管理する「医学教育総合電子システム eYUME」上で毎回の授業ごとにオンライン授業評価（進行評価）が実施されている。また、ユニット終了時にはマークシート方式による「ユニット学生振り返り評価」「ユニット責任者振り返り評価」が実施されている。その結果は同システム上で公開されている。

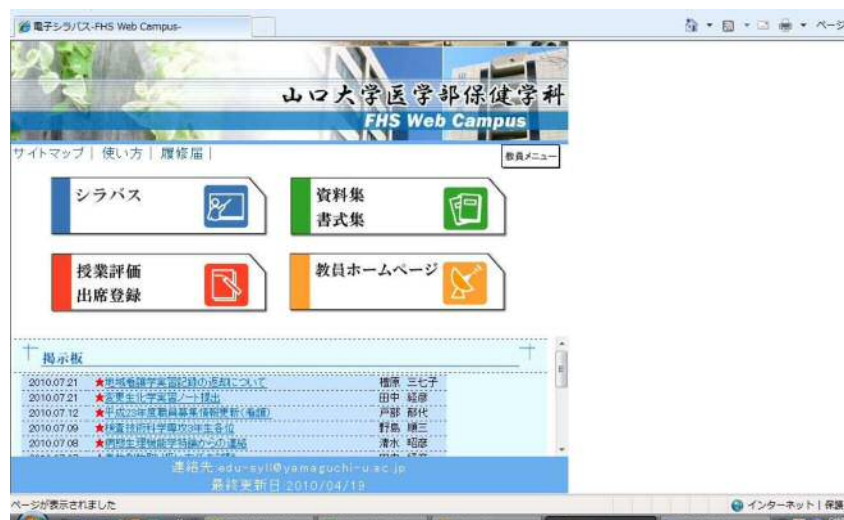
● 医学部医学科 医学教育総合電子システム



### 3) 医学部保健学科「山口大学医学部保健学科授業支援システム」

保健学科ホームページ上から「山口大学医学部保健学科授業支援システム」にログインし、教員が登録した授業評価メニューや出席確認メニューに対して、学生が教員から告げられた期間（時間）内にアクセスしてオンライン授業評価を行っている。

#### ● 医学部保健学科 授業支援システム



## (2) 質問紙の種類

質問紙は各学部・研究科ごとに異なっている。また、授業区分（講義、演習・実験・実習等）ごとに分かれており、学部・研究科独自の質問項目も設けられている（詳しくは4章以降の各学部・研究科のFD報告を参照のこと）。これは各学部・研究科のニーズに合った授業評価を実施するためである。

なお、本学のシラバスでは下表のように様々な授業区分が設けられているが、用いられる質問紙は大まかに分類して以下のようになっている(医学部を除く)。

シラバスの授業区分	質問紙の種類
「講義」の場合	講義用
「講義と演習」の場合	講義用
「講読」の場合	講義用
「演習」の場合	演習・実験・実習用
「実験・実習」の場合	演習・実験・実習用
「その他」の場合	講義用

共通教育では、上記に加えて、外国語系列の授業でシラバスの授業区分に関わらず「語学用」「TOEIC 準備用」の質問紙が使用されている。この2つの質問紙は基本的には「講義用」と同じであるが、授業技術を尋ねる質問の内容が異なっている。

シラバスの授業区分	質問紙の種類
共通教育・外国語系列 「講義」の場合	語学用（TOEIC 準備のみ TOEIC 準備用を使用）
共通教育・外国語系列 「演習」の場合	語学用

※「語学用」の質問紙は農学部専門授業の外国語科目でも使用されている

### （３）質問項目

上述のように学部・研究科ごとに質問紙・質問項目は異なっているが、平成 17 年度からの統一的な実施に際して、全学共通の質問項目が 5 項目設定され、上記の「講義用」「演習・実験・実習用」「語学用」「TOEIC 準備用」の各質問用紙に盛り込まれた。この共通質問項目の導入によって山口大学全学の傾向の分析を行うことが可能となった。ただし、各学部・研究科では、共通質問項目に独自の質問項目を加えたオリジナルの質問紙を作成することができるので、これまで実施してきた学生授業評価との経年比較を行うことも可能となっている。

#### 全学共通質問項目

- ①<授業外学習時間> あなたはこの授業のために授業時間以外にどのくらいの学習（予習・復習・宿題や関連した学習）を行いましたか？授業1コマ当たりの平均で教えてください
- ②<学習目標達成> あなたはシラバスに記載された学習目標を達成しましたか？
- ③<理解> あなたは授業の内容を理解しましたか？（講義、語学、TOEIC 準備）、内容理解や技能のレベルは向上しましたか？（演習、実験・実習）
- ④<満足> この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？
- ⑤<出席> あなたはこの授業にどのくらい出席しましたか？

### （４）実施対象授業

#### 1) 学部

基本的に全ての授業で実施しているが、授業評価の対象として適さない科目(例：教育実習、卒業論文等)については実施対象から除いている(詳しくは第 2 節「学生授業評価の結果について(全学)」の表を参照のこと)。なお、教員授業自己評価については学生授業評価を実施した授業を対象としている。

#### 学生による授業評価実施要項（H17ー）

	実施対象科目	授業規模	その他
全学部 (学士課程)	全て。ただし、学生授業評価の対象として適さない授業科目については実施対象から除くことができる。	規模に関係なく全ての授業で実施。ただし回答者が 5 名未満の場合は授業担当者に結果を開示しないものとする。	非常勤講師についても実施

※評価を実施しない授業科目名は一覧にして質問項目とともに大学教育センターに情報を提供。

## 2) 研究科

平成 18 年度より大学院における授業評価は、a)学生授業評価は各研究科で最適な方法を決定・実施する(IYOCAN を利用してもよいし、自由記述形式等の独自の方式でもよい)、b)その代わり、学生授業評価の実施・非実施にかかわらず教員授業自己評価はすべての授業で実施し、授業の振り返りを通じた授業改善を促す、という方式で実施している。

### ●大学院・学生授業評価の実施方法 (H18-)

	実施対象科目	実施方法	その他
全研究科 (修士)	学生授業評価の対象として適する授業科目全て。	各研究科で選定した評価対象授業については、各研究科独自の方法で授業評価を実施する。学士課程と同様の方法を用いる場合は「いよかん」を利用できる。	独自で実施する場合は、質問項目の選定も自由とする

※実施方法および対象授業については大学教育センターに情報を提供。

### ●大学院・教員授業自己評価の実施方法 (H18-)

	実施対象科目	実施方法	その他
全研究科 (修士)	全て	学生授業評価の実施・非実施にかかわらず、全ての授業で自己評価を実施する。自己評価は「いよかん」で行う。 なお、評価項目については学士課程に準じるが、【28. 授業実施上の工夫】(10 項目)は任意とする。	

※授業形態の特殊性等の理由から学生授業評価を実施しない授業についても、教員自身による授業の振り返りを通じた授業改善を促す観点から自己評価については実施する。

なお、平成 23 年度前期からは以下のように変更することが平成 23 年度第 1 回教学委員会(平成 23 年 4 月 27 日開催)で承認された。

## 大学院における教員授業自己評価の対象授業選定方法の変更について(案)

大学教育センター

この度、大学院における教員授業自己評価の対象授業選定方法を以下のように変更する。

大学院・教員授業自己評価の対象授業

(現) 全て

(新) 学生授業評価と同じ (IYOCAN2 を利用する研究科)

対象として適する授業科目 (独自の方法で実施する研究科)

(理由)

現在、大学院における教員授業自己評価は、学生授業評価の実施・非実施にかかわらず「全て」の授業で実施されている (平成 17 年度第 10 回 FD 委員会承認)。これは、当時、大学院(修士)の授業は規模・形態の面で学生授業評価に適さないものが多いという意見が多数であったため、少なくとも教員授業自己評価だけは全ての授業で実施する、という方針が承認されたものであった。

しかし、現在、すべての研究科では学生授業評価が導入されており、修士論文に関係する科目(課題研究、演習、セミナー等)、集中講義、実習科目など、一部の科目を除いた大多数の授業で評価が実施されている。従って、これまでのように教員授業自己評価を一律に全て実施する必要はなくなっている。

加えて、修士論文に関係する科目や実習科目などは授業の形態上「担当時間数(分)」が入力しにくい面があることが指摘されている。

よって、今回、上記のように選定方法の変更を提案したい。

## (5) 学生授業評価の結果の閲覧方法、教員授業自己評価の実施方法について

これまで各学部・共通教育では個々の教員への学生授業評価の結果の通知を印刷物で行ってきた。しかし、これは非常に手間がかかるため、より効率的で効果的な方法として、Web上での閲覧システムの導入が共通教育は平成16年度から、また専門教育は平成17年度から導入された(医学部医学科は平成13年度より)。

教員は大学教育センターのホームページにアクセスし、公式メールアドレスとパスワードを入力して教育情報システム「IYOCAN」にログインし、学生授業評価の閲覧と自己評価の入力を行うことができる。Web上では過去の評価結果も閲覧でき、PDFでダウンロードすることもできる。また、非常勤講師も学外からデータベースにアクセスできるようになっている。

なお、学生授業評価の回答者が5人未満の場合、集計結果は教員には開示されない。これは学生が特定される危険性を避けるためである。

閲覧・入力の手順で工夫したことは、学生授業評価の結果を見る前に、まず教員授業自己評価を行う点である。この目的は、自己の認識と学生による評価の「ずれ」を確認するためである。教員はこのずれを確認した上で、授業の反省点・改善点を記入することになっている。

## (6) 学生への結果のフィードバックについて

平成18年度後期より、学生への結果のフィードバックの第一歩として教員授業自己評価の一部を学内公開した。具体的には【30.授業実施上の問題点・改善点(自由記述)】をWeb上で公開した。

### ●教員授業自己評価の学内公表用画面



The screenshot shows a web browser window displaying the IYOCAN2 system. The page title is "山口大学授業評価システム IYOCAN2". The main content area lists several courses with their respective feedback text:

- 1002323001 美術鑑賞と作品記述 藤川 哲**  
学生授業評価の結果は概ね好評だったと言えます。受講生の皆さん、有り難うございます。とても嬉しいです。評価指数による多角形状のグラフを見ると、唯一「家庭学習時間」の項目が2.5よりやや下と、大きくへこんでいる形になっていました。しかし、この評価項目で他と同じく4～5の指数を得るためには、毎回3時間以上かかるような宿題を課さなければならぬと考えられません。むしろ1コマ90分の授業に対して、同程度の家庭学習時間が望ましい、という話を聞いたことがあります。したがって、新年度は、「30分未満」と答えた48.4%の学生さんたちの層から、少しでも多く「30分～50分程度」の家庭学習を行う層へと移行してもらえよう、復習や発展学習の指示に心を配ります。
- 1002331027 経済学 兵藤 隆**  
「新聞を読む習慣を」という学習目標を達成するにはまだまだ高いハードルがある。若い学生たちの社会に対する関心度が低すぎるということもあるが、教員側もさらなる努力が必要であると感じた。
- 1002331032 産業倫理 笠谷 和男**  
新学科として最初の年であり、また、非常勤講師の方の入院で急速代理授業を行うなど、万全の講義が行えたわけではない。また、3年生の後期で一部の学生は就職活動のため休みがちであった。次は、学生の理解を促す工夫を重ねていきたい。
- 1002331035 地理学 荒木 一視**  
ディスカッションが特定の学生に偏る。予習の指示はしているのだが決して十分ではない。
- 1002331036 産業倫理 佐伯 隆**

The bottom of the browser window shows a status bar with "ページが表示されました" and "インターネット | 保護モード: 有効".



## 第2節 授業評価の結果について(全学)

### (1) 学生授業評価の実施状況

今年度も山口大学ではすべての学部・研究科(修士課程)において学生授業評価が実施された。次頁に掲載されている「2019年度山口大学学生授業評価および教員授業自己評価結果一覧(経年変化)」(2020年5月12日現在)は、教育情報システム(IYOCAN)で処理された学生授業評価と教員授業自己評価、および IYOCAN を利用しないで独自に授業評価を集計している学部・研究科のすべての授業評価の実施率をまとめたものである。また、学生授業評価の回答数については一覧表の後に別表(2015年度以降の経年変化)として掲載した。

2019年度の学生授業評価はすべての学部・研究科(修士レベル)・共通教育で実施され、回答数合計は111,836人(※IYOCANのみ)であった。

実施率が最も高かったのは医学部医学科(100.0%)、続いて高かったのは理学部・農学部(いずれも91.5%)であった。学部・研究科で全体的に昨年度より減少する結果となっており、改善充実が求められる。

### (2) 教員授業自己評価の実施状況

教員授業自己評価は、医学部保健学科を除くすべての学部・研究科等で実施された。教員授業自己評価の実施率が最も高かったのは医学部医学科(100.0%)、理学部(60.1%)であった。多くの学部・研究科で昨年度より減少する結果となっており、改善充実が求められる。

## 2019年度 山口大学 学生授業評価および教員授業自己評価 結果一覧（経年変化）

2020年05月12日 現在

### ＜学部＞学生授業評価

データベース	学部等	学生授業評価 (2015年度)	学生授業評価 (2016年度)	学生授業評価 (2017年度)	学生授業評価 (2018年度)	学生授業評価 (2019年度)	対象授業
I Y O C A N 2	共通教育	86.6%	84.8%	89.7%	91.7%	90.5%	全て
	人文学部	82.8%	84.3%	79.7%	80.5%	76.0%	卒業論文、集中講義、一部の演習を除く
	教育学部	81.0%	82.6%	75.5%	76.1%	79.2%	卒業研究、教育実習、事前・事後指導、介護等体験実習を除く
	経済学部	81.4%	79.3%	81.4%	81.4%	78.3%	卒業論文演習、演習Ⅰ・Ⅱを除く
	理学部	89.3%	93.6%	92.5%	95.2%	91.5%	特別研究、集中講義、一部の演習を除く
	工学部	88.5%	90.1%	85.2%	89.9%	89.9%	卒業論文、国際実習、社会活動実習、インターンシップを除く
	農学部	89.2%	87.7%	93.2%	86.6%	91.5%	卒業論文、集中講義、特別演習、専攻演習、インターンシップ等を除く
	共同獣医学部	90.4%	82.8%	88.0%	89.2%	84.0%	卒業論文、集中講義、特別演習、専攻演習、インターンシップ等を除く
	国際総合科学部	76.2%	89.9%	95.0%	94.5%	86.7%	
独自	医学部(医学科)	91.6%	93.3%	92.7%	100.0%	100.0%	自己開発コース、臨床実習1、臨床実習2を除く
独自	医学部(保健学科)	72.3%	83.8%	81.1%	74.8%	59.0%	授業評価の必要なものに限定

### ＜学部＞教員授業自己評価

データベース	教員授業自己評価入力率 (2015年度)	教員授業自己評価入力率 (2016年度)	教員授業自己評価入力率 (2017年度)	教員授業自己評価入力率 (2018年度)	教員授業自己評価入力率 (2019年度)	対象授業
I Y O C A N 2	41.5%	34.8%	30.9%	29.6%	21.2%	全て
	43.6%	31.1%	33.2%	32.7%	22.2%	学生授業評価と同じ
	46.6%	40.1%	56.3%	47.4%	35.4%	学生授業評価と同じ
	62.0%	61.7%	40.7%	33.8%	28.9%	学生授業評価と同じ
	58.3%	35.9%	38.4%	69.0%	60.1%	学生授業評価と同じ
	31.0%	27.1%	27.7%	10.3%	28.4%	学生授業評価と同じ
	92.6%	57.3%	60.9%	64.5%	57.9%	学生授業評価と同じ
	98.3%	97.1%	48.6%	19.2%	10.7%	学生授業評価と同じ
	88.7%	70.4%	79.9%	64.9%	37.3%	学生授業評価と同じ
独自	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	全て
独自	51.1%	68.0%	66.4%	73.8%	46.1%	—

### ＜大学院＞学生授業評価

データベース	学生授業評価 (2015年度)	学生授業評価 (2016年度)	学生授業評価 (2017年度)	学生授業評価 (2018年度)	学生授業評価 (2019年度) (*1)	対象授業	
I Y O C A N 2	技術経営研究科	58.3%	53.6%	67.9%	100.0%	74.2%	全て
	医学系研究科	51.8%	72.6%	65.8%	93.6%	81.8%	特別研究、オムニバスを除く
	教育学研究科	66.3%	67.5%	62.4%	71.4%	53.7%	課題研究、総合研究、実習等を除く
	経済学研究科	24.2%	8.1%	42.3%	21.0%	100.0%	演習、セミナーを除く
	創成科学研究科	—	71.6%	70.3%	76.5%	77.4%	
	教育学研究科(専門職学位課程)	—	95.5%	78.5%	83.9%	78.8%	
独自	人文科学研究科	21.4%	87.5%	50.0%	30.0%	80.0%	半期の授業全体に対する評価を実施しており、授業ごとには実施していない。後期は実施せず。

### ＜大学院＞教員授業自己評価

データベース	教員授業自己評価入力率 (2015年度)	教員授業自己評価入力率 (2016年度)	教員授業自己評価入力率 (2017年度)	教員授業自己評価入力率 (2018年度)	教員授業自己評価入力率 (2019年度)(*1)	対象授業
I Y O C A N 2	66.7%	14.3%	28.6%	16.7%	9.7%	〃
	81.6%	15.9%	14.3%	0.0%	33.3%	〃
	53.6%	40.2%	60.9%	48.7%	28.2%	〃
	45.6%	58.6%	34.2%	17.9%	15.9%	〃
	—	32.1%	27.7%	26.6%	34.8%	〃
	—	59.1%	67.7%	24.6%	42.0%	〃
独自	41.4%	40.9%	22.2%	20.0%	16.7%	〃

なお、理工学・医学系研究科の博士後期課程、および連合獣医学研究科、連合農学研究科、東アジア研究科(すべて博士後期課程)は実施対象から除いている。

< 学生授業評価回答数の経年変化 >

部局等	回答数
共通教育(2015)	51,210
共通教育(2016)	51,417
共通教育(2017)	51,904
共通教育(2018)	51,089
共通教育(2019)	49,511
人文(2015)	7,557
人文(2016)	8,035
人文(2017)	6,941
人文(2018)	7,388
人文(2019)	6,905
教育学部(2015)	11,339
教育学部(2016)	10,810
教育学部(2017)	10,180
教育学部(2018)	10,179
教育学部(2019)	9,572
経済(2015)	9,147
経済(2016)	9,696
経済(2017)	8,334
経済(2018)	7,654
経済(2019)	8,085
理(2015)	5,597
理(2016)	5,475
理(2017)	5,651
理(2018)	5,463
理(2019)	4,806
工(2015)	18,850
工(2016)	18,015
工(2017)	17,575
工(2018)	18,297
工(2019)	18,325
農(2015)	3,707
農(2016)	3,560
農(2017)	3,460
農(2018)	3,495
農(2019)	
共同獣医(2015)	2,112
共同獣医(2016)	2,326
共同獣医(2017)	2,504
共同獣医(2018)	2,788
共同獣医(2019)	2,595
国際総合(2015)	4,298
国際総合(2016)	6,827
国際総合(2017)	8,137
国際総合(2018)	7,929
国際総合(2019)	7,729
大学院・創成科学(2016)	3,571
大学院・創成科学(2017)	3,492
大学院・創成科学(2018)	3,399
大学院・創成科学(2019)	3,403
大学院・技術経営(2015)	312
大学院・技術経営(2016)	215
大学院・技術経営(2017)	238
大学院・技術経営(2018)	412
大学院・技術経営(2019)	355
大学院・医学系(2015)	374
大学院・医学系(2016)	186
大学院・医学系(2017)	93
大学院・医学系(2018)	135
大学院・医学系(2019)	137
大学院・教育学(2015)	447
大学院・教育学(2016)	395
大学院・教育学(2017)	314
大学院・教育学(2018)	290
大学院・教育学(2019)	85
大学院・教育学・専門職(2017)	276
大学院・教育学・専門職(2018)	252
大学院・教育学・専門職(2019)	281
大学院・経済学(2015)	96
大学院・経済学(2016)	37
大学院・経済学(2017)	173
大学院・経済学(2018)	200
大学院・経済学(2019)	47
合計(2015)	115,046
合計(2016)	120,565
合計(2017)	119,272
合計(2018)	118,970
合計(2019)	111,836

### (3) 全学共通の質問項目に関する分析

次に、全学共通質問項目である5項目を取り上げ、各学部・研究科ごとに経年変化をみていく。各質問項目の選択肢1~5の平均値を算出し、授業区分別（講義、講読、演習、実験・実習、語学）に結果を整理した。また、全体平均については図にも示した。

なお、大学院については、IYOCANを利用した学生授業評価を行っている研究科とそれ以外の独自の方法で実施している研究科が混在しているため、ここではIYOCANを利用している理工学研究科、技術経営研究科、医学系研究科、教育学研究科、経済学研究科のみの結果を整理した。ただし、教育学研究科については共通質問項目「満足」のデータのみ尋ねているため他の項目はデータが存在しない。

#### (1) 共通質問項目1「授業外学習時間」

**Q. あなたはこの授業において、授業外学習(予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強)をどれくらい行いましたか？総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。**

1. 3時間程度または以上、2. 2時間程度、3. 1時間程度、4. 30分~50分程度、5. 30分未満

共通質問項目1は、授業1回あたりの授業外学習時間を尋ねたものである。平均値は1)3時間程度または以上を5点、5)30分未満を1点として授業区分別の平均値を算出した。

2019年度の平均値データは2018年度の平均値と比べると、学部段階では、共通教育、教育学部、経済学部、理学部、工学部、農学部、共同獣医学部で増加傾向にある一方、人文学部、国際総合科学部で減少傾向にある。特に、共通教育は過去5年間で最高の数値を示している。

#### (2) 共通質問項目2「学習目標達成」

**Q. あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？**

1. そう思う、2. ややそう思う、3. どちらとも言えない、4. あまりそう思わない、5. そう思わない

共通質問項目2はシラバスに記載された学習目標を学生自身が達成できたかどうかについて尋ねたものである。山口大学はシラバスに観点別の到達目標を記載する方式となっており、「知識・理解の観点」「思考・判断の観点」「関心・意欲の観点」「態度の観点」「技能・表現の観点」の5つのうちから教員が用いる観点を選び、それぞれについて具体的な到達目標を学生に示すことになっている。これらの学習目標を達成できたかどうかについて、「1.そう思う」を5点、「そう思わない」を1点として平均値を授業区分別に算出した。

今年度はほとんどの学部・研究科で平均値が現状維持又は上昇している。2009度から修学支援システムが新たに導入されたため、受講登録の際にweb上でシラバスを読み、各授業の到達目標を理解して授業に臨んでいる者が増えていると推察される。授業の到達目標を知り、どのような成績評価方法で評価を受けるのかを事前に知って受講するのとしないうとでは大きな差がでる。新システムの導入が学生の受講態度や理解度にいい意味で影響を及ぼしているとするならば喜ばしいことである。

### (3) 共通質問項目3 「理解」

**Q. あなたは、この授業の内容を理解したと思いますか？**

1. そう思う、
2. ややそう思う、
3. どちらとも言えない、
4. あまりそう思わない、
5. そう思わない

共通質問項目3は授業の理解度について尋ねた設問である。多くの学部・研究科で昨年度を上回っており、特に共通教育は昨年度に比べ、上昇している。これは多くの学生が「そう思う」「ややそう思う」といった肯定的な回答をしていることを意味しており、授業担当の先生方の努力が実っていると考えられる。共通教育という大人数の授業が多い中でこのように高い理解度であることは喜ばしい状況にあるといえよう。

### (4) 共通質問項目4 「満足」

**Q. この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？**

1. そう思う、
2. ややそう思う、
3. どちらとも言えない、
4. あまりそう思わない、
5. そう思わない

共通質問項目4は授業の満足度について尋ねた設問である。多くの学部・研究科で平均値が上昇しており、概ね一定の満足度が得られていることが確認できる。学部段階では、すべての学部で高い数値を示している。

### (5) 共通質問項目5 「出席」

**Q. あなたは、この講義にどれくらい出席しましたか？**（括弧内は、15回講義の場合の出席回数参考値）

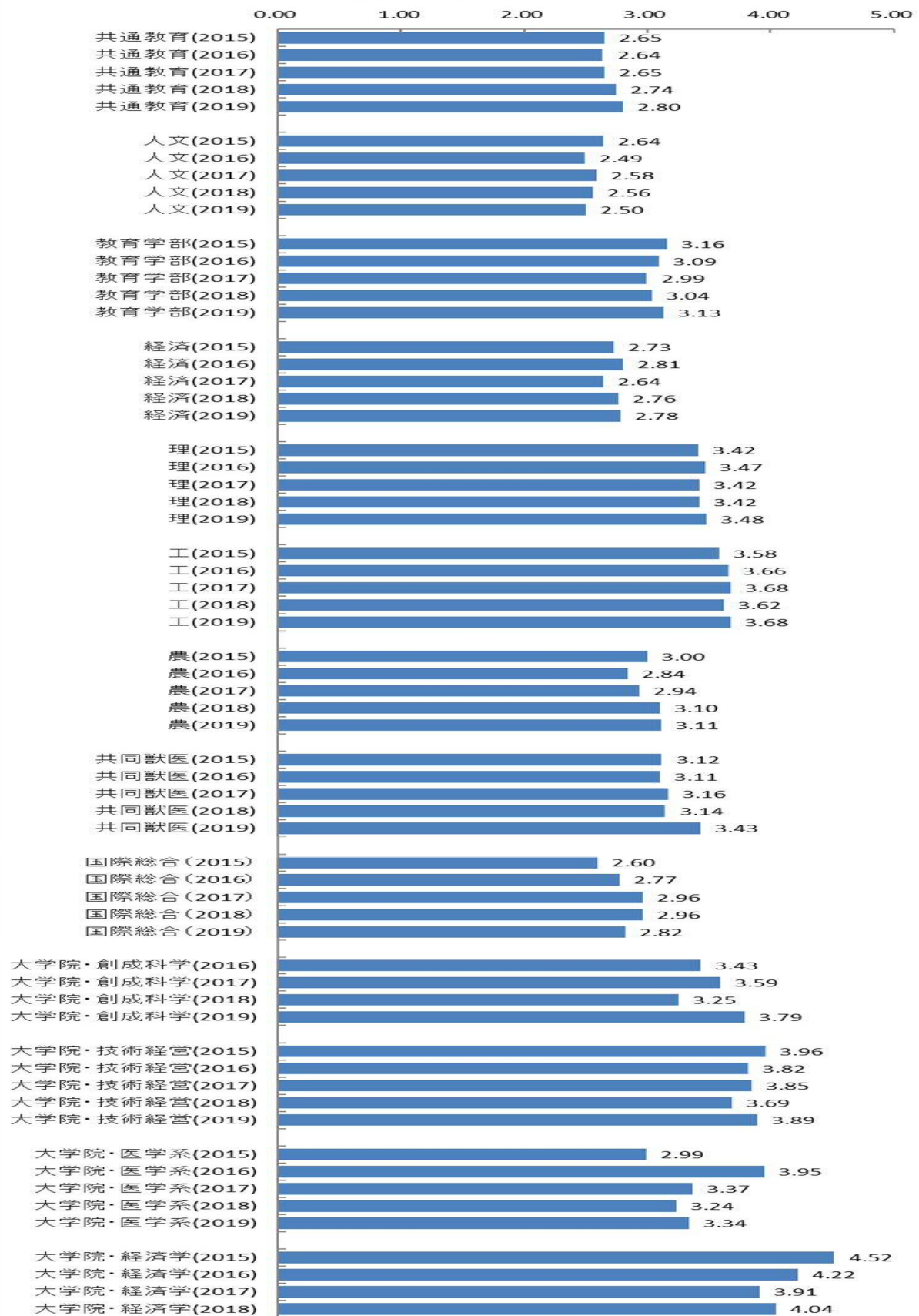
- |                 |                   |                  |
|-----------------|-------------------|------------------|
| 1. 90%以上（14回以上） | 2. 80～90%（12～13回） | 3. 60～80%（9～11回） |
| 4. 40～60%（6～8回） | 5. 40%未満（6回未満）    |                  |

共通質問項目5は授業への出席状況について尋ねた設問である。本質問も選択肢1の90%以上を5点、選択肢5の40%未満を1として計算を行った。すべての学部・研究科で4.5を超える高い平均値となっている。全体的にみて山口大学の学生の授業出席率は非常に良好であるといえる。

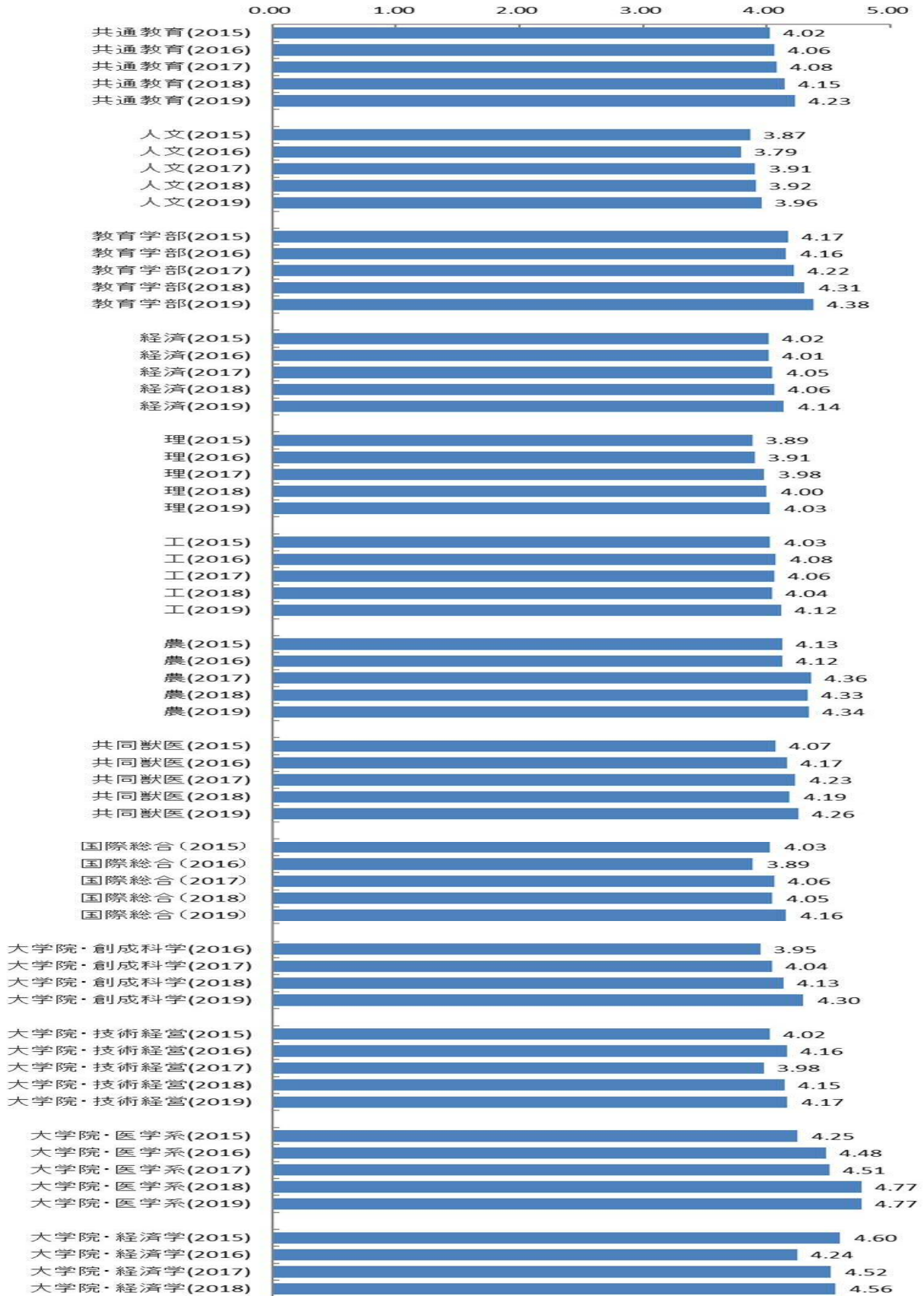
<全学共通質問項目結果の経年変化>

部局等	授業外学習時間 全体平均	学習目標達成 全体平均	理解 全体平均	満足 全体平均	出席 全体平均
共通教育(2015)	2.65	4.02	4.17	4.21	4.86
共通教育(2016)	2.64	4.06	4.19	4.23	4.87
共通教育(2017)	2.65	4.08	4.22	4.25	4.85
共通教育(2018)	2.74	4.15	4.25	4.28	4.85
共通教育(2019)	2.80	4.23	4.35	4.38	4.87
人文(2015)	2.64	3.87	4.00	4.28	4.46
人文(2016)	2.49	3.79	3.96	4.27	4.61
人文(2017)	2.58	3.91	4.06	4.34	4.60
人文(2018)	2.56	3.92	4.07	4.36	4.60
人文(2019)	2.50	3.96	4.08	4.41	4.62
教育学部(2015)	3.16	4.17	4.36	4.47	4.74
教育学部(2016)	3.09	4.16	4.35	4.46	4.73
教育学部(2017)	2.99	4.22	4.41	4.49	4.76
教育学部(2018)	3.04	4.31	4.44	4.50	4.78
教育学部(2019)	3.13	4.38	4.52	4.58	4.76
経済(2015)	2.73	4.02	4.13	4.26	4.58
経済(2016)	2.81	4.01	4.13	4.25	4.62
経済(2017)	2.64	4.05	4.18	4.27	4.62
経済(2018)	2.76	4.06	4.17	4.27	4.59
経済(2019)	2.78	4.14	4.25	4.34	4.64
理(2015)	3.42	3.89	3.96	4.16	4.76
理(2016)	3.47	3.91	3.97	4.15	4.76
理(2017)	3.42	3.98	4.05	4.23	4.77
理(2018)	3.42	4.00	4.08	4.27	4.76
理(2019)	3.48	4.03	4.11	4.27	4.75
工(2015)	3.58	4.03	4.07	4.17	4.70
工(2016)	3.66	4.08	4.13	4.22	4.72
工(2017)	3.68	4.06	4.11	4.18	4.77
工(2018)	3.62	4.04	4.09	4.18	4.75
工(2019)	3.68	4.12	4.15	4.24	4.75
農(2015)	3.00	4.13	4.24	4.41	4.83
農(2016)	2.84	4.12	4.26	4.42	4.86
農(2017)	2.94	4.36	4.41	4.48	4.87
農(2018)	3.10	4.33	4.27	4.38	4.83
農(2019)	3.11	4.34	4.03	4.10	4.85
共同獣医(2015)	3.12	4.07	4.14	4.27	4.84
共同獣医(2016)	3.11	4.17	4.21	4.29	4.86
共同獣医(2017)	3.16	4.23	4.27	4.31	4.90
共同獣医(2018)	3.14	4.19	4.21	4.30	4.81
共同獣医(2019)	3.43	4.26	4.31	4.39	4.85
国際総合(2015)	2.60	4.03	4.15	4.33	4.79
国際総合(2016)	2.77	3.89	4.13	4.25	4.80
国際総合(2017)	2.96	4.06	4.22	4.31	4.83
国際総合(2018)	2.96	4.05	4.21	4.30	4.86
国際総合(2019)	2.82	4.16	4.35	4.42	4.72
大学院・創成科学(2016)	3.43	3.95	4.02	4.07	4.61
大学院・創成科学(2017)	3.59	4.04	4.11	4.16	4.77
大学院・創成科学(2018)	3.25	4.13	4.17	4.29	4.72
大学院・創成科学(2019)	3.79	4.30	4.37	4.35	4.88
大学院・技術経営(2015)	3.96	4.02	4.06	4.29	4.89
大学院・技術経営(2016)	3.82	4.16	4.28	4.63	4.93
大学院・技術経営(2017)	3.85	3.98	4.09	4.36	4.92
大学院・技術経営(2018)	3.69	4.15	4.25	4.37	4.87
大学院・技術経営(2019)	3.89	4.17	4.18	4.51	4.84
大学院・医学系(2015)	2.99	4.25	4.24	4.44	4.94
大学院・医学系(2016)	3.95	4.48	4.58	4.74	5.00
大学院・医学系(2017)	3.37	4.51	4.54	4.73	5.00
大学院・医学系(2018)	3.24	4.77	4.80	4.85	4.97
大学院・医学系(2019)	3.34	4.77	4.73	4.87	4.84
大学院・教育学(2015)	—	—	—	4.79	—
大学院・教育学(2016)	—	—	—	4.74	—
大学院・教育学(2017)	—	—	—	4.76	—
大学院・教育学(2018)	—	—	—	4.79	—
大学院・教育学(2019)	—	—	—	4.76	—
大学院・教育学・専門職(2017)	—	—	—	4.93	—
大学院・教育学・専門職(2018)	—	—	—	4.87	—
大学院・教育学・専門職(2019)	—	—	—	4.71	—
大学院・経済学(2015)	4.52	4.60	4.54	4.58	4.96
大学院・経済学(2016)	4.22	4.24	4.51	4.62	5.00
大学院・経済学(2017)	3.91	4.52	4.55	4.64	4.98
大学院・経済学(2018)	4.04	4.56	4.54	4.67	4.98
大学院・経済学(2019)	4.04	4.57	4.67	4.78	4.98

## 授業外学習時間(全体平均) — 経年変化 —

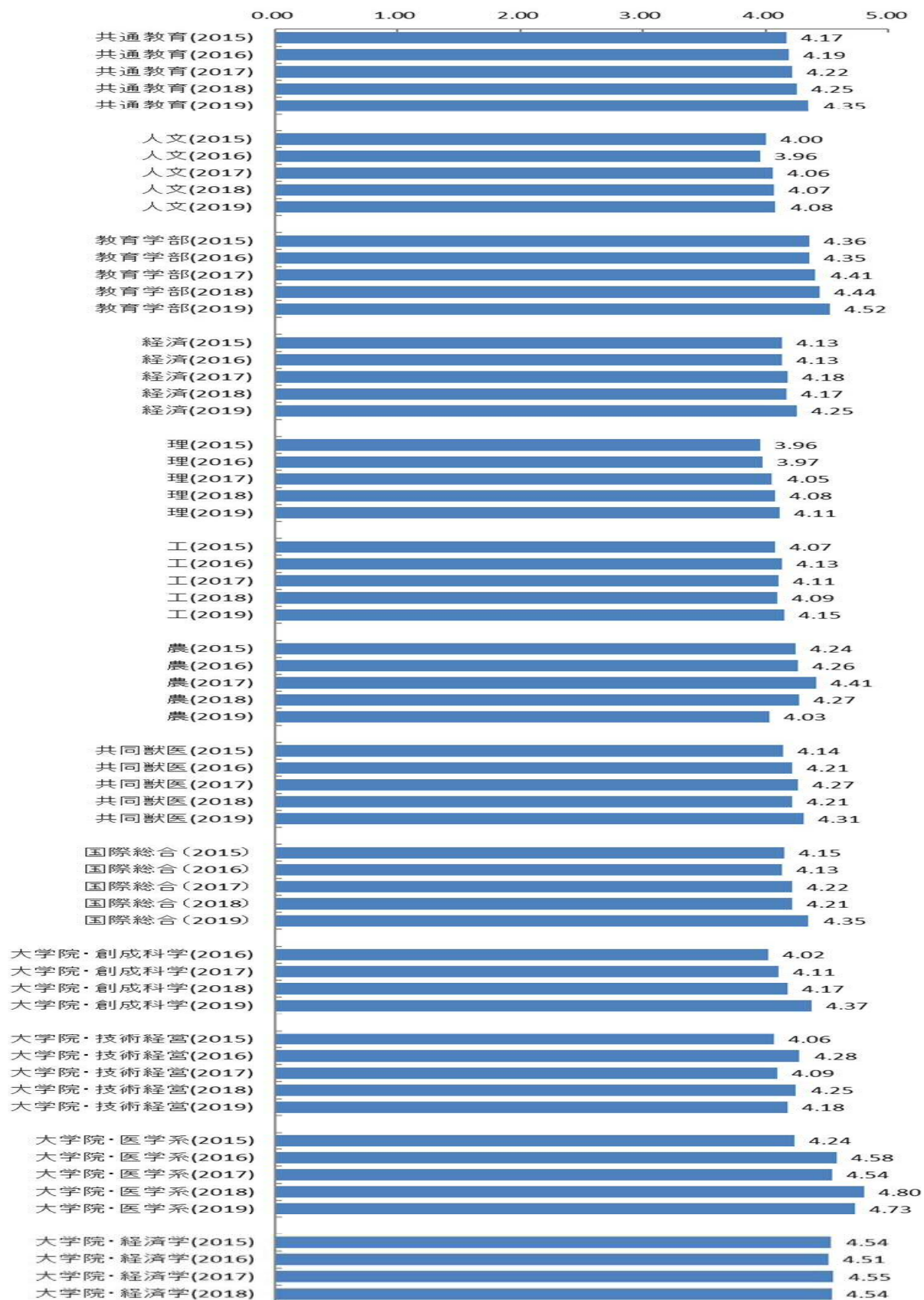


## 学習目標達成(全体平均) — 経年変化 —

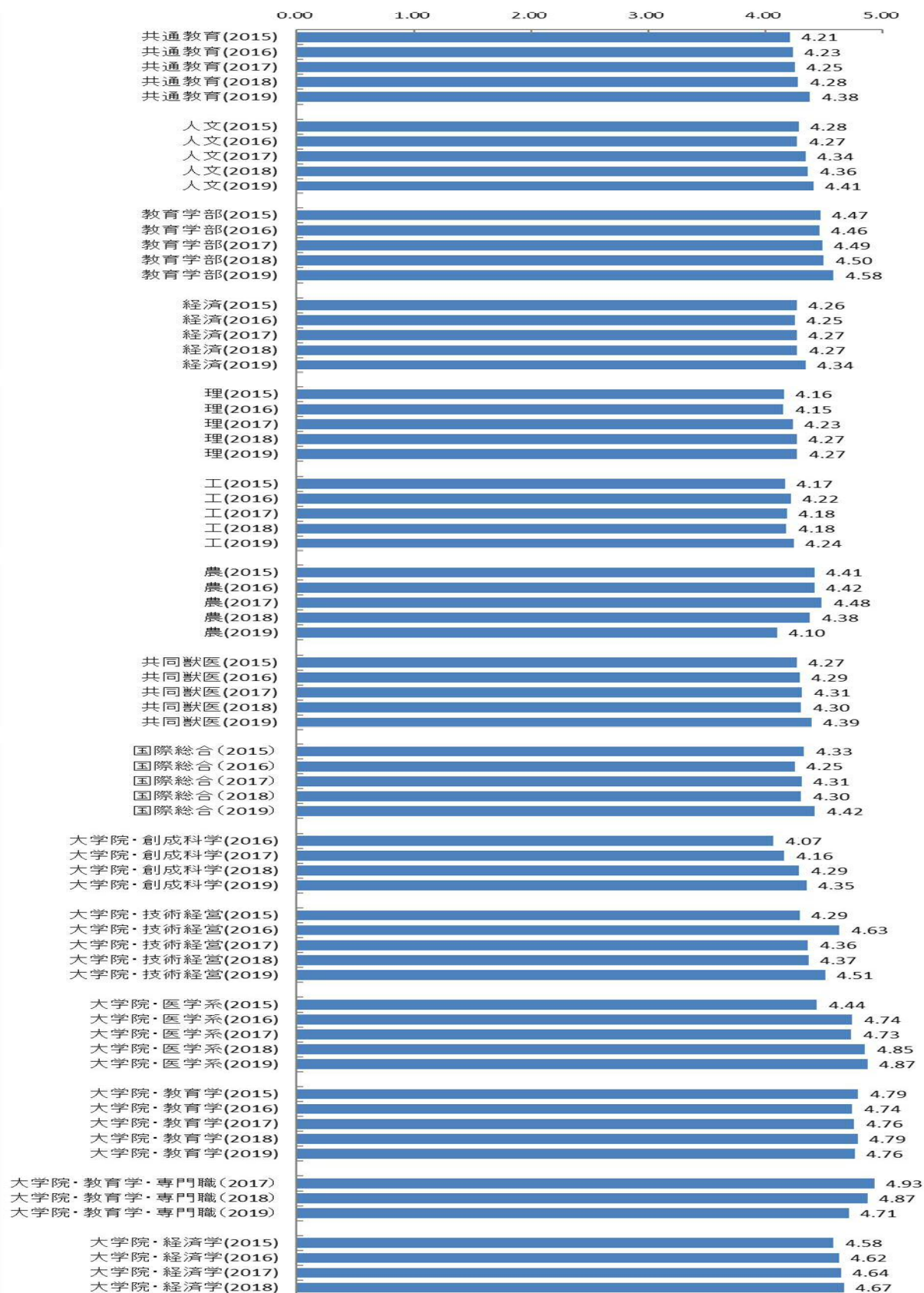




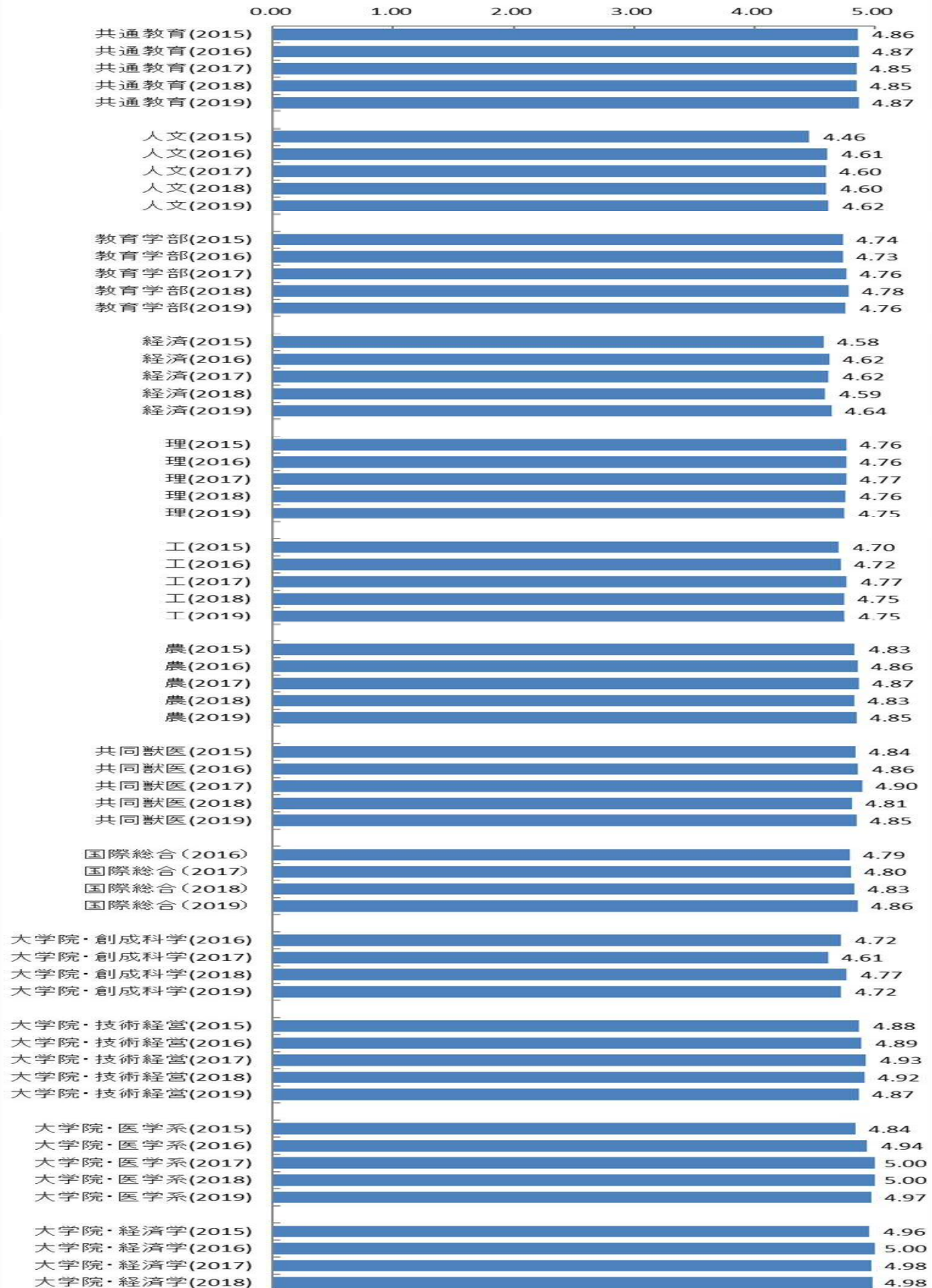
## 理解(全体平均) — 経年変化 —



## 満足(全体平均) — 経年変化 —



## 出席(全体平均) — 経年変化 —



## 第3節 学生授業評価の結果について（共通教育）

次に、第3節では共通教育に絞って2019年度の学生授業評価の結果を考察する。前節で示したデータのとおり、今年度の共通教育の学生授業評価実施率は90.5%、教員授業自己評価実施率は21.2%であった。学生授業評価実施率は昨年度と同様に90%を超える実施率を維持した。この傾向を引き続き続けていくことが求められる。なお、回答数は合計49,511人であった。2013年度における共通教育の大幅なカリキュラム改正に伴い、新しい共通教育の科目系列・分野に応じて評価結果を掲載している。過去5年間の経年変化を見ていくこととしている。

なお、以下に示す学生授業評価の結果は質問紙の種類（講義用、語学用、実験実習用の3種類）別に分野別の平均値の変化を経年で示したものである。各分野に含まれる授業科目および開設科目は附表に掲載した。また、詳しい質問項目は節末に質問紙を掲載したので、適宜ご参照いただければ幸いである。

### （1）講義系科目の結果について

以下の表・図は4種類の質問紙のうち「講義」用を使用している講義系科目を系列・分野別に整理し、評定平均値を算出したものである。講義系科目には大きく分類して「教養コア」「一般教養（人文教養）」「一般教養（社会教養）」「一般教養（自然教養）」「一般教養（学際的教養）」「専門基礎」に分けられる。またそれぞれ分野別に細かく分かれている。

Q1の出席状況は「1. 90%以上（14回以上）」を5点、「5. 40%未満（6回未満）」を1点として平均値を計算したものである。すべて4.5を超えており良好である。

Q2の授業外学習は予習・復習・宿題やレポート作成、試験勉強を行った総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算した時間を尋ねたものである。「1. 3時間程度または以上」「2. 2時間程度」「3. 1時間程度」「4. 30-50分程度」「5. 30分未満」をそれぞれ5,4,3,2,1として平均値を算出した。最も高いのは「理系基礎」が3.35、次に高かったのは、アクティブ・ラーニング型科目である「基礎セミナー」が3.31、「山口と世界」が3.21、さらには、反転授業などを取り入れている「科学技術と社会」3.15となっている。なお、大学設置基準には「1単位の授業科目は45時間の学修を必要とする」と規定されており、この中には授業時間の他に予習、復習の時間が含まれている。例えば、2単位の講義を行う場合90時間の学修が必要であり、このうち授業の30時間を除く60時間が授業外学習となる。つまり、半期15回の授業では1回の授業2時間に対して4時間の授業外学習が必要という計算になる。単位の実質化という観点から、現在の傾向がさらに進むことが期待される。

Q8のシラバスに記載された学習目標を達成したかについては「1. そう思う」「2. ややそう思う」「3. どちらとも言えない」「4. あまりそう思わない」「5. そう思わない」を5,4,3,2,1とし、「6. 答えられない」は平均値の計算から除いた。これはシラバスを読んでいない学生や学習目標を忘れた学生のために設けられた選択肢である。平均値はすべての科目で4.0を上回っており良好である。

Q9のこの授業の内容を理解できたかという質問については大半の科目が4.0を上回っており良好であった。

最後にQ10のこの授業はあなたにとって満足のものだったかという質問については最も平均値が高かったのは文化の継承と創造（4.51）であり、次に高かったのは基礎セミナー（4.50）、食と生命（4.46）と続く状況であった。

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q8学習目標達成	Q9理解	Q10満足
教養コア	基礎セミナー(2015)	講義	4.90	3.13	4.15	4.37	4.46
教養コア	基礎セミナー(2016)	講義	4.90	2.94	4.17	4.41	4.46
教養コア	基礎セミナー(2017)	講義	4.88	3.09	4.16	4.39	4.43
教養コア	基礎セミナー(2018)	講義	4.89	3.09	4.20	4.41	4.45
教養コア	<b>基礎セミナー(2019)</b>	<b>講義</b>	<b>4.91</b>	<b>3.31</b>	<b>4.31</b>	<b>4.50</b>	<b>4.50</b>
教養コア	情報処理(2015)	講義	4.93	2.51	4.00	4.20	4.19
教養コア	情報処理(2016)	講義	4.91	2.57	4.03	4.21	4.22
教養コア	情報処理(2017)	講義	4.92	2.45	4.06	4.20	4.21
教養コア	情報処理(2018)	講義	4.92	2.84	4.08	4.20	4.18
教養コア	<b>情報処理(2019)</b>	<b>講義</b>	<b>4.94</b>	<b>2.56</b>	<b>4.14</b>	<b>4.27</b>	<b>4.27</b>
教養コア	運動健康科学(2015)	講義	4.87	2.47	4.03	4.28	4.31
教養コア	運動健康科学(2016)	講義	4.88	2.25	4.07	4.28	4.33
教養コア	運動健康科学(2017)	講義	4.85	2.26	3.98	4.17	4.16
教養コア	運動健康科学(2018)	講義	4.86	2.44	4.09	4.19	4.18
教養コア	<b>運動健康科学(2019)</b>	<b>講義</b>	<b>4.89</b>	<b>2.50</b>	<b>4.12</b>	<b>4.27</b>	<b>4.26</b>
教養コア	山口と世界(2015)	講義	4.90	3.10	4.28	4.45	4.37
教養コア	山口と世界(2016)	講義	4.93	3.03	4.28	4.44	4.35
教養コア	山口と世界(2017)	講義	4.93	3.26	4.28	4.43	4.35
教養コア	山口と世界(2018)	講義	4.91	3.12	4.27	4.38	4.29
教養コア	<b>山口と世界(2019)</b>	<b>講義</b>	<b>4.94</b>	<b>3.21</b>	<b>4.43</b>	<b>4.53</b>	<b>4.44</b>
教養コア	キャリア教育(2015)	講義	4.91	2.69	4.07	4.22	4.13
教養コア	キャリア教育(2016)	講義	4.90	2.68	4.13	4.27	4.23
教養コア	キャリア教育(2017)	講義	4.88	2.52	4.04	4.20	4.10
教養コア	キャリア教育(2018)	講義	4.90	2.63	4.09	4.23	4.14
教養コア	<b>キャリア教育(2019)</b>	<b>講義</b>	<b>4.91</b>	<b>2.65</b>	<b>4.14</b>	<b>4.30</b>	<b>4.21</b>
一般教養(人文教養)	哲学(2015)	講義	4.79	2.04	3.85	3.87	4.07
一般教養(人文教養)	哲学(2016)	講義	4.84	2.04	4.04	4.10	4.30
一般教養(人文教養)	哲学(2017)	講義	4.82	1.82	4.04	4.19	4.36
一般教養(人文教養)	哲学(2018)	講義	4.83	2.03	4.14	4.19	4.36
一般教養(人文教養)	<b>哲学(2019)</b>	<b>講義</b>	<b>4.89</b>	<b>2.27</b>	<b>4.21</b>	<b>4.25</b>	<b>4.41</b>
一般教養(人文教養)	歴史学(2015)	講義	4.85	2.12	3.77	3.77	3.88
一般教養(人文教養)	歴史学(2016)	講義	4.86	2.05	3.90	3.93	4.01
一般教養(人文教養)	歴史学(2017)	講義	4.88	2.03	3.93	3.99	4.05
一般教養(人文教養)	歴史学(2018)	講義	4.86	2.08	3.95	3.92	3.99
一般教養(人文教養)	<b>歴史学(2019)</b>	<b>講義</b>	<b>4.89</b>	<b>2.13</b>	<b>4.03</b>	<b>4.02</b>	<b>4.10</b>
一般教養(人文教養)	社会学(2015)	講義	4.91	2.33	3.87	4.01	4.01
一般教養(人文教養)	社会学(2016)	講義	4.87	2.25	3.99	4.09	4.14
一般教養(人文教養)	社会学(2017)	講義	4.82	2.27	3.99	4.20	4.23
一般教養(人文教養)	社会学(2018)	講義	4.84	2.33	4.12	4.19	4.23
一般教養(人文教養)	<b>社会学(2019)</b>	<b>講義</b>	<b>4.85</b>	<b>2.44</b>	<b>4.14</b>	<b>4.27</b>	<b>4.32</b>
一般教養(社会教養)	経済と法(2015)	講義	4.87	2.25	3.96	4.13	4.24
一般教養(社会教養)	経済と法(2016)	講義	4.86	2.27	3.91	4.00	4.14
一般教養(社会教養)	経済と法(2017)	講義	4.84	2.24	3.94	4.05	4.15
一般教養(社会教養)	経済と法(2018)	講義	4.79	2.39	4.00	4.05	4.15
一般教養(社会教養)	<b>経済と法(2019)</b>	<b>講義</b>	<b>4.84</b>	<b>2.48</b>	<b>4.10</b>	<b>4.18</b>	<b>4.30</b>
一般教養(自然教養)	自然科学(2015)	講義	4.88	2.10	3.77	3.80	3.81
一般教養(自然教養)	自然科学(2016)	講義	4.86	1.99	3.81	3.83	3.85
一般教養(自然教養)	自然科学(2017)	講義	4.89	2.11	3.83	3.90	3.93
一般教養(自然教養)	自然科学(2018)	講義	4.89	2.23	3.95	3.96	3.98
一般教養(自然教養)	<b>自然科学(2019)</b>	<b>講義</b>	<b>4.92</b>	<b>2.21</b>	<b>4.08</b>	<b>4.12</b>	<b>4.19</b>
一般教養(学際的教養)	人間の発達と育成(2015)	講義	4.87	2.38	4.08	4.28	4.36
一般教養(学際的教養)	人間の発達と育成(2016)	講義	4.89	2.21	4.13	4.34	4.45
一般教養(学際的教養)	人間の発達と育成(2017)	講義	4.86	2.17	4.03	4.21	4.29
一般教養(学際的教養)	人間の発達と育成(2018)	講義	4.87	2.25	4.14	4.28	4.37
一般教養(学際的教養)	<b>人間の発達と育成(2019)</b>	<b>講義</b>	<b>4.86</b>	<b>2.28</b>	<b>4.13</b>	<b>4.27</b>	<b>4.39</b>
一般教養(学際的教養)	文化の継承と創造(2015)	講義	4.88	2.35	4.01	4.18	4.19
一般教養(学際的教養)	文化の継承と創造(2016)	講義	4.87	2.32	4.05	4.23	4.25
一般教養(学際的教養)	文化の継承と創造(2017)	講義	4.86	2.37	4.04	4.21	4.24
一般教養(学際的教養)	文化の継承と創造(2018)	講義	4.87	2.51	4.08	4.18	4.23
一般教養(学際的教養)	<b>文化の継承と創造(2019)</b>	<b>講義</b>	<b>4.88</b>	<b>2.47</b>	<b>4.26</b>	<b>4.42</b>	<b>4.51</b>
一般教養(学際的教養)	社会と医療(2015)	講義	4.87	2.03	4.03	4.23	4.30
一般教養(学際的教養)	社会と医療(2016)	講義	4.89	2.06	4.10	4.26	4.33
一般教養(学際的教養)	社会と医療(2017)	講義	4.86	1.95	4.12	4.25	4.30
一般教養(学際的教養)	社会と医療(2018)	講義	4.84	1.98	4.15	4.27	4.32
一般教養(学際的教養)	<b>社会と医療(2019)</b>	<b>講義</b>	<b>4.88</b>	<b>2.05</b>	<b>4.27</b>	<b>4.42</b>	<b>4.44</b>
一般教養(学際的教養)	科学技術と社会(2015)	講義	4.90	2.96	4.06	4.18	4.20
一般教養(学際的教養)	科学技術と社会(2016)	講義	4.90	3.06	4.02	4.13	4.12
一般教養(学際的教養)	科学技術と社会(2017)	講義	4.90	2.97	4.04	4.15	4.10
一般教養(学際的教養)	科学技術と社会(2018)	講義	4.91	3.03	4.15	4.24	4.19
一般教養(学際的教養)	<b>科学技術と社会(2019)</b>	<b>講義</b>	<b>4.91</b>	<b>3.15</b>	<b>4.24</b>	<b>4.32</b>	<b>4.32</b>
一般教養(学際的教養)	環境と人間(2015)	講義	4.86	2.87	4.00	4.13	4.07
一般教養(学際的教養)	環境と人間(2016)	講義	4.87	2.74	4.05	4.17	4.14
一般教養(学際的教養)	環境と人間(2017)	講義	4.86	2.81	4.07	4.16	4.14
一般教養(学際的教養)	環境と人間(2018)	講義	4.83	2.77	4.15	4.24	4.24
一般教養(学際的教養)	<b>環境と人間(2019)</b>	<b>講義</b>	<b>4.87</b>	<b>2.71</b>	<b>4.22</b>	<b>4.31</b>	<b>4.31</b>
一般教養(学際的教養)	食と生命(2015)	講義	4.83	2.35	4.07	4.30	4.31
一般教養(学際的教養)	食と生命(2016)	講義	4.86	2.46	4.13	4.34	4.39
一般教養(学際的教養)	食と生命(2017)	講義	4.85	2.35	4.07	4.29	4.31
一般教養(学際的教養)	食と生命(2018)	講義	4.85	2.33	4.15	4.29	4.30
一般教養(学際的教養)	<b>食と生命(2019)</b>	<b>講義</b>	<b>4.86</b>	<b>2.62</b>	<b>4.29</b>	<b>4.43</b>	<b>4.46</b>
専門基礎	理系基礎(2015)	講義	4.86	3.33	3.92	3.96	3.97
専門基礎	理系基礎(2016)	講義	4.86	3.45	3.85	3.83	3.87
専門基礎	理系基礎(2017)	講義	4.82	3.54	3.79	3.77	3.79
専門基礎	理系基礎(2018)	講義	4.83	3.52	4.02	4.00	4.04
専門基礎	<b>理系基礎(2019)</b>	<b>講義</b>	<b>4.86</b>	<b>3.35</b>	<b>4.20</b>	<b>4.25</b>	<b>4.35</b>

## (2) 語学教育科目の結果について

以下は「語学」の質問紙を用いた外国語科目の平均値である。「英語」「日本語」の2つの分野のそれぞれに含まれる授業科目の評価の平均値を表している。Q1の出席は4.5を超えており良好である。Q2の授業外学習については、前々年度・前年度に比べ回復傾向にある。また、それ以外の項目も4.0をすべて超えており大変良好な状況である。

英語分野については、2017年度よりカリキュラム改編を行っており、2017年度以降の経年変化の推移を注視していく必要がある。

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q8学習目標達成	Q9理解	Q10満足
英語	英語(2015)	語学	4.77	3.49	4.21	4.35	4.43
英語	英語(2016)	語学	4.78	3.56	4.18	4.33	4.40
英語	英語(2017)	語学	4.81	2.95	4.23	4.43	4.47
英語	英語(2018)	語学	4.81	3.02	4.25	4.44	4.45
<b>英語</b>	<b>英語(2019)</b>	<b>語学</b>	<b>4.84</b>	<b>3.18</b>	<b>4.31</b>	<b>4.50</b>	<b>4.51</b>
専門基礎	日本語(2015)	語学	4.40	3.24	4.52	4.71	4.73
専門基礎	日本語(2016)	語学	4.59	3.35	4.54	4.70	4.68
専門基礎	日本語(2017)	語学	4.59	3.45	4.57	4.70	4.70
専門基礎	日本語(2018)	語学	4.57	3.45	4.38	4.56	4.59
<b>専門基礎</b>	<b>日本語(2019)</b>	<b>語学</b>	<b>4.64</b>	<b>3.53</b>	<b>4.55</b>	<b>4.66</b>	<b>4.69</b>

## (3) 演習・実験・実習系科目の結果について

以下は「演習・実験・実習」の質問紙を用いた授業の平均値である。共通教育のうちこのタイプに当てはまるものは、「理系基礎(実験)」分野の実験科目である。Q2の授業外学習については4.58と非常に高い。また、それ以外の項目も4.0をすべて超えており大変良好な状況である。

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q9学習目標達成	Q10理解	Q11満足
専門基礎	理系基礎(実験)(2015)	演習・実験実習	4.94	4.49	4.33	4.42	4.47
専門基礎	理系基礎(実験)(2016)	演習・実験実習	4.95	4.43	4.44	4.45	4.48
専門基礎	理系基礎(実験)(2017)	演習・実験実習	4.92	4.40	4.31	4.33	4.28
専門基礎	理系基礎(実験)(2018)	演習・実験実習	4.96	4.43	4.39	4.43	4.44
<b>専門基礎</b>	<b>理系基礎(実験)(2019)</b>	<b>演習・実験実習</b>	<b>4.97</b>	<b>4.58</b>	<b>4.43</b>	<b>4.51</b>	<b>4.57</b>

附表 <各分野に含まれる授業科目および開設科目>

(1) 共通教育科目の授業科目及び単位数 (共同獣医学部を除く)

系列	分野	授業科目	単位数	
教養コア	基礎セミナー	基礎セミナー	2	
	情報処理	データ科学と社会Ⅰ	1	
		データ科学と社会Ⅱ	1	
	運動健康科学	運動健康科学	1	
	山口と世界	山口と世界	1	
	キャリア教育	知の広場	1	
キャリア教育		1		
英語	英語	英語Ⅰ aまたは英語Ⅱ a	2	
		英語Ⅰ bまたは英語Ⅱ b	2	
		英語会話Ⅰ aまたは英語会話Ⅱ a	2	
		英語会話Ⅰ bまたは英語会話Ⅱ b	2	
一般教養	人文教養	哲学	1	
		歴史学	1	
		社会学	1	
	社会教養	経済と法	経済と法1	1
			経済と法2	1
			経済と法3	1
	自然教養	自然科学	自然科学1	1
			自然科学2	1
	学際的教養	人間の発達と育成	人間の発達と育成1	1
			人間の発達と育成2	1
		文化の継承と創造	文化の継承と創造1	1
			文化の継承と創造2	1
		社会と医療	社会と医療	1
		科学技術と社会	科学技術と社会	1
環境と人間		環境と人間	1	
食と生命	食と生命	1		
専門基礎	理系基礎	数学Ⅰ	2	
		数学Ⅱ	2	
		物理学Ⅰ	2	
		物理学Ⅱ	2	
		化学Ⅰ	2	
		化学Ⅱ	2	
		生物学Ⅰ	2	
		生物学Ⅱ	2	
		地球科学Ⅰ	2	
		地球科学Ⅱ	2	
		物理学実験A	2	
		物理学実験B	1	
		化学実験A	2	
		化学実験B	1	
		生物学実験	2	
地球科学実験	2			

系列	分野	授業科目	単位数
専門基礎	学部専門基礎	ドイツ語入門1	2
		ドイツ語入門2	2
		フランス語入門1	2
		フランス語入門2	2
		中国語入門1	2
		中国語入門2	2
		中国語初級1A	2
		中国語初級1B	2
		中国語初級2A	2
		中国語初級2B	2
		ハングル入門1	2
		ハングル入門2	2
		ハングル初級1A	2
		ハングル初級1B	2
		ハングル初級2A	2
		ハングル初級2B	2
		医学のための統計学	2
		数学概論	2
		医学のための物理学入門	2
		医学英語1a	1
医学英語1b	1		
医学英語2	2		
医療英語	2		
基礎医療英会話	2		
医療心理学	2		
医療環境論1	1又は2		
医療環境論2	1又は2		

## (2) 共通教育科目の授業科目及び単位数 (共同獣医学部)

系列	分野	授業科目	単位数
専門基礎	日本語	日本語Ⅰ(総合)	2~10
		生活日本語	2~6
		日本語Ⅱ(総合)	2~8
		日本語Ⅱ(読む・書く)	2~4
		日本語Ⅱ(聞く・話す)	2
		日本語ⅢA(総合)	2~4
		日本語ⅢB(総合)	2~4
		日本語Ⅲ(読む・書く)	2~4
		日本語ⅢA(聞く・話す)	2~4
		日本語ⅢB(聞く・話す)	2~4
		日本語ⅢA(文法)	2
		日本語ⅢB(文法)	2
		日本語ⅣA(総合)	2~4
		日本語ⅣB(総合)	2~4
		日本語ⅣA(読む・書く)	2~4
		日本語ⅣB(読む・書く)	2~4
		日本語ⅣA(聞く・話す)	2~4
		日本語ⅣB(聞く・話す)	2~4
		日本語ⅣA(文法)	2
		日本語ⅣB(文法)	2
		日本語ⅤA(総合)	2~4
		日本語ⅤB(総合)	2~4
		日本語ⅤA(アカデミックライティング)	2
		日本語ⅤB(アカデミックライティング)	2
		日本語ⅤA(口頭表現)	2
		日本語ⅤB(口頭表現)	2
		日本語ⅤA(ビジネス日本語)	2
		日本語ⅤB(ビジネス日本語)	2
		日本事情ⅠA	2
		日本事情ⅠB	2
		日本事情ⅡA	2
		日本事情ⅡB	2
プロジェクトワークで学ぶ日本語A	2		
プロジェクトワークで学ぶ日本語B	2		
教職基礎	教職基礎	日本国憲法	2
		スポーツ運動実習	1
教養展開	国際展開	国際展開科目	1又は2
		海外英語研修	2
	地域展開	地域展開科目	1又は2
		知財展開	知財展開科目
ユニバーサルデザイン展開	ユニバーサルデザイン展開科目	1又は2	

系列	分野・科目	授業科目	単位数	
一般教育科目	人文・社会科学系	文化と芸術	文化の継承と創造1 文化の継承と創造2	1 1
		思想と歴史	哲学 歴史学	1 1
	人と社会	社会学	1	
		経済と法1	1	
		経済と法2	1	
		経済と法3	1	
		人間の発達と育成1	1	
		人間の発達と育成2	1	
	自然科学系	自然と科学技術	自然科学1	1
			自然科学2	1
科学技術と社会			1	
環境と人間			1	
食と生命 生命科学概論			1 2	
総合教養系	人間教養と将来設計	山口と世界 知の広場	1 1	
		体育・健康科目	健康とスポーツ分野	スポーツ運動実習 社会と医療
初期教育科目	導入教育系	生命倫理学 コミュニケーション論	1 1	
		情報科学系	情報セキュリティ・モラル 情報リテラシー演習	1 1
外国語科目	英語	英語Ⅰ 英語Ⅱ	4 4	
		基礎教育科目	数学・理科	基礎生物学 基礎化学 基礎物理学 分子生物学 畜産科学 生物統計学 作物・草地学 生物学実験





## <参考> 共通教育 学生授業評価 質問紙（3種類）

### 共通教育 学生授業評価（講義）

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

【学 生 区 分】 1. 一般学生 2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部  
7. 農学部

#### 【質 問 Ⅰ】

1	あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です） 1. 90%以上（14回以上） 2. 80～90%（12～13回） 3. 60～80%（9～11回） 4. 40～60%（6～8回） 5. 40%未満（6回未満）
2	あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。 1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分～50分程度 5. 30分未満
3	教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
4	専門用語や理論的な話は、適切に説明されましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
5	テキストやプリントなどの教材が、効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
6	板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
7	学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
8	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう

	思わない 6. 答えられない
9	<b>あなたは、この授業の内容を理解できましたか？</b> 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
10	<b>この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？</b> 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
11~30	<この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください>

**【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください**

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

## 共通教育 学生授業評価（語学）

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

**【授業科目名】** 授業科目名を記入して下さい。

**【担当教員名】** 担当教員名を記入して下さい。

**【学 年】** 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

**【学生 区分】** 1. 一般学生 2. 留学生

**【学 部】** 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部  
7. 農学部

**【質問Ⅰ】**

1	<b>あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？</b> （括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です） 1. 90%以上（14回以上） 2. 80~90%（12~13回） 3. 60~80%（9~11回） 4. 40~60%（6~8回） 5. 40%未満（6回未満）
2	<b>あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？</b> 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。 1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分~50分程度 5. 30分未満
3	<b>教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？</b> 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
4	<b>テキストやプリントなどの教材が、効果的に使われましたか？</b> 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない

5	<p>板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが、効果的に使われましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない</p>
6	<p>学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
7	<p>教員は、授業内容の説明以外に、あなたたちに演習や練習の時間を十分に与えましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
8	<p>あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない</p>
9	<p>あなたは、この授業の内容を理解できましたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
10	<p>この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？</p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
11~ 30	<p>&lt;この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください&gt;</p>

**【質問Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください**

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

## 共通教育 学生授業評価（演習・実習・実験）

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

**【授業科目名】** 授業科目名を記入して下さい。

**【担当教員名】** 担当教員名を記入して下さい。

**【学 年】** 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

**【学生 区分】** 1. 一般学生 2. 留学生

**【学 部】** 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部 6. 工学部  
7. 農学部

**【質問 I】**

1	<p><b>あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？</b>（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です）</p> <p>1. 90%以上（14回以上） 2. 80～90%（12～13回） 3. 60～80%（9～11回） 4. 40～60%（6～8回） 5. 40%未満（6回未満）</p>
2	<p><b>あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？</b> 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。</p> <p>1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分～50分程度 5. 30分未満</p>
3	<p><b>教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？</b></p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
4	<p><b>演習・実習・実験の方法に関する指示は、わかりやすく説明されましたか？</b></p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
5	<p><b>教材または器材が使用された場合、それらは適切に活用されましたか？</b></p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない</p>
6	<p><b>学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？</b></p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
7	<p><b>教員から手本・示範が示された場合、それらは適切でしたか？</b></p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない</p>
8	<p><b>授業中は、演習や実習に集中できる雰囲気でしたか？</b></p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
9	<p><b>あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？</b></p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない</p>
10	<p><b>あなたは、この授業の内容を理解できましたか？</b></p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
11	<p><b>この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？</b></p> <p>1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない</p>
12～30	<p>&lt;この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください&gt;</p>

**【質問 II】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください**

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

## 第2部 学部・研究科のFD活動

## 第4章 人文学部のFD活動

### 第1節 授業公開

#### (1) ピアレビュー実施形態の変遷

平成24年度以来、人文学部では、FD活動の一環として、ピアレビューの実施形態のあり方を試行錯誤してきた。平成24年度～27年度は、平成28年度の学科・コース改編に向けたカリキュラム整備を学部全体の課題ととらえ、新コースのカリキュラム構築や運営に資すべく、分野内・分野間で教育に対する共通理解を深めることを目的として通常の授業を互いに広く参観しあうという形で実施された。しかし、当初予定されていた新コース体制が教職課程との連携に比重を置いたものへと練り直された結果、既存の教育組織に大幅な入れ替えが生じる必要が無くなった。この結果、平成27年度には教員のピアレビューに関する意欲に減退傾向がみられるようになった。平成28年度に新コースカリキュラムが実際に始動したことともあわせ、ピアレビューを実施形態や企画趣旨のレベルから見直す必要が生じた。平成28年度は、新カリキュラムの始動にあわせて改革された基礎セミナーを幅広く公開することにした。これは初年次教育のあり方について議論を深めるとともに、自身が担当する際に授業改善のヒントを得ることを目的としたものであった。しかしながら、ピアレビューに対する意欲の減退を改善するには至らなかった。意欲の減退を招いている一因として、近年の教員の事務作業量の増加や研究・教育の時間の確保の困難さがあることがあげられ、より簡素で効率的なピアレビューのあり方が求められるとの見解で一致した。そこで、平成30年度からは以下の実施方法を取っている。

<平成30年度以降の実施方法>

- ・人文学部の教員のなかから5名を選出し、その5名が任意の授業を参観する。「ピアレビュー参加シート」を記入し、提出する。
- ・参観者は、事前にその旨を授業担当の教員に連絡し、同意を得ておく。
- ・授業を公開する教員は、普段とかわらず授業を行う。ただし、参観者を考慮して講義資料などがある場合は多めに印刷しておく。
- ・参観者は授業後「ピアレビュー参加シート」を書き、提出してもらう。
- ・提出してもらった「ピアレビュー参加シート」は、授業担当者にも共有し、参考にしてもらう。

#### (2) ピアレビュー実施状況

令和元年度も平成30年度からの新方式を踏襲する形でピアレビューを実施した。選出された教員からは負担感の声は現在のところ特にあがっていない。また、特定の授業により日時が固定されることもなく、授業担当者との話し合いで、参観日の都合を決められる点は、新方式の利点であると言える。実際に、参観をした教員からは、分野やコースを越えた授業を観ることができ、参考となる教授上の工夫や学生への対応など得るものが多かったとの感想が寄せられた。より簡素で効率的なピアレビューという観点から提案された新方式は現在のところは良好な結果をもたらしていると言える。ピアレビューの様式に関しては、【図1】参照。

【図1】令和元年度ピアレビュー参加シート

ピアレビュー参加シート

提出先：人文学部FD部会

提出者氏名 [ ]

見学した授業科目名 [ ]

授業見学の日時 [ ]

授業担当者 [ ]

見学授業に対する感想・意見

※授業見学後、本シートをご提出ください。FD部会・ピアレビュー担当者（XX）のメールボックスにいらていただくか、メール（XXXX@yamaguchi-u.ac.jp）でも構いません。

※FD部会で集めたいえ、写しを授業担当教員にお渡しします。

※授業担当教員の承認を事前に得た上で見学して下さいますよう、お願いします。

## 第2節 学部・研究科主催FD研修会

### (1)令和元年度 人文学部教育改善FD研修会

日程： 令和2年1月15日(水) 14:30～15:10

場所： 人文学部・理学部大会議室

講師： 林 透 (大学教育センター准教授)

参加者： 41名 (アンケート回収 22名)

#### 【研修内容】

最初、人文学部FDコーディネーターより、教育改善FD研修会の主旨の説明があった。つづいて大学教育センター林透准教授より「学修ポートフォリオ」について以下のような説明があった。教員に学修ポートフォリオを「学修者の振り返りと成長のために」、3つの学習ポリシー (DP、CP、AP) と内部質保証を高めることに利用する、学生の自律的な学びを推進するために、経験を振り返り、熟考する為の機会つくるため、として使って欲しい。さらに振り返りとしてメタ認知をすること。振り返りの材料としては経験、記憶だけでなく、種々の記録物と同時に評価基準、同期の人、先生、先輩



も含まれる事が紹介された。後半は、次年度4月から修学支援システム (eYUSDL) 上にポートフォリオのメニューが設置され、運用可能な電子ポートフォリオについての説明があった。電子ポートフォリオの利点として入力データが卒業時までシステム上にあることで紛失しない、かさばらない。またLMS (ラーニングマネジメントシステム) と連動させて使う事ができる。教員が資料の検索ができる。また運用面として改善されているところとして、ポートフォリオの記入項目を柔軟に設定出来る。学科単位で設問の設定ができる。在学中のポートフォリオの記録を閲覧出来る。学生が作成したポートフォリオに対して指導教員がコメントできる。等の機能がある、事項が紹介された。

#### 【質疑応答・意見交換】

**Q1:** これまで紙媒体でのポートフォリオを約5年間行っていて感じる事は、設問が適切でないため、設問に対する学生の回答が曖昧な内容である。その結果、学生とのポートフォリオと指導教員と薄い人間関係としてか築けていないと思う。以上のことからこれまでのポートフォリオの検証結果を聞きたい。

**A1:** ポートフォリオのアンケートは3年前に使われ方のアンケート調査をした。結果としてポートフォリオの電子化は賛成であった。また、人文学部はポートフォリオを細かく設定して運用されている。国際総合学部はYU CoB CuSを使用して振り返りは行われていて、学習成果と振り返り結果を毎年可視化している。ポートフォリオとDP等の相関分析については行っていない。学習ポートフォリオは学科毎にカスタマイズできるので必要な効果は期待できる。本学の運用は学習ポート



フォリオが目標であり、他大学はポートフォリオを DP 達成の観点で利用しているところもある。

Q2：電子ポートフォリオはAI機能をのせれば2-3年すれば自動でデータが多量に集まるので電子ポートフォリオは良いと思う。その結果極端な場合として、試験をしなくてもよくなるのではないかと思う。



A2：コメント：学習目標が確定し、カリキュラムマップが学部・学科の中で合意されていれば学習が身につくと思う。AI機能を使った自動データ収集によって、ポートフォリオを自動で行う事ができるとは限らないと思う。学生と指導教員の先生が対面でポートフォリオを検証する機会を設けることは必要と思う。

Q3：電子ポートフォリオの高大接続についての今後の動きはありますか。2020年からの推薦入試にポートフォリオを活用して行うよう文科省に言われているが、ポートフォリオを使う事で信頼性があるのか。東大とベネッセが共同開発している高校のポートフォリオシステムについては、研究チームの一員だった早稲田大学側はこのポートフォリオを採用しないという情報がある。このシステムを使ったデータで大学推薦入試をする事に信頼性があるか。大学のポートフォリオの予算はどうなっているのか。

A3：高校にもポートフォリオは導入されているところはある。大学のポートフォリオは各大学で開発し、運用している。高校とのポートフォリオの連携はないと思う。

Q4：ポートフォリオ自体、本当に必要かどうか疑問である。ポートフォリオ以外の物に対しても何でも管理感がある。またポートフォリオが調査物のように定期的に行われている感がある。自分はとても疲れた状態で設問に対して入力するので、結果として設問に適切な表現で記入することとなる。もっとポートフォリオ自体を検証して、精査したら良いと思う。

A4：ポートフォリオの活用については、頻度、設問事項等は各学部で決めてもらって良い。学科単位で細かくカスタマイズできるので活用して欲しい。大学教育センターはいつでも相談にのる体制である。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	0	0.0%
良かった	12	54.5%
どちらとも言えない	5	22.7%
あまり良くなかった	2	9.1%
良くなかった	3	13.6%
無回答	0	0.0%
合計	22	100.0%

## (2)令和元年度 人文学部アラカルト FD 研修会

### 大学における授業のあり方を考える～高校までの授業、教育改革の動向を踏まえて～

日時 令和2年3月19日(木) 14:30～15:00  
場所 人文学部・理学部大会議室  
講師 和泉研二 (大学教職センター：教育学部教授)  
参加者 38名 (アンケート回収 18名)

#### 内容

はじめに人文学部 FD コーディネーターより大学教職センター和泉研二教授の紹介があった。引き続き和泉研二教授の自己紹介があり、その後講演内容に入った。

#### 1. はじめに

最初に山口大学への合格者の出身校の内訳が説明された。県内の出身者が多く、次いで広島、福岡といった隣の県の出身者が多いことが示された。

#### 2. 高校教育の現状から学生達への関わり

##### (1)変わりつつある高校教育

高校教育の変化についての説明があった。教育改革に伴い、高校も教員研修の頻度が向上し、授業改善の意識が高まっている。これまで高校では①校内研修の機会が少なく、「授業改善等」という意識が薄かった。②授業の進め方は個々の先生に任されていた。③「教員の研修」の機会は限られ、教員個人が研修に参加し授業改善を行っていた。しかし、最近では高校自体が組織的に教育改善に取り組んでおり、校内研修時間が増え、授業改善に取り組み、授業自体が変化してきている。また新しい学習指導要領に示されている「主体的で対話的な深い学び」を意識して授業に取り組む先生が増えている。特に、教科指導、AL (アクティブ・ラーニング) を切り口にした授業改善が進みつつある。ペアグループ学習、ディスカッション、プレゼンテーションを行いながら生徒と共に授業をつくる、という意識が定着しつつある。これまでの「訓練重視の授業」から、「自主的・自発的な学習」を重視する授業になっている。生徒の学力向上の「できるようになる事」は、「確実な学力保証」から「主体的な学び」に移行している。授業改善の取組として、KJ法、ロールプレイ、ブレインストーミング等を授業に取り入れ、生徒が授業に慣れると、学習の仕方が分かってきたと感じ、授業中の表情に変化が出てきている。高校ではアクティブラーニングは単に他者との協働学習ではなく、受動的な学習を乗り越え、生徒自身の活動(書く、話す、発表する)を創り出せる学習を目指している。改革の結果、AL推進に肯定的な教員は増え、授業の内容も数年前に比べてグループ活動や発表が多くなってきており、日常的に行われるようになってきている。

##### (2)高校の悩み

高校側の悩みとして、大学や社会からの要請と進学のための学力保証の両立が求められている。このため受験対応と社会的要請のバランスをどう取るかが求められている。高大接続改革、大学入試改革、学習指導要領改訂が高校教員の生徒指導に影響を与えており、高校が対応を迫られている。高校は生徒に求める姿としての「身に付けさせたい力」と現実のギャップに悩んでおり、生徒の強みを伸ばし、

弱みを克服する姿勢で取り組んでいる。

### (3)山口大学に入学する生徒たち

高校から見ると、山口大学へ進学する生徒は大凡全教科に渡って「基礎的学力」、「読解力」、「地道に真面目に学習しようとする姿勢」は身に付いていて、アクティブなグループ学習や発表等には慣れている。また「与えられた学習」はこなすが「与えられないとやらない」生徒、「自分から考えて」新しい物を創る、提案する、わかりやすく説明する、生徒が少なくなったと感じている。また大学に対して敬意を持てる生徒であり、「法律遵守」は理解し、誠実に守る道德心を持っている。山口大学へ進学する層の強み（生かす力）として「基礎的知識・技能」、「他者と協力して学ぶ力、読み取りの力」が挙げられ、弱み（今後伸びていく力）として「主体的に学ぶ力」、「理論的な思考力」、「わかりやすく話す・表現する力」の調査結果がある。

## 3. 大学の授業を通して人を育てる、人材を育成すること

### (1)大学の授業作り

大学生は内発的に動機と知的好奇心を持っている、また学生が主体的に参加する授業が展開できる土台を持っている。教員が授業デザインやファシリテーションの力を発揮し、授業を工夫することで、授業が質の高い探求のプロセスになると思われる。また授業は教員と生徒と一緒に創る物であり、能動的な学びを仕組む事で探求が深まるはずである。

一例として教育学部3年前期で行われている「地域教育実践演習」の授業の狙い、授業の達成目標、授業における創意工夫（外部ゲストの活用、授業冒頭に行うショートスピーチ、少人ワーク、プレゼンテーション、地域授業での協働体験）の説明があった。

#### 設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	0	0.0%
良かった	12	66.7%
どちらとも言えない	4	22.2%
あまり良くなかった	2	11.1%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	18	100.0%

## (3)令和元年度 人文学部主催 FD 研修会

### 「過年度生について考える」

日時 令和元年12月18日(水) 14:30～15:00

場所 人文学部・理学部大会議室

参加者 40名

内容：

はじめにFD座長より、本研修会の予定と平成31年度12月までの人文学部における過年度生数の

推移に関する報告があった。引き続き、人文学部平成 30 年度学生委員長より、学生委員としての学生面談での体験談の報告の後、参加者全員より過年度生に関わる体験報告の共有を行った。

今回は、全参加者に発言してもらおう形態をとり、普段、発言の機会のない方の声も拾い、全員で分かち合うことを目的とした。多岐にわたる報告がされたが、以下のような点が多くあげられた。

- ・教員はどこまで学生の私生活に踏み込むべきか、踏み込んで良いのか。
- ・精神疾患により大学に来られない過年度学生に対する専門家ではない者としてできることは何か。
- ・過年度生の学力・スキル不足（卒論レベルの妥協をどこまで許すか等）
- ・本人と親、親と大学の関係
- ・過年度生との連絡の取り方（連絡の手段がないケースが多い）
- ・特定のサークルや部活での留年率の高さ
- ・最近の学生特有の傾向（叱責すると上手くいかない）

参加者からは、過年度生に対する様々な体験や試みを共有することができ、気づきもあり、有意義であったとの感想が報告された。また、全員発言型の研修会も好意的に参加者には受け入れられたようである。

学部・大学内のシステムに由来するような問題に関しては、速やかに対応が検討されるよう、教学部長により適切な場で発議される仕組みになっている（成績証明書の保護者への送付時期等）。



## 第 3 節 教育改善に関する活動

### (1) 第 4 回基礎セミナー部会

日時：令和元年 1 月 29 日（水）

場所：人文学部研究棟 6 1 8 号室

参加者：FD 部会・教務委員・令和 2 年度基礎セミナークラス担当教員 6 名

内容：

FD 部会では例年、FD 部会・教務委員および次年度の基礎セミナー担当者を参加者とし、次年度の授業概要・授業目標・授業計画のすりあわせを行う基礎セミナー部会を開催している。

FD 部会では平成 28 年度から基礎セミナーの改革を実施し、第 1 クォーターで学生の間関係構築やアカデミック・スキルの習得に重点を置いたクラス別指導を行い、第 2 クォーターで各コースにおける履修のあり方などに関する合同のガイダンスを行ってきた。

人文学部 FD 部会では令和 2 年度基礎セミナークラス担当教員を主な参加者として第 4 回基礎セミナー部会を実施し、次年度の基礎セミナー実施にむけて意見交換と情報の共有をはかった。令和 2 年度については基本的に平成 29 年度の方針を継続することとし、授業概要・一般目標・到達目標および合同授業の内容について下記の通り共有し、令和 2 年度基礎セミナークラス担当教員に対し、下記に基づいて統一的なシラバスを作成するようお願いした。

## 人文学部基礎セミナー授業概要・一般目標・到達目標および合同授業の内容

### 【授業概要】

人文学部に入学した皆さんが、はやく大学生活に馴染み、大学を勉学の間として活用してゆけるように導きます。あわせて、今後四年間の勉学について各自の方向性や目的意識がより明確になるよう促します。

### 【一般目標】

- (1) 自らの大学生生活の目的について、明確な意識を持つことができる。
- (2) 大学の環境に適応し、大学を自らの勉学の間として活用できる。
- (3) 自らの勉学に必要な情報・文献を収集できる。
- (4) 日本語論述にかかわる基礎的知識を習得し、大学の授業で課されるレポートを作成できる。

### 【到達目標】

知識・理解の観点：自らの人生の展望を持ち、そのなかでの大学生生活の位置づけを理解している。

思考・判断の観点：自ら問いを発見し、よく考える習慣を体得している。

関心・意欲の観点：人文学全般に広く関心を持つとともに、特に自身の素質に適い、自らが深く関心を持てる分野に気づいている。

態度の観点：大学生生活を送る上で基本的な習慣やマナーを身につけ、主体性を確立している。

技能・表現の観点：大学の授業で課されるレポートの作成において、適切に情報を収集したり、文章を構成・表現したりする方法・技術を習得している。

### 【合同授業の内容】

- (1) ポートフォリオとキャリア教育 第8回に実施予定  
「人文学部生のためのキャリア教育」(学生委員・就職支援部・学生支援センターと連携)
- (2) 留学案内 第9回に実施予定 「人文学部生のための留学案内」(国際交流部会と連携)
- (3) 各コースの紹介と履修モデルの解説 第10～14回に実施予定  
「学際的視野を持つために(各コースの紹介と履修モデル)」(各コースに委託)
- (4) 総括 第15回に実施予定  
「ポートフォリオの返却・レポート課題アンケートの回収・授業アンケートの実施」  
(学務係・FD部会)

## 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

### (1) 令和元年度の状況

#### ・学生授業評価

令和元年度の学生授業評価は、平成30年度の354科目実施率80.5%から308科目実施率76%となり、やや減少した。

以下、アンケートを実施した全授業における評価の平均値を平成30年度と比較して分析を行う。

【図2】授業評価 全体平均

項目	平成30年度	令和元年度
授業外学習	2.56	2.53
学習目標の達成	3.92	3.93
理解度	4.07	4.07
満足度	4.36	4.38
出席率	4.60	4.61

令和元年度は、授業外学習時間は若干下がったものの、学習目標の達成・満足度・出席率の各項目は改善し、理解度は横ばいであった。全体としては各項目とも高い水準を維持しており、変動は誤差の範囲を大きく超えるものではない。授業外学習時間については、低い傾向が続いており、何らかの具体的方策を立てる必要がある。言うまでもないことではあるが、学生授業評価の高低はそのまま授業の質の善し悪しを示すものではない。

・ 教員授業自己評価

教員授業自己評価の実施率は平成 30 年度の 37.5%から 24.3%とかなり減少した。なお、令和元年度の実施率の低下は、本年 2 月以降続いているコロナ対策に追われ、入力への時間を割けないこともあると思われる。さかのぼっての入力が行われることで上昇していく可能性はあろう。引き続き教員への周知徹底が今後の課題である。

以下、アンケートを実施した全授業における評価の平均値を平成 30 年度と比較して分析を行う。

【図 3】 教員授業自己評価 全体平均

項目	平成 30 年度	令和元年度
学習目標の達成	4.49	4.42
理解度	4.51	4.42
満足度	4.23	4.18

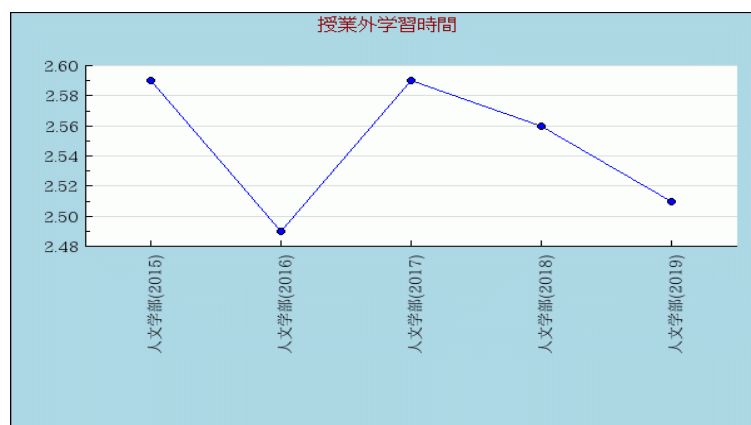
平成 30 年度と令和元年度を比較すると、学習目標の達成・理解度・満足度の各観点について若干の低下傾向が見られるが、大きな変動は見られない。【図 2】と【図 3】を比較すると、学習目標の達成、理解度について、学生の評価より教員の自己評価が高い。一方で、満足度については教員の自己評価よりも学生の評価のほうが高い。これは平成 28 年度以来続く傾向である。このあたりの誤差をどの程度少なくできるかが今後の課題である。

## (2) 経年変化

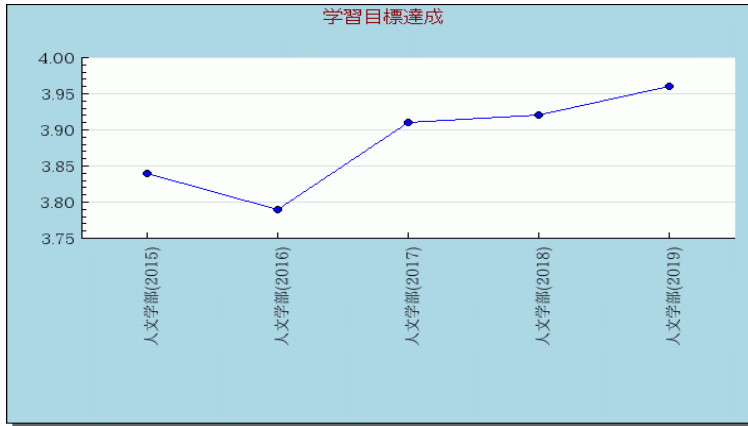
・ 学生授業評価

授業外学習時間、学習目標の達成、理解度、満足度、出席率について、平成 26 年度から令和元年度までの 5 年間の経年変化を【図 4】～【図 8】に示す。授業外学習時間以外、全て評価が上昇傾向にあることがわかる。

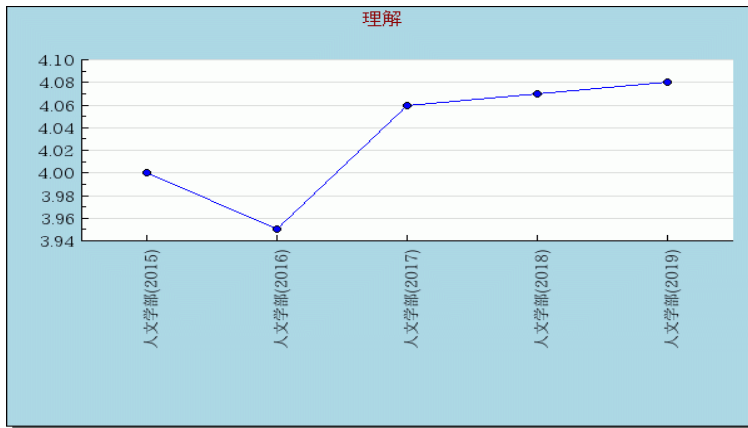
【図 4】 授業外学習時間 経年変化



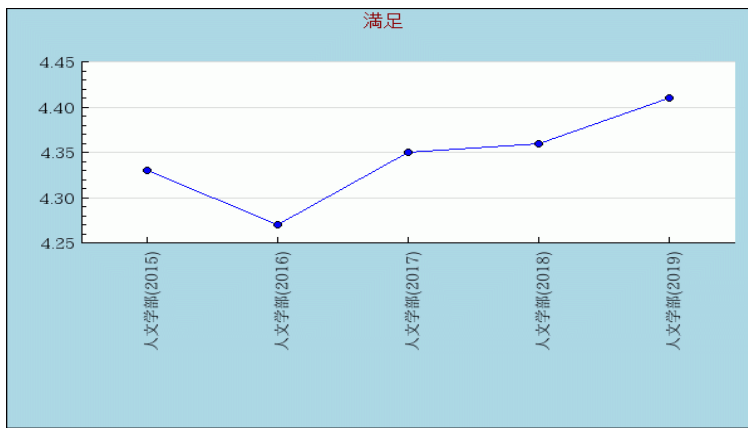
【図5】学習目標の達成 経年変化



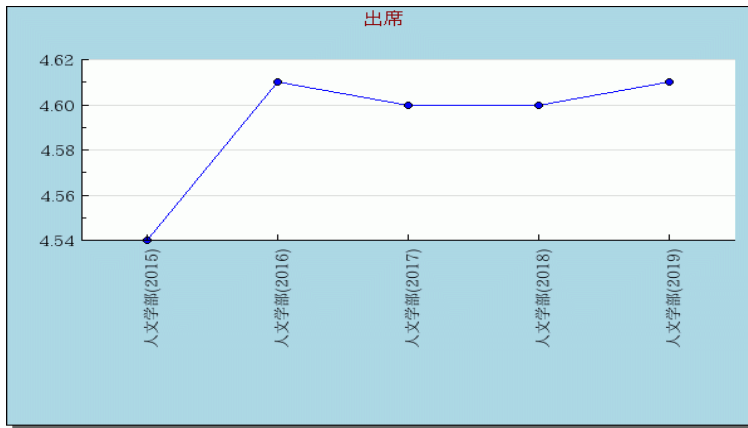
【図6】理解度 経年変化



【図7】満足度 経年変化



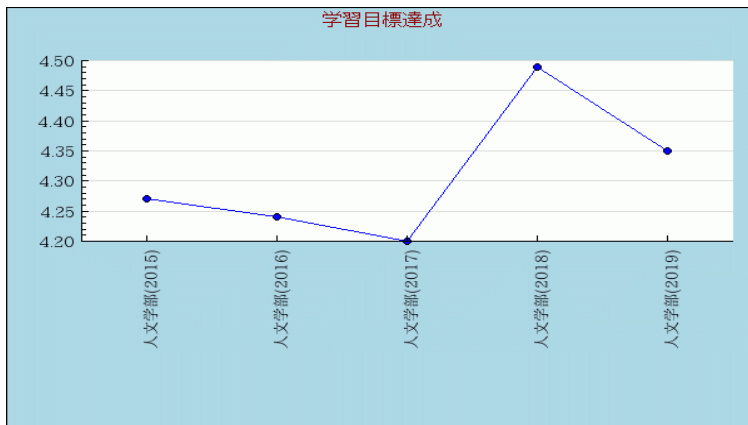
【図8】出席率 経年変化



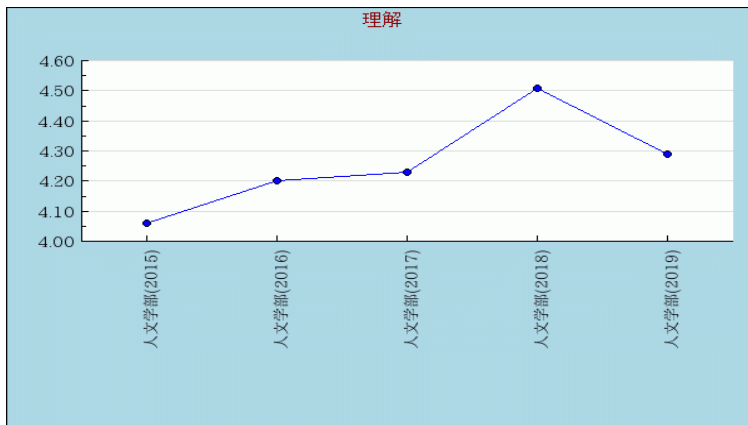
・教員授業評価

学習目標の達成・理解度・満足度について、平成26年度～令和元年度の5年間の経年変化を【図9】～【図11】に示す。学生授業評価に比べると教員授業評価は、3項目全てにおいて、評価は低下している。しかしながら、これは平成30年度に比べてであり、それ以前の3年間の評価を下回るものではない。過去5年間の評価としては、全体としては評価は上がっていると観察できる。

【図9】学習目標の達成 経年変化

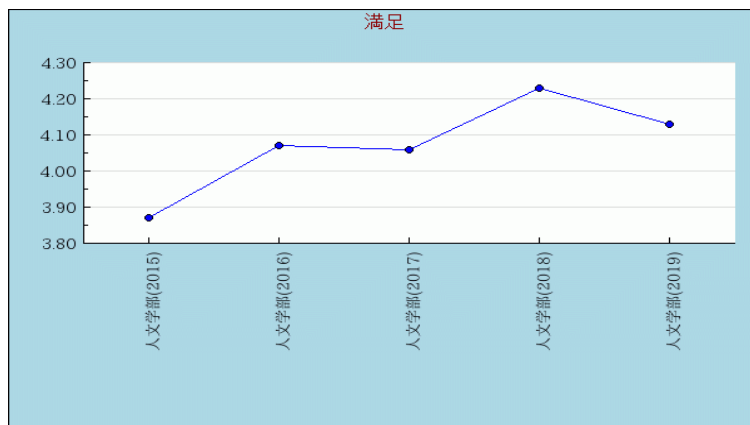


【図10】理解度 経年変化





【図 1 1】満足度 経年変化



### (3) 今後の課題

平成 30 年度と同様であるが、授業外学習時間の向上が今後の課題といえる。

また、人文学部では平成 28 年度から新コースカリキュラムが実施され、令和 1 年度に改組後初めての卒業生を送り出した。この 4 年の間にも今後に向けてのカリキュラム上の修正を学部内で議論してきたが、令和 2 年度は、これまで積み上げてきた議論を元に、より改善された教育・研究環境整備へ向けての修正を実施する時となる。同時に、その修正・変更の是非も検証して行かなくてはならない。その検証は、短期的成果だけでなく、長期的な成果も見据えての評価が必要となる。改組後こそが、このような評価法を上手く利用する時であるが、いかにして利用するべきかを理解するものが少ないことも問題である。

教員授業自己評価の入力率向上についても、その意義が理解されていないことが大きな問題である。このままの方式では飛躍的に改善されるとは考えにくい。一斉メールでの通知や教務委員による会議時の周知徹底だけでは、入力率の飛躍的な向上は難しい。教員一人一人にとってもっと有用な調査、つまり教育改善にすぐさま反映できる項目であれば、自ずと入力率も向上するのではないであろうか。

## 第 5 節 F D 実施経費報告書

令和元年度の F D 活動において経費は使わなかった。

## 第 6 節 来年度の課題

### (1) 教員授業自己評価の入力率向上に関する組織的な取り組み

第 4 節(3)を参照のこと。

### (2) 授業外学習時間の確保（単位制度の実質化）

経済的事情などから、アルバイトに多くの時間を割かざるをえない学生も存在する。授業外学習時間の確保にむけた取り組みと同時に、学生への支援を手厚くし、彼・彼女らが学業に集中しうる環境を整えなければならないであろう。こうした点を含め、現状における適切なバランスについて、議論を深める必要がある。

教員にとっても、授業外学習を課すには大いに工夫が必要である。ただ、課すだけでは、学生は自身のやっていることが正しい方向へ進んでいるのか否かが確認できず不安を募らせることとなる。そ

のためには、教員側には課したものに対する十分なフィードバックが必要となるが、近年の様々な付加的な業務（事務作業）に加え、配慮を必要とする学生の増加や学力不足での入学者に莫大な時間を要し、実質的な時間にかかなりの制限があるのも事実である。このような意味で、業務上簡素化できる部分とより充実させる部分の差別化をはかることも検討すべきと考える。

また、人文学という学問は、自らの中から湧き出る向学心に基づく研究・学びを本質とする。マニュアル化されたものをなぞるような学びに学生を慣れさせてしまうことは、その本質に反する。時間外学習の指示がなければ自らの学習ができないような学生を育てない工夫も大いに必要である。

#### **（４）その他**

くりかえし述べているように、人文学部では平成 28 年度より新コースカリキュラムが実施されている。平成 27 年度から 28 年度にかけてFD部会が基礎セミナーの改革に注力したのも、新コースカリキュラム一期生の入学にあたって、より良い初年次教育のあり方を模索したためであった。平成 29 年度から、新コースカリキュラムの一期生はリテラシーなどカリキュラムの目玉といえる授業をうけ、今年春卒業した。第 4 章（２）経年変化報告でも記したように、学生評価は、新コースカリキュラム前に比べ、表面的な評価数値自体は上がっている。しかしながら、現場の教員側からは深刻な問題点の指摘もあることも事実である。学生や教員の要望をくみとり、新カリキュラムの成果や課題点を共有することが今後も継続して必要である。

## 第5章 教育学部のFD活動

### 第1節 授業公開

教育学部としての授業公開は実施していない。

### 第2節 学部・研究科主催FD研修会

#### 第1回FD研修会

「やまぐち総合教育支援センターの調査研究事業—山口大学教育学部との連携を中心として—」

講師：佐藤和生（やまぐち総合支援センター研究指導主事）

日時：令和元年5月22日（水）15:00～15:30

参加者：約80名

やまぐち総合支援教育支援センターでとりくんでいる、教科等における見方・考え方を働かせる授業づくりのためのモジュール型研修モデルの開発について紹介された。その背景には学習指導要領改訂の方向性として、主体的・対話的で深い学び・「アクティブ・ラーニング」の視点からの学習過程の改善が求められていることがある。

山口大学教育学部との共同研究として、「深い学びの過程を通して科学的な概念の形成を図る理科指導法の研究」によって授業づくりのポイントを取り入れ、教員等のICT活用指導力向上のためのモジュール型研修プログラムの開発を進めた例が紹介された。

調査研究校での研修では、キャリアステージ、教科を超えて話し合い、求められる授業とは何かを考えているという。授業づくり支援サイトも作られており、平成30年度受講者数は1万6千人以上にのぼっているともされた。

昨年度、山口大学教育学部からは、研修講座の講師、長期研修教員の指導担当、調査研究デザインプロジェクト、研修モジュールプロジェクト委員、ちゃぶ台、協議会などを通して多数が連携に関与している。そうした連携をとおして、(1)山口大学の教員と何かを作り上げる面白さ、(2)国、県と現場をつなぐところの商品開発、(3)即戦力を育成するために、養成段階からの情報共有の大切さ、といったことが見えてきたという。

全国に先駆けて取り組んでいる成果として、山口大学教育学部教員採用率はトップクラスであることも最後に指摘された。

#### 第2回FD研修会

「情報セキュリティ管理対策とその実装について」

講師：王躍（メディア基盤センター）

日時：令和元年7月17日 15:00～15:30

参加者：77名

まず情報セキュリティ管理体制の構築についての基本的な説明があった。組織内での情報の取扱いについて、情報セキュリティの機密性、完全性、可用性を一定の水準で確保する仕組みをISMSということ、そのさい、どの業務に適用するか、だれに適用するか、適用範囲でありながら、一部を除外するばあい、その内容と除外すつ正当な理由を明示する必要があるとされた。

次に情報セキュリティ対策におけるPDCAサイクルの整備について説明された。リスク洗い出しの

ポイントとなる資産の一覧作成、リスクアセスメントの実施、ISMS の運用、適用宣言書の作成、パフォーマンス評価、リスク対応計画の策定、改善、という一連の流れがあるとのことだった。

そのうえで山口大学におけるインシデント発生時の緊急対応体制の整備状況について説明された。CSIRT 対応について、NII-SOCS からの通報例、通信異常、サイバー攻撃、標的型ダイバー攻撃など、通報の種類があるとされた。そのうえで、サイバー攻撃を受けたときの、保存—隔離—調査—聴取・状況確認という一連の流れについても説明があった。

情報セキュリティ対策のための予算や人材などの確保、情報共有活動への参加とその有効活用についても言及された。

### 第3回 FD 研修会

「教育学部・研究科に課せられた喫緊の課題

～教職成長を支える教師教育機関への転換とその方策について～

講師：和泉研二（教育学部副学部長）

日時：令和元年 7 月 17 日 15:00～15:30

参加者：77 名

はじめに教員研修に関する近年の動向について説明があった。24 年答申では「学び続ける教員」を支援する仕組みの構築、教育委員会・学校や大学間の連携の推進がいわれていた。27 年中教審答申においては、教職キャリアシステムの一体的な改革、学校現場や教職の実際を体験する機会の充実、学校インターンシップの導入、教育課程の質の保証、評価の推進などのことが提言されていた。29 年の有識者会議報告書では、教員養成機能の強化のため、協議会を通じた地域との連携、現職教員の教育・研修機能の強化がいわれ、また附属学校の存在意義の明確化と大学のガバナンスについても指摘されていた。要するに、教育の高度化・教員の資質能力の向上が必要であり、そのためにはどの段階でどのような研修が必要かを考え、研修を効率的・効果的に実施するのが大事だということである。県、市町、大学、任意団体等がバラバラに研修を計画しているのでは、教員の多忙化は解消されない。

すでに先行する大学はいくつかの取り組みが進んでいる。鳴門教育大学、福井大学、東京学芸大学などである。また教職支援機構地域センターも設置、岡山大学ではそれとの連携が進められている。

教育学部でも、初任者研究選択研修「理科授業づくりの会」を立ち上げている。多くの研修を通じて、より多くの知識・情報を手に入れることが可能とはなっているが、それらが必ずしも日々の実践のなかに生かし切れていない、あるいは研修で得た知識・経験を、学校現場での日々の試行錯誤のなかで自らのものとして消化する必要がある、という課題意識に基づき、立ち上げたものである。

教科の授業力を高めるためには、養成段階では不十分であり、研修で高めてゆく必要がある。附属の強み（授業実践、授業研究）も生かし、附属の理科部と協力して平成 24 年以降、教材、教具の提案、授業実践事例、理科授業構成の理論と方法、科学的思考を伸長させる授業構成などに取り組んできた。平成 29 年度からは、実質的に学部・附属・県支援センターとの連携講座となっている。初任研の校外研修に位置づけたことにより、参加者は確実に増加した。

これからも継続してゆくためには、まず運営費用の問題があるが、学部長裁量経費からの捻出で対応できる。また担当教員の負担感もあろうが、とくにあたらしく準備する必要はないものだし、人数制限も可能、実施報告は不要など、さほどの負担にはならないものである。

今後社会的使命に応えるとともに、制度化を進めるためには、さらに単位認定可能な研修を整理する必要がある。外的要因としては、答申等により、教職成長を支える教師支援教育機関への転換が求められており、とくに履修証明制度、ラーニングポイント制度の活用が急速に整備されてきていることがある。本来的要因として、理論と実践の融合を通して、資質能力の高い教員を要請する必要がある。

#### 第4回 FD 研修会

「学修ポートフォリオ

～学修者の振り返りと成長のために～」

講師：林透（大学教育センター准教授）

日時：10月16日（水）15:00～15:30

参加者：80名

学修ポートフォリオの一般的な意義や内容について、以下の説明があった。

まず、学修目標—学修過程—学習成果—自己評価・修学指導・学修支援の自律的な学びのサイクルのなかで、学修成果の振り返りが大事である。自らの経験を再生することで、経験をより深い学びにつながるができる。具体的には自らの学修過程や知識について考える、“思慮深い抽象化”が必要である。こういった意義が述べられた。

次に、振り返りの形態には、自己による振り返り、集団による振り返り、対話による振り返りがある。そのなかで自己による振り返りが起点であり終点というべき。ただし学生一人の力だけでは深い振り返りは難しい、と説明された。

そのうえで、振り返りのためには自分の経験、記憶がもちろん必要だが、それに加えて記録や目標、評価基準などの基準があること、あるいは話せる人あるいは同じ経験の人、先生や先輩がいることが有益となる、という。

そうした観点からすると E ポートフォリオは、4年間ずっと捨てない、なくさない、LMS と連動させて使うことができる、教員が検索ですぐに確認できる、ショーケースの役割も果たすなどのメリットがあるという。すなわち、修学支援システム（eYUSDL）は、ポートフォリオの記入項目を柔軟に設定可能、在学期間中のポートフォリオ記録が閲覧可能、学生が作成したポートフォリオに指導教員がコメントを入力可能、学科単位での設定が可能などのメリットがあるとされた。

以上の説明のうえで、修学支援システム（学生画面）（教員画面）の具体的な解説がなされた。

#### 第5回 FD 研修会

「大学生・大学院生の抱えやすい課題と学生相談の現状」

講師：春日由美（学生相談室長）

日時：11月20日（水）15:00～15:30

参加者：約70名

まず「学生相談とは？」として、学生相談の歴史が説明された。学生相談所の設置は東京大学とともに山口大学が全国初だった。その後、「廣中レポート」によって教員中心の大学から学生中心の大学へと視点の転換が提言されたこともあり、多くの大学で設置されるようになったという。今後の課題として、学生相談機能を大学教育の一環として位置づけること、学生相談に応じることはすべての教員の基本的責務であるとの認識をもつこと、学内外諸機関との連携をとること、不登校への対応などの課題もあわせて説明された。

つづいて学生相談の目的・使命について、学生個人個人に焦点をあて、学内外への適応や心理的成長をうながすものであり、心理的問題の取り組みにおいて困難に陥っている学生へのカウンセリング、予防活動や予防教育、教職員に対するコンサルテーションなどの心理学的炎上を行うものだとされた。

次に学生相談で扱う具体的内容が紹介され、相談の方法には、個別の心理的援助、グループ活動、授業、居場所の確保などがあるとされた。それらをふまえてうえで、「学年ごとの抱えやすい課題や危機」について詳細な説明があった。

さらに本学の学生支援の体制と学生の利用状況について、具体的な状況が紹介された。新規来談者は4月が多く、6月までは不調を抱える学生が多いと考えた方がよいということ、また3キャンパス

ともに心身問題が多いことなどだった。さらに相談内容の傾向について、対人関係、修学、進路、就職、心身問題などについて、具体的な説明があった。

最後に、「学生相談所から教職員へのお願い」が何点かなされた。

#### 第6回 FD 研修会

「幼少中一貫教育実践教育研究発表会研究概要」

講師：厚東佳奈枝（附属幼稚園）・重枝孝明（附属山口小学校）

日時：12月18日（水）15:00～15:30

参加者：約80名

山口大学教育学部山口地区附属学校園「やまぐち学園」にて、「よりより未来を共に創り出す人間」をテーマとして、公開保育・授業参観・検討会、教職員による異校種体験、合同行事の開催、教科・領域における対象・自己・他者と向き合う子供の姿案の作成、教科、領域ごとのカリキュラム案の作成、幼少中一貫教育実践研究発表会の開催、などに昨年度取り組んできた。

その成果として、各教科・領域におけるカリキュラム案の作成、一貫教育を進めていく上でのシステムづくり、各校種の文化や研究に対する考え方の共通点・相違点の理解などをあげることができる。また課題としては、教師の援助・支援・手立ての具体、子供を見取るための共通の基準、指標づくりがある。

校種ごとの取り組み内容は以下の通り。附属山口中学校では、今年度の研究主題を「対象・自己・他者と向き合う子供の姿を視点として保育・授業づくり」とし、各学年区分における向き合う子供の姿を設定した。附属幼稚園では対象と向き合う姿をふまえ、対象と向き合うための環境構成、保育者の援助を行った。附属小学校では、対象と々々かわる中で見方・考え方を働かせ、問いを追求させた。そのため活動と振り返りを交互に行い、それを繰り返す単元、題材構成を仕組んだ。また毎時間、帯活動として同じ活動を行う場を設定した。それぞれについての具体的な実践例が紹介された。

#### 第7回 FD 研修会

「小中一貫教育への歩みを通して、深い学びの在り方を探る（3年次）

～問いが紡ぐ学びの姿～

講師：中村哲哉（附属光中学校）・宮崎洸佑（附属光小学校）

日時：1月15日（水）15:00～15:30

参加者：約80名

研究の1年次～3年次を以下のように振り返った。

まず研究の1年次では、課題解決の過程において「見方・考え方」が顕在化した、各教科・特別の教科道徳・領域の本質に沿った授業をすることができた。しかし、子どもの思考に沿った授業展開を大切にしていたものの、子どもが本気で解決したいという思いをもつに至らないこともあった。

次に2年次では、子どもがより主体的に学習に取り組める授業づくりを目指して、副主題を「見方・考え方が働く問いを子どもがつかむためには」とし、研究を進めることにした。そして子どもの思いと問いの繋がりを意識した授業づくりを進めることで、各教科等に応じた教師の手立てや、教科を越えた汎用的な手立てを整理することができた。

これらの成果を踏まえ、3年次は、副主題を「問いが紡ぐ学びの姿」とし、研究を進めることとした。問いを持続させたり、問いを連鎖させたりと、単元の構成に応じた教師の手立てが重要であること、また、問いをつかませる手立てに加え、持続や連鎖を促す手立てについても探っていくことの重要さがわかった。

このように単元全体を見据えた授業づくりを行う際には、各発達段階や、9年間を通して育てたい力との関連が不可欠である。これまでに作成したカリキュラムを、授業実践を基に改善しながら、カリキュラムの再編成を行っていく。そうすることで、より授業づくりに密接したカリキュラムを実現し、日々の授業づくりに生かせるものへと高めていきたい。このように概括した。

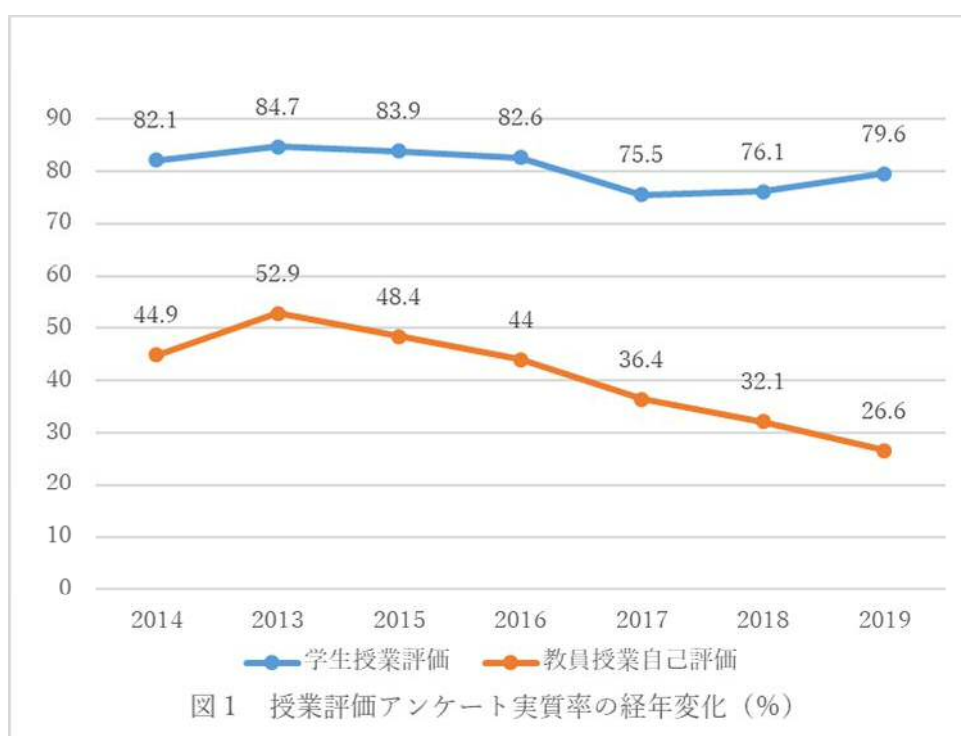
さらに、これまでの実践を基に、単元における問いのつながりや子どもが自律的に学んでいくことを見据えたとき、留意する必要があることが見えてきた。それらの視点を、単元の特性や発達段階に応じて単元づくりの中に取り入れていくことで、単元全体を通して学びを深めていくことができる考える。また、これらの視点は、平成 32 年度より施行される学習指導要領において指摘されている、自己調整学習にもつながるものであると考える。子どもたちが主体的に学習に取り組むことのできる単元づくりを実現するためには、子どもたちが学びを自身で調整しながら進めていく学習が欠かせないということについても再認識している。このように述べた。

### 第3節 教育改善に関する活動

教育学部の改組に伴い、カリキュラムフローチャート等を作成した。そのさい、コース別のカリキュラムマップに共通教育を加え、一貫の学士課程としての、ディプロマポリシーと各授業科目の到達目標との関係が一覧できるよう、可視化を行った。

### 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

令和2年4月時点で確認できたデータによる学生授業評価、教員授業評価の実施率の経年変化を図1に示す。実施率は、学生授業評価はやや上向いたものの、教員授業評価は昨年度に引き続き減少傾向にある。教員自己評価については、昨年同様、全教員が出席する拡大教授会において入力に依頼がなされたが、それ以外の特別な呼びかけ等は今年度も行わなかった。教員授業自己評価の意義を再度確認し、一人一人が取り組まなければならないという意識を高める工夫を行い、また呼びかけを強化するなどを行い、実施率を回復することが課題である。



## 第5節 FD実施経費報告書

令和元年度教育学部 FD 研修会において経費は使わなかった。

## 第6節 来年度の課題

令和元年度は、昨年度に引き継水手公開授業を実施しなかったが、教育学研究科専門職学位過程（教職大学院）では、原則すべての授業を公開している。また平成31年度卒業生に対し教育学部では授業、教育実習、卒業論文、ちゃぶ台プログラム等に対する調査を行い、その分析を行った。これらの点をふまえて、学部における公開授業の在り方、方向性について検討することが課題となる。

教員授業評価の実施率向上についての組織的取り組みは、ここ数年非常に大きな課題である。早急に入力を促す方法を検討するべきである。

学生授業評価ここ数年減少傾向にあったものが、昨年度はやや上向いた。とはいえ、これについても実施を促す方法を検討すべきである。

授業外学習時間の確保については、上に述べた授業、教育実習、卒業論文、ちゃぶ台プログラム等に関する調査を反映したかたちで対応が必要である。調査によれば、山口大学教育学部のちゃぶ台プログラム等で小中学校においてチューターを行っている学生が多い。このような点をふまえて授業外学習時間の確保についてあらためて考えることが必要である。



## 第6章 経済学部のFD活動

### 第1節 授業公開

授業公開についてはそのあり方が議論されることとなり、昨年度に続き、今年度も実施しなかった。従来は、公開希望者を選出、公開当日都合のいい委員が授業を見学し、参加教員が感想を述べるというだけのものとなって実施の形骸化が進んでいた。公開希望者が一巡し、また、参加者の数も減少傾向にあったため、見直しをすることとなっていたが、よりより具体的な改善案が出で来なかった。ただし、一般市民を対象とする公開授業の数を増やすなど必要な努力は続ける。

### 第2節 学部・研究科主催FD研修会

#### 「科研獲得文化構築のためのFD研修」

2018年度から開始した科研獲得文化構築のためのFD研修会を2019年度も継続して行った。

#### 第1回 科研獲得戦略WG

4月17日（水）12時より、経済学部学生対応室にて。

内容：昨年度の募集および採択状況の確認、今後のスケジュール確認などを行った。

#### 科研採択者の報告

4月17日（水）13時30分より、経済学部第1会議室にて

内容：教授会開催にあたり、平成31年度の科研に新規採択された8名の方を全教員の前で学部長が発表し、全教員で祝福の拍手を行った。

#### アンケート調査の実施

4月17日（水）13時30分、経済学部第1会議室にて

内容：教授会の場を借りて、昨年度の科研申請の状況やその結果、ピアレビューの実施、科研獲得文化構築のためのFD研修に対する感想などについてアンケート調査を実施した。

#### 第2回 科研獲得戦略WG

5月22日（水）17時より、経済学部学生対応室にて

内容：科研申請書作成のためのワンポイントアドバイス集作成のためにアンケート調査を行うことについて検討を行う。

#### 科研申請書作成ワンポイントアドバイス集のためのアンケート

6月19日（水）13時30分より、経済学部第1会議室にて

内容：教授会の場を利用し、科研申請書作成のためのワンポイントアドバイス集を作成するために、

近年の科研採択者を対象に申請書作成の際の留意点や気を付けるべき点などについてアンケートを行う。提出期限は7月16日。

## アンケート調査結果の報告

6月  
日

19



質問8 H30年度科研FDの評価 (N=29)

とても良かった／参考になった	9人	} 意見
良かった／参考になった	11人	
どちらとも言えない	6人	
良くなかった／参考にならなかった	0人	
非常に良くなかった／参考にならなかった	0人	
無回答	3人	

(水) 13時30分、経済学部第1会議室にて  
内容：教授会において、4月17日に行った平成30年度の科研申請に関するアンケート調査結果の報告を行う。

## 第3回 科研獲得戦略WG

6月19日(水) 19時より、経済学部学生対応室にて。  
内容：科研申請書作成ワンポイントアドバイス集のためのアンケート結果集計や今後のスケジュールについて確認を行う。

## 科研申請書作成講習

7月17日(水) 13時30分より、経済学部第1会議室にて  
内容：教授会開催にあたり、昨年度に科研に採択された経済学部の角田由佳教授と諏訪竜夫準教授から、科研申請書作成において留意した点や工夫した内容などについて講演をしていただいた。

## 第4回 科研獲得戦略WG

7月29日(火) 16時15分より、経済学部学生対応室にて。  
内容：科研申請書作成のためのワンポイントアドバイス集の様式などについて確認などを行う。

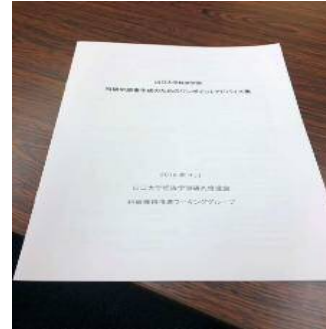
## 第5回 科研獲得戦略WG

8月8日(木) 13時30分より、経済学部学生対応室にて。  
内容：科研申請書作成のためのワンポイントアドバイス集の完成版サンプルについて最終確認などを行う。

## 科研申請奨励とアドバイス集の活用

9月18日（水）13時30分より、経済学部第1会議室

内容：教授会において今年度の科研申請を行うように最終的な呼びかけを行う。また、完成した科研申請書作成のためのワンポイントアドバイス集を配布し、申請書作成の際に役立てるよう依頼。

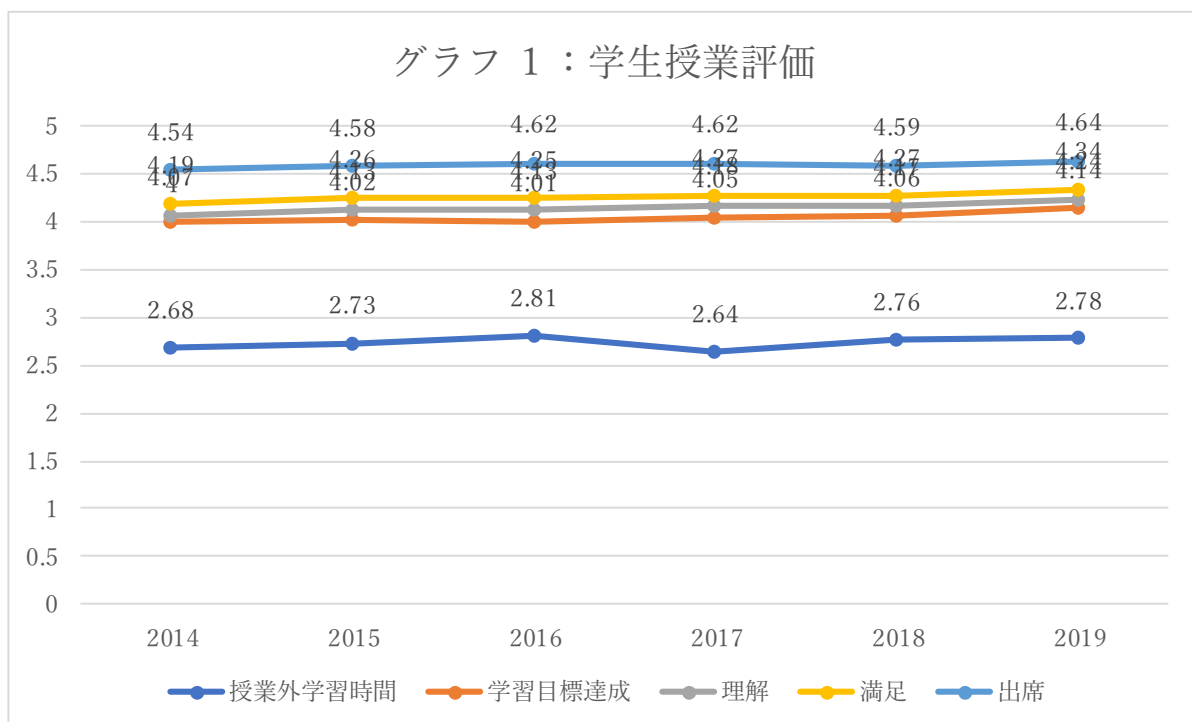


## 第3節 教育改善に関する活動

特記事項なし

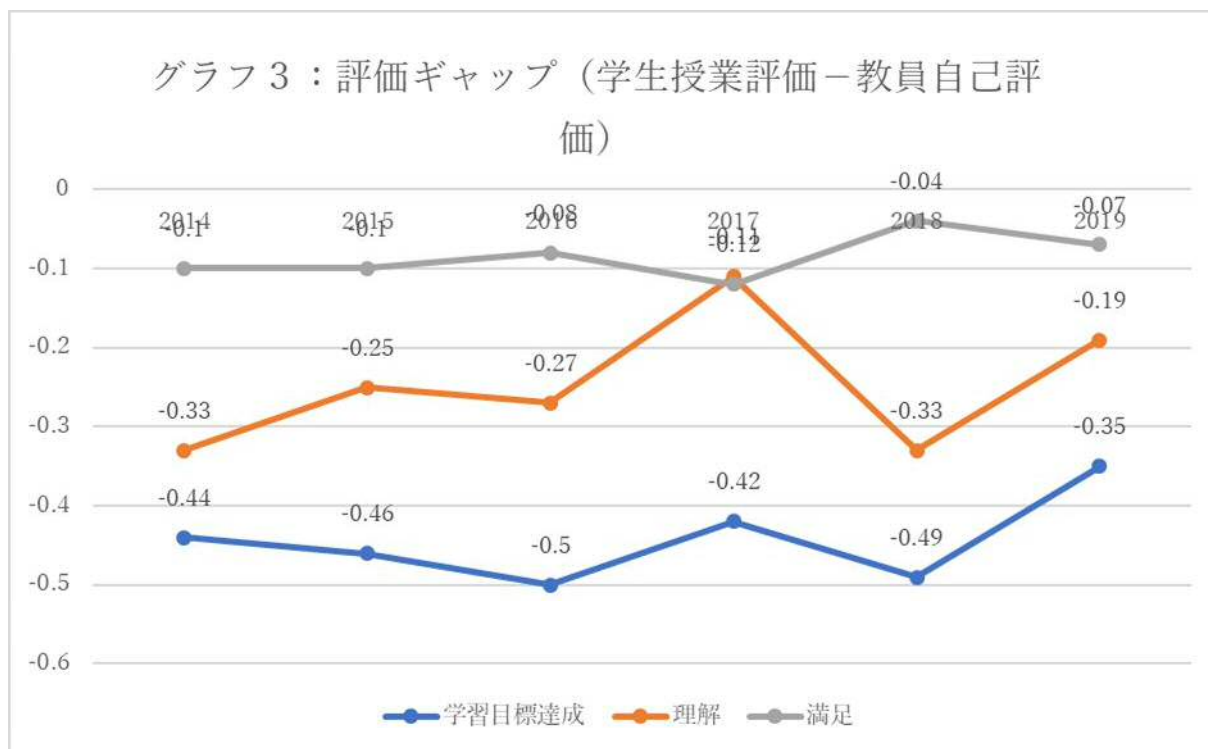
## 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

1. 学生による授業評価は、目標達成、理解、満足、出席において、ほとんど4以上の評価であり、質の高い授業を受けているという評価が継続して確認できているといえる（グラフ1参照）。



2. ただし、授業外学習時間の確保に関しては、2点台と他の学部と比較して満足できない状況にあるが、一方でその分だけ学生としてのプライベート時間を部活動やアルバイト、資格取得のための自己学習などに向けられる環境だと見ることもできる（グラフ1参照）。

3. 教員による自己評価においても学習目標達成、理解、満足ともにすべて4以上の評価を継続しており、学生と教員がともに質の高い授業評価の維持を確保できているといえる（グラフ2参照）。



3. 評価ギャップ（学生授業評価－教員自己評価）に関しては、学習目標、理解、満足のどの項目においても教員による自己評価の方が高くなっている。ただし、2018年度に評価ギャップが拡大した理解と満足は、2019年度はともにギャップが縮小している点は評価できる点である。

## 第5節 FD実施経費報告書

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果（簡潔に）
経済学部	科研申請書作成講習	講師への謝礼(図書券)	20	講師役2名に対して謝礼として図書券
		計	20	

## 第6節 来年度の課題

- ・ 教員授業自己評価の入力率向上を目指す
- ・ プライベート時間とのバランスを考慮しながら授業外時間学習の確保について検討する
- ・ 学生と教員の評価ギャップを出来るだけない状態、もしくはプラスの状態にもっていく
- ・ 学生および教員の語学研修について新しいシステムを作る
- ・ 修学支援システムや講義支援システムなどを有効活用して教育の質をあげていく
- ・ 学生の個別支援を充実させていく

# 第7章 理学部のFD活動

## 第1節 授業公開

### 1. 数理科学科のピア・レビュー

#### (1) 実施科目「数理科学基礎セミナー」

##### 1) 概要

①日時：令和元年6月18日（火）3・4時限

②対象学生：数理科学科2年生（約55名）

③授業概要：本授業では、90分間の試験と、試験問題に関するプレゼンテーションを交互に繰り返すという形で授業を行っている。プレゼンテーションでは学生はセミナー形式で前回の授業で受けたテストの内容についてプレゼンテーションを行い、それに対し担当教員から更なる質問を受け、それに答えることによって理解を深めていくという形式で授業が進められる。各グループの担当教員は学生のプレゼンテーションに対し、理解の浅い点や曖昧な点を指摘し、学生の数学に対する理解を深めると共に、プレゼンテーションの方法についても指導を行う。

④授業担当教員： 菊政 勲、大関 一秀、南出 真、塚本 真由、倉富 要輔

レビュアー：増本 誠、宮澤 康行、中内 伸光、幡谷 泰史、近藤 慶

##### 2) レビュー結果

レビューシートの評価欄には、「知識・理解」、「思考・判断」、「関心・意欲」、「技能・表現」、「態度」の観点から適切な指導が行われているかを5段階で評価されており、いずれのグループも殆どの項目で「4」又は「5」の評価があり、効果的な授業が行われていることが確かめられた。

レビューシートの自由記述欄には以下のような記述があった。

(優れた点)

- ・発表内容についての質疑応答では学生のレベルに見合った説明がなされていた。
- ・板書の仕方についても記載事項の順序や内容について適切かどうか確認・添削し、また補足事項を書き入れる等、丁寧な指導がなされていた。
- ・発表者の板書中、教室内を巡回し、質問事項を受け付ける等、時間を有効に使う工夫がなされていた。
- ・熱心に指導されていた。特に学生が自ら進んで発表をしない問題に対し、基礎事項を優しく解説し、発表を行うよう鼓舞し、発表をしやすい環境（雰囲気）を作ろうとしていたところが良かった。
- ・別解の言及もあり、多角的な考え方と視点を与えているところに感心した。
- ・学生からの発言があり、アクティブラーニングが効果的に展開されていた。
- ・授業が始まる前に、学生と教員の間雑談がかわされ、フレンドリーな関係のもとで、授業が進められているので、学生も発表しやすく、また、質問しやすい環境が整えられていた。
- ・問題の番号順でなく、学生ができていない問題から優先して行ったので、「苦手部分の克服という『重点学習』と「セミナーの『効率化』」が意図されていた。
- ・ポイントがわかりやすいように、学生の解答の不完全な点を適切な言葉で指摘していた。
- ・数学の内容の指導のみならず、「板書をもう少し大きく書くように」などのプレゼンテーションに関する細やかな助言もなされていた。
- ・発表する学生が板書を行っている間も、座っている学生の間を見回って、マン・ツー・マンの指導を行っていた。
- ・発表者に対する細かい点の指示については、教員が労を厭わず、その都度、黒板の前まで行って対

応していた。

- ・学生が解けなかった問題に対しては、教員がヒントを板書し、学生の解答を誘導することによって、学生が積極的に授業に参加できるような工夫がなされていた。
- ・解答ができる学生にも、細かな注意点を与え、学生の能力に応じた対応がなされていた。
- ・ほめるところはほめていたので、学生の勉強心に良い影響を与えていると思われる。
- ・今回は、他の授業の試験が前後にあり、欠席者が少し見受けられる状況にありながら、出席した学生が丁寧な指導を受けられるように、工夫がなされていた。
- ・(入学直後の1年生ではなく) 2年生の個別ゼミの授業であるので、教員は自宅学習・自発的な取り組みを要求していた。学生は結果が不十分でもこの要求に答えていた。この取り組みを継続できれば、学生は力をつけることができると期待でき、厳しさを備えた良いゼミ授業だと感じた。
- ・基本的・抽象的な概念について、学生の発表内容が回りくどく本質についていないときに、教員はあいまいな考え方を解きほぐし、どこがたいせつであるか少ないポイントを明示し、考え方を伝えていた。学生を理解へ導くために重要な事柄だとも思う。
- ・各問いが終わるごとに必ず質問の有無を確認、学生もないと返答していた。疑問点を残さないこと・教員と学生のコミュニケーションが取れていることをうかがい知ることができた。

#### 【改善点】

- ・無論、自主性、やる気、公正を考えて、発表を促すスタイル(教育方針)であることは十分理解しているが、内気な学生が多いクラスのようなので、発表は強制的に学籍番号順に当てていっても良いと思った。
- ・セミナーでは大抵、教員と発表者とのやり取りに多くの時間をかけることになるが、時間的に余裕があるときでよいので、多くの学生が質問したり、質疑応答に加わるよう発表者以外の学生に積極的に声かけをしてもらえるとよいかと思う。
- ・この日は欠席者が通常に比べてとても多かった。学生にとって問題の程度がやや高かったためかも知れない。

## 2. 物理・情報科学科のピア・レビュー

### (1) 実施科目「物理学実験A・物理学実験B」(後期)

#### 1) 概要

- ①日時：令和元年12月19日(木) 12:50-16:00  
場所：共通教育物理学実験室 (共通教育等北側3階西)
- ②対象学生：物理学実験A(2単位：理学部物理・情報科学科1年生)  
物理学実験B(1単位：医学部医学科1年生)
- ③授業概要：共通教育の物理学実験AとBは理系学部が開講している理系基礎科目であるが、基本的にすべての開講クラスで、同じ実験装置を用い、同じ教科書を用いて指導をしている。しかしながら、各学部・学科で定めているカリキュラム・ポリシー(CP)における物理学実験A/Bの位置づけは学部・学科ごとに異なるため、具体的な指導内容や指導方法は、対象学生の所属する学部・学科のCPに合わせている。  
今回対象の理学部物理情報科学科のCPでは物理学実験Aは「各自が高等学校卒業までに得た知識・技能をもとに、社会に出た後に最低限必要となる汎用的技能及び理系の基礎知識を身に付ける。(関連部分のみ抽出)」となっている。一方、医学部医学科の場合は「共通教育科目」及び「専門基礎科目」により学士としての教養と専門基礎知識を身に付けます。」となっており、物理学実験Bは「教養あるいは医学の基礎知識」を身に付けるためのものである。  
このようなCPの違いを意識し、今年度から同じテーマ・内容の実験を同じ時間、同じ実験室で

行わせている上記2つの物理学実験の授業で、何に重きをおくかを変えて指導をしている。

④担当教員：物理学実験 A・・・新沼 浩太郎 准教授、堀川 裕加 講師、元木 業人 助教  
物理学実験 B・・・笠野 裕修 准教授、野崎 浩二 教授、岸本 祐子（非常勤講師）

レビュアー：白石清

## 2) レビュー結果

レビュアーからのコメント：

- ・実験テーマ予定表は入り口前に貼ってあり、同様のものを用いて出欠のチェックを行っている。このように可能な限りシステムティックにすることは効率化が求められる現代においては重要である。
- ・実験のテーマは1回で完結するもので、何日もかかるものではない設定である。これも現代的だがカリキュラム進行的にはやりやすいのかもしれない。
- ・再履修者は、すでに終えた実験については免除されているらしい。しかし欠席も多いと聞くので、対応を考慮すべきだが、これはこの授業に限ったことではない。
- ・実験開始から1時間ぐらいは、スタッフはレポートの採点整理にあたる。この間はほぼTAのみが実験指導に当たる。TAはテーマごとに分担されている。分光計の実験などでは、TAが度分秒の基礎から教える。TAの負担が大きい、最初に基礎的講義を全体に行う時間も限られていて、改善は当面難しそうである。
- ・返却レポートには「かがみ」として問題点チェックシートをつける。多くのレポートで同じような問題点が生じるため、これによって効率化されている。理学部学生対象では、ほぼデータ取得中心の実験と、考察主眼の実験があり、それにあわせてシートも2種類ある。医学部学生対象では、専門性につながることは少ないとの認識で、評価基準が異なるシートである。（ちなみに工学部は予習資料とレポート記入用紙を配布（棚に入っている）し簡素化されていて、時短がかなり達成されていると聞く。）また、場合により時間中に前回のレポートを返却、コメントをする。以上、スタッフの時間中の仕事は多様（赤ペン・ホチキスも）で、この人数では負担が大きいと感じた。
- ・実験グループのはやいところは、15時ころからぼちぼち終了していく。実験終了のグループは自らチェック用紙に記入して退出することで、余計な手間を省いている。15:30を過ぎると、教員のところに並び出す（以前は行列ができたが改善されたそうである）。これもテーマごとに教員がほぼ休み無く対応する。
- ・総じてA・Bを同時に行うことで効率よく指導にあつたようだが、CPの違いに加えて、例えば両学部生の計算力の差などにより、一律の指導ができないことが多少のストレスの元となっていそうである。

## (2) 実施科目「バイオインフォマティクス」(後期)

### 1) 概要

日時： 令和元年 10月16日（水）10:20-11:50

場所：理学部 11番教室

対象学生： 物理・情報科学科情報コース 3年生

授業担当者： Adrien Faure

レビュー方法： 授業に参加し、終了後、問題点や改善点等を担当者に口頭または文章で指摘する。

授業概要： 基礎なバイオインフォマティクスアルゴリズムを応用したペアワイズや多重整列の動的計画法および系統樹 (phylogenetic tree) の構築に関する内容である。プレゼン資料を受講生に共有し、プロジェクトに表示しながら講義を行なっている。講義だけするのではなく、途中で練習問題を解かせる時間を与え、その後解説も行った。

レビュアー： 内野、西井、末竹、川村、浦上、韓、野崎

### 2) レビュー結果



レビュアーから以下のコメントを頂いた。

- ・話し方がゆっくりで聞き取りやすかった
- ・講義中に演習があった
- ・スライドに十分な情報が書かれていた
- ・英語の講義を受講できることは学生にとって貴重だと思います。」
- ・Sharing your slide is good.
- ・Self-test is good.
- ・Speaking speed is perfect.

講義の内容について[contents] :

- ・Dynamic programming is adequate.
- ・By showing the algorithm of DP, some students can understand the DP.

### 3) 改善点

- ・ほかの授業とのつながりを強調するとよりよいと思います。  
例えば、今回の内容であれば、グラフ理論(Graph Theory)や情報ネットワーク(Information Network)で紹介されているダイクストラ法(Dijkstra's algorithm)とのつながりを強調すると、学生の理解が早く進んだ可能性があります。
- ・計算手順は細かく解説されていましたが、その意味の説明があまりなかったように思います。
- ・A few students are late for the class. Please check their attendance.
- ・It is better to use bigger fonts and color letters in the slide.
- ・A few students take their notes of the lecture.
- ・Many students did not work on the self-test. I think those students cannot understand English lecture. So, I recommend a group work.  
Those who cannot understand the lecture may be helped by other students.。

## 3. 生物・化学科のピア・レビュー

### 3. 1. 生物学コースのピア・レビュー

#### (1) 実施科目「植物分子生理学 II」

##### 1) 概要

①日時：令和元年7月10日(水) 5・6時限 理学部12番教室

②対象学生：生物・化学科、生物学コース3年生(44名)

③授業の概要：植物分子生理学IIでは初回の講義で、シラバスに従って15回の講義内容や授業方針(パワーポイントを用いた講義、講義資料の配付、板書ノートの準備、毎回行うレスポンスシートの記入など)について説明をし、授業の到達目標を伝えている。授業の項目としては、植物の生存戦略に必須な環境応答に的を絞り、光受容体であるフィトクロムとフォトトロピンによる光応答、植物ホルモンであるアブシジン酸の合成や生理応答について解説している。

7月10日の授業では、アブシジン酸の内生量の制御機構について解説した。

④授業担当教員：武宮淳史

レビュアー：岩楯好昭、原田由美子(生物・化学科 生物科学分野)

⑤レビューの方法：90分の演習全体を聞いていただき、終了後、指導方法について改善点などを文書で指摘して頂く

##### 2) レビュー結果

授業に対して、レビュアーより以下の指摘を頂いた。

レビュアー1

- ・パワーポイント表示を中心に植物ホルモンの解説する授業が行われた。
- ・パワーポイントの内容を口頭で解説するだけでなく、パワーポイント内容の区切りごとに大事なポイントをあらためて黒板に板書されていた。これにより、学生が重要点を認識することができると同時に、授業にメリハリが付いて大変有効であった。
- ・パワーポイントをカラー印刷したプリントをあらかじめ配布されていたが、A3の用紙に9スライド印刷していたため、1つ1つのスライドの大きさが大きく、容易に判読することができる。そのため、メモを取りやすいなど、学生は配布プリントが有効に使えるだろう。
- ・度々学生を指名して質問に回答させていた。これは授業が一方通行にならず双方向になる点、複数の学生の回答を聞くことで学生の理解度をある程度認識できて大変有効だと思われる。
- ・授業の後半でその授業の内容に関する問題を回答するレスポンスシートを配られていた。これは、学生がその日の内容を自分なりに噛み砕いて理解するのに大いに役立つだろう。また、同時に感想も書かせることで、次回以降の授業の改善にもつながっていた。

レビュアー2

- ・講義の構成が「前回の講義の復習」と「本日の講義内容の概要の説明」から始まり、1週間前の講義内容のおさらいと当日の講義内容への導入がスムーズに行われ、学生が講義内容をきちんと理解するための工夫がなされていた。
- ・わかりやすく色分けされた図と写真を使ったパワーポイントを使用し、カラーコピーの講義プリントも配布され、教材の工夫がされていた。
- ・植物ホルモンの合成と制御メカニズムについて、パワーポイントを使用した的確で論理的な解説が行われ、重要な内容については、直後に簡潔にポイントをまとめた板書を書くことで学生がノートに記録をとっていた。また、具体的な実験データを紹介してメカニズムの根拠を示し、最新の研究報告について触れるなど、学生の理解を助け興味を持たせる工夫がされていた。
- ・講義の途中で学生の反応を見ながら、学生を指名して質問の回答をさせ、学生からの前回の講義内容の質問に触れるなどのフィードバックが効果的に行われていた。一方的な講義でなく、双方向でのコミュニケーションをとりながら講義が進められ、学生が内容をより理解できるよう工夫がされていた。
- ・講義の最後の時間で「レスポンスシート」が配布され、学生が互いに議論しながら授業の重要ポイントを考えさせる課題が与えられ、授業のまとめが効果的になされていた。
- ・質問への回答をするのに時間がかかる学生に対しては、回答のヒントを与えて学生の発言を手助けする工夫がされていた。もし改善点をあげるとすれば、学生の理解度にはどうしても個人差があるため、講義内容を計画通りに遂行する時間が予測しにくいことが考えられた。

レビュアーから頂いたコメントを参考に、来年度以降の授業の改善に努めたい。

アクティブラーニングの一環として授業内で課題を課し、各自で解答を考えた後に学生間で話し合う時間を取っている。これにより内容理解が進む側面はあるが、その時間を確保することにより、授業内容を説明する時間が制約を受けている。授業の導入部分を簡略化するなどして、説明の時間の確保に努めたい。同様に授業内で学生に質問し回答して貰う形式も取っているが、スムーズに返答できない学生への対応を工夫し、説明時間の捻出に努めたい。

## 3. 2. 化学コースのピア・レビュー

### (1) 実施科目「量子化学及び演習Ⅱ」

#### 1) 概要

- ①日時・場所：令和元年7月29日（月）9・10時限、理学部2号館 第1計算機実習室
- ②対象学生：生物・化学科 化学コース3年生（11名）
- ③授業概要：「量子化学及び演習Ⅰ」を基礎とし、分子に対するシュレーディンガーの波動方程式の適用例を紹介する。水素分子イオンに対して分子軌道法を適用し、エネルギーと波動関数を求める過程を示す。原子価結合法と分子軌道法の二つの方法で水素分子の解を求める。2原子分子や多原子分子の分子軌道の取扱いを紹介する。多原子分子について、結合の極性、電子密度、結合次数等を説明する。パイ電子系の分子に対してヒュッケル近似を適用し、さらに高度な近似計算法である半経験的分子軌道法と非経験的分子軌道法についても触れる。分子軌道計算プログラム「Gaussian 16W」を用いて実際に分子軌道やエネルギーを求める方法を説明する。
- 授業内容：群論による共役系の光吸収遷移に関する予測と帰属
- ④授業担当教員 谷 誠治  
レビュアー 安達健太（生物・化学科 生物学分野）
- ⑤レビューの方法：実施後のアンケート調査により、授業内容、授業の進め方、その他改善を要する点についての意見を用紙またはメールにて回答

## 2) レビュー結果

レビュアーから以下のような意見が寄せられた。

1. 授業内容に対する意見
  - ・講義資料の作成に時間がかけており、資料が充実している。
  - ・講義中に資料に書き込むための空欄もあり、講義内容の理解が深まる工夫がなされている。
2. 改善を要する点
  - ・資料に書き込むための空欄を活用されているが、理解できないで講義についていけない学生が間違っただけを書き覚えてしまうこともあるので正解を示すケアが必要と思う。
3. その他、気付いた点やよかった点など
  - ・学生のパソコンに対するスキルがまちまちであるため、演習の指示がスピーディーに100%伝わっているかどうか不明である。
  - ・計算の概念をイメージできる学生はなんとか計算することは可能だと思う。概念をつかんでいない学生に対するTA等によるサポートが必要と思われる。

## (2) 実施科目「分析化学実験」

### 1) 概要

- ①日時・場所：令和2年1月14日（火）5－8時限、理学部本館4階 化学第1実験室（427室）
- ②対象学生：生物・化学科 化学コース2年生（必修科目：39名）
- ③授業概要：「分析化学実験」は、生物・化学科 化学コース2年生の専門・選択必修科目である。化学を学んでいく上で必要となる分析化学に関して基礎的な実験操作を身につける。そのため、原則として1人で実験を行い、操作や器具の取り扱いについての一定の技術を身につけるべく反復して練習する。
- 当日の授業内容：2から3人のグループに分かれ、以下の実験を行う。
- ・エチルバイオレット吸光光度法による陰イオン界面活性剤の分離・定量
  - ・誘導結合プラズマ発光分光分析法による水道水中の金属イオンの一斉定量分析
  - ・イオン選択性電極法による飲料水中のフッ化物イオンの定量

- ・クロロ錯体の生成を利用したニッケル (II) とコバルト (II) の分離・定量
- ・高速液体クロマトグラフィーによるカフェインの分離・定量

到達目標：以下のような目的を設定している。

- ・ JIS 法に記載されている公的分析法を体験し、技術を習得する。
- ・ 様々な分析実験で用いられる器具の使い方を体験し、技術を習得する。
- ・ 最先端の分析機器の操作を体験し、その原理について理解する (考察事項)。
- ・ 実測されたそれぞれの物質の濃度について考察する (考察事項)。
- ・ 物質を分離するメカニズムについて理解する (考察事項)。

④授業担当教員 村上良子・安達健太

レビュアー 山崎 鈴子・川俣 純・藤井 寛之・鈴木 康孝・谷 誠治

⑤レビューの方法：実施後のアンケート調査により、授業内容、授業の進め方、その他改善を要する点についての意見を議論する

## 2) レビュー結果

レビュアーから以下のような意見が寄せられた。

1. 講義内容に関して
  - ・ TA 学生もしっかり指導できていて良い雰囲気であった。
  - ・ 基礎的な内容から応用的な内容までバランス良く取り上げられていると思う。
  - ・ 実験内容は高度で十分な学習が期待できると思う。
2. 授業の進め方に関して
  - ・ 学生たちに落ち着きがあり、うまく進んでいると思う。
  - ・ 各班のメンバーが協力して実験している。(特定の人たちが実験している訳ではない)
3. その他、改善点やよかった点など
  - ・ 分液ロートの使用方法の指導が必要と思われる。
  - ・ 女子学生の”爪”の長さが気になった。
  - ・ 実験中は安全のため、常に保護メガネをすべきである。

## 4. 地球圏システム科学科のピア・レビュー

### (1) 実施科目「野外実習」

#### 1) 概要

①日時：令和元年 11 月 20 日 (水) 12:50~15:00

②実施科目：野外実習

③対象学生：地球圏システム科学科 3 年生 (地域環境科学コース 3 年生必修：4 単位)

#### ④授業の概要

「野外実習」は通年・集中の授業であり、春および夏に 1 週間ずつ泊りがけの野外調査を行い、地質調査の方法、地層や岩石の観察法、データの解析法、地質図の作成、調査成果の発表、論文の書き方等について基本的な能力を養う。本年度の実習地は山口県萩市須佐湾周辺であり、班 (4~5 名) ごとに割り当てられた調査範囲を 3 月と 9 月とに踏査し、共同作業を通じてグループ調査のやり方や協調性を身につける。各班による中間発表 (7 月) および最終発表 (11 月) が設けられており、本ピア・レビューは最終発表会 (FAVO 2 階のワークショップルームで開催) を対象として行われた。

⑤授業担当教員：川村喜一郎、永嶌真理子

レビュアー：阿部、岩谷、太田、大橋、大和田、川村、坂口、志村、辻、永嶌 (あいうえお順)

⑥レビュー方法：講義後に行う学生授業アンケート（無記名）とレビューによるコメント（授業観察カード記載）、その後、授業研究会を開催

## 2) レビュー結果

### ① 発表技術に関して（声の大きさ、話の速度、プレゼンテーション一般）

概ね適切な発表スキルを修得している、など肯定的な意見が多かったが、地質図に走向傾斜がないなど不備があった、専門用語を正しく使用してほしい、などの指摘もあった。

### ② 発表会の運営・構成に関して（会場設定に関する準備等）

最後に全体のまとめの地質図を出したのはよかった、など肯定的な意見が多かったが、席が少ない、ポインターの光が反射してみにくい、などの意見もあった。

### ③ 野外実習の目標に対する達成度や理解度に関して

目標の達成に向け、自主的によく調査・研究されていた、など肯定的な意見や、文献を根拠にするのではなく、自分たちのデータを重視してほしい、などの意見もあった。

### ④ 発表した学生のまとめ方や聴講していた学生の参加度に関して（学生の質問など）

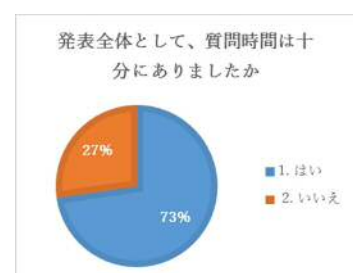
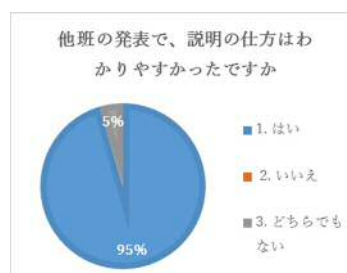
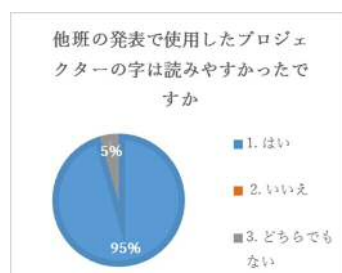
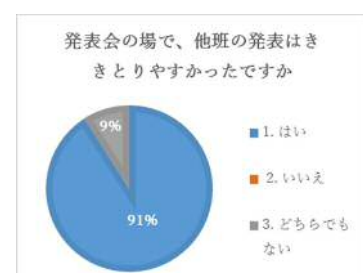
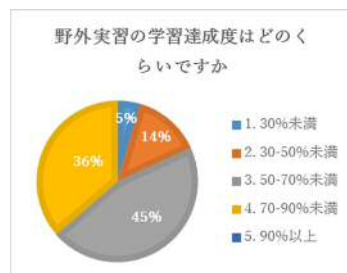
学生からの質問が少ない、といった意見が目立った。

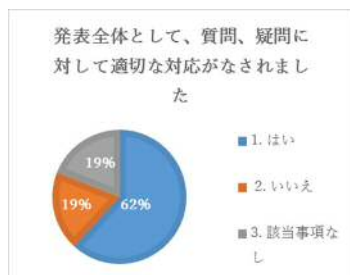
### ⑤ 野外教育における注意点（講義との関係、安全教育など）

全員を参加させるためのさらなる工夫の必要性、調査地域の選定への工夫の必要性、論理的思考の訓練の必要性などの意見があった。

### ⑥ 学生の授業アンケートについて

各項目についてグラフで示す。また、これ以外の意見として、この授業の利点として、総じて、知識ではなく、実践によって能力が身についた、との意見が多数あった。また問題点として、班内での協調性を取ることの困難さや、調査全般での危険性（ハチなど）、調査日数の不足によるデータ不足とそれに伴うゴールの設定の困難さ、などが挙げられていた。自由記述では、データのまとめ方が理解できた、論文の引用方法について学ぶ事ができた、などがあった。





### 3) 授業研究会

日時：令和 元年 11 月 27 日（水） 14:30～15:30

出席者：阿部、岩谷、太田、大橋、大和田、川村、志村、辻、永嶋（あいうえお順）

研究会概要：

学生アンケートとレビュアーによるコメント（授業観察カード）をもとに授業研究会を開催し、意見交換を行った。授業内容については、新しいアイデアが評価された。例えば、7月の中間発表会では、従来口頭発表だけであったが、口頭発表とポスター発表にすることによって、口頭発表では挙手できなかった学生でも、ポスター発表で質問ができるようにする仕組みにした。これにより、学生の質問が少ない現状を改善させることができた。また、班ごとにノートを配布し、活動日誌をつけさせた。これにより、分担を均等にする効果があった。さらに、自己評価とそれに基づく個人面談を行い、学生と教員の意思疎通を図ることができた。調査地域の住民との交流が学習において効果的であることが確認された。このように、今年の取り組みが一定の成果を上げたことに対して評価がなされた。他方で、観察事実に基づいた議論ができていない班があること、室内作業において分担が行われるため薄片作成ができない4年生が生じること、など意見があり、今後の課題であることが確認された。以上のように、多くの指摘と議論があり、次年度につながる有意義な場となった。

## 第2節 学部・研究科主催FD研修会

### 1. 教育改善FD研修会（理学部・創成科学研究科（理学系））

日程：令和元年10月9日(水) 15:00～15:30

場所：人文学部・理学部大会議室

講師：林 透（大学教育センター准教授）

参加者：47名（アンケート回収41名）

#### 【研修内容】

最初、理学部宮澤康行教授から教育改善FD研修会の主旨の説明があった。つづいて大学教育センター林透准教授より「学修ポートフォリオ」について説明があった。学修ポートフォリオを行う事で、「学修者の振り返りと成長のために」として利用して欲しい。学習の3つのポリシー（DP、CP、AP）と内部質保証を高めることに利用する。学生の自律的な学びを推進するために、



経験を振り返り、熟考する為の機会を作るために行って欲しい。その振り返りの起点として、また振り返りのツールとしてポートフォリオが利用できる。さらに電子ポートフォリオについての説明があり、入力データが卒業時までシステム上にあることで紛失しない、かさばらない。また LMS（ラーニングマネジメントシステム）と連動させて使う事ができる。教員が資料の検索ができる等の便利な点が紹介された。さらに新就学支援システムにもポートフォリオのメニューが用意された。まだ中身は不十分ではあるが、今後充実していき、活用しやすいようになる予定である。

【質疑応答・意見交換】

1. e-ポートフォリオについて他学部の活用状況について聞きたい。

各学部・学科の使用状況調査を4-5年前にした。また運用の調査を2年前にした。人文学部では組織的に学生との個人面談に紙媒体のポートフォリオを使用している。国際総合学部では YU CoB CuS を使っていてメールを使って学生とやりとりをしている。医学部は eYUSDL を使ってポートフォリオを行っている。

2. e-ポートフォリオのデメリットはありますか？

e-ポートフォリオの利点としては、紙媒体は煩雑であるが電子媒体では引き出しに入っている。しかし面談の際には紙媒体が重宝されるため印刷物を用意しているとの意見が多い。電子上のデータを CSV 形式では吐き出すため不便を感じる。このシステムは学部単位、学科単位では運用できるが、個人単位（だれが見ることができるのか等）の個人のデータ検索については機能がないので使いづらいところがある。



またこのシステムを使うには、学生に書き込んでもらう工夫が必要である。システムに書き込んでもらうようにコア授業やオリエンテーションの機会を使うと効果があると思われる。

3. 自分の授業について、年度毎、学部学科上で指導に活用したいのでポートフォリオのカスタマイズはできるか？

担当毎に eYUSDL に備わっているので可能である。小テスト、設問も同様にできる。従来紙でしものが e-ポートフォリオでできる。

設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	8	19.5%
良かった	12	29.3%
どちらとも言えない	15	36.6%
あまり良くなかった	3	7.3%
良くなかった	1	2.4%
無回答	2	4.9%
合計	41	100.0%

## 2. 講師派遣型アラカルト FD 研修会「大学生・大学院生の抱えやすい課題と学生相談の現状」（理学部 FD 研修会）

日時 令和2年3月10日(火) 15:00～15:35  
場所 人文学部・理学部大会議室  
講師 春日由美（学生相談所長：教育学部准教授）  
参加者 59名（アンケート回収 47名）



### 内容

はじめに理学部宮澤康行教授より春日由美准教授の紹介があった。引き続き春日由美所長の自己紹介があり、その後講演内容に入った。

### 1. 学生相談とは？

まず学生相談の歴史が説明された。山口大学は日本初、東京大学と同時期の1952年に学生相談所が設置された。これは国立大学に保健管理センターの設置以前であること。学生相談のレポートとして「大学における学生生活の充実方策について」報告書（通称「廣中レポート」）が説明され、「大学は教員中心の大学から」「学生中心の大学へ」の視点転換として学生相談の大切性が示され、ハンドブックの作成、その後「大学における学生相談体制の充実方策について」の報告（通称「苦米地レポート」）がされた経緯について。また学生相談は単なる学生へのカウンセリングだけでなく、予防活動、予防教育、教職員に対するコンサルティング（助言）も含まれるため、取扱う内容が多いこと。また、大学生は自殺割合も高く、自殺のきっかけ（原因）を取除く事が大事であり、学生の大学での居場所の確保も大事である事が説明された。

### 2. 学年毎の抱えやすい課題・危機

大学に入学した1年生は、新しい環境への適応ができないと悩みを抱えていること。2、3年生は生活の変化が比較的少ないものの社会の中での自分の存在を考えて自分らしさ、社会との繋がりを考えて悩んでいる。4年生は学生（大学）生活の終点と社会への入口（将来の準備）において多くの現実的な悩みを持っていること。また卒業にあたり親子関係の振り返りの時期でもある。大学院生も、研究生活環境の変化等が伴う場合、対人関係から研究環境と不安の原因（悩み）が多いと考えられる。

### 3. 本学の学生支援

山口大学の学生支援体制は①学生なんでも相談窓口（学生生活全般の相談が可能）、②保健管理センター（心と身の相談が可能）、③学生相談室（臨床心理士配置、居場所設置）、④学生特別支援室（SSR；障害等による修学上困難についての相談）である。学生相談所の利用は4－6月が多く、その後7－10月が少なく11月に再び多くなる。また延べ相談回数を見ると長期休暇中である8－9月は余り減っていない状況から学生の相談のよりどころとなっている事が考えられる。また相談内容は心身的な問題多い。教員との①対人、②修学、③心身問題が挙げられる。また相談は、教職員からの学生対応相談もあり、かなり困難な内容の相談を日々多く受け付けている現状である



ことが説明された。

#### 4. 学生相談所から教職員の皆様へお願い

学生相談所からの先生方へお願いとして以下の事が示された。①学生の命を守ることが大切であるため、気になる学生・院生については相談してください。学生相談に行きそうにない学生は教職員と一緒に来て頂いたほうが良いと思われます。②気がかりな学生については先生方と連携して学生相談をさせて頂きたい。③教員が思っている感覚と、学生が思っている感覚が随分異なっていると思われることがあり、世代や立場の違いにより受け取り方が違う。コミュニケーションの機会が少なくずれが生じやすいと思われる。これらのことから、こちら（先生から）の話を伝えるだけでなく学生の話聞くようにする。学生にとって先生と話すことは敷居が高いと感じており、先生から敷居を下げて学生の話聞いて欲しい。日々のコミュニケーションの機会をできるだけ作るようにして欲しい。また、学生への対応に関して先生方の相談も学生相談所は聴くことができる。学生対応はかなり難しくなっているの一人で考えるよりも誰かと共有することで気持ちが楽になる可能性があるのを利用して欲しい。

#### 質疑応答

Q1:数学を教えている物ですが、数学に人間関係を持たない数学を本気でやれ、と言った事があるが良かったのでしょうか。

A1: 状況に寄るの。人間関係に寄ると思われる。相対的に大学3年以上になると人間関係は重要になる。悩むことがあったら学生相談を利用して欲しい。

Q2:自閉症スペクトラムの学生が入学して来た時の学生への対応について、周りの学生また教員も傷つく事が多い。また本人進路の問題についても教員とトラブルが多くなる事が多い。結果として人間関係が傷つく事が多い。この場合はSSRに行くとか、学生相談所に行くことも考えられるが、どの順番で対応したらよいか教えて欲しい。

A2:発達障害等の学生により、周りの学生、教員が傷つく事はよくある。学生、教員も学生相談所で相談し愚痴を吐く事も可能である。SSR担当から聞いたところに寄ると該当の学生に早めにSSRに行かせて相談させることが良い。入学後早い時期からSSRに行くと次第に落ち着いてきて相談回数が減る傾向がある。特に進路については早くから相談して親とも早く相談することが大事である。



設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？		
選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	8	17.0%
良かった	30	63.8%
どちらとも言えない	6	12.8%
あまり良くなかった	1	2.1%
良くなかった	1	2.1%
無回答	1	2.1%
合計	47	100.0%

## 第3節 教育改善に関する活動

### 1. 「サイエンス実習」、「数理科学企画研究」、「数理科学トピック」における学士力育成の取り組み

理学部全学科に共通する学士力育成の取り組みとして挙げられるのが授業科目「サイエンス実習 I, II」(数理科学科にあっては、「数理科学企画研究」、「数理科学トピック」)である。この授業は、学生の問題発掘解決能力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力の育成を目的として開講されるものである。履修学生は、科学理解増進活動事業(例えば、山口大学理学部サイエンスワールド)に向け、自らが企画立案し、計画をたて、準備を行い、効果的な展示・説明を考案し、実際に当該事業において、一般市民に対して科学を分かり易く伝えることを目標に、プレゼンテーションを行う。担当教員からの適切な指導のもと、これら一連の活動・経験を通して上記能力を身に付け、さらには磨きをかけ、学士力の向上を目指している。

今年度の取り組みの一例として、生物・化学科生物学コースにおける「サイエンス実習 I, II」について報告する。

生物・化学科生物学コースにおける実習例及び学生による運営について

2019年10月26日に開催されたサイエンスワールド2019は、吉田キャンパスの第2学生食堂きらら、理学部本館、農学部、FAVOを会場として開催しました。当日は、山口市内外からの来場者1,304名、主催者側(教員・学生)も150名を超える盛大な催しとなりました。イベントの内容としては、理学部、および教育学部理科教育選修の院生・学部生による企画展示ブース15件、県内の博物館(防府市青少年科学館ソラール・山口県立山口博物館)の展示ブース、理学部内を巡りながら3つの科学体験を行う理学部ミステリーツアーを2コース実施しました。

生物学コースからはブース出展が2企画、ミステリーツアーに2企画出展しました。まず、ブース出展で行われた「食べてビックリ!味の魔法」では、ヒトは5つの基本味のバランスで味を総合的に感じていることを予備知識として説明し、麦茶と牛乳を混ぜ合わせると、コーヒー牛乳の味に変化することを体験してもらい、なぜ味がそのように変化したのかをグラフを使うなどして、ヒトの味覚に関してわかりやすく解説する工夫がなされていた。また、「君はダンゴムシを操ったことはあるか?」では、生物に実際に触れることで生物や生命現象を身近に感じてもらい興味をもつきっかけとなることを目的として、ダンゴムシの交替制転向反応と呼ばれる行動現象を一人一人に実験し体験してもらう企画であった。身近な生物を使った行動現象であり、小学生や未就学児に対しても興味と知識を導入する工夫がなされていた。いずれの展示も、参加者が実際に舌で感じたり、手を使って実験したりと、子供から大人まで楽しみながら学べる出展内容となっていた。

次にミステリーツアーの一部として実施された「緑野菜は緑?赤?」と「地球をひとりじめ」は、15名前後の参加者を対象として各回20分の内容が合計10回行われた。「緑野菜は緑?赤?」では植物の葉に含まれるクロロフィルを題材として、光合成に利用される光エネルギーの一部が蛍光として放出される現象に着目し、実際にクロロフィルが発する蛍光を観察するというものであった。「緑色」の葉を実際にすりつぶし、その抽出液が「赤色」に光る様子を観察してもらい、普段目にすることがない「不思議」を体験することでサイエンスに対して興味をもつきっかけ作りがなされていた。さらに、蛍光に対する原理の説明や、身近に蛍光を発する生物の話、それがどのような分野に応用されているかなどの付加的な情報を加えることで、それがどのような「原理」によって生じるのかを学習してもらう出展内容となっており、物理情報分野の「魔法使いになろう~光の分解・合成」と内容をすり合わせて、理解を向上させる取り組みが見られた。また、「地球をひとりじめ」ではカンブリア紀以降の多細胞生物の進化と絶滅をクイズ形式で答えてもらいながら、生物の進化を学んでもらう内容となっ

ていた。現存しない生物を子供たちにイメージしてもらうために化石を展示して、より興味を持ってもらい、理解してもらう工夫がなされていた。ミステリーツアーの2つの出展に関しては、少人数の来場者に対して学生らがきめ細やかに対応することで、科学への興味、理解を向上させる内容となっていた。

当日は、開場前から多くの子供連れの家族に訪れて頂き、科学体験を楽しむ多くの子供達の姿が見られました。子供達だけではなく、保護者の方からも多くの質問を頂き、学生らが一生懸命に回答しておりました。本企画に参加した学生にとっても、来場者からの意見を通して「科学の魅力をどのように伝えるか?」「どのように分かりやすく説明するか?」など多くのことを学んだ機会となりました。

## 2. 理学部における低年次教育改革

理学部では、「理学教育企画センター」が中心となり、さまざまな教育改革の取り組みを実施している。その一つが低年次教育改革である。以下、本年度に実施された学科単位での取り組みを報告する。

### (1) e-ラーニングを積極的に利用した教育の取り組み

#### 1) 数理科学科における e-ラーニングの活用事例

本年度、数理科学科では以下の二つの科目で e-ラーニングを活用した。いずれも数学の基礎知識のみならず、プレゼンテーション能力をも重視した科目であり、数理科学科のディプロマ・ポリシーの 2・汎用的技能 (1)、及び 3・態度志向性に対応する。より良いプレゼンテーションを行うには、日頃から知識を蓄える必要があるが、その実践にはアクティブ・ラーニングである講義外学習を受講生に期待したい。e-ラーニングがその機会になればと願う。

授業科目名：数理科学入門セミナー

対象学生：数理科学科1年生（約55名）

活用方法：この授業では学生の自学自習の定着を促すため e-ラーニングを活用している。内容は高校レベルの数学の復習ができる内容の宿題を一定回数課すという形である。成績の10パーセントを e-ラーニングのテストの成績で評価しており、ほぼ全て学生が e-ラーニングを活用した。受講生の多くは意欲的に e-ラーニングに取り組んでおり、学生の自学自習の試みに対して一定の効果が確認された。一方で、少数ではあるが e-ラーニングの受講履歴のない学生もおり、そのような学生の意識を高めることが今後の課題である。

授業科目名：数理科学基礎セミナー

対象学生：数理科学科2年生（約55名）

活用方法：この授業では学生の自学自習の定着を促すため e-ラーニングを活用している。e-ラーニングは隔週で実施しており、微積分・線形代数の復習となる内容の問題を1回あたりに50問程度（5つの単元から10問）出題している。e-ラーニングへの取り組みは本授業成績の10パーセントで評価している。ほとんどの学生は積極的に e-ラーニングに参加しており、学生の学習時間確保という面でかなりの効果があったことが確認された。一方で1年次の数理科学入門セミナーと比べると若干意識の低い学生が多いように思われる。そのような学生への対応が今後の課題である。

#### 2) 物理・情報科学科における e-ラーニングの活用事例

物理・情報科学科では数学関連科目を中心とする以下の科目で e-learning システムを活用している。

- ・「物理と情報のための基礎数学 I」
- ・「物理と情報のための基礎数学 II」
- ・「物理と情報のための応用数学 II」
- ・「ロジカルシンキング II」
- ・「計算モデル論 I」
- ・「計算モデル論演習 I」
- ・「計算モデル論 II」
- ・「計算モデル論演習 II」
- ・「数値解析」
- ・「プログラミング演習 I」
- ・「バイオインフォマティクス」
- ・「確率論」
- ・「情報ネットワーク」

プログラミング課題のダウンロード、プログラムの作成・実行、課題提出、プログラムの自動採点を行える e-learning システムを構築した。また、Python および機械学習の学習課題開発を行い、演習科目で活用した。また、昨年度に引き続き、上記の科目で宿題や自習のための小テスト配信、講義資料配布、出席管理、レポートの相互採点等を行うために必要な教材の改訂およびコンテンツの追加を行った。「物理と情報のための基礎数学 I、II」、「ロジカルシンキング II」では講義時間の不足を補うため、e-learning システム上にビデオ講義を用意し、これを見ることを理解度確認のための小テストとともに宿題とする取り組みを継続している。学生へのアンケート結果から授業で理解できなかった内容を e-learning を通して理解している学生も多く、また、e-learning の問題を解くことが授業の理解につながっていると回答する学生も多い。年々、少しずつであるが教材の充実を行っている。

## （2）学力別クラス編成の導入

物理・情報科学科では、「低年次導入教育の改革」の取り組みとして、平成 23 年度に 4 つの授業で学力別クラス編成授業を試行した。その結果に基づいて、平成 24 年度には、1 年生、2 年生の 5 つの必修科目で学力別クラス編成を本格導入した。その後、学力別クラス編成の改編を行い、平成 27 年度以降は、「物理と情報のための基礎数学 I、II、III」、および「力学 I」において、学生の学力に応じた授業を行っている。ただし、いずれの授業においても、学力別クラスに関係なく期末試験には同じ問題を使用し、単位修得の基準も統一することで、評価に不公平はない。今年度も引き続き学力別クラス編成により授業を行った。このように、学力別クラス編成が定着している。今後も学生の習熟度を確認しながら、引き続き、改善を行っていく予定である。

## 第 4 節 学生授業評価・教員授業自己評価

2019 年度に理学部で開設している専門科目 237 科目のうち、学生授業評価対象科目は 156 科目である。そのうち、実際に学生の授業評価を実施したのは 140 科目で、実施率は 89.7%であった。

下図は 2019 年度における学生授業評価および、教員自己評価実施アンケートの年度推移である。図 1 から図 5 までは、学生の授業評価項目である。図 1 は学生の授業外学習時間の年度推移、図 2 は学

生の授業目標達成の自己評価に関する年度推移、図3は学生の授業理解度についての年度推移、図4は学生の授業満足度に関する年度推移、図5は学生の授業出席の自己評価の年度推移である。分野間で若干の差があるものの、学部全体としては、いずれの項目も高い数値で安定して推移している。

一方、図6から図8までは教員側から見た授業自己評価である。図6は教員側から見た学生の授業目標達成の年度推移、図7は教員側から見た学生の授業理解度の年度推移、図8は教員側から見た学生の授業満足度を示す。教員側から見た評価は分野間の差異が大きい傾向にはあるが、全体としては評価点の高い好ましい結果が得られていると解釈できる。分野間で自己評価に差が生じる理由としては、多分に学問特性が影響していると考えられるが、評価基準の違いも要因の一つであろう。自己評価であるが故に、基準を統一することは極めて難しい問題であるが、検討する余地はあるかもしれない。今後取り組むべき課題である。

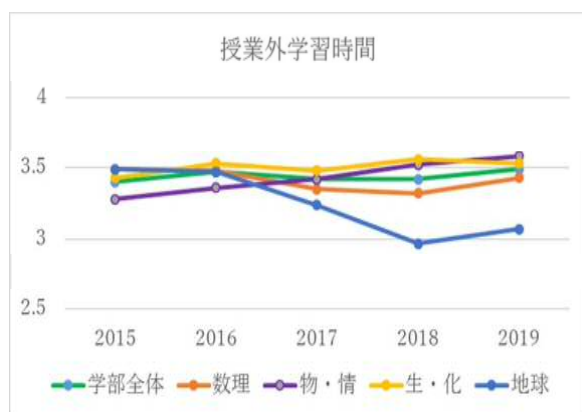


図1

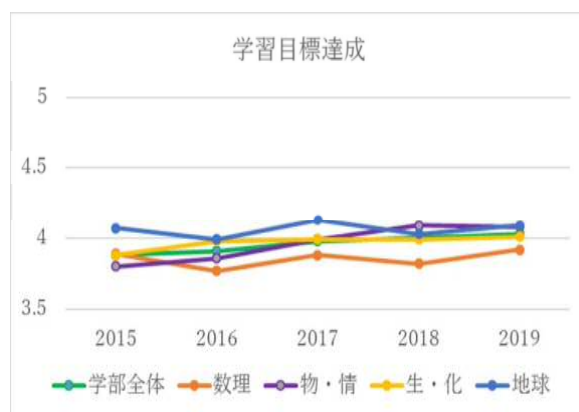


図2

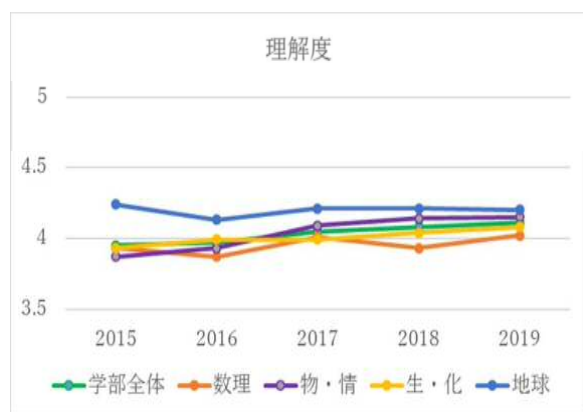


図3

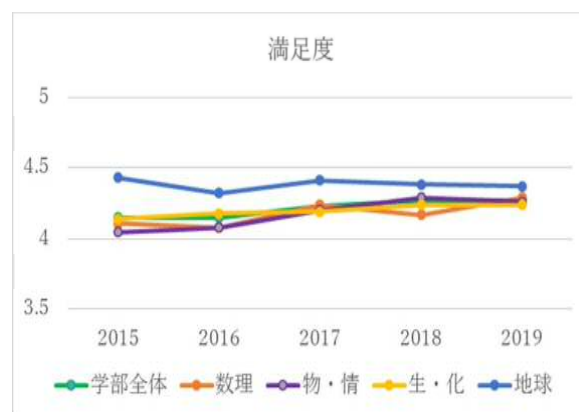


図4

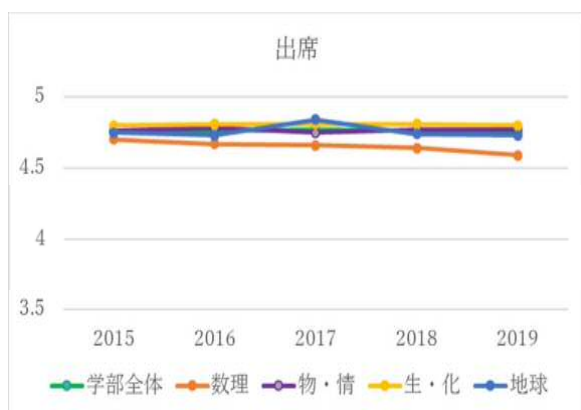


図5

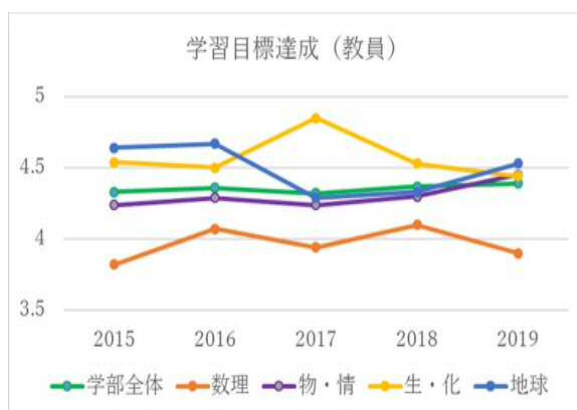


図6

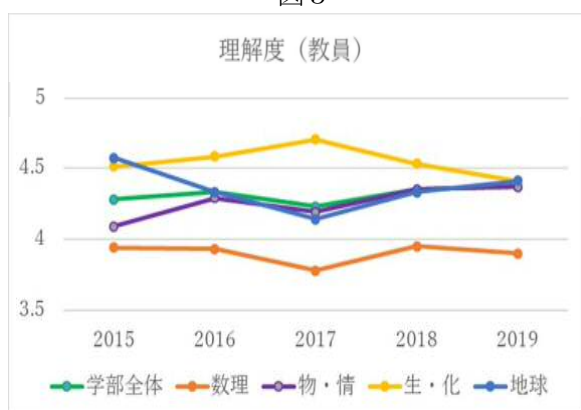


図7

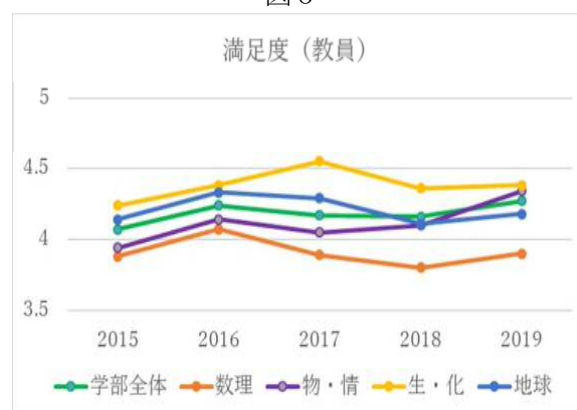


図8

## 第5節 FD実施経費報告書

今年度は理学部ではFD実施経費を使用していない。

## 第6節 来年度の課題

ピア・レビューや授業評価アンケートの結果を検討し、毎年、授業内容に関して工夫や改善が積み重ねられ続けている。ほんの2、3年前と比較しても、多くの教員の授業がより良い方向に進化していると思える。今後も慢心することなく少しでも質を高めるべく努力を継続していきたい。

数年前から、学生の学習時間の向上と教育効果の向上を狙い、eラーニングの活用を模索してきた。その甲斐あって、eラーニングの利用が進みつつある。また、Moodleの利用実績も増えてきている。現時点では、まだ一部の学科に導入されているに過ぎないが、次年度以降、さらなる学科に積極的に

e-ラーニング，Moodle の活用を推進していきたい。

大学としても力を入れている「学士力」の向上を目指すにあたり，理学部では科学理解増進活動事業（「サイエンスワールド」等）を推進している。これら事業への教員の積極的参加と指導を促すことで，講義科目とは別角度から教育力向上のFDを実施することに繋げていきたいと考えている。

## 第8章 医学部のFD活動

### 第1節 授業公開

#### 1.医学科

実施なし

#### 2.保健学科

開催日時:令和元年12月11日(水)16:10~17:40

開催場所:医明館S1教室

科目および対象学年:特別講義 検査技術科学専攻3年

担当教員:検査技術科学専攻 湯尻俊昭教授

参加教員:35名

内容:「日本におけるHTLV-1キャリアの問題」



日本には約100万人弱のHTLV-1キャリアがいるといわれており、身近な問題ではあるものによく知らない人が多く、正しい知識を得ることが大切である。講師の湯尻教授は山口県HTLV-1母児感染予防専門委員会のメンバーの一人として活動されており、まず医療従事者にこの問題を知ってもらい適切な対応ができることを期待するということで、講義をしていただいた。参加教員35名のうち33名がアンケートに回答し、大変好評であった。

アンケート結果(回収数33)

1. 所属  
看護学専攻(24) 検査技術科学専攻(9)
2. 職名  
教授(11) 准教授(4) 講師(5) 助教(12) 回答なし(1)
3. 講演内容  
とても有意義だった(25) 有意義だった(8)
4. 理解しやすさ  
とても理解しやすかった(28) 理解しやすかった(5)
5. 講義  
適切だった(33)
6. 開催時期  
適切だった(30) どちらともいえない(3)
7. 開催時間帯  
適切だった(30) どちらともいえない(3)
8. 会場  
適切だった(32) どちらともいえない(1)
9. 感想  
・知らない領域の話だったので、とても興味深かった。(看護・助教)



- ・関心を引きつけるようなイントロ（厚労省のマンガ）だったので、とてもよかった。（看護・助教）
- ・治療法が確立していない時にキャリアと判明することに対する患者の心理・治療者の心理を考える機会となってよかった。（看護・助教）
- ・医学の知識としても、自分自身や家族にも関連する興味をもちやすいテーマを、専門的にも一般的な面においても理解しやすく講義されていた。（検査・講師）
- ・3年生にも理解しやすい内容だった。（検査・講師）
- ・引き込まれる内容と話し方でとてもわかりやすかったです。（看護・准教授）
- ・詳細を知らなかったのでよく理解できました。（看護・講師）
- ・難しいけれど大切なことだと思い、頑張って聴きました。（看護・助教）

## 第2節 学部・研究科主催FD研修会

### 1. 医学科

#### 医学科主導FD研修会

##### （1）国試対策セミナー

- 1) テーマ：医師国家試験対策 セミナー
- 2) 開催日時：令和元年4月19日 13:00～
- 3) 実施時間/回数：合計 1.50 時間 1.50 時間/1 回
- 4) 主催者：医学教育センター
- 5) 開催場所：学内
- 6) 企画立案者：医学教育センター
- 7) 講演出席者：講演者：4 人 聴衆者：130 人（6年生、コーチ関係者）
- 8) 講演1：国試の現状について  
講演2：合格体験記
- 9) 演者/専門：学内教員/医学教育
- 10) 講演時間：1.50 時間
- 11) 主な内容：医師国家試験対策についてのセミナー

##### （2）CBT問題ブラッシュアップ講習会及びワークショップ

- 1) テーマ：CBT問題ブラッシュアップ講習会及びワークショップ
- 2) 開催日時：令和元年4月19日
- 3) 実施時間/回数：合計 3.00 時間 3.00 時間/1 回
- 4) 主催者：医学部長
- 5) 開催場所：学内
- 6) 企画立案者：医学教育センター
- 7) 講演出席者：講演者：1 人 聴衆者：32 人
- 8) 講演1：CBT 作問について
- 9) 演者/専門：学内教員/医学教育
- 10) 講演時間：3.00 時間
- 11) 主な内容：CBT 作問ブラッシュアップに関する説明とワークショップ

### (3) 医学科新任教員オリエンテーション

- 1) テーマ：新 eYUME の操作及び eYUSDL の操作について
- 2) 開催日時：令和 元年 5 月 14 日 17:00-18:00
- 3) 実施時間/回数：合計 1.00 時間 1.00 時間/1 回
- 4) 主催者：医学教育センター
- 5) 開催場所：学内
- 6) 企画立案者：医学教育センター
- 7) 講演出席者：講演者：3 人 聴衆者：43 人
- 8) 講演 1：新 eYUME の操作説明  
講演 2：eYUSDL の操作説明
- 9) 演者/専門：学内教員/医学教育
- 10) 講演時間：1.00 時間
- 11) 主な内容：新 eYUME の操作説明 及び eYUSDL の操作説明

### (4) 医学科教育主任説明会

- 1) テーマ：医学部医学科教育主任説明会
- 2) 開催日時：令和 元年 5 月 14 日 18:00~19:00
- 3) 実施時間/回数：合計 1.00 時間 1.00 時間/1 回
- 4) 主催者：医学部長
- 5) 開催場所：学内
- 6) 企画立案者：医学教育センター
- 7) 講演出席者：講演者：1 人 聴衆者：33 人
- 8) 講演 1：医学科教育主任の業務について
- 9) 演者/専門：学内教員/医学教育
- 10) 講演時間：1.00 時間
- 11) 主な内容：平成 29 年度における医学科各講座教育主任の業務の説明

### (5) 国際認証受審準備対応講演会

- 1) テーマ：国際認証受審予定大学の講師による講演会
- 2) 開催日時：令和 元年 7 月 5 日
- 3) 実施時間/回数：合計 1.50 時間 1.50 時間/1 回
- 4) 主催者：医学部長・教務部委員会・教育 FD 部会・医学教育センター
- 5) 開催場所：学内
- 6) 企画立案者：医学教育センター
- 7) 講演出席者：講演者：2 人 聴衆者：33 人
- 8) 講演 1：山口大学の準備状況について  
講演 2：医学教育分野別評価受審に向けて
- 9) 演者/専門：  
講演 1：学内講師／医学教育  
講演 2：学外講師／医学教育

1 0) 講演時間： 1.50 時間

1 1) 主な内容：国際認証・分野別認証に向けての教育改善について

### (6) 臨床実習入門実施担当者講習会

1) テーマ： 臨床実習入門実施についての説明会

2) 開催日時： 令和 元年 7月 19 日 18:00～

3) 実施時間/回数： 合計 1.00 時間 1.00 時間/1 回

4) 主催者： 医学部長

5) 開催場所： 学内

6) 企画立案者： 医学教育センター

7) 講演出席者： 講演者：1 人 聴衆者：24 人

8) 講演 1： 臨床実習入門について

9) 演者/専門： 学内教員/医学教育

1 0) 講演時間： 2.00 時間

1 1) 主な内容：臨床実習入門ユニットの実施について

### (6) プレ臨床実習テュートリアルチューター講習会

1) テーマ： プレ臨床実習テュートリアル実施についての説明会

2) 開催日時： 令和 元年 12月 10 日 18:00～

3) 実施時間/回数： 合計 1.00 時間 1.00 時間/1 回

4) 主催者： 医学部長

5) 開催場所： 学内

6) 企画立案者： 医学教育センター

7) 講演出席者： 講演者：1 人 聴衆者：15 人

8) 講演 1： プレ臨床実習テュートリアルの実施について

9) 演者/専門： 学内教員/医学教育

1 0) 講演時間： 2.00 時間

1 1) 主な内容：臨床実習入門ユニットの実施方法について

### (7) シラバス講習会

1) テーマ： 医学科 シラバス説明会

2) 開催日時： 令和元年 12月 17 日 17:00～19:00

3) 実施時間/回数： 合計 2.00 時間 2.00 時間/1 回

4) 主催者： 医学部長

5) 開催場所： 学内

6) 企画立案者： 医学教育センター

7) 講演出席者： 講演者：1 人 教員 50 人

8) 講演 1： シラバスの更新について

9) 演者/専門： 学内教員/医学教育

1 0) 講演時間： 2.00 時間

1 1) 主な内容： 医学部シラバス(e-YUME)の更新について  
ユニット責任者及びシラバス担当者への講習会

## (8) CBT 試験問題作成講習会

- 1) テーマ： CBT 試験問題の作問
- 2) 開催日時： 令和2年3月6日
- 3) 実施時間/回数： 合計1.00時間 1.00時間/1回
- 4) 主催者： 医学部長
- 5) 開催場所： 学内
- 6) 企画立案者： 医学教育センター
- 7) 講演出席者： 講演者：1人 聴衆者：36人
- 8) 講演1： CBT 作問について
- 9) 演者/専門： 学内教員/医学教育
- 10) 講演時間： 2.00時間
- 11) 主な内容： CBT 作問に関する説明

## 令和 元年度 教育改善 FD 研修会 (医学科)

日程： 令和2年2月12日(水) 13:00~13:40

場所： 医学部本館 6F 第1会議室

講師： 林 透 (大学教育センター准教授)

参加者： 27名 (アンケート回収 17名)

### 【研修内容】

最初、医学部藤宮龍也教授から教育改善 FD 研修会の主旨の説明があった。つづいて大学教育センター林透准教授より「学修ポートフォリオ」について説明があった。教員に学修ポートフォリオを「学修者の振り返りと成長のために」、3つの学習ポリシー (DP、CP、AP) と内部質保証を高めることに利用する、学生の自律的な学びを推進するために、経験を振り返り、熟考する為の機会をつくるため、として使って欲しい。さらに振り返りとしてメタ認知をすること。振り返りの材料としては経験、記憶だけでなく、種々の記録物と同時に評価基準、同期の人、先生、先輩も含まれる事が紹介された。後半は、次年度4月から修学支援システム (eYUSDL) 上にポートフォリオのメニューが設置され、運用可能な電子ポートフォリオについての説明があった。電子ポートフォリオの利点として入力データが卒業時までシステム上にあることで紛失しない、かさばらない。また LMS (ラーニングマネジメントシステム) と連動させて使う事ができる。資料の検索ができる。また運用面として改善されているところとして、ポートフォリオの記入項目を柔軟に設定出来る。学科単位で設問の設定ができる。在学中のポートフォリオの記録を閲覧出来る。学生が作成し



たポートフォリオに対して指導教員がコメントできる。等の機能がある、事項が紹介された。

#### 【質疑応答・意見交換】

Q1：医学部は担任制による学生が割り振られている。次年度4月からe-ポートフォリオが稼働すると担任が閲覧可能である。また学生がe-ポートフォリオにデータを入力すれば見る事が可能である。一年、半期間と個々の授業でのレポートを保管することもできるのでいろいろな事が可能と思われる。YU CoB CuS と e-ポートフォリオを連動が可能であるのか。

A1：YU CoB CuS と e-ポートフォリオを連動できるようにすれば可能である。

Q2：他大学ではe-ポートフォリオは長続きしないと聞いている。なぜなら所属が変わったときにそれば引き継がない。また大学内では、学部と大学院で学籍番号が変わるので対応が難しい。医療関連は所属を代わることが多いので、ポートフォリオを継続的に行ってキャリアを積んでいくことが望ましい。同様に看護師が病院をかわった時に持って行くことはできない。

A2：現時点では、所属が変わったときのシステム上の対応がない。今後考慮して行く必要がある。

#### 設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	5.9%
良かった	12	70.6%
どちらとも言えない	3	17.6%
あまり良くなかった	1	5.9%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	17	100.0%

## 2. 保健学科

### 保健学科主導FD研修会

#### 第1回保健学科FD研修会

開催日時：令和元年8月7日（水） 13:30～14:30

開催場所：HD1-1

講師：山根俊恵教授

参加教員：28名

テーマ：「地域活動の取り組みを活かした研究・教育～ひきこもり支援と共生のまちづくり～」

実務経験と研究実績にもとづいて長年にわたり取り組んでこられた「ひきこもり支援」についてお話をいただいた。

この社会貢献活動は高く評価され 2018 年度保健文化賞を受賞されたこともあり、大変興味深く貴重な講演であった。



アンケート結果（回収数 20）：

1. 所属  
看護学専攻（16） 検査技術科学専攻（4）
2. 職名  
教授（8） 准教授（3） 講師（4） 助教（5）
3. 講演内容  
とても有意義だった（15） 有意義だった（3） どちらともいえない（2）
4. 理解しやすさ  
とても理解しやすかった（14） 理解しやすかった（6） どちらともいえない（1）
5. 講演時間  
適切だった（19） どちらともいえない（1）
6. 開催時期  
適切だった（19） どちらともいえない（1）
7. 開催時間帯  
適切だった（20）
8. 会場  
適切だった（20）
9. 自由意見  
・長年の有意義な活動に、素晴らしいと思いました。

## 第 2 回保健学科 FD 研修会

開催日時：令和元年 10 月 9 日（水） 17:50～18:20

開催場所：HD1-1

講師：保健学専攻長，学科長 野垣宏教授

参加教員：33 名

テーマ：「パワーハラスメントの防止に向けて」

はじめに、研修会の目的を①ハラスメントとは何かを知る，②行為者の責任と，大学に求められるもの（大学の責任）を理解する，③パワーハラスメントをなくすためには，どうすればよいか学ぶ，④パワーハラスメントが起きた際の対応について学ぶ，と明確にされた後，パワーハラスメントの防止についてわかりやすくお話しいただいた。最後に，参加者に強く印象づける 3 つのトップメッセージを示された。

1. ハラスメント行為は人権にかかわる問題であり，教員・学生の尊厳を傷つけ職場・教育環境の悪化を招く，ゆゆしき問題です。
2. 山口大学医学部保健学科は，ハラスメント行為は断じて許さず，すべての教職員・学生が互い

に尊重し合える，安全で快適な職場環境づくりに取り組んでいきます。

3. 教授をはじめとする全教員は，研修などによりハラスメントに関する知識や対応能力を向上させ，そのような行為を発生させない，許さない環境・風土づくりを心がけてください。



アンケート結果（回収数 28）：

1. 所属  
看護学専攻（20） 検査技術科学専攻（8）
2. 職名  
教授（6） 准教授（6） 講師（4） 助教（12）
3. 講演内容  
とても有意義だった（19） 有意義だった（8） どちらともいえない（1）
4. 理解しやすさ  
とても理解しやすかった（23） 理解しやすかった（5）
5. 講演時間  
適切だった（27） どちらともいえない（1）  
・大切なことなので，もう少し時間をかけても良いと思います。
6. 開催時期  
適切だった（23） どちらともいえない（5）  
・早い段階での開催（4月頃）でも良いかもしれません。
7. 開催時間帯  
適切だった（25） どちらともいえない（3）  
・もう少し早い時間帯が良かった。  
・できれば13時から17時くらいの間が良かった。
8. 会場  
適切だった（28）
9. 自由意見  
・ハラスメント防止の大切さを再認識しました。ありがとうございました。

### 第3回保健学科FD研修会（医学科・保健学科・大学院合同）

開催日時：令和元年10月30日（水） 17:00～18:30

開催場所：HD1-1

講師：国際総合科学部准教授 ソーレンセン・アリエル・キース先生

参加者：39名（保健学科教員32名，医学科教員4名，大学院前期課程2名，事務局1名）

## テーマ：「英語プレゼンテーションの技法」

この研修会は、英語でのプレゼンテーションに自信がもてないという保健学科看護学専攻教員の声で企画されたものである。日本人が行うプレゼンテーションの問題点、海外での発表におけるスライドのフォーム、英語表現で相手の関心をひくためのポイント、効果的な英語プレゼンテーションの秘訣などについて知りたいといった数点の要望をあらかじめ講師に伝え、依頼した。

講師は日本語が堪能な方であったが、意図されて 90 分間すべて英語で話された。にもかかわらず大変わかりやすく、参加者がプレゼンテーションを行う演習も組み込まれ、引きつけられる内容であった。また、「言い間違いや文法の誤りは英語プレゼンテーションにおいてたいした問題ではない。それよりも、自分が伝えたいことをしっかり持って伝えることが大切」と励ましてくださったことで、英語プレゼンテーションに臨む勇気を与えていただいたように思えた。



アンケート結果（回収数 33）：

### 1. 所属

看護学専攻（18） 検査技術科学専攻（9） 医学科（4） 大学院前期課程（2）

### 2. 職名

教授（7） 准教授（5） 講師（6） 助教（10） 助手（2）

### 3. 講演内容

とても有意義だった（21） 有意義だった（10） どちらともいえない（1）

- ・興味深い内容でした。
- ・実践的でした。

### 4. 理解しやすさ

とても理解しやすかった（17） 理解しやすかった（11） どちらでもない（3）

- ・私の英語力の不足が原因です（どちらでもないと回答した人から）
- ・質疑応答の内容がとても勉強になりました。

### 5. 講演時間



適切だった (27) 長かった (4) 短かった (1) どちらともいえない (1)

・1時間くらいが適切ではないでしょうか (長かったと回答した人から)

6. 開催時期

適切だった (30) どちらともいえない (3)

・早い段階での開催 (4月頃) でも良いかもしれません。

7. 開催時間帯

適切だった (30) どちらともいえない (3)

・大学院生が参加できるのがよかった。

8. 会場

適切だった (33)

## 令和元年度 教育改善 FD 研修会 (医学部保健学科・医学系研究科)

指定研修：教育改善 FD

開催日時：令和元年 12月 4日 (水) 13:00~13:40

開催場所：本館 6階第一会議室

講師：大学教育センター 林 透 准教授

参加教員：36名

テーマ：学修ポートフォリオ～教学 IR について

13:00~13:02 (2分) 開催挨拶とスケジュール説明 (FD コーディネータ)

13:02~13:20 (18分) 学修ポートフォリオについて説明 (大学教育センター 林 透 准教授)

13:20~13:30 (10分) 質疑応答

### 【研修内容】

はじめに医学部保健学科の堤 FD コーディネーターから講師紹介と概要説明が行われた後、講演に入った。講師の林准教授から、まず3つのポリシーに基づく教育の質保証が求められている背景があり、単なる学修成果だけでなく4年間の学修過程も無視できず見ていくツールとして学修ポートフォリオ利用して通じて振り返り先生方もそれを基に修学指導していくために、本学でもeポートフォリオを運用する体制が整ったので紹介を行う旨が述べられた。

前半では、学修者の振り返り (リフレクション) の重要性について 2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン (答申) や、Kolb の経験学習の理論、メタ認知能力やベネッセと東大の共同調査 (「親子パネル調査」分析結果, 2019) 等を引き合いに出しながら解説された。後半では、それを効果的に行うためのツールとしてポートフォリオの機能等について確認が行われると共に、本学修学支援システムにおける e ポートフォリオの準備状況について画面等を交えながら紹介が行われた。



講演後、以下のように活発な議論が繰り広げられた。

Q：学生ポートフォリオが作ってあってそれに保健学科なりのモディファイしたものを保健学科のポートフォリオとして検査の方でやっているが、我々独自の設問をここに反映することが可能か？

A：可能です。

Q：今、振り返りを4年間まとめてというのが出来てないので、こちらのシステムを使わせてもらったほうがそういうことが良く分かるかなと。

A：学部学科によって温度差あって紙媒体使われている部局もあるが今はどういう形で？

Q：修学支援システムのレポート機能でやっている。

A：専攻単位で？

Q：検査の専攻でやっている。

A：これでやって頂くと教員もコメント返して出来る。今日やってきたのは要望聞いているところがある。理学部も是非という話があった。来年4月から運用できるように準備進めている。

Q：相談させてください。

A：是非。ありがとうございます。

Q：看護は教員単位でやっていて教員の方針次第と思う。学科単位でという話あったが、科目のその日の振り返りを全学生の一覧で見ること出来るか？日々の授業の振り返りを。

A：授業科目単位と、学位プログラム単位の話聞くが、授業単位については、修学支援システムの各授業でボックスができていと思うので、授業内アンケートやレポート、小テスト機能があるので先生と受講生の間で確認できると思う。今日話しに来たのは学位プログラム単位。学位プログラムになると保健学科は専攻2つあるので、看護学専攻と検査専攻では4年間で複数の科目を付けながら知識技能を身に付けていくと思うので、その相対的な振り返りの所で使ってもらえたらと。今の学習ポートフォリオは1年間の学びの振り返りをしていると思う。カリキュラムを通して学生がどう学んだか。正課外、サークル活動もあるとは思う。

最後に、堤FDコーディネーターから、今日の研修内容を参考にしながら活用を検討したい旨の話があり、研修会が締めくくられた。

### 【アンケート結果（回収数34）】

#### 1. 感想

- ・ポートフォリオの活用法が良く分かりました。
- ・実践的な話で役に立ちました。是非活用したいと思います。
- ・実際に活用している学生と教員をもっと見たかったです。
- ・もう少し具体的な話がききたかった。

#### 2. 希望の研修内容

- ・学生の学修効果を高めるための具体例など。
- ・授業準備の仕方
- ・ポートフォリオの実例と成果
- ・eYUSDL を実際に用いた研修
- ・シミュレーション教育
- ・研究方法のお話
- ・統計のこと
- ・来年の4月前にもう一度、学修ポートフォリオについて聞きたいです。
- ・3Pとeポートフォリオ、科目、各科目の中で各単元をどのように運用したらよいか。
- ・教授法、教材開発について



### 設問1 研修会に参加した感想はいかがでした？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	4	11.8%
良かった	26	76.5%
どちらとも言えない	3	8.8%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	1	2.9%
合計	34	100.0%

## 令和元年度講師派遣型アラカルト FD 研修会（医学科・保健学科合同）

開催日時：令和2年1月21日（火）13:30～14:30

開催場所：HD1-1 教室

講師：大学教育センター 林 透 准教授

参加教員：38名

テーマ：「学生の主体的な学びを引き出す授業デザイン～シラバス点検から始めてみよう」

### 【研修内容】

最初に、医学部保健学科の堤 FD コーディネーターから、医学部アラカルト型 FD 研修会の主旨の説明があった。つづいて FD の前半は大学教育センター林透准教授より「学生の主体的な学びを引き出す授業デザイン～シラバス点検から始めてみよう！～」について説明があった。

まず全体事項として、授業準備と授業設計の大切さを認識してもらい、これを充実させる事で授業目標が達成され、学習効果が明確になること、達成目標・授業計画・成績評価が連動し重要であること、またシラバスは、契約書、授業の計画書、カリキュラムに一貫性を持たせるツールの意味があることについて説明され、続いて個別事項の一例として 2019 年度の医学部・保健学科のシラバス授業計画を取り上げられた。

この中では、新しい項目として「授業外指示」の項目があり、予習・復習時間の目安の記入が必要であること、シラバスは到達目標、行動目標を記入し、学生を主語として書くこと、カリキュラムと自分の授業の関係を考慮し、到達目標の記載方法を、知識・理解、思考判断、態度の観点から適正に記述すること、到達目標に対しての成績評価である点を確認することについて説明され、ルーブリック等の評価についても紹介された。

その他として、最近の入力必要事項として、アクティブラーニングポイント、実務経験のある教員による授業科目、持続可能な開発目標(SDBs)についても説明された。さらに授業改善として学生の授業評価と教員の自己評価によるセルフチェック、同じ科目なら比較可能な成績分布の閲覧による評価も可能であり、ピアレビュー制度の説明もあった。

後半はミニワークとして、次年度に向けて自分の担当科目のシラバスを各自チェックした。最後は、今後に向けてシラバスのチェックは授業の質保証であることであるから、各教員によるチェック、また学部・学科でのチェックを行い、大学教育センター側ではシラバス関連のワークショップを継続的に実施してさらにマニュアルを充実させる、とまとめられた。



### 【アンケート結果（回収数 35）】

以下のような感想が記述されていた。

1. 自分のシラバスを見て、授業外の指示が少なかったと反省している。またアクティブラーニングについてはデザインできるか再考したいと思う。
2. 私も授業外の指示をシラバスに示していなかったので、入力したい。
3. 医学部医学科では eYUME がしっかりしている。学生は私の授業をチェックしている。厳しい指摘を学生から受ける。学外に向けた説明責任が必要であることがわかった。

### 設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	13	37.1%
良かった	19	54.3%
どちらとも言えない	3	8.6%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	35	100.0%

### 看護学専攻 FD

開催日時：令和元年 11 月 13 日（水）18:00～19:00

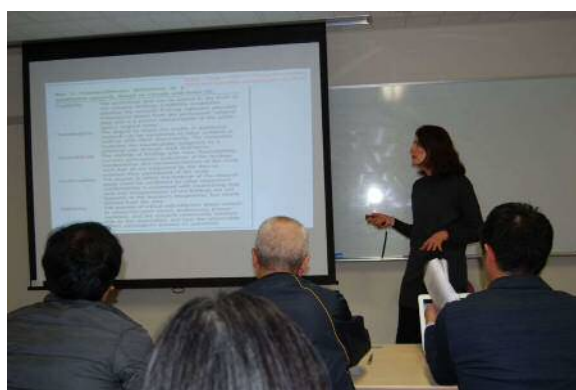
開催場所：保健学科第 2 研究棟 302 号室

講師：タスマニア大学 ミシェル・クリアリー 教授

参加教員：15 名

テーマ：「Research Seminar ; Quality and Qualitative Research in Healthcare」

質的研究の手法について、実践例を含んだわかりやすい講演をいただいた。



## 看護学専攻ミニFD

以下の日程とテーマで、1ヶ月に1回開催される全教員出席の領域会議の終了後に、30分程度のミニFD研修会を企画・実施した。

1. 令和元年5月15日（水）  
「FDの目的と意義を再認識するためにー改めてFDとはー」生田奈美可 准教授
2. 令和元年7月17日（水）  
「学生の特性に応じた支援を行うためにー看護学を学ぶ上で配慮を必要とする学生への支援の実際ー」堤雅恵 教授・FDコーディネーター
3. 令和元年9月18日（水）  
「学生の特性に応じて『つながる教育』を行うためにー看護学を学ぶ上で配慮の必要な学生に行う計画的な支援、情報共有のありかたと方法ー」堤雅恵 教授・FDコーディネーター
4. 令和元年10月16日（水） 研究活動の紹介（基礎看護学，急性期看護学教員）
5. 令和元年11月27日（水）  
「災害支援について（活動報告）」網木政江 講師
6. 令和元年12月18日（水） 研究活動の紹介（慢性期看護学，精神看護学教員）
7. 令和2年1月15日（水） 研究活動の紹介（母性看護学，助産学教員）
8. 令和2年3月18日（水） 研究活動の紹介（小児看護学，地域看護学，老年・在宅看護学教員）

## 第3節 教育改善に関する活動

### 1. 医学科

#### 1（1）医学教育分野別評価の受審

令和元年10月28日～11月1日に、日本医学教育評価機構による評価を受審した。医学教育分野別評価における医学教育の自己点検評価報告書を作成すべく、平成30年6月に医学科医学教育自己点検評価委員会を立ち上げ、その後約1年にわたり順次領域1～9ごとに部会を開催し、自己点検評価報告書の作成・ブラッシュアップを行ってきた。あわせて、様々な教育改善に関する活動を実施しており、令和元年度の主な取り組みを下に記す。



[医学教育分野別評価実地調査 領域別検討会議で質疑応答する谷澤医学部長]

## (2) ユニットの變更

令和元年度カリキュラムにおいて、以下のとおりユニットを變更し、テュートリアル教育等を強化した。

- ・展開医学系科目のコマ数を10%削減し、ゆとりあるカリキュラムを開始
- ・「重点統合ユニット1」を「生命医科学テュートリアル」に、「重点統合ユニット2」を「統合医学テュートリアル」に改変し、“高度自己修学コース”に配置
- ・「システムバイオインフォマティクス」を新設
- ・“Post-CC OSCE（臨床実習後共用試験）”を開始

## (3) ユニットコマ数の見直し（ゆとりあるカリキュラム）

臨床医学教育に十分な時間をかけつつ、臨床実習期間の延長・前倒しにより過密になった「展開系医学科目」のカリキュラムを再編成し効率化させるため、各コース・ユニットにおいて令和元年度の講義のコマ数や講義内容の見直しを行った（総コマ数で約100コマの減少）。これは、平成29年度に開催した拡大カリキュラム改善WG（各学年のカリキュラム委員が委員として参加）の答申を受けて具体化したものである。なお、“自己開発力”と“科学的探究力”を育成する本学の特徴あるユニットである「自己開発コース」、「修学論文テュートリアル」のコマ数は、現状維持としている。

	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	H31
総コマ数	3,253	3,224	3,214	3,241	3,195	3,168	3,273	3,435	3,473	3,452	3,355
臨床実習1	726	656	760	776	788	788	912	812	812	808	792
	2週×19	2週×19	2週×20	2週×20	2週×20+1	2週×20+1	2週×4+2週×20	2週×21	2週×21	2週×21	2週×21
臨床実習2	236	224	236	236	232	228	224	493	489	485	473
	4週×3	4週×3	4週×3	4週×3	4週×3	4週×3	4週×3	2週×2+4週×20	6週×4+1	6週×4+1	6週×4+1
臨床実習1+臨床実習2	962	880	996	1,012	1,020	1,016	1,136	1,305	1,301	1,293	1,265
	50週	50週	52週	52週	53週	53週	60週	67週	67週	67週	67週
臨床実習1、臨床実習2以外	2,291	2,344	2,218	2,229	2,175	2,152	2,137	2,130	2,172	2,159	2,090
自己開発コース	419	445	479	483	440	438	419	411	440	444	424
修学論文テュートリアル	83	113	73	77	80	80	80	80	90	80	76
自己開+修学論文デ	502	558	552	560	520	518	499	491	530	524	500

## (4) 学修成果基盤型教育の推進

平成27年度の医学科カリキュラム・ポリシー作成より、学修成果基盤型教育を推進してきた。平成31年度は「医学教育モデル・コア・コンピテンシーに基づくH31カリキュラム強化策」により、学修成果基盤型教育を更に推進している。

## (5) マイルストーンとしての到達目標の設定

平成31年4月より、学修成果基盤型教育の充実と学修成果の確認のため、医学専門群別にマイルストーンとして到達目標を設定した。

群の特徴	医学専門I群	医学専門II群	医学専門III群	医学専門IV群・V群
	基礎	基礎	発展	応用
群の特徴	医学・医療の基礎となる基礎医学を、臓器・系統別に編成された「コース・ユニット制」に基づいたプログラムのもとで学修する。講義、実習、少人数グループ学修等により、医学・医療の基礎となる基礎医学知識を身に付ける。	基礎医学から臨床医学への発展段階として、社会医学や臨床医学総論を含めた知識の水平的統合を行う。また研究活動を通して科学的探求力と自己開発力の涵養を行う。	臓器・疾患別に編成されたユニット講義により臨床医学各論を体系的に学ぶとともに、医療法学、医療安全、多職種連携、基本的臨床技能を学修し、臨床実習前段階としての基本的能力を身につける。	医学部附属病院、教育関連病院や地域の医療機関での診療参加型臨床実習を通して、知識・技能・態度など医師として求められる能力の涵養と発展を図る。
DP1:医療基礎力	生命現象の基本、人体の基本的構造と機能、分子細胞生理学等の基礎医学知識や、診療の基礎となる臨床病理学知識を有し、実習を通じて問題解決に応用することができる。	基礎医学知識の学修を徹するとともに、基礎系コースの義務科目として総合医学の「ユニット」等の演習を通じて知識の水平的統合を行い、問題解決に応用できる。	基礎医学と社会医学の知識を基盤として、臨床医学を系統的に学修することで、疾病についてより総合的に理解し、病態や疾病の理解や臨床推論に応用することができる。	診療参加型臨床実習を通じ、学修した基礎医学・臨床医学知識を応用し、臨床推論法・基本的診療技能などを実践できる。
DP2:地域・国際対応力	地域の保健・医療・福祉・介護に関する社会医学知識を身に付けている。	高度自己修学コースや社会医学活動を通じて、地域の保健医療を理解・実践できる。社会・自然科学と関連する医学知識を広く学び、社会の変化や国際化に対応する能力を身に付けている。	疾病に関する疫学・予防・医療体制等、地域医療や国際医療に関する知識を有し、地域保健活動を実践することができる。	地域医療実習や学外実習を通じ、地域医療・地域保健活動やブライマリアリアを実践できる。
DP3:医療プロフェッショナリズム	医療倫理に関する基本的な知識を修得するとともに、医療人としての自覚をもった対応ができる。自他した学修姿勢を育み、解剖・生理等の実習を謙虚と畏敬の念を持って取り組むことができる。	研究活動や社会医学活動を通じて、教養を高めるとともに、研究倫理やセルフマネジメントなど医師としての高い倫理性を身に付けている。	医療に関する法学や医療安全・臨床倫理に関する知識と考え方を身につけ、模擬患者や事例検討、シミュレーション学修において医師としての対応を実践することができる。	医師としての職務を自覚し、患者・家族および医療スタッフ等と良好な関係を築くことができる。医療安全を心がけて実習を行うことができる。キャリア教育や指導医とのディスカッションを通じて、自身の目標と将来像を表現できる。
DP4:チーム医療とコミュニケーション能力	実習やグループ学修において、周囲と連携して役割分担と情報共有を行い、協調・共働するチーム力を身に付けている。	研究活動や社会医学活動を通じて、研究者や医療従事者、社会と深く関わり、円滑なコミュニケーションと共働ができる。機会があれば学外や海外での活動にも参加できる。	医療安全・行動医学・多職種連携に関連するユニットで、医師としての責務を自覚し周囲と共働することができる。小グループで共働して事例検討やシミュレーション教育に取り組むことができる。	指導に関わる医師や看護スタッフ等の多職種医療職との連携の中で、医師としての対応やコミュニケーション、チーム医療を実践できる。
DP5:自己開発力	医学・社会の変化をにらみながら、積極的に最新の情報を収集・分析し、基礎医学を中心として医学の修得に積極的に取り組むことができる。	研究活動の中で、自分自身の知識、技術や態度を客観的に評価し、その向上に向けた努力をする能力を身に付けている。	医療を取り巻く変化を踏まえ、最新情報を収集・分析し、臨床医学を中心とした医学の修得に積極的に取り組むことができる。	臨床実習を通じて医学の修得に積極的に取り組むとともに、臨床医学・生命科学の発展分野に触れ、積極的に学術的視野の拡大に努めることができる。
DP6:科学的探究力	自然科学への探究心と論理的思考力を持ち、基礎医学知識の修得と実習手技を実践できる。	人々の健康と疾病の問題に対して幅広い学術的視野を持ち、能動的な研究活動や社会活動を行うことができる。その成果を論理的に理解し、論文にまとめるとともに、口頭発表できる。	基礎医学と臨床医学を垂直統合して課題に取り組むことができる。臨床推論を体験し、問題点の発見と考察、解決のプロセスを学修する。また成果をまとめ、発表できる。	臨床情報を臨床医学・基礎医学・社会医学等の知識をもとに論理的に考察し解決に導くことができる力を養い、成果をレポートにまとめ、口頭発表できる。
DP7:総合的診療能力	将来の医師としてのコミュニケーション能力を有し、医療・介護に関する見学実習や保健活動を安全に実践できる。	実践的診療の基礎となる基礎医学知識を応用しつつ、患者安全と全人的視点をもって実習や社会活動を行うことができる。	少人数グループで課題解決型学修、実技実習、シミュレーション実習を行い、臨床実習前段階としての医学知識の統合と臨床推論の演習、基本的診療技能の修得を行う。	診療チームの一員として、自ら医療面接や身体診察、基本的検査によって病態を収集し、統合された知識と技術に基づいて問題点を抽出し、解決に向けて診断や治療の計画を立案・実行することができる。

[医学専門群別マイルストーン]

### (6) eYUME 機能の周知と活用の促進

平成 30 年度より、eYUME に簡単に HP の編集を行うことができる CMS (content management system) を搭載した。各講義を担当する教員が自身の ID とパスワードで学内からログインし、授業内容詳細等を適宜更新することで、学生が自己学修を行うための情報を常に最新にすることが可能となった。

2 年目となる令和元年度は、5 月に“新 eYUME の操作及び eYUSDL の操作について”のテーマで、新任教員も含めた説明会を行い、eYUME 機能の周知と更なる活用を促した。

\*eYUME の定義：山口大学医学教育総合電子システム (electronic system of Yamaguchi University Medical Education) の頭文字によるネーミングであり、山口大学医学部医学科で行われる全ての授業内容を電子化したシラバスで、平成 13 年より Web サイト上に公開している。

### (7) 医学科教育プログラム評価委員会の開催と改善実施計画の作成

平成 30 年度に、医学教育 IR を実質化すべく、収集したデータに基づき、教育プログラムの効果及び適切性を評価することを目的として、学生や広い範囲の教育の関係者及び外部の専門家を委員に含めた医学科教育プログラム評価委員会を立ち上げた。

令和元年度は 9 月に開催し、当委員会からの評価を受け、以下の改善実施計画を作成した。

1. 医学科教育プログラム評価委員会の配付資料については、eYUME の学生専用サイト・教員専用サイトに掲載済みであり、配付資料にアンケート結果とフィードバックが掲載されている旨、全学生・全教員に通知する。
2. 担当講座や非常勤講師から要望があれば、評価結果を非常勤講師本人にフィードバックすることを検討する。

### (8) 医学科カリキュラム委員会の開催と改善実施計画の作成

平成 30 年度に、学生、教職員、広い範囲の教育の関係者及び外部の専門家の相互の協力のもと、

カリキュラム等の医学教育全般に関する改善検討を行い、その結果を教育企画会議に提言することを目的とした医学科カリキュラム委員会を立ち上げた。

令和元年度は9月に開催し、当委員会からの提言を受け、以下の改善実施計画を作成した。

1. eYUMEにポートフォリオ機能を追加し、学生が年度当初に立てる目標等を担任教員が把握し、効率的な面談ができる担任制の実質化の具体策を、学生委員会を中心に検討し、令和2年度中の稼働を目指す。
2. eYUMEの臨床実習マイルストーンの自己評価項目に、“mini-CEXの経験の有無”を追加し、令和2年の臨床実習からの稼働を目指す。

#### (9) 医学科アドミッション・ポリシーの見直し

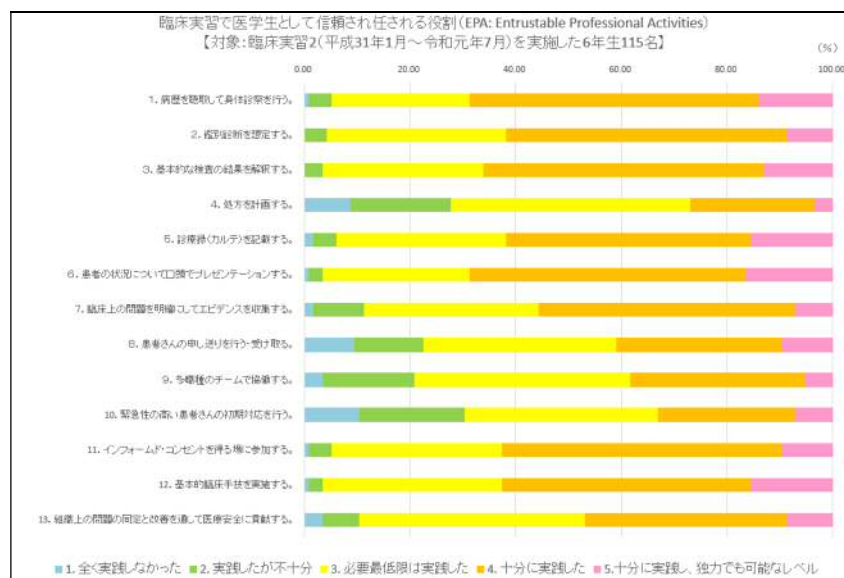
平成30年度に開催した医学科カリキュラム委員会で、外部委員より“医学科アドミッション・ポリシーを見直してはどうか”との提言があった。

当提言を受け、令和元年9月に、医学科入試委員会の下に、外部委員と学生委員も参画した医学科アドミッション・ポリシー検討WGを設け、令和3年度入試より開始される大学入学共通テスト導入にあわせ、医学科アドミッション・ポリシーの“求める学生像”を大幅に変更した。これにより、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーの3つのポリシーが一貫性のあるものとして再構築された。

#### (10) 臨床実習におけるマイルストーン評価の解析

平成31年1月、学生にeYUME上で、“臨床実習で医学生として信頼され任される役割(EPA: Entrustable Professional Activities)”、“基本的臨床手技”、“臨床推論(実習で経験した症例や臨床推論を学んだ疾患名を記録)”を自己評価させることで、各学生が最終的な到達点の中でどの程度修得しているかを把握させる臨床実習マイルストーンの評価を本格的に開始した。

令和元年7月で終了した6年生の臨床実習の結果は下グラフのとおりであり、電子化された臨床実習マイルストーンの結果を解析し、学生が経験しにくい技能や臨床推論を把握・分析し、各診療科へフィードバックした。



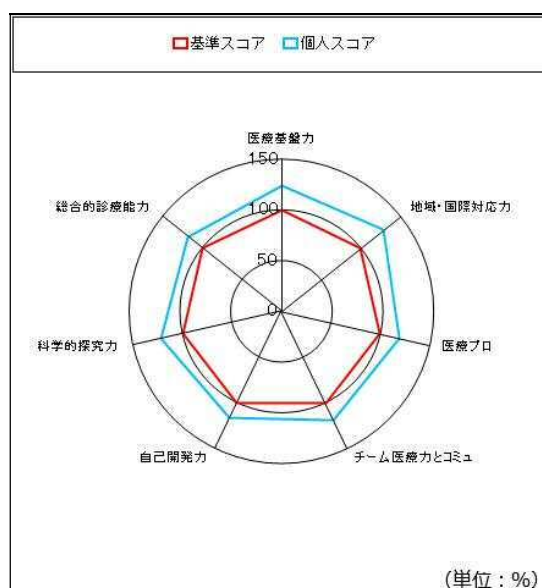
[臨床実習マイルストーン結果(一部)]



### (11) YU CoB CuS の稼働

医学科では、学修成果基盤型教育を更に推進するため、大学全体の開始より1年早く、令和元年度より、DP に基づく人材育成の達成度を定量的に可視化する YU CoB CuS (Yamaguchi University Competency-Based Curricular System) を導入した。学修プロセスを可視化することにより、学生自身の振り返りを促進するとともに、教員による学修プロセスの把握を通じた学修指導を可能とし、教育・学修の質的転換に繋げている。具体的には、ユニット毎に DP への貢献度を数値化（1 単位あたりの合計値を 100 とする）し、成績によって係数を掛け（秀：×1.4、優：×1.2、良：×1.0、可：×0.8）、学生毎にレーダーチャート化することで、学生は成績表とともに、目標が十分に達成できている DP、不十分な DP が一目瞭然に把握できるようにしている。

2 年生（H31 カリ）～4 年生（H29 カリ）に適用し、オリエンテーション等を通じ学生に周知を行っている。



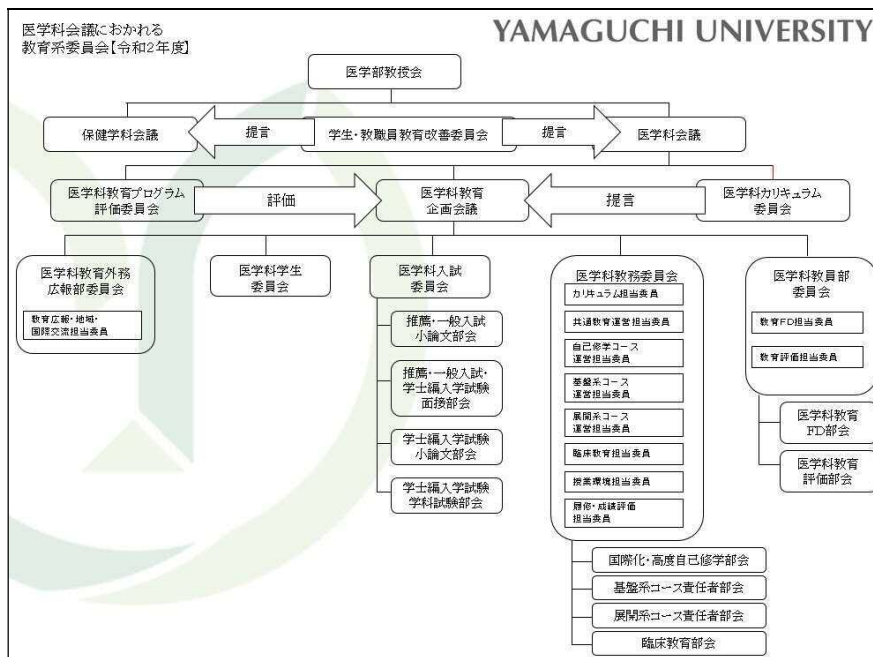
[学生毎のレーダーチャート（一例）]

\* YU CoB CuS の定義：山口大学能力基盤型カリキュラムシステム（Yamaguchi University Competency-Based Curricular System）の略。ディプロマ・ポリシーとして設定した卒業時に修得しているべき能力に基づき、その各々の能力をどの程度修得しているかを定量的に示すもの。カリキュラムマップに基づき算定する。

### (12) 学生・教職員教育改善委員会の設置

令和元年 10 月に受審した医学教育分野別評価実地調査で、“学生に関する諸事項を審議する委員会に学生が参画し、適切に議論に加わるべき”との講評をいただいた。

当講評を受け、毎年定期的に行われている“学生自治会との懇談会”を、規則上に位置付けられた正式な委員会とした。令和 2 年度より、学生・教職員教育改善委員会において協議された学生からの意見・要望等を議事要旨にまとめ医学科会議に報告することで、組織的に医学教育の改善に取り組むこととした。



[医学科会議におかれる教育系委員会]

### (13) FD 出席の義務化

令和元年 10 月に受審した医学教育分野別評価実地調査で、“新任教員を含め、教員に対する研修を充実すべき”との講評をいただいた。

当講評を受け、医学科教育 FD 部会で、“FD 参加を年度に 1 回義務づける”、“参加については eYUME の FD 動画を見る e-ラーニング形式でも「可」とする”ことを協議した。令和 2 年度より実施する。

### (14) 担任制の実質化（ポートフォリオシステムの開発）

医学科では、平成 29 年度より担任制を導入しており、令和元年度時点で、2 年生～4 年生の全学生を 39 講座で分担し、面談等を実施することとしている。また、修学支援システムの“レポート機能”を使用して、年度初めに学生にポートフォリオ・シートを記入させている。

この 2 つを効率的に行うため、令和元年度学長戦略経費で、eYUME にポートフォリオ機能を搭載した。担任講座の教員が、eYUME 上で学生が記入したポートフォリオ・シートを確認し、学生の面談等を行うこととしている。令和 2 年度より実施する。

## 2. 保健学科

学生へは教務委員が、担任、ゼミ担当教員、学生委員と連携して学習活動や履修に関する学生の相談に応じている。進路や、学習状況についてもアンケートを実施し、さらに年 1 回程度は面談を行っている。

国家試験の合格率で学部教育の充実が評価されるため、保健学科看護学専攻では国家試験対策委員とゼミ担当教員が連携して模試結果をもとに 4 年生の個別指導を行った。保健学科検査技術科学専攻では、国家試験対策講義を実施した。看護学専攻・検査技術科学専攻とも、95～100%の合格率を長年維持しており、2019 年度の看護師国家試験の合格率は 97.6%、臨床検査技師の合格率は 100%であった。

## 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

授業評価については、医学科では医学教育総合電子システム[eYUME]上で、保健学科は、保健学科授業支援システム[FHS Web Campus]上で、学生授業評価、教員授業自己評価を引き続き行っている。またその結果については、教員へフィードバックし、次年度以降の授業の改善に活用している。

### 医学科

医学科では、平成30年4月より、学生がeYUMEを使用して入力した診療科（部）ごとの臨床実習評価結果を、即時に該当診療科に所属する全ての教員が閲覧可能とし、診療科の教員は、次のクールでの臨床実習の参考にし、より質の高い臨床実習の実施に活用しているところである。

更に、平成31年4月より、ユニット毎に設定した山口大学独自の“到達目標”により、学生はユニット終了後に、“到達目標”をどの程度身に付けることができたかをeYUME上で自己評価する取り組みを開始した（紙媒体のユニット学生振り返り評価票は廃止）。ユニット責任者及びシラバス責任者はその結果を閲覧することができ、形成的評価を行うと同時に、次回のユニットの向上に活用することが可能となる。ユニットの1つである「医療概論・倫理序説」の到達目標は以下のとおり。

目標	
<b>1.主題</b>	
1.医学・医療の倫理問題全般を理解する。 2.医学・医療の各領域の倫理問題に対する現在の考え方や解決のあり方について理解する。 3.医療概論全般について理解する。	
<b>2.到達目標</b>	
1.医療倫理の歴史的な流れを概説できる。 2.臨床倫理の歴史的な流れを概説できる。 3.患者の基本的権利を概説できる。 4.患者の自己決定権を概説できる。 5.臨床諸領域における代表的な倫理問題を概説できる。 6.倫理問題に対する解決法を4分割表を用いて概説できる。 7.キャリア形成のあり方について概説できる。	

## 第5節 FD実施経費報告書

部局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
医学部	国際認証受審準備対応講演会(5/2)	講師旅費・謝金	70	本学部の国際認証受審のために大いに参考になった。
計			70	

## 第6節 来年度の課題

### 1.医学科

#### (1)医学教育分野別評価の受審

令和元年10月28日～11月1日に医学教育分野別評価を受審した。実地調査で改善すべき、あるいは改善が望ましいと講評・指摘を受けた領域については、実現可能なところから実施改善していく。

#### (2)教務委員会と入試委員会およびIR部門の協働による受験生・入学生の質確保

令和2年度入試から実施された地域枠の入学定員の増員が、今後どのような影響をもたらすのか等、医学教育センターIR部門とも協働調査していく。また、引き続き教務委員会と入試委員会の協働による受験生・入学生の質確保の細やかなフォローを行う。また、大学入試制度の変革に対応するための検討を引き続き行う。

#### (3)学生委員会による担任制導入など学生支援の充実化

平成29年度より開始された担任制も4年目となる。令和2年度から実施されるeYUMEでのポートフォリオシステムの運用を通じて、担任制の充実化・実質化をさらに進めていく。

#### (4)教育主任制度の更なる充実によるカリキュラム改革の普及

平成25年度より、各講座、診療分野毎に、教育主任制度を開始した。これは、医学教育センターと、実際の教育を担当する各講座教員グループとの情報の伝達、共有を密にすることにより、複雑化する医学教育を円滑に進めることを目的としている。教員間の戸惑いや伝達ミス等も散見されたが、概して軌道に乗ったものと思われる。令和2年度は、今まで以上にこの制度の更なる活用により、より充実した内容の教育を目指していく。また、令和元年度は臨床実習後OSCEが開始された。臨床実習前OSCEと併せ教員の負担は大きくなるばかりであるが、学生教育の必要性・重要性の理解を深めてもらい、医学教育への参加をこれまで以上に促していく。

#### (5)学外での地域医療実習の更なる充実

将来選択する専門領域に関わらず、プライマリ・ケアや地域医療に一定の理解・能力を有する医師を養成することが必要になってきている。そこで、6年生を対象に山口大学医学部近辺の各診療科同門の診療所を中心にした診療参加型地域医療臨床実習を、平成25年度より導入している。引き続き、施設関係者との密なコンタクトを行い、実習内容の細かな検討、あるいは学生アンケート等を実施して実習の更なる充実を図る。

#### (6)成績不振者への個別指導の更なる充実と対象学生の拡充

個別試験で成績不良であった4年生と卒業留年学生が対象であり、個別指導等の更なる充実と拡充に向けて、議論をさらに加速させる。今後の検討課題として、低学年時の成績不振者に対する個別指導体制の構築についても検討していく。

## (7)臨床実習の充実化、mini-CEX の普及、臨床実習後 OSCE

臨床実習の更なる充実に向けて、ログブックの一部を eYUME 上で行えるように改訂を行っており、運用等の問題点を整理する。また、mini-CEX も 4 年目になり、主要な診療科での実施をさらに進めるとともに、問題点などについても整理していく。

また、卒業時の技能・態度の評価として、臨床実習後 OSCE が令和 2 年度から全国正式実施となる。これに伴う人員や設備の運用を的確に行い、円滑な試験の実施に取り組んでいく。

## (8)eYUME の改定と e-learning の普及

eYUME の機能強化を引き続行っていく。また eYUME を用いた動画配信等により、学生・教員が自由な時間に学習を行うことができる e-learning のシステムを整備していく。

# 2.保健学科

保健学科では、適正な授業評価を心がけながら、医療の変化や国際化に対応でき、医療チームの一員として活躍できるとともに地域医療の向上に貢献できる人材の育成を教育目標としており、この視点から現在の教育を更に充実させる予定である。看護学専攻ではカリキュラム改正の作業を開始する予定もあり、2020 年度は教育改善の観点からとくに重要な位置づけとなる年となる。国家試験については、今後とも高い合格率を維持するとともに、キャリア教育等の充実により進路への意識を高め、学生がスムーズに社会人として医療人として活躍できる環境を整えていきたい。加えて、大学院への進学者の増加についても取り組んでいきたい。

### 1. 授業外学習時間の確保および適正な成績評価

保健学科では FD 研修で学んだシラバスの充実を推進し、授業外学習時間の確保に務めたい。また授業評価については、学科内シラバスにおいて、成績入力により学生成績がヒストグラム化され瞬時に見えるため、教官は自分の行った試験の分布がすぐに把握でき、適正な評価を行う上で役に立っている。今後もこのシステムの利用を続けていきたい。

### 2. 国際化

国際化に関しては、APAHL (Asia-Pacific alliance of Health Leaders) などを通し、より国際的な人材育成のための努力を行っていきたい。2020 年度は、山口大学が APHAL のホスト校になることが決定しており、学生に対する英会話能力等の向上を促す取り組みを充実させる必要がある。

### 3. 国家試験対策とその成果

看護師・臨床検査技師ともに 100%近い国家試験の合格率を継続して達成している。とくに検査技術科学専攻では、教員が率先して、国家試験対策の講義をシリーズで企画・実施し、2019 年度の合格率は 100%であった。この試験における日本全体の合格率がおおむね 70%台 (2019 年度は 71.5%) であることから、講義・実習・研究活動を遂行しながら高い合格率を達成していることを、内外に強くアピールする必要があると思われる。一方、看護師国家試験においては、2 名が不合格であったことから、全国平均の合格率 89.2%を大きく上回ったものの 97.6%にとどまったため、100%を目指した方略が課題である。

### 4. 大学院教育

在学生の研究マインドを高め大学院への進学を促すとともに、広く社会に向けて医学系研究科保健学専攻の魅力伝えることが必要である。この具体策については、現在検討中である。

## 第9章 工学部のFD活動

### 第1節 学部・研究科主催FD研修会

#### 1. 教育改善FD研修会

以下の要領で教育改善FD研修会を実施した。

日程：令和元年11月13日（水）14:20～15:00  
場所：工学部D棟 D11講義室  
講師：林 透（大学教育センター准教授）  
参加者：24名（アンケート回収 14名）

設問1  
研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	0	0.0%
良かった	12	85.7%
どちらとも言えない	2	14.3%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	14	100.0%

#### 【研修内容】

第3期認証評価が迫ってくる中で、組織での内部質保証が大学レベル、学部・学科レベルで非常に重要になって来ており、その起点となるのが3つのポリシーを軸とした内部質保証と教学マネジメントが非常に大事になってきている。その中で教育に加えて、学生がしっかりと学んでいけるかということと、しっかりと学修成果が上がっているかが大事になってきている。特に最終的な学位プログラムの到達点であるDPに対して、しっかりと学修成果が上がってきているかが問われてきている。学修成果に加えて学修過程も非常に大事になって来ており、その中で学びを振り返るツールとして学修ポートフォリオが大事になって来ており、今回の研修会で紹介するポートフォリオの重要性について説明があった。

続いて、生涯学び続けられる力・態度を大学4年間で身に付けて出て行く必要があるということについて、中教審の2040年に向けた高等教育のグランドデザイン答申などにも触れながら言及すると共に、経験学習におけるKolbの理論やメタ認知能力等のキーワード、更にはベネッセ教育総合研究所と東京大学社会科学研究所の共同調査（親子パネル調査）等のエビデンスも交えながら学びの振り返り・リフレクションの必要性について紹介された。また、有効な形態やアプローチとしての自己・集団・対話による振り返りや、振り返りのツールとして学修ポートフォリオの紹介が行われ、これを電子化することのメリットとして、紛失の防止や、情報の共有、検索やショーケースなどの機能を紹介され、本学学修支援システムにおける準備状況や機能、実際の画面等について紹介が行われた。

そのほかの質疑応答は以下のとおりである。

Q： 学修支援システムを使っているが、私の科目、工学部では何かのスキルというか工学の設計の基本のような勉強をすることが多くて、どちらかというと本人が理解度をもう少しうまく把握出来ないかと思う。例えば中間テストの点数を入れて学修者に見えとか（本人が数値的に学習の達成度を把握できるもの）、それが良いかどうかはわからないが、そういうことが出来るか？

A： システム的にはeYUSDLで見える同じ画面となると改修が必要になるが、1つ1つの科目ではなくその期間で学んだものという理解で良いか？であれば、セメスターや学年ごとにポートフォリオの中で、〇〇分野の中でどのくらい身についたと思いますか、と例えば択一や自由記述で書いて

もらうことが出来ると思います。面談をしている学科もあると思うので、場合によっては面談の時にそこをさらに深く聞いてみるという形で行えばよいと思います。今までは学生ポートフォリオの項目も割とおおざっぱに年間の学修目標を立てたり、学生生活がどうだったかと項目を立てていたが、そこは学科の裁量で、学修でどのくらい学べたかという項目を立てていただいて書いてもらうというのが一つあると思う。自己評価するということ。

本当はこの画面の中で参照しながら出来るが良いが、改修が必要となる。LMS と連携することはできる。

Q: 一つの講義の進捗度合いの中である程度理解出来たらと思っているが、最後にアンケートを取った時にあまりよく理解できなかった、という回答があり、途中でもっと聞いておけばよかったなと思うことがある。どの辺が分からなかったとか。いろいろ出来れば有効に使えるかなと思う。

A: 大教センターの立場からいうと、先生方は割と自分のカリキュラム上で担われている科目のところはどうしても執着するようなんですけど、最終的には年間でカリキュラムの中で科目も関連性があるって、その中で例えば電気電子に関する理解や力学に関する理解が身についたとか、振り返る必要があると思う。各科目は当然先生方の到着目標に対してどれだけ出来たかについて、テストをやっていると思う。学修ポートフォリオでは、もっと長いスパンを扱うことになるので、もう少し抽象度が高くなると思う。もう一つ言うと、九州工業大学の話だが、本学でも JABEE を受けている学科もあると思うが、ポートフォリオシステムがすごく充実していて、ポートフォリオの中で自分がカリキュラムマップの中でどれが取れて、どれくらいの成績が取れたかを自己省察でき、かつ自己評価できるシステムを導入されている。また何かの機会に、先生方にご紹介出来たらと思っている。素晴らしいシステムを入れてやっているところが工学系でもある。

Q: 良くわからないところがあって、メタ認知の話のところ、何かについて分かることが分かるというのはあるが、学生の場合、何が分からないか分からない子がいる。そこを、解決してあげないといけないと思うが、それは振り返りのやり方で、上手くやるやり方があるのか、質問事項や設問を変えてやっていかないといけないのか。分かることを分かるというのはいいが、どこが分からないか分からない子がいて、そういう子をどうしたらよいかなど。

A: 最終的に、分からないこと自体を、自分自身が自覚しないと、次、主体的に動けないと思う。最終的に自律的な学習とか、自己調整をしていくのは、分かった人も分からない人も同じと思う。そこをファシリテートというか、支えることが、我々に求められている。今日、職員の方も聞いていらっしゃるが、職員もその一助を担わなければならなくなっている。

Q: そこが上手く、こういうので分かればいいけど、今彼がどこで分からないのか分かれば、指導の仕方もありますよね。

A: 面談は手数かかると思うが、ただ面談じゃなくて、記録、2年の1学期で何か不安ないですかと、対面じゃないと掘り起こせないと思うので、そこでポートフォリオがあるのかなと。

Q: 面談も大変で、工学部は1科目必修なら90~100人になるので、研究室の学生くらいならいいが、そこを上手くやるのはどうしたらよいかなど。

A: 私立大学だとアカデミックアドバイザーが多く配置されていて、何人単位で一人付けている。数が多くてもやっていかないといけなくなっているのは、理系は一度躓くと困るから。全員じゃなくても学修の記録ありますよね、素点や、GPA で、ちょっとどうなのという人呼び出してくしかない。

Q: 工学部の場合、大学院に行く子がいるのでIDが代わる。4年間溜めて、紐付け、そこを連携しておかないと使いにくくなると思う。これは教育センターじゃなくてメディアとかかもしれないが考えて頂けると良いなと思う。

A: それは認識していなかった。大事なポイントなので学内で、センターでも議論したい。

Q: 最初は、理解と言うので授業の話かと思ったけどそうではないという話で、設問等を見ると達成出来ましたかとかあって、そういう話になっているけど、そうするとステップアップノートが

あって、それを電子化すればいいのかなと思いますが、そういう問題なんですか？大教センターとしてどれくらいのスパンで使ってもらいたいのか、それを示していただかないと、最後のところで学科、部局となると結局、仕事増えるだけじゃないかと思う。

A：あくまで授業単位ではなく期間設けての学修ポートフォリオなので、まず学部レベルであれば当然4年間、刻みとしては1年単位とかセメスター単位で振り返りをしてもらうことになる。なんでこういう話をしているかというと、YU CoB CuSを導入している国際総合科学部はYU CoB CuSのスコアを見ながらクォーター毎、セメスター毎で振り返っている。教育学部も最近、教育学部版のYU CoB CuSを作って運用している。学科でカスタマイズして使ってもらうことも可能ですが、eYUSDLでもデフォルトでこういう運用ができるので、設問項目だけ定めれば学科単位で求められているものについて、指導教員と学生のインタラクションができる。それをいろんな学部・学科、9学部あるので、学部・学科単位で運用して頂きたいというのが我々の希望ではある。

Q：そこの設問セットできればという所が凄く大事で、あなた達成出来ましたかとか、出来ませんでしたとか、まあまあとか書いてですね、それでインタビューしてまあまあじゃいけませんねとか、もう少し頑張りましょうとか、そういう繰り返しだったら、何か偏差値のわかるところはそれが出来ているとかどういう風に近づけられるか、その設問を見ると申し訳ないないけどがっかりするんですよね。

A：これは従来の学修ポートフォリオの学生生活面が充実しているかとか今年目標何を立てますか、となってますけど、我々いろいろ話を聞いていると学部学科の専門性によってどうポートフォリオの設問を立てるか、特に学修ポートフォリオとして運用していくにはかなり学習指導の形態も全然違うんですよね。私、9学部全部調べました。なので、そこはご相談に乗ります。逆に、学科としてこういう風に運用したいんだけど、どう運用したらいいかということをご相談に乗らせて頂く、ご支援させて頂くというスタンスかなと思う。もちろん元々の学生ポートフォリオのスタイルもあるので、これで運用してください、というスタイルもあるが、そこは学科様で、ポートフォリオの項目について逆にご相談させていただきながら、こちらでご支援するというスタンスで今日来ている。

Q：例えば、これを使ってくださいという時に、どういう使い方がありますかとか、これを使わないといけないんですかとか、という話にならないのか。

A：今のスタンスではYU CoB CuSの時もそうだったですけど、各学部の環境に応じてYU CoB CuSもいろいろ使われている。我々はなるべく強制したくないというのが大教センターのスタンスです。こういう環境で使えるから、まずは学部さんのお声、今日もこれ初めてこういう形で使えるということを今回初めて紹介しているので、ニーズを聞かせて頂きながら、運用検討してみたいとか、ご要望があればお聞きしますよと言ったのはそういう意味で、まずはシステムや環境があるということをご説明に参ったということです。具体的話になると当然ご相談させていただく。そういうスタンスでなるべく対話型でやっていきたいと思っている。どうしても、こういう形でやってくださいとやると、工学部は割と柔軟と思うけど、いろんな学部があって、いろんな反論があるわけです。その中でまずは大枠でこういうフレームで出来るので、学修ポートフォリオ、学習過程見ていくこと大事ですよ。その中で運用されますかと、そういう相談で来ていると受け取って頂けると。

Q：お立場分かりました。

Q：学生にとって、私とかだと面と向かって話した方がフランクに話せるんじゃないかと勝手に思ってますけど、学生は多分そういうのが嫌でこういうのを介してやった方がいいのかもしれないなと思ったので有効性はあるのかもしれない。ひとつ聞きたいのはこれ、匿名性はないということなんですよね？このシステムとしては、ある特定の指導学生と先生の間でという話があるということ、個人情報、学科で共有するかも学科の判断ということですか？

A：個人情報の扱い、大事になってきます。今のところ基本的に指導学生のものは指導教員しか見



えないようにしようとしているが、学科で参照したいとなると、またお話を聞かせて頂きたい。基本的にはポートフォリオは個人のものになるので、指導教員は指導学生だけが見える環境になると思う。指導教員も、主・副あって各学部学科で体制違うので、そこは運用し易い環境にしたいと思っている。

Q：最初にあったが、集団でというのは可能なんですか？何か共有するというシステムの。

A：これ前段の話は自己省察する際にそういうやり方で深まるという話をしたが、修学支援システムでやるところは、集団でやるのが可能な項目とそうでない項目があると思う。今日やっている修学支援システムの対話のところのやり取りとなると自分の振り返り、それと後は先生との対話という所、ここの2段階かなとは思っています。あと、いろんな場面では集団で振り返ること、実験・実習、研究室単位でいろいろ学習の進捗や研究の進捗測るときにやられてますよね、という話でちよっと言ったところがある。

Q：指導学生なら直接の方が手っ取り早い話で、こういうことやるの回りくどいかなと。少し関係薄い学生と教員とも会えた方が良い気が。

A：その辺りも誤解ないように頂きたいのですが、まず学修ポートフォリオは誰のものでしょうか？まず、一番起点は学生が毎年度の学習でどれだけ出来たか不安点があるかという点を、まず自分の学びの量を蓄積していく、まず見るのが一義かなと。学生のためのポートフォリオなので、まずそういう意味ではメリットはあると思う。あと、いろいろと指導するときの在り方は当然近くにおいて対面の方がいいですけど、学生のためにはこういう蓄積した物、1年2年3年と振り返るために必要だろうと言っているんだろうと。そこを上手く運用して頂ければと思います。

Q：まずは学科全体で、配属は4年生からなので、1年から4年生までは学科全体では学科長が旗振ってこういう風にしていきましょう、みたいな話をして、自己でやって、もしかしたら面談するチャンスがあるかどうかという形で運用していくということですか？希望としては4年生までにある程度ポートフォリオの使い方が分かれば、そのまま使っていれば有用性あるのかなと。それで最終的に6年、学部と研究科をうまく繋がないといけないというのもあると思うんですが、そうすると学生にも有用、例えば書いてある目標とかが半年ごとにどう変わってきたのかとか、そういうのも面白いのかなとは思いました。

A：目標のところも学科で定めにくいというところあれば、学科の学位プログラム単位で当然DPがあるので、そういうのを振り返るポートフォリオの目安として設定されて、毎年聞いていくというのも一つの方法ではないですかと提案させていただいて、またそれは学科で検討して頂ければと。

Q：振り返りというのが凄く理解出来て非常に重要だとわかりました。個々の授業、毎回の授業のデータを各学生が全部保存していったら、本当にずっと振り返ることが出来るなと思いました。

A：それも今の修学支援システムがユーザーサイドで使い易いかというところいろいろご意見あると思いますが。

Q：アイデアとして言わせてください。結構今の学生、黒板、白板を写真で撮ったりするんですけど、自分のノートを写真で撮ったりするから、しょっちゅうレポートを出させているので、それも全部保存していったら振り返ることが出来るなと思って。それで学習をどのくらいしてるか学生見えるので、こっちからも見ようと思ったら見えるようになるなと、どこで困り始めているかもわかるようになる。それだけのデータ保存できるような大勢になってきているのかなと？

A：修学支援システム、授業単位では先生方も授業資料アップロードできますし、割と教員ベースになってますけど、アンケートも授業単位でできる。それを学習者側も保存できると思うので、そこに振り返ってみようとか、確認してみようというのを入れると授業単位では。

Q：そうですね。学生の方で、自分のデータをその授業の個々のところに放り込んで行けるようにすると、本当の意味で振り返りが出来るので、それを全部集めたら相当の量になる。それは凄く価値がある。自分のやってきた成果を見返すことも出来るので、そういうシステムにすると凄く良いんじゃないかと思いました。これはアイデアですが。

A：それも踏まえながら、1年終わってどうだったかというのをポートフォリオのところで自分で言語化させてみるというのもありかなと思うんです。そういう紹介だったんです。

以上のような活発な議論が繰り広げられた。

アンケートでは以下のような内容が見られた。

#### 感想

- 前任の大学でWEBシステムみたいなものがあった。学生にとっては直接教員と話すよりは間接的に連絡する方がいいかもしれない。
- システムを作りましたので使って下さいが、いずれ、使って下さいとなりそう、もしくは、工学部でどこかで使って下さいとアリバイ？になりそうと思えてそもその必要性が感じられなかった。
- データの収集、集約の重要性は分かった。これを指導に役立てていくのか続編を楽しみにしている。
- ポートフォリオの定義について、ぼんやりではあるがりんかくが見えてきた。

#### 希望の研修内容

- 学内・学外でケーススタディや事例（上手くいった）を聞きたい。
- LMSについて
- 教学マネジメント、教育の内部質保証
- 教学マネジメントのこれからと対応について

#### 実施時期

- 年度の早い時期が良いと思う。
- 新たな取り組みを始めにくい

#### 参加したくない理由

- 時間がない

#### 実施場所

- もう少し狭い場所の方が良いと思う

## 2. 講師派遣型アラカルト FD 研修会

学部・学科等のFD活動に大学教育センターから講師を派遣して実施する「講師派遣型アラカルトFD研修会」を以下の要領で実施した。

日程：令和元年12月11日（水）14:00～14:30

場所：工学部D棟 D11講義室

講師：岡田菜穂子（学生支援センター准教授）

田中亜矢巳（同センターカウンセラー）

参加者：36名（アンケート回収 22名）

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	4	18.2%
良かった	16	72.7%
どちらとも言えない	2	9.1%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	22	100.0%

## 【研修内容】

研修会では、本学における障害学生の就学支援について説明があった。

障害のある学生への支援は、倫理上、あるいは大学の教育機関として実施すべきことである。我が国では平成 28 年に障害者差別解消法が施行され、国立大学では合理的配慮の実施が法律で義務付けられている。この法律では、障害等による差別的取り扱いの禁止と、合理的な配慮の提供の義務が明記されている。

大学では平成 28 年度から、障害学生が大学に対して支援を要請できる制度を導入している。学生特別支援室（Student special Support Room。以下、SSR）は障害学生修学支援の拠点として、学内の様々な組織と連携しながら、障害学生の修学支援とコーディネート業務を行っている。

SSR では、障害学生だけではなく、障害が疑われる学生、障害の傾向が強い学生の対応も行っている。障害学生から大学への修学支援の申し出には、学生本人が支援を希望する意思が明確であること、支援の根拠となる書類（診断書、障がい者手帳など）を持っていることが必要となる。SSR への相談件数は、平成 26 年度は 326 件であったが、平成 30 年度は 2,669 件急増している。これは、潜在的ニーズがあること、支援の仕組みを利用する学生が増えているためと考えられる。近年は障害の種類や相談内容が多様化する傾向があり、相談対応・支援対象者に占める修学支援申請者の数が増加する傾向にある。日本学生支援機構では高等教育機関における障害のある学生の在籍・支援状況の実態調査を毎年実施しているが、その結果によると、障害のある学生の在籍率が増加しており、障害種では特に精神発達、病弱・虚弱が増えている。※1 これらの障害のある学生の増加傾向はしばらくの間続くと考えられる。本学の月別の相談件数については、修学スケジュールとの連動が見られる。これは修学と関係のある相談が多いことによる。

本学では、支援を申請した学生からの要望に応じて、授業の担当教員に対して、学生が抱える障害の内容と、授業中に必要な支援について情報提供をするために、配慮願を配布している。これは担当教員が授業の目的や形式に合わせて、支援の内容を検討する際の参考にしてもらうことを目的としている。

次に、障害学生の修学支援のシミュレーションとして、診断の有無、支援を希望する意思の有無による支援の利用について、典型的な以下の 3 つのパターンに分けて説明があった。

※1 病弱や虚弱の増加は、精神障害による 2 次障害の可能性もある。

(1) 大学入学以前に診断を受け、本人の障害理解が進んでいて、支援を希望する意思が明確な場合。

→このようなケースでは、修学や就職についての的確かつ円滑な支援を行うことができる。

(2) 大学入学後に初めて支援を希望する場合。

→これに該当する相談件数は比較的多い。例えば、大学の授業でグループワークやプレゼンテーションに困難を感じて学生委員等に相談して、SSR への相談を勧められて来訪するケースがある。このような場合、SSR では面談を通じて、修学上の問題、得意分野等について整理を行う。その過程で、本人がこれまで必要と思わなかったことについて問題点を発見し、有効な支援につながることもある。ただし、修学支援の申請には診断書もしくは障がい者手帳などが必要であるため、すぐに支援の開始ができないこともある。このようなケースでは、保健管理センターに相談することがある。また、必要に応じて、学期の途中から教員に配慮願を配布する。

(3) 診断を受けておらず、支援希望の意思がない場合。

→これについても相談件数が非常に多い。周りから見て、その学生が明らかに困っている状況にあっても、本人にその自覚がない場合は、本人の認識と周りの対応のずれがないかを見極めながら、支援を慎重に検討する必要がある。このような学生がいたら、SSR に相談しても

raitai.

特に理工系分野における障害学生への対応では、実験への対応がひとつのポイントである。

これまでも、工学部の先生方には適宜ご対応いただいていた。今後はさらなる対応の必要性が生じる可能性もある。個別の対応も必要だが、一般的な指示要領や実験の運用方法を工夫いただく方法もご検討いただきたい。

気になる学生がいる場合は、今後のスムーズな対応につなげるために、まずは先生方から SSR にご連絡いただきたい。SSR から教員に授業等についてご相談させていただくこともあるが、その際は教職員のご協力をお願いしたい。

講演後には以下の質疑応答があった。

Q：日本学生支援機構の「障害のある学生の修学支援に関する実態調査」についてであるが、個人情報保護の関係で、学生本人あるいは保護者の承諾がないとデータの提供ができないと考えられる。この調査結果は実態を反映していると言えるのか。

A：この調査では、日本学生支援機構が各大学に障害学生の修学状況の提供を依頼して実施している。各大学による障害学生を把握する方法は、大学によって異なると思われる。本学では、学生に対して障害の有無を聞くことはないので、基本的には学生本人から相談があったケースについて回答している。

Q：合理的配慮の事例集については、本人または保護者の承諾が得られているのか。

A：事例提供した大学の判断で、本人または保護者の承諾を得るか、もしくは本人が特定されないように配慮して取り上げているはずである。

Q：就職活動における面接について、就職支援室もサポートを行っているが、発達障害学生に対してソーシャルスキルのトレーニングを行う必要があるのではないか。

A：発達障害の学生は、筆記試験には問題がなくとも、ソーシャルスキルが不十分で面談に失敗するケースが少なくない。また、就職後に職場になじめないこともある。大学としてどこまで対応するかは、全国の大学で課題となっている。本学では、障害学生に特化したトレーニングを大学で行うのは難しいため、学外で行われているプログラムを紹介するしかない。しかしながら、山口県ではこのようなプログラムを提供する機関がほとんどないため、学生の郷里や就職先の地域に機関があれば紹介している。

Q：配慮願で座席を出入口の近くにすることを求められるケースがあったが、座席の指定によってクラスの他の学生に障害があることを知られてしまうので、逆に配慮に欠けないか心配があった。配慮願対象の学生については、他の学生に障害があることを知られる可能性があることについて、了承は得られているのか。

A：配慮願対象の学生によっては、他の学生に障害があることを知られたくない学生もいる。このような場合には、配慮願を他の学生に知られたくない旨を記載している。特別に記述がない学生については、できるだけ事前にご確認いただくと確実である。

アンケートでは以下のような内容が見られた。

感想

- これまでも SSR に支援してもらい、現在 4 年生になり、問題なく修学しています。来年 4 月から大学院に進学します。
- 具体例があってわかりやすかった
- A さん、B さん、C さんの事例でどんな支援が行われているのかが分かった

- 障害のある学生対応をもう少し詳しく知りたい
- 具体的な対策を聞きたい
- SSR で障害のある学生の支援を行っているを知ることができた。今後何かあったときに相談したい
- 病気と障害の違いは？

#### 希望の研修内容

- 適応障害、特に理系研究室での適応障害
- 健康増進法の一部を改正する法律（受動喫煙防止）について校門周辺での喫煙（主に学生）があまりにもひどい。法律の趣旨（『敷地内で吸わなければよい』ではなく『受動喫煙をなくす』）が理解されていない。喫煙所が絶対必要
- 事例を知りたい
- 情報化時代の教育・・・最近、時々聞くようになりました
- すぐには思いつきませんが、興味のあるテーマの案内がきた時には時間が許す限り参加したい
- メンタルヘルス
- 発達障害について、かかわり方等

## 第2節 教育改善に関する活動

工学部では、以下の様な教育改善に関する活動を実施している。

### ① Yu CoB CuS の導入

令和元年度（2019年度）から、一部の学科において YU CoB CuS を導入し、学習成果を可視化できるようにした。

### ② 工学部サロン

平成 18 年度（2006 年度）から、吉田キャンパスの研究 1 号館の 1 階に「工学部サロン」を開設している。「工学部サロン」では工学部 1 年生のいろいろな相談にいつでも対応できるように、工学部教員の OB が待機している。また、工学部のいろいろな情報提供も行い、学生交流の場としても利用できるようになってきている。

### ③ 工学教育研究センター

先駆的な教育実践活動について情報を収集・分析して新しい企画を提案し、教育実践活動をとりまとめ、学内外に公表するための工学部付属のセンターである。

平成 25 年度（2013 年度）から常盤キャンパスに「グローバル技術者養成センター」が設置され、工学部と理工学研究科（平成 28 年度より創成科学研究科）のグローバル化教育プログラムの開発や、教職員に対する SD 研修プログラムの開発とその実施が行われ、工学部のグローバル教育力の向上のための体制を整備する取り組みが推し進められた。同センターは、平成 29 年度（2017 年度）から、工学教育研究センター内に組織変更され、引き続き学生の海外留学の支援を実施している。

### ④ ステップアップノートの配布

平成 23 年度（2011 年度）から、工学部の新 1 年生に対して「ステップアップノート」の配布

を行っており、工学部学生のポートフォリオとして利用している。

## 第3節 学生授業評価・教員授業自己評価

工学部の点検・評価委員会では、学生授業評価データを利用して、優秀授業の表彰を行っている。優秀授業の選考は、「学生授業評価表彰実施要綱」（平成19年制定、平成25年、平成29年改正）に従って実施しており、その概要は以下の通りである。

まず、学生授業評価の質問項目の中から下記の3項目の合計点を出す。

**項目2：理論や考え方、専門用語などがわかりやすく説明されましたか？**  
**項目9：あなたは授業の内容を理解しましたか？**  
**（実習・演習の場合は、内容理解や技能のレベルは向上しましたか？）**  
**項目10：この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？**

次に、授業評価アンケート回答数と合計点の相関を考慮した補正式から補正合計点を算出する。この補正合計点を評点とし、これにより学部では全開講科目数の10%、大学院では20%を「優秀授業」としている。ただし、授業評価アンケート回答数が10未満の授業は正確な評価が期待できないとして「優秀授業」の対象から除いている。

学部の「優秀授業」に関しては、昨年度、「学生授業評価表彰実施要綱」を一部改正し、学科間のバランスを考慮し、「各学科の補正合計点の上位3授業」とそれら以外の「学部全体での補正合計点の上位授業」を「優秀授業」とするように選考方法を変更した。また、大学院に関しては、これまでと同様、研究科全体での補正合計点の上位20%の授業を「優秀授業」としている。

また、学部では学部全体と各学科の最高点の授業を、大学院では各専攻の最高点の授業を「最優秀授業」として、これらの授業の担当教員を表彰している。

平成30年度（2018年度）開講の工学部と大学院博士前期課程（工学系）の授業について、上記3項目の合計点と授業評価アンケート回答数の相関（授業評価アンケート回答数が10未満を除く）を以下に示す。全開講授業数は、学部は378科目、大学院は88科目である。授業評価アンケート回答数が10未満を除く授業数は、学部は352科目、大学院は70科目である。

Y値 = Q2, Q9, Q10 の合計

学部

回答数分散:397.279

回答数、Y値の共分散:-1.841

回帰直線の傾き:-0.0046

大学院

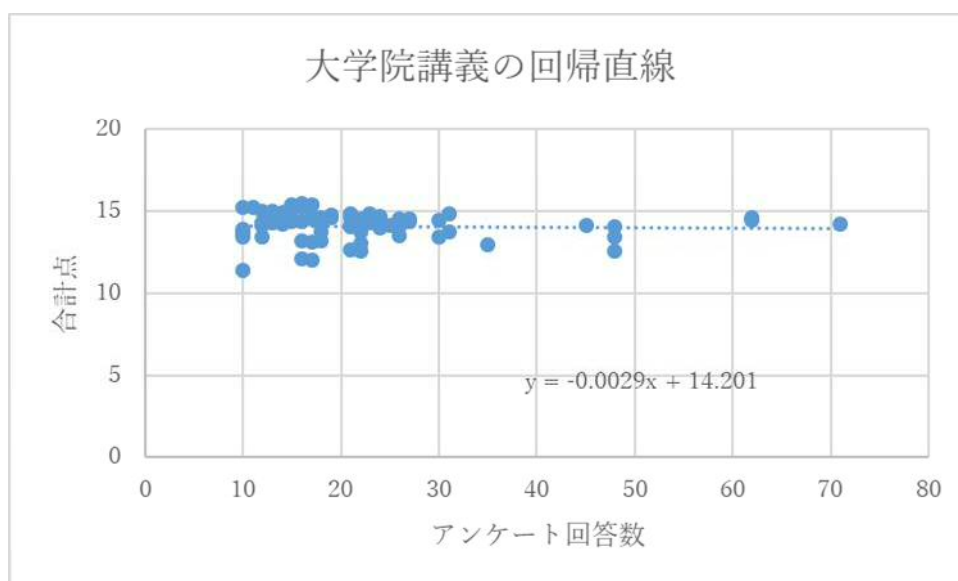
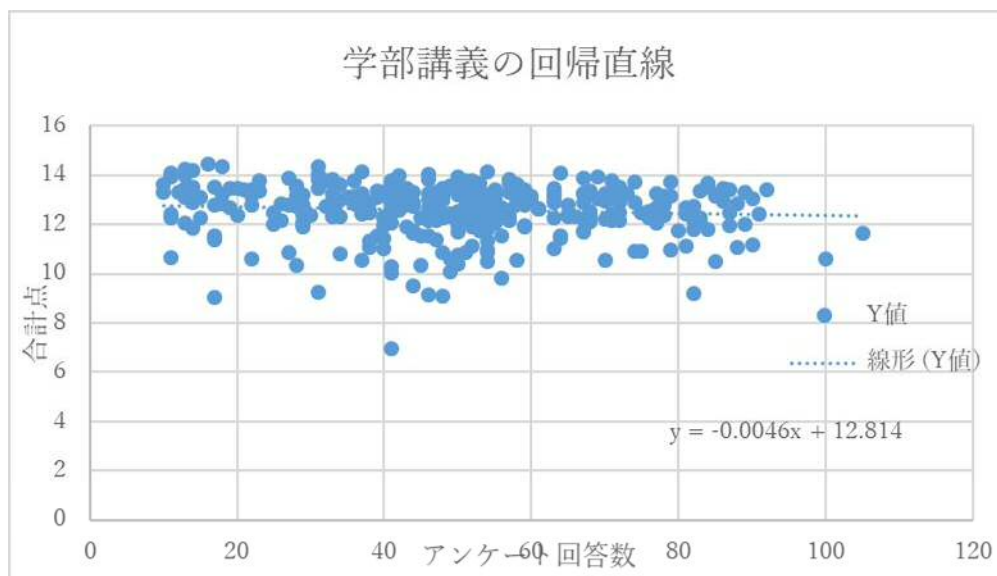
回答数分散:161.177

回答数、Y値の共分散:-0.461

回帰直線の傾き:-0.00286

$\alpha$  = 回帰直線の傾きの絶対値

Z値 = Y値 +  $\alpha$  \* 受講者数



前述の3項目の質問に対する学生の回答は、「そう思う」が5点、「ややそう思う」が4点、「どちらとも言えない」が3点、「あまりそう思わない」が2点、「そう思わない」が1点である。したがって、合計点が12点以上であれば「良い評価」、9点以上12点未満であれば「概ね良い評価」と考えて良い。

学部では12点以上の科目が全開講授業378科目の内301科目、9点以上12点未満の科目が76科目、9点未満の科目が1科目であった。全体平均値は12.6点であった。比率で表すと、「良い評価」が79.6%、「概ね良い評価」が20.1%で、両者を合わせると99.7%であった。なお、前年度(平成29年度[2017年度])は、全体平均値が12.7点、「良い評価」が76.4%、「概ね良い評価」が23.0%で

あり、平成 30 年度は「良い評価」が増加しており、「概ね良い評価」が減少しているが、全体平均値もほとんど変わらず、昨年度同様良好な結果である。

大学院では 12 点以上の科目が全開講授業 88 科目の内 81 科目、9 点以上 12 点未満の科目が 7 科目、9 点未満の科目は無かった。全体平均値は 13.2 点であった。比率で表すと、「良い評価」が 92.0%、「概ね良い評価」が 7.9%で、両者を合わせると 100%であった。なお、前年度（平成 29 年度 [2016 年度]）は、全体平均値が 12.9 点、「良い評価」が 82.7%、「概ね良い評価」が 17.3%であり、平成 30 年度も昨年度同様、良好な結果である。

しかしながら、このような評価に満足せず、今後も授業改善のための活動を進めていきたい。以下に平成 30 年度の学部および大学院の優秀授業の一覧を記載する。



平成30年度優秀授業一覧表(学部)				
科目名	担当者	学科等	評点	
常微分方程式及び演習	堀田 一敬	機械工学科	14.396	最優秀授業
応用解析II	堀田 一敬	機械工学科	14.390	
材料力学I	大木 順司	機械工学科	14.253	
流体工学I	望月 信介	機械工学科	13.950	
国際建設技術演習II	森 啓年	社会建設工学科	14.504	最優秀授業
土質力学演習II	吉本 憲正	社会建設工学科	14.311	
土質力学II	吉本 憲正	社会建設工学科	14.184	
エンジニアリングコミュニケーション基礎 II	COSTA LUIS	社会建設工学科	14.174	
応用物理学I	嶋村 修二	社会建設工学科	14.089	
エンジニアリングコミュニケーション II	森 啓年	社会建設工学科	13.983	
エンジニアリングコミュニケーション基礎 I	COSTA LUIS, 植村 隆	社会建設工学科	13.928	
応用化学工学実験II	堤 宏守, 鬼村 謙二郎, 岡本 浩明, 山吹 一大, 西形 孝司, 川本 拓治, 岩井 志帆, 外崎 剛, 森田由紀	応用化学科	14.086	最優秀授業
分析化学	吉本 信子	応用化学科	14.053	
反応速度論	吉田 真明	応用化学科	13.919	
電気回路II	山田 陽一	電気電子工学科	14.249	最優秀授業
半導体工学I	山田 陽一	電気電子工学科	14.170	
電気電子工学特別講義	小柴 満美子	電気電子工学科	14.151	
統計力学	鳴海 孝之	電気電子工学科	14.063	
数理計画法	若佐 裕治	電気電子工学科	14.016	
電気設計	山田 洋明	電気電子工学科	14.015	
応用解析II	堀田 一敬	電気電子工学科	13.909	
電気エネルギー伝送工学	山田 洋明	電気電子工学科	13.879	
プログラミングI	瀧本 浩一	知能情報工学科	14.079	最優秀授業
プログラミング演習I(実習を含む。)	瀧本 浩一	知能情報工学科	14.039	
ソフトコンピューティング	間普 真吾	知能情報工学科	13.782	
基礎デザイン実習I	久澤 謙二郎	感性デザイン工学科	14.413	最優秀授業
基礎デザイン実習II	久澤 謙二郎	感性デザイン工学科	13.954	
空気調和計画法	小金井 真, 金 炫兌	感性デザイン工学科	13.947	
建築施工学	大久保 孝昭	感性デザイン工学科	13.924	
反応工学	通阪 栄一	循環環境工学科	14.300	最優秀授業
環境プロセス論及び演習	佐伯 隆, 貝出 絢	循環環境工学科	14.192	
国際コミュニケーション	長井 正彦	循環環境工学科	14.114	
地球環境論	長井 正彦	循環環境工学科	14.011	
循環環境工学実験II	今井 剛, 田中 一宏, 通阪 栄一, 江口 毅, 比嘉 充, 安川 政宏, 遠藤 宣隆, 隅本 倫徳, 山本 豪紀, 佐伯 隆, 貝出 絢, 小淵 茂寿, 樋口 隆哉, 長井 正彦, 熊切 泉, 新苗 正和, 鈴木 祐麻, 前田 修一	循環環境工学科	13.905	
テクニカルコミュニケーション α	Gilmour Graeme John	工学部	14.514	最優秀授業
テクニカルコミュニケーション I	Gilmour Graeme John	工学部	14.255	
テクニカルコミュニケーション I	COSTA LUIS, 植村 隆	工学部	14.050	
テクニカルコミュニケーション I	Gilmour Graeme John	工学部	13.991	
*講義総数378、その内アンケート数10以上の講義数352				
*講義総数378の10%として、38件を表彰				



## 第4節 FD実施経費報告書

昨年度実施したFD実施経費を下表に記載する。

令和元年度 各学部・研究科FD実施経費報告票				
部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
工学部	優秀授業の表彰	消耗品, 印刷費	3千円	学部及び大学院の授業改善
	工学部ポートフォリオ(ステップアップノート)の改訂	消耗品, 印刷費	56千円	学部新生生に対する教育改善の準備
計			59千円	

## 第5節 来年度の課題

- ① 教員授業自己評価の入力率向上に関する組織的な取り組み  
これまでも、入力率向上のために学科長・専攻長会議などにおいて、学科長などを通して入力を促すことをしている。今後もこのような対応をお願いしていく。
- ② 授業外学習時間の確保, 適正な成績評価  
工学部では、JABEE に代表されるように、工学教育における学習時間の確保, 適正な成績評価についての十分な理解とその実践がなされているが、引き続き、各学科に実践をお願いしたい。
- ③ 共通教育における試験監督体制  
引き続き、問題点を整理した上で適正な試験監督体制を検討したい。

## 第10章 農学部のFD活動

### 第1節 授業公開

#### 1. 生物資源環境科学科の授業公開（ピアレビュー）

生物資源環境科学科では、本年度は、教員の授業を公開し、複数教員によるピアレビューを実施し、教員どうしの意見交換が活発に行われた。以下に、本年度に実施した公開授業（1件）を示す。

- (1) 豪雨災害軽減のための基礎研究の魅力～雨雪を測る

日時：2019年5月24日（金）15:00～ 鈴木 賢士 准教授

#### 2. 生物機能科学科の授業公開（ピアレビュー）

生物機能科学科では、「生物機能科学科セミナー」として、教員の授業を公開し、複数教員によるピアレビューを実施してきた。本年度も、公開授業が行われ、教員どうしの意見交換が活発に行われた。以下に、本年度に実施した公開授業（6件）を示す。

- (1) 脂質修飾タンパク質の網羅的探索と機能解析— オルガネラの形成・分解に関する*N*-ミリストイル化

タンパク質

日時：2019年4月26日（金）17:00～ 内海 俊彦 教授

- (2) メタン発酵における共生的プロピオン酸代謝機構の解析とその展望

日時：2019年5月10日（金）16:00～ 高坂 智之 助教

- (3) 産業微生物のグルコース代謝に関する研究

日時：2019年6月28日（金）17:00～ 片岡 尚也 助教

- (4) 海藻から放出される香り成分とその機能性

日時：2019年10月24日（木）17:00～ 赤壁 善彦 教授

- (5) 植物のフェロドキシンとフェレドキシン—NADP<sup>+</sup>還元酵素との相互作用：NADP(H)によるアロステリックな調節

日時：2019年11月22日（金）17:00～ 木股 洋子 准教授

- (6) 骨格筋への物理的刺激的の功罪

日時：2020年1月23日（木）17:00～ 宮田 浩文 教授

### 第2節 学部・研究科主催FD研修会

# 1. 令和元年度 アラカルト FD 研修会「障害等のある学生への支援シミュレーション」(農学部 FD 研修会)

**日程** 令和元年 10 月 16 日(水)  
 [吉田地区] 13:30~14:00  
**場所** 農学部・共同獣医学部大会議室  
 (吉田キャンパス)  
**講師** 岡田 菜穂子  
 (学生支援センター 准教授)  
 田中 亜矢巳  
 (学生支援センター カウンセラー)  
**参加者** 26 名(アンケート 24 枚回収)



## 内容

研修会では、本学における障害学生の修学支援について説明があった。本学では平成 28 年度から、障害学生が大学に対して支援を要請できる制度を導入している。学生特別支援室 (Student special Support Room。以下、SSR) は障害学生修学支援の拠点として、学内の様々な組織と連携しながら、障害学生の支援とコーディネートを行っている。

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	8	33.3%
良かった	16	66.7%
どちらとも言えない	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	24	100.0%

SSR では、障害学生だけではなく、障害が疑われる学生、障害の傾向が強い学生の支援も行っている。学生からの修学支援の申し出には、学生本人が支援を希望する意思が明確であること、支援の根拠となる書類 (診断書、障がい者手帳など) を持っていることが必要となる。SSR への相談件数は、平成 26 年度は 326 件であったが、平成 30 年度は 2,669 件に急増している。これは、潜在するニーズがあること、支援の仕組みを利用する学生が増えているためと考えられる。近年は障害の種類や相談内容が多様化する傾向があり、支援対象者に占める申請者の数が増加する傾向にある。日本学生支援機構では高等教育機関における障害のある学生の在籍・支援状況の実態調査を毎年実施しているが、その結果によると障害のある学生の在籍率が増加しており、障害種では特に精神発達、病弱・虚弱が増えている<sup>1</sup>。これらの障害のある学生の増加傾向はしばらくの間続くと考えられる。本学の月別の相談件数については、修学スケジュールとの連動が見られる。これは修学と関係のある相談が多いことによる。

本学では、支援を申請した学生からの要望に応じて、授業の担当教員に対して、学生が抱える障害の内容と授業中に必要な支援について情報提供をするために、配慮願を配布している。これは担当教員が授業の目的や形式に合わせて支援の内容を検討する際の参考にしてもらうことを目的としている。

次に、障害学生の修学支援のシミュレーションとして、診断の有無、支援を希望する意思の有無による支援の利用の仕方を、よくあるパターン 3 つに分けて紹介された。まず、大学入学以前に診断を受け、本人の障害理解が進んでいて、支援を希望する意思が明確な場合である。このようなケースでは、修学や就職についての確かつ円滑な支援を行うことができる。次に、大学入学後に初めて支援を希望する場合である。これに該当する相談件数は比較的多い。例えば、大学の授業でグループワークやプレゼンテーションに困難を感じてチューター等に相談して、SSR への相談を勧められて来訪する

<sup>1</sup>病弱や虚弱の増加は、精神障害による 2 次障害による可能性もある。

ケースがある。このような場合、SSR では面談を通じて、修学上の問題、得意分野等について整理を行う。その過程で、本人がこれまで必要と思わなかったことについて問題点を発見し、有効な支援につながることもある。ただし、支援には診断もしくは障がい者手帳などが必要であるため、すぐに支援の開始ができないこともある。このようなケースでは、保健管理センターに相談することがある。また、必要に応じて、学期の途中から教員に配慮願を配布する。もうひとつは、診断を受けておらず、支援希望の意思がない学生の場合である。これについても相談件数が非常に多い。周りから見て、その学生が明らかに困っている状況にあっても、本人にその自覚がない場合は、本人の認識と周りの対応のずれがないかを見極めながら、支援を慎重に検討する必要がある。このような学生がいたら、SSR に相談してもらいたい。

農学部における障害学生への対応では、実験への対応がポイントである。これまでの実験における配慮の例には、実験室までのアクセス配慮、実験室内での導線確保、座席の位置の工夫、紙媒体での資料配布、重要事項の文字による共有などがある。これらはすべて必須とは限らないが、それぞれのケースに応じて検討する必要がある。SSR に連絡いただければ、支援内容の整理や検討などサポートを行うこともできる。その際には、支援に必要な機器についても貸出や助言をすることも可能である。

今後とも、教職員からも SSR を周知していただきたい。気になる学生がいる場合は、今後のスムーズな対応につなげるために、SSR にご連絡いただきたい。SSR から教員に授業等についてご相談させていただくこともあるが、その際は教職員のご協力をお願いしたい。

講演後には以下の質疑応答があった。

**Q1** SSR への相談が増加する傾向は、今後も続くか。

**A1** まだ潜在的なニーズがあるため、増加傾向は続くと思われる。全国的な傾向も同様である。その一方で、支援が軌道に乗った学生については必要な対応事項が減るため、教職員とスムーズな対応ができれば、相談対応の負担は軽減できると考えている。

**Q2** 少し問題がある学生が居た場合に、相談窓口は SSR の他に、学生相談所や保健管理センターなど複数の窓口があるが、どの窓口を紹介すればよいのか。

**A2** 学生特別支援室は学生本人には紹介しにくいかもしれない。紹介しやすい窓口としては学生相談所ではないかと思う。睡眠の問題や気分の落ち込みなど医療的な内容であれば、保健管理センターが良いかと思われる。窓口は複数あるが、それぞれの部署で必要に応じて連携しているので、どちらの窓口にも相談されても構わない。紹介しやすい窓口をご利用いただければと思う。

**Q3** 視覚障害や聴覚障害の学生は、どのような支援が考えられるか。

**A3** 点字ユーザーの場合は点訳、読み上げソフトの利用や対面朗読による音声化や、指示や状況の言語化など様々な方法がありうる。個人によって障害の程度や種類が異なるため、支援の方法も異なる。

**Q4** 支援を受けた学生の就職活動や就業状況についてデータは蓄積して利用されているか。

**A4** 障害等のある学生の修学支援を主な業務とする SSR で全容を把握するには限界がある。今後、教職員や就職支援室と連携して、データを共有し、有効な支援につなげてゆきたい。

研修会後のアンケートには、「大学の取り組みの状況と自分の対応の方法が理解できた」、「SSR の支援体制が分かった」との回答があった。また、今後希望する研修会については、「SSR 支援機器の紹介。就職に関するお話し」、「今回のような学生支援の内容で、実験やグループワークなどの理系特有科目での実際の対応例（他大学の過去の例）など知りたい」、「精神的な問題を持つ（または在学中に持つようになった）学生への対応。教員はどうするべきかについて」、「大学特有のしくみや情報につ

いての理解が進むような内容（今回の内容はすごく合っていると思います）」、「学生対応について」、「発達障害」、「具体例の紹介」、「学生の支援について」、「今回のような内容」、「障害学生支援」、「発達障害学生とのつきあい方」、「同一性障害といったもの」、「教育改善技術」との回答があった。

## 2. 令和元年度 教育改善FD研修会(農学部)

日程 令和元年12月18日(水)  
[吉田地区] 13:30~14:00  
場所 農学部大会議室  
(吉田キャンパス)  
講師 林 透  
(大学教育センター)  
参加者 26名(アンケート22枚回収)

### 内容

本研修会では、修学支援システムにおいて運用可能な学修ポートフォリオの意義や機能について説明があった。

第3期認証評価に向けて教育の内部質保証が組織の各階層で重要とされている。それには3つのポリシーを軸とした内部質保証と教学マネジメントによって、教育による学修成果が上がっているか検証と改善を行う必要がある。具体的には、学習成果に加えて学習過程も重要視されており、学びを振り返る学修ポートフォリオが欠かせないツールとなっている。そこで、本学ではeポートフォリオを修学支援システムで取り扱えるように整備を行うことになった。その特徴やメリット、効果的な利用方法、システム環境整備の状況、及び利用可能な機能や画面構成等について説明があった。

講演後には以下の質疑応答があった。

表1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	4.5%
良かった	14	63.6%
どちらとも言えない	7	31.8%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	22	100.0%

Q1 農学部はeポートフォリオになれば利用する。4月から利用できるか。

A1 利用できる。

Q2 個人情報が含まれるが、研究に用いられる場合の制限はどうするのか。

A2 学内の教育目的のみの研究を想定している。個人情報への配慮を行う。

Q3 ポートフォリオの内容を閲覧できるのは学生本人と指導教員のみか。

A3 基本的に、そのように想定している。

Q4 メタ認知は向上させることができるのか。

A4 ワークを行うことでメタ認知を向上させることができる。

研修会後のアンケートでは、「eポートフォリオの具体的な運用方法」、「ポートフォリオを活用します」、「する人はするので、しない人をどうするか。教員の努力以外のシステム作りが大事ではないかと思う」、「心に響かない」、「2040年となると遠い未来に見えます。私を含め、それまで定年になる人

は無関係のように見えます」との感想があった。今後参加したい研修会については、「学生に関するもの」、「授業改善」、「学生指導」、「大学の新しいルール、教育技術に関する情報の共有」、「学生のやる気（特に研究活動に対する）を上昇させるためにはどうすれば良いか」とのコメントがあった。

### 第3節 教育改善に関する活動

シラバスに予習、復習の学習時間の目安を明記するなど学生の学習を促す工夫を施した。カリキュラムポリシーにより即するために、講義科目の再検討を行ない、新入生に対する理系基礎の補習授業科目を開設した。学生実験項目の改善も検討した。

## 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

### 1. 学生授業評価

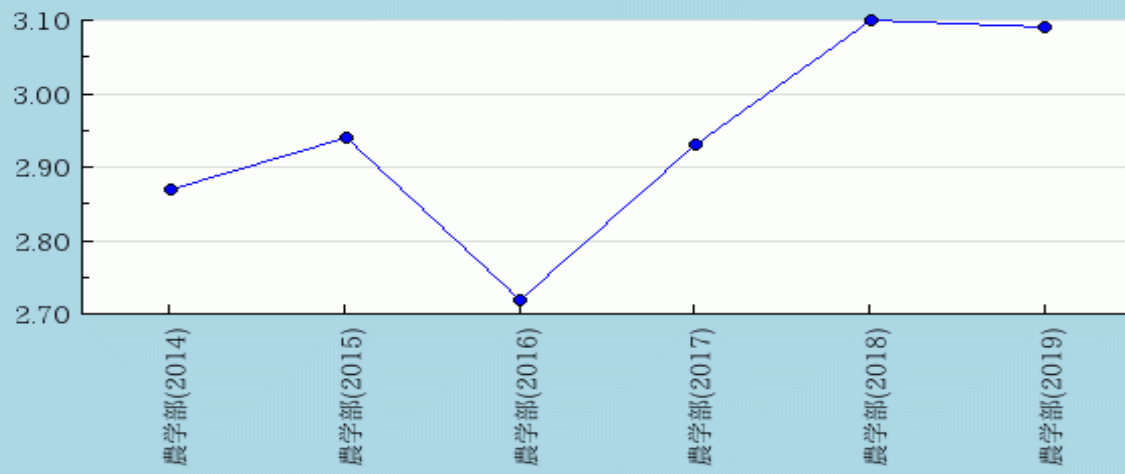
授業街学習時間はほぼ横ばい、学習目標達成は前年度をやや下回っていたが、その他の項目は昨年より増加していた。

回答数

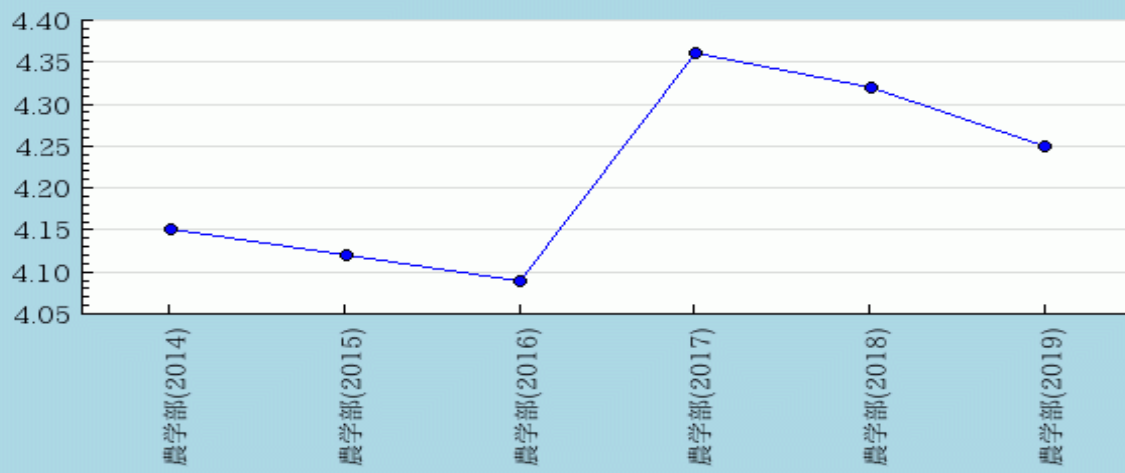
	講義	講読	演習	実験・実習	語学（共通教育）	語学（農学部専門）	その他	語学（人文学部専門）	未指定	合計
農学部(2014)	2866			610						3476
農学部(2015)	2815			535						3350
農学部(2016)	2790			484					21	3295
農学部(2017)									3414	3414
農学部(2018)									3441	3441
農学部(2019)									2756	

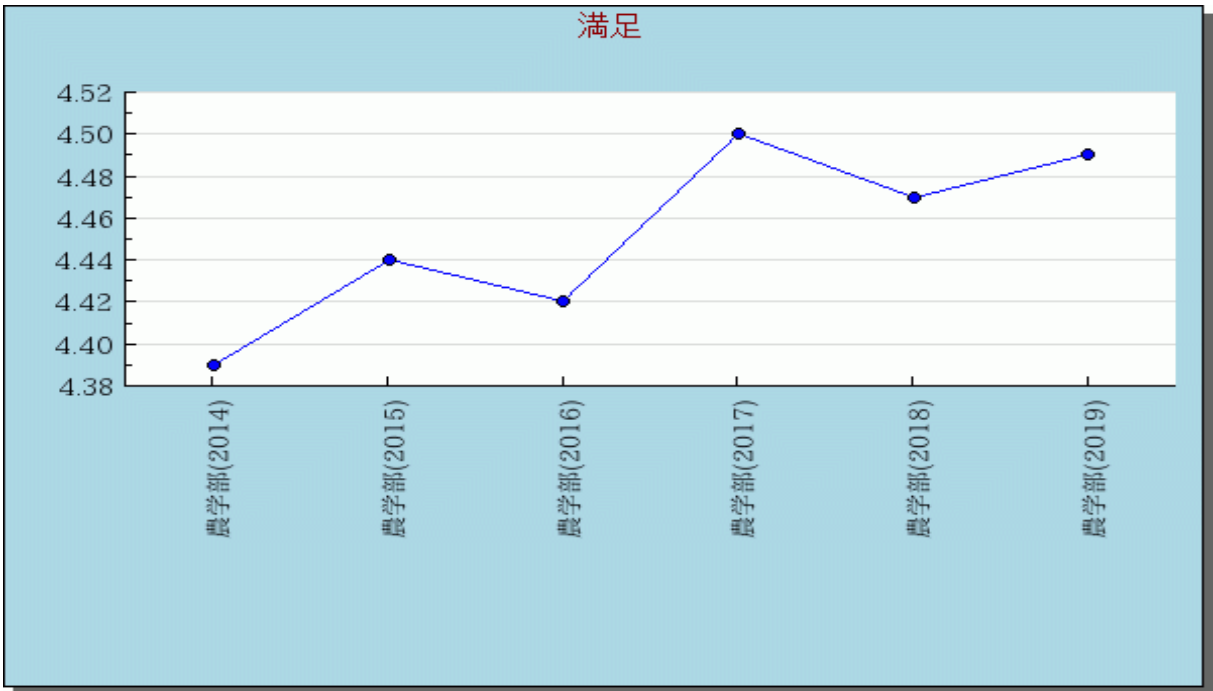
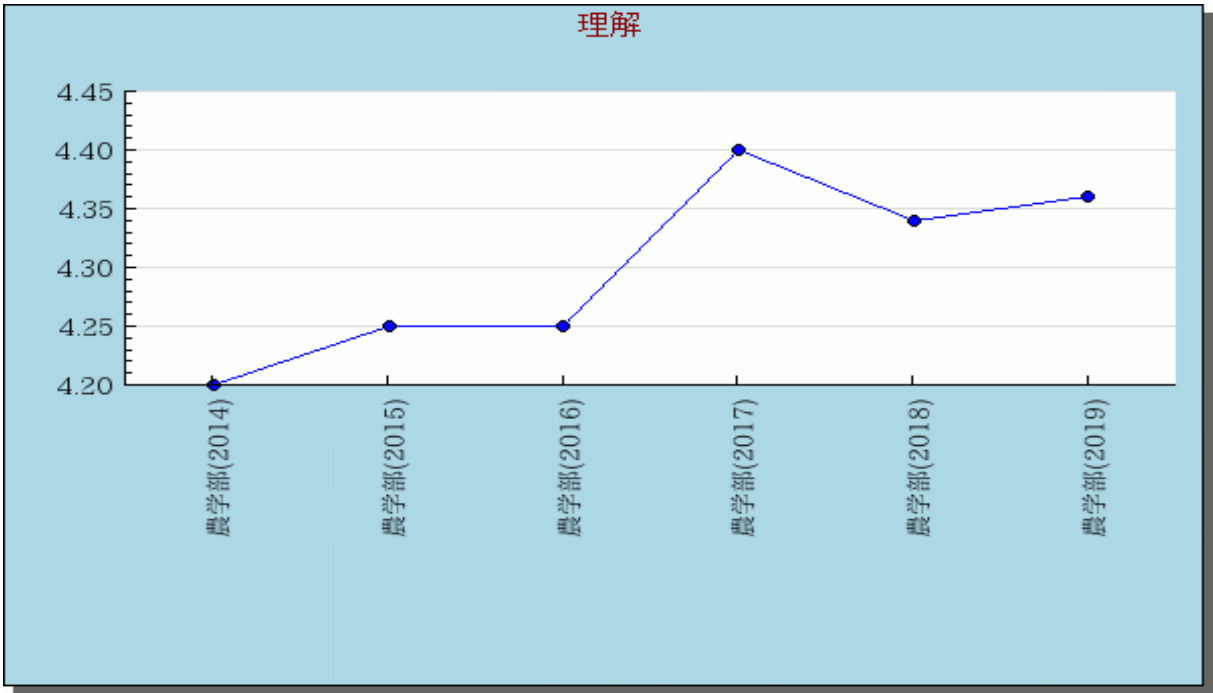


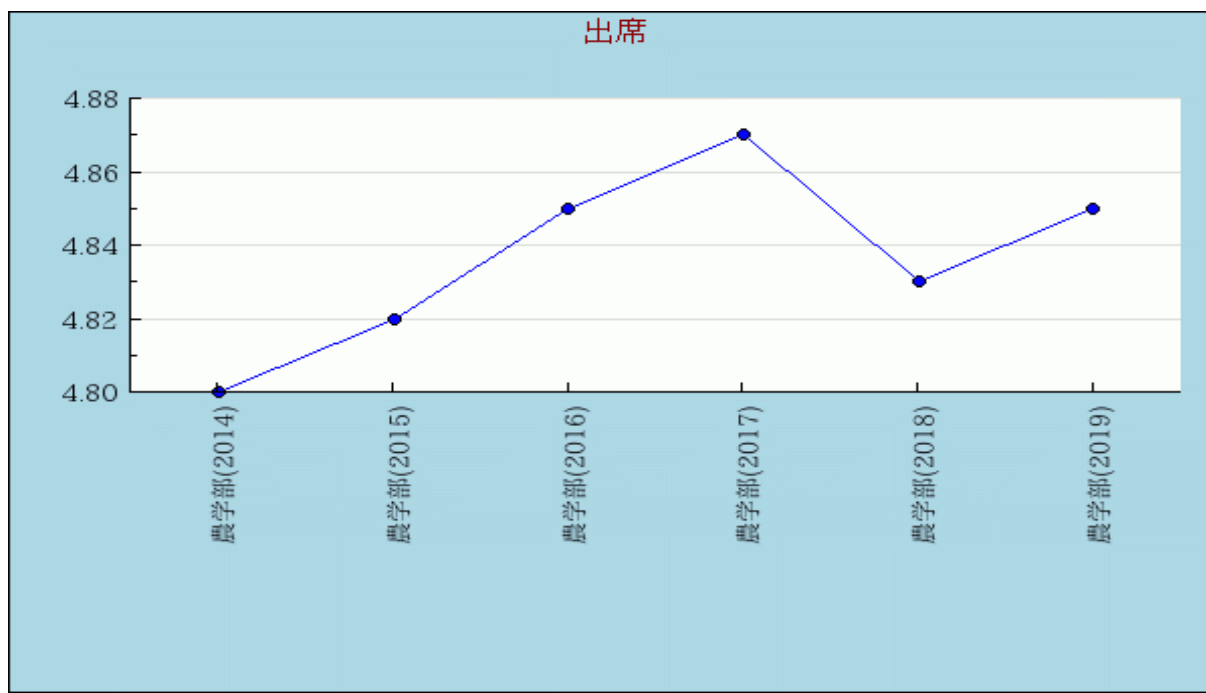
授業外学習時間



学習目標達成







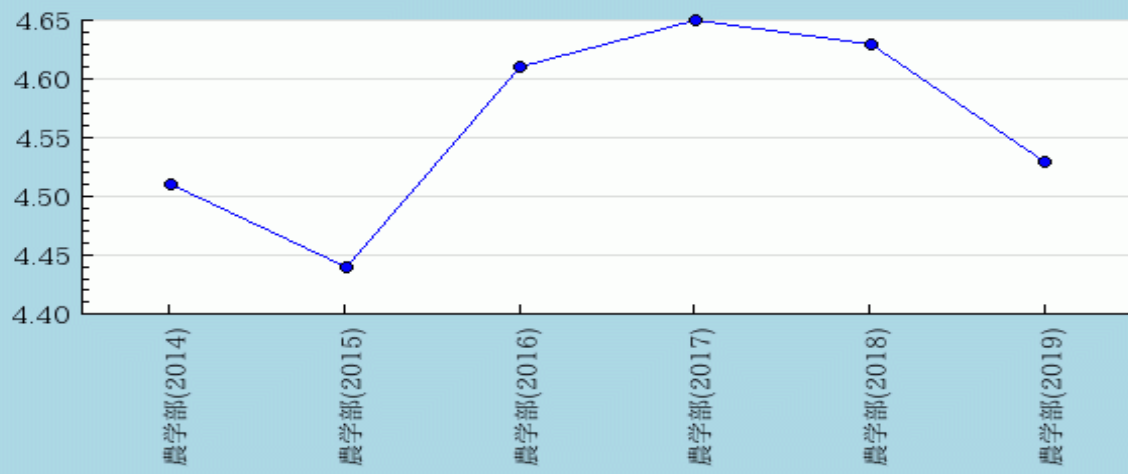
## 2. 教員授業評価

学生評価と同様に学習目標達成は昨年より下回ったが、その他の項目は昨年度よりやや上回る結果となった。

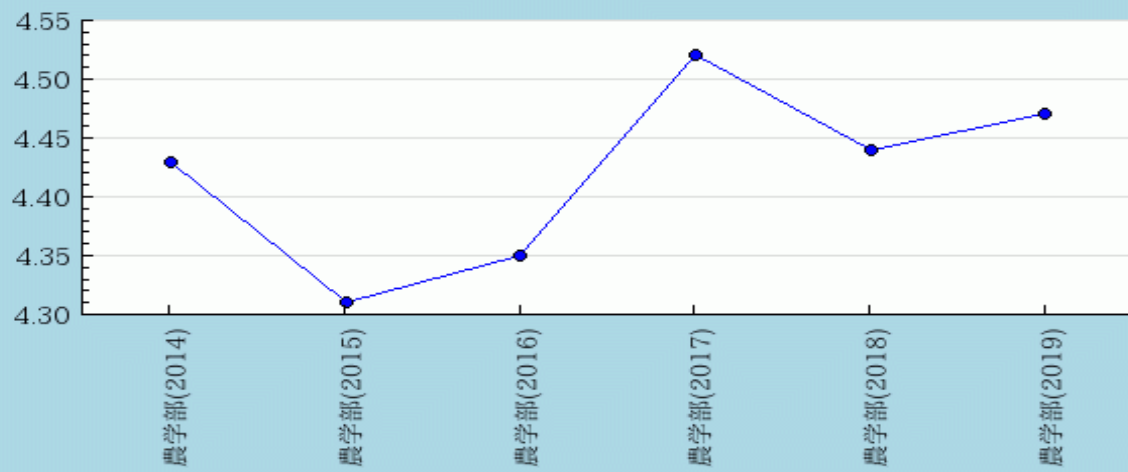
### 回答数

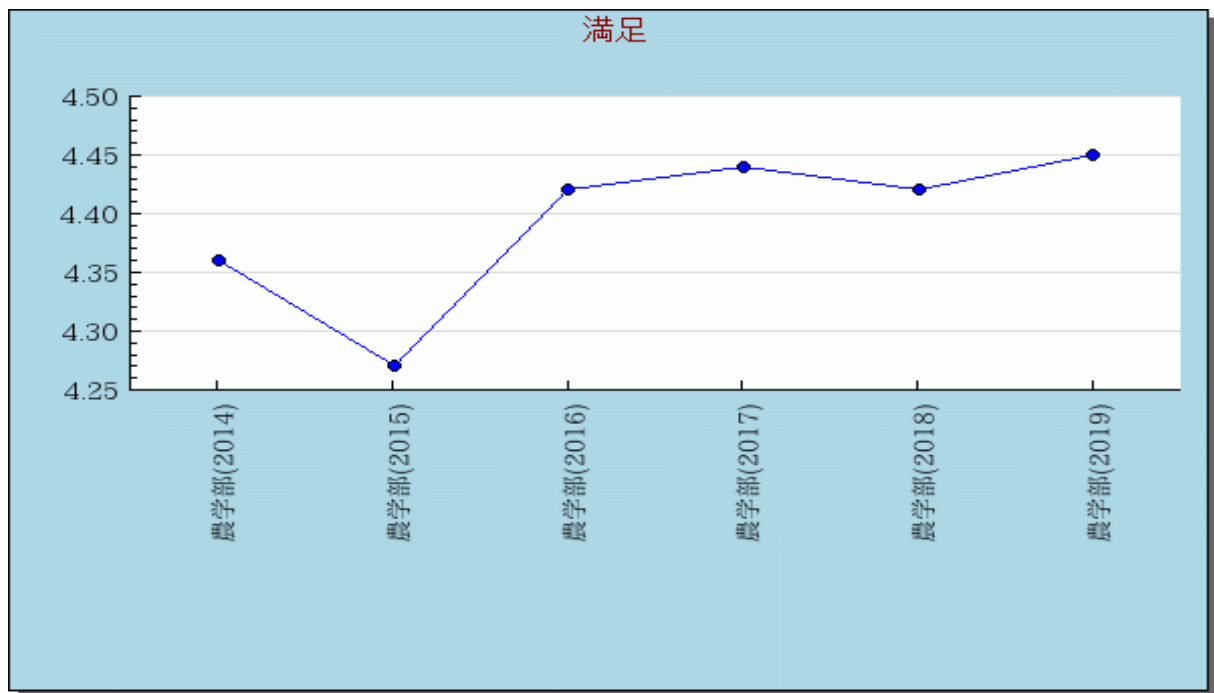
	講義	講読	演習	実験・ 実習	語学 (共通 教育)	語学 (農 学部 専門)	そ の 他	語学 (人 文学 部専 門)	未 指 定	合 計
農学部(2014)	62			25						87
農学部(2015)	59			29						88
農学部(2016)	41			15				1		57
農学部(2017)									66	66
農学部(2018)									59	59
農学部(2019)									38	38

学習目標達成



理解





## 第5節 FD実施経費報告書

本年度はFD実施経費の申請はなかった。

## 第6節 来年度の課題

### 1. ピアレビュー

生物資源環境科学科におけるピアレビュー数が少なかった。次年度は、これまで一度もピアレビューに関わったことがない教員に対してピアレビューへの参加を勧めるとともに、ピアレビュー実施数を多くしたい。また、他の教員の授業を参観できるようなシステムについても再検討したい。

### 2. 学生授業評価および教員授業評価

学生、教員共に学習目標達成が昨年度より下回っており、今年度は改善していく必要がある。

# 第 11 章 共同獣医学部の F D 活動

## 第 1 節 授業公開

### 1. 獣医学セミナー

#### ① はじめに

本学部では教員間のピア・レビューとして教員が持ち回りで講師を務める“獣医学セミナー”を開催している。教員が教員・学生を対象として各教員の研究内容を伝えるセミナーを定期的に開催し、学部の研究力・教育力の向上を図ることを目的としている。本年度は 3 名の本学部教員が講師としてセミナーを開催した。

#### ② 開催概要

##### 1. 産業動物疾病における画像診断支援

講師：田浦保穂 教授（臨床獣医学講座 大動物臨床学分野）

日時：令和元年 4 月 24 日（水）16：00－17：00

場所：獣医学研究科棟 4 階 大講義室

参加者数：35 名（教員 14 名、学生 17 名、院生・その他 4 名）

内容：牛・馬・豚・鶏など産業動物獣医学の最終目的は、安定した安心・安全な臨床と食品の供給と考える。それには臨床獣医学と家畜衛生学・公衆衛生学・食品科学などの病態・予防獣医学と連携すべきであり、従来の一般法に加えて、飼養管理衛生や生命倫理および HACCP 等の食品安全管理を強く意識した教育研究が求められる。また高度な教育研究には設備等のハード面とともに、貴重な臨床症例や病理検体等の収集および参加型臨床実習等におけるマンパワーが必要不可欠である。私達はこれまで、動物の飼養管理衛生や動物福祉に十分配慮された高度な産業動物臨床や病理および食品科学分野の教育研究推進を試み、従来の動物医療センターだけでは困難であった産業動物の集団健診やフィールドでの群単位の調査研究、さらに家畜衛生・病理・公衆衛生食品衛生など、分野を越えた教育研究連携をしており、格段の教育研究効果が得られている。時は AI の時代に突入した。現在 AI と言えば人工知能（Artificial Intelligence）が一般的で、獣医学領域で一般的な人工授精（Artificial Insemination）は人医学では AIH や AID と略され、最近では死亡時または死後画像診断（Autopsy imaging; Ai）という AI も出てきた。小動物獣医臨床においては X 線 CT（CT）や磁気共鳴画像（MRI）などを使用して多くの研究が報告されているが、家畜伝染病予防法等により確定診断を余儀なくされる産業動物獣医療においては、病理解剖による診断が主であり、生前画像と Ai 診断を一体化した研究は未だ少ない。私達は世界に先駆けてウシの頭部疾患の MRI 検査等を実施しその有用性や画像診断支援を行ってきた。これらは産業動物疾病の臨床的画像診断支援だけでなく病理診断支援ツールとして期待される。山口大学共同獣医学部は鹿児島大学同学部と教育連携しながら、獣医学教育の国際水準の一つである欧州基準（EAEVE）を 2019 年 6 月にアジアで最初にクリアできるよう準備中である。これまで脳脊髄疾患疑似患牛に対して MRI や CT など画像診断を積極的に臨床応用してきたが、臨床と病理学の教育連携が指摘された。産業動物の臨床と病理学の教育連携の是正・充実が緊急課題であり、画像診断をキーワードとして連携することにより、臨床獣医学研究の最新手法の選択肢が拡大し、臨床獣医学領域研究の飛躍的な進展、臨床獣医学と病態・予防獣医学との研究連携、および食品安全という新たな研究分野の構築や、研究の高度化に繋がると期待する。「人類のたゆまない歩み 恐ろしき・・・電子顕微鏡や GFP 等による細胞の画像診断から、電波望遠鏡等によるビッグバンの画像診断など、超ミクロ～超マクロまでも診られるようになったのだから・・・」

## 2. ウイルス進化と受容体

講師：西垣 一男教授（病態制御学講座 総合病性鑑定センター）

日時：令和元年5月29日（水）16：00－17：00

場所：iCOVER 101 室

参加者数：26名（教員13名、学生12名、院生・その他1名）

内容：レトロウイルスの感染の第一歩は、ウイルスの細胞への吸着とそれに引き続く感染受容体との相互作用である。この相互作用がウイルスの立体構造の変化および、ウイルスと細胞の膜融合を引き起こす。この過程にはpHの変化を必要とする場合もある。レトロウイルスはエンベロープ糖蛋白質の構造を進化させることによって、異なった感染受容体を用いる能力を有する。私達の研究室では、最近、2種のレトロウイルスの受容体を解明することに成功したので、研究手法なども含めて紹介し、この分野の意義や魅力を伝えたい。

## 3. ウシの下垂体を材料にした、新たな動物の性機能調節機構の発見

講師：角川 博哉准教授（臨床獣医学講座 獣医予防管理学分野）

日時：令和元年5月29日（水）16：00－17：00

場所：獣医学研究科棟4階 大講義室

参加者数：23名（教員8名、学生4名、院生・その他11名）

内容：下垂体前葉中のゴナドトロフは、繁殖のための重要ホルモンであるLHやFSHを分泌する、極めて重要な細胞です。同細胞からのLH・FSH分泌は、視床下部からのGnRHが受容体に結合することや、卵巣からのエストラジオールが核内受容体に結合することで調節されている、とだけ教科書は教えています。しかしこれらの知識レベルでは説明できない現象が現場では観察され様々な問題に結びつきます。私達は、ウシのゴナドトロフについて研究し、次のようなことを明らかにできたので紹介します。まずGnRH受容体はゴナドトロフの細胞膜中のリピッドラフトという特殊部位に存在することが解明できました。次に次世代シーケンサー等を用い、リピッドラフトには、GnRH受容体と同乗する、新規のGPCR型受容体の数種が存在することを発見しました。さらにそれら新規受容体による新たなLH・FSH分泌の調節機構も発見できました。このようにウシからは、ヒトも含めた他種に貢献できる知見が得られます。

## 2. 獣医学特別セミナー

### ① はじめに

本学部では学部の研究力・教育力の向上を図るため“獣医学特別セミナー”として外部から講師を招聘し、各分野の最先端の研究に教員・学生が触れる機会を設けている。本年度は4名の外部講師を招いて実施された。

### ② 開催概要

#### 1. 人工知能の基礎と獣医療応用への可能性

講師：石田 隆行先生（大阪大学大学院 医学系研究科 保健学専攻）

日時：令和元年6月6日（木）16：00－17：00

場所：獣医学研究科棟4階 大講義室

参加者数：18名（教員10名、学生5名、院生・その他3名）

内容：近年、人工知能がさまざまな分野に応用され話題となっている。AIがこのような大きな進歩を遂げたのは、深層学習という人工ニューラルネットワークが用いられるようになってからである。自然画像分類のコンペティションでは、すでに人の分類能をはるかに超えている。人の医療においても、特に画像診断領域で活発に研究が行われており、その診断精度も医師を超えたという報告がある。そこで、この講演では、AIの基礎をわかりやすく説明す

るとともに、AIの放射線医学への応用を例にとりながら獣医療 応用への可能性についても述べたい。

## 2. 野兎病菌の病原因子同定と、感染防御に必要な宿主因子の検索

講師：宇田 晶彦先生（国立感染症研究所 獣医科学部）

日時：令和元年7月2日（火）17：30－18：00

場所：農学部・共同獣医学部本館2階 大会議室

参加者数：25名（教員10名、学生、13名、院生・その他2名）

内容：野兎病菌 *Francisella tularensis* は二種病原体に指定される高病原性の細菌で、バイオテロへの応用などが危惧されている。通常はウサギ目や齧歯目の動物とマダニなどの節足動物の間で生活環が維持されているが、節足動物の吸血や動物の解体によりヒトへと感染する。しかしながら BSL3 に分類され、研究が難しいことからその病原性の解明はほとんど進んでいない。宇田晶彦先生は国立感染症研究所獣医科学部において、野兎病の疫学調査から基礎研究まで幅広く実施されており、今回は野兎病菌の病原因子および、宿主の防御因子について講演いただく予定です。

## 3. 魚類養殖における寄生虫病対策研究の現状

講師：白樫 正先生（近畿大学 水産研究所）

日時：令和元年8月7日（水）16：00－17：15

場所：獣医学研究科棟4階 大講義室

参加者数：16名（教員15名、院生・その他1名）

内容：魚類養殖において寄生虫病は最も古くから知られている疾病であるが、近年世界的に脚光を浴びつつある。その理由の一つとして、病害性が高いウイルスや細菌性疾病がある程度制御できるようになったため、限定的な対策しかない寄生虫症が目立ってきたことが挙げられる。一方で、養殖の多様化に伴い新しい寄生虫症も多く出現している。本セミナーでは前者の例として世界中の海産魚養殖で問題となっている扁形動物門単生綱に属する通称「ハダムシ」と、後者の例として近大マグロでも大きな問題である吸虫「マグロ住血吸虫」を取り上げ、対策研究の現状を紹介する。

## 4. エレクトロポレーションを用いたブタ胚でのゲノム編集と遺伝子改変ブタの作製

講師：谷原 史倫先生（徳島大学 社会産業理工学研究部）

日時：令和2年2月13日（木）16：00－17：15

場所：農学部・共同獣医学部本館2階 大会議室

参加者数：13名（教員6名、学生7名）

内容：ブタは生理学的、解剖学的性質や食生活も含めた生物学的特性がマウスと比較してヒトに近く、動物実験により得られた知見をヒトへ外挿しやすいとされる。遺伝子改変技術によってヒトの病態モデルとなるようなブタを作製することができれば、医学研究の大幅な発展が期待される。従来、遺伝子改変ブタの作製は、遺伝子改変を行った体細胞を用いた核移植によるクローンブタの作出（体細胞クローン法）によりなされてきた。近年、ZFN、TNALN、および CRISPR/Cas9 システムといったゲノム編集技術が確立され、その技術を活用してブタを含む様々な動物種で標的とする遺伝子の高効率な改変が可能になった。本セミナーでは、私たちの研究グループが徳島大学で取り組んでいるエレクトロポレーションを用いたブタ胚への CRISPR/Cas9 システムの導入によるゲノム編集と、それを活用した遺伝子改変ブタの作製例について紹介する。



### 3. 総合臨床セミナー

#### ① はじめに

本学部では学部の獣医臨床における研究力・教育力の向上を図るため“総合臨床セミナー”として年1-2回、1-2名の臨床系教員もしくは外部から講師を招聘し、教員・学生・学外獣医師を対象としたセミナーを実施している。本年度は

#### ② 開催概要

##### 1. 第16回山口大学共同獣医学部附属動物医療センター総合臨床セミナー

講師：末松 正弘先生（AMC 末松どうぶつ病院）

「気管虚脱の診断と治療-適切な診断、治療のためにできること」

平岡 博子先生（IDEXX LABORATORIES）

下ノ原 望先生（IDEXX LABORATORIES）

「知らなかったではもうすまされない?! 病変の成り立ちから考える上手な細胞診の使い方」

日時：令和元年12月15日（日）12:30-17:00

場所：獣医学研究科棟4階 大講義室

参加者数：74名

## 第2節 学部・研究科主催FD研修会

令和元年度 山口大学・鹿児島大学共同獣医学部 合同FD研修会 報告書

#### ① はじめに

本年度は、第6回目の合同FD研修会として鹿児島大学共同獣医学部主催により、令和元年9月17日（火）に鹿児島大学を主会場として実施され、両共同獣医学部教員の合計77名が参加した。

同研修会は、14時より鹿児島大学共同獣医学部 宮本 篤 学部長の挨拶の後、教育講演として鹿児島大学学術情報基盤センター サイバー・セキュリティ戦略室 佐藤 豊彦 特任教授により「鹿児島大学の情報セキュリティ」をテーマとした教育講演が実施された。その後、「共同教育のあり方について」をテーマとした意見交換会が、山口大学共同獣医学部 佐藤 晃一 学部長を座長として開催された。次いで、基礎、病態予防、伴侶動物臨床及び産業動物臨床の4分野に分かれ、遠隔授業システムも活用したワークショップが実施された。その後、分科会報告が各分科会世話役により行われた。最後に、山口大学共同獣医学部 佐藤晃一 学部長の閉会の挨拶により閉会となった。

#### ② 研修会次第

日時：令和元年9月17日（火）14時～18時

場所：鹿児島大学共同獣医学部（鹿児島大学主催）

山口大学共同獣医学部（遠隔授業システム）

##### 【プログラム】

14:00～14:05（場所：307 講義室）

開会の挨拶：鹿児島大学共同獣医学部 宮本篤 学部長

14:05～15:20（場所：307 講義室）

教育講演：「鹿児島大学の情報セキュリティ」

鹿児島大学 学術情報基盤センター サイバー・セキュリティ戦略室  
佐藤 豊彦 特任教授

15:30～16:00 (場所：307 講義室)

意見交換会：「共同教育のあり方について」

座長 山口大学共同獣医学部 佐藤 晃一 学部長

16:10～17:40 教育ワークショップ

基礎分野 (世話役：松元先生)

<鹿児島大学組織学実習室、山口大学2番教室>

テーマ：講義実習などの改善すべきこと

病態予防分野 (世話役：一二三先生)

<鹿児島大学302講義室、山口大学5番教室>

テーマ：総合感染症実習の現行の形と今後のあり方、その他の感染症・衛生系の講義実習について

伴侶動物臨床分野 (世話役：遠藤先生)

<鹿児島大学301講義室、山口大学動物医療センター>

テーマ：成績不振者への対応、学生のモチベーションの維持について、参加型臨床実習のあり方

産業動物臨床分野 (世話役：畠添先生)

<鹿児島大学307講義室>

テーマ：講義および実習(臨床前および臨床)の問題点等について

17:15～ (場所：307 講義室)

分科会報告：各分科会世話役

閉会の挨拶：山口大学共同獣医学部 佐藤晃一 学部長

18:00～20:00 情報交換会

鹿児島大学学術交流プラザ

### ③ 教育ワークショップ参加者

#### 1) 基礎分野

鹿児島大学会場：12名参加

山口大学会場：4名参加

#### 2) 病態予防分野

鹿児島大学会場：18名参加

山口大学会場：2名参加

#### 3) 伴侶動物臨床分野

鹿児島大学会場：15名参加

山口大学会場：3名参加

#### 4) 産業動物臨床分野

鹿児島大学会場：9名参加

#### ④ 各セッションの概要

##### 1. 教育講演

演題「鹿児島大学の情報セキュリティ」

佐藤豊彦特任教授（鹿児島大学 学術情報基盤センター サイバー・セキュリティ戦略室）

近年、大学におけるサイバー・セキュリティ対策が大きな課題となっており、教員個人での自己防衛が非常に重要な意味を持つ。国内最高峰のセキュリティ・サービス会社である株式会社ラックから、クロスアポイントメント制度を利用して鹿児島大学に出向されている佐藤豊彦特任教授により、大学におけるサイバー・セキュリティ対策および教員個人における自己防衛についての講演会が実施された。

##### 2. 教育ワークショップ報告

###### 1)基礎分野

###### 1. 講義・実習における両大学のシラバス内容の現状確認について

- ・ 生理学分野を除いて、講義のシラバスは両大学で一致していることを確認した。
- ・ 同様に実習もほぼ一致していたが、薬理及び実験動物分野でコア・カリに準拠しているもの若干の違いがあることが報告された。
- ・ 生理学分野もコア・カリに準拠してシラバスを統一する努力をする。

###### 2. カリキュラムの変更に伴う教育効果について

- ・ 学年の気質もあるが、教育効果が上がったという実感を感じられない。
- ・ 成績の二極化が見られ、下位者に酷い成績の者がいるのは憂慮すべきである。このことが講義のターゲットの設定を難しくしている。
- ・ 講義が先行することで実習での補講の負担が減った。
- ・ 専門科目を1年前期から開始することには否定的な意見が出された。

###### 3. 実習に使用する動物の種類と数について

- ・ EAEVE で指摘のあった種と数は最小限必要である。
- ・ 山大では動物への侵襲性の高い実習を減らすゼロプロジェクトを推進中である。ビデオ、模型、シミュレーター等の代替品の利用ばかりでなく開発も必要である。
- ・ 学生から動物利用の要望もあり、それを実施すると学生の反応が良かった。
- ・ 生体を使った実習は必要だが、下等な動物への変更や数を減らす工夫をしている。
- ・ 動物実験に対する一般の賛同者の数を増やす努力も必要である。

###### 2)病態予防分野

以下の3つの議題について議論した。各議題の内容等については下記のとおり。

###### ①総合感染症学実習（山大）、家保実習（鹿大）について

最初に双方の実習の今年度の実施状況や実習内容について報告した。共同獣医学部が発足した当初は鹿児島大学の学生も総合感染症学実習を受講していたが、現在は受講しておらず、このような状況になった背景について議論があった。共同獣医学部であるにもかかわらず、お互いに違う内容の実習を行っていることに疑問を持つ学生もいるとの意見があり、希望者する学生はもう一方の大学の実習に参加できるように取り計らうなどの対応策も必要ではないかという意見が挙がった。これについては学生が負担する旅費の問題も合わせて指摘された。双方の実習の内容をすり合わせすることも検討されたが、山大は総合感染症学実習を「コア科目」、鹿児島大学は家保実習を「アドバンス科目」と捉

えており、根本の部分揃える必要があることという意見も挙がった。シラバス上はコアの部分を作り、双方の実習の担当者同士で内容をすり合わせることは可能であるとのことであった。

多くの先生方からたくさんの意見が出たが、双方の実習の内容、シラバスの内容等を病態予防分科会で協議し、意見を取りまとめたものを執行部に上げ、今後の双方の実習の方向性を検討していただく、ということで最終的には落ち着いた。

### ②食品衛生学、と畜場実習など EAEVE に関わる実習について

これまでのワークショップ等で十分な議論がなされたうえでシラバス・実習内容が統一されており、特に問題はない。

### ③感染症系の講義について

動物感染症学と人獣共通感染症学の講義の期間が重なっていること、また H30 年以降入学者からは鹿児島大学では受講する時期が早くなることについて議論があった。特に後者について、受講時期が早すぎるなどの問題が指摘され、学生からの不満が出ることも懸念されるとの意見があった。



### 3) 伴侶動物臨床分野

伴侶動物臨床分科会では以下の 3 項目について検討を行った。

#### ①成績不良者への対応

臨床系科目は学年が進んでから組まれていることもあり、成績不良者であっても心情的に不合格にしにくい実情がある。この点について出席者間で再確認したところ、追再試験は実施するが、成績の評価は厳格に行うことで意見の一致を見た。ただし開講時期によっては、5 年生の後期が再試験実施時期の最後となる可能性があるため、このような科目については事前にこの点を学生に周知する必要性も指摘された。オムニバス形式の科目では、再試験の実施が困難となることがあるため、内容を再検討しても良いのではないかという意見も挙げられた。再試験についてはまた開講中に出席が不足する可能性がある学生については、事前に担任あるいは指導教員に報告して注意してもらっている科目があることも報告された。

#### ②学生のモチベーションの維持について

双方向形式の講義では、やはり送信先にいる学生の居眠りなどが多い傾向が見受けられるため、何らかの対策が必要であることが確認された。ただし現状では具体的な対策法は示すことはできなかった。参加型臨床実習については、個人差はあるものの、履修時間数が増えたこともあり、やった分だけ学生は応えてくれているように感じられる、という意見が多かった。Day One Skill の習得については、参加型臨床実習に入る前から意識させることで、よりよい教育効果が上がる可能性が指摘された。いっぽうで Day One Skill の内容を現状よりより高度にすることでモチベーションがさらに上がるのではないかという意見もあった。参加型臨床実習の内容などについては学生からの意見聴取の必要性も報告された。

#### ③参加型臨床実習のあり方

今後カリキュラムの変更があり、全体的に前倒しになることになる。現在、参加型臨床実習を行っている時間枠に少し余裕ができる見込みである。その枠を含め参加型臨床実習の全体像をどのようなも

のにするか検討した。基本的な方向性は協議会の WG で検討されることになると思われるが、選択制にしてアドバンスコースを設定するという意見や、詰め込みすぎると授業の平坦化につながらない、あるいは就職活動や卒業論文の作成にも影響が出る、という考え方も議論された。もし時間的余裕ができれば、学生の相互乗り入れの是非についても検討してもよいのではないか、という意見が出された。



#### 4) 産業動物臨床分野

講義および実習（臨床前および臨床）の現状を確認し、その問題点等について意見交換を行った。現在、牛診療学Ⅰおよび豚診療学は鹿児島大学発信の双方向科目、牛診療学Ⅱ、豚診療学、獣医繁殖学はそれぞれの大学での科目である。例年、双方向科目では鹿児島大学の学生の成績が良い傾向にある。その理由として、そもそも鹿児島大学では大動物診療に興味を持っている学生が、山口大学より多いのではないかと意見があった。



また、山口大学の1年生への取り組みとして、牛、山羊、ポニーの飼養管理を生物学実験の科目として単位化したとのことであった。その目的は、低学年時から産業動物へふれあい、授業へのモチベーションを高めることであるとのことであった。

その他の科目および臨床前の実習はそれぞれの大学で行っているが概ね問題ないことを確認した。産業動物関連のポリクリについては、鹿児島大学が非常に多い現状であるが、山口大学でも Day One Skills は修得できているとのことであった。山口大学で産業動物に意欲を示す学生が鹿児島大学での産業動物系ポリクリの参加を希望した場合は受け入れてほしいとの要望もあった。また、鹿児島大学では牛の一次診療体制を構築できる段階にあるので、学部の執行部と協議の上、推進していくことが確認された。

## 第3節 教育改善に関する活動

令和元年度 共同獣医教育改善 FD 研修会

日程： 令和元年 10 月 23 日(水) 13:40～14:10

場所： 農学部・共同獣医学部本館 2階大会議室

講師： 林 透（大学教育センター准教授）

参加者： 18 名（アンケート回収 13 名）

#### 【研修内容】

まず初めに、共同獣医学部下田宙准教授より教育改善 FD 研修会の主旨の説明があった。続いて、学教育センター林透准教授より「学修ポートフォリオ」について説明があった。学修ポートフォリオを行う事で、「学修者の振り返りと成長のために」として利用し f て欲しい。学習の 3 つのポリシー（DP、



CP、AP) と内部質保証を高める為に利用して欲しい。学生の自律的な学びを推進するために、学修を振り返り、熟考する為の機会を作るために、行って欲しい。その振り返りの起点として、また振り返りのツールとしてポートフォリオが利用できる。さらに電子ポートフォリオについての説明があり、データが卒業時までシステム上にあることで紛失しない、かさばらない。また LMS (ラーニングマネジメントシステム) と連動させて使う事ができる。教員が資料の検索ができる等の便利な点が紹介された。さらに新就学支援システムにポートフォリオのメニューが用意された。まだ不十分な所はあるが、今後中身を充実し、活用しやすいようになる予定である。

### 【質疑応答・意見交換】

1. ポートフォリオについて他学部の状況について聞きたい。

基本的には YU CoB Cus を用いてポートフォリオが行われ、学生は自己評価している。評価の可視化することで授業を振り返っている。教育学部では以前から組織的にエクセルベースでポートフォリオを行っており、結果のデータ解析を行い、自分の教師像としての評価等に用いている。人文学部では学生との個人面談に紙媒体のポートフォリオを使用している。国際総合学部では DP を評価している。医学部は eYUSDL を使って国際認証資格の要件について可視化機能を使ってポートフォリオを行っている。また学年単位で設定を行っている。



2. 学習の成果についてはポートフォリオに載せることはできるか。

学生の実験レポート、教員が教育(例えば実験)しているところ記録としての写真、ビデオについてはデータとして載せることはできる。

### 設問1 研修会に参加した感想はいかがでしたか？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	2	15.4%
良かった	6	46.2%
どちらとも言えない	4	30.8%
あまり良くなかった	1	7.7%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	13	100.0%

## 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

### (1) 学生授業評価アンケート

令和元年度の学生授業評価アンケートは実施率が84%となっており、2015年度(平成27年度)から継続して80%を超えて推移している。

### 学生授業評価アンケート実施状況の推移

2017年度			2018年度			2019年度		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
101	89	88%	102	89	87%	106	89	84%

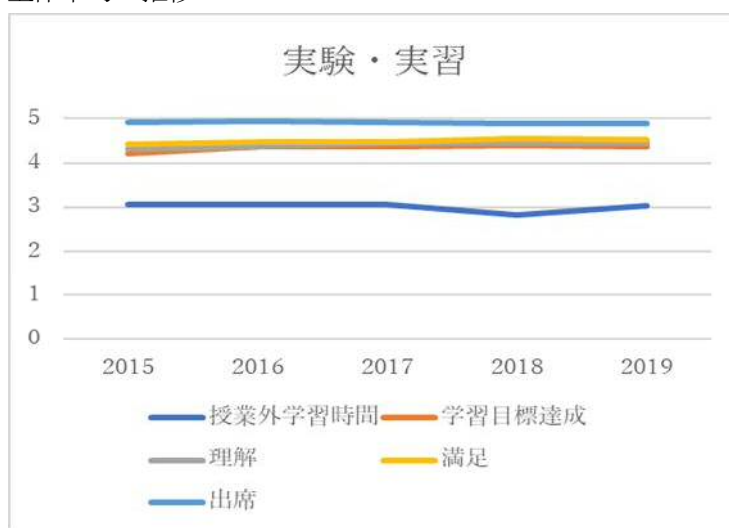
全額共通の質問5項目（授業外学習時間、目標達成、満足度、理解度、出席）については、ほぼ近年と同様の数値となっている。

授業外学習時間については、クリニカル・スキルスラボを整備し、シュミレーターを用いた基本的なトレーニングや録画講義の閲覧、コアカリに準拠教科書を始めたとした図書を備え、学生の自主的な学習の場としての活用が見込まれるため、学習時間の増加が期待される。

令和元年度の学生授業評価アンケート全学共通項目における全体平均

授業外学習時間		目標達成率		理解度		満足度		出席率	
講義	実験・実習	講義	実験・実習	講義	実験・実習	講義	実験・実習	講義	実験・実習
3.52	3.03	4.22	4.38	4.26	4.44	4.34	4.54	4.83	4.90

学生授業評価アンケート全学共通項目における全体平均の推移



## (2) 教員授業自己評価

令和元年度は、前年と比較すると改善傾向にあるが、実施数が少なく、実施率は17%であった。今後は教員に周知し、全教員間で教員授業評価を実施することについて、再度、共通した認識を持ち実施することが重要である。

表4 対象科目における教員授業自己評価実施状況の推移

2016年度			2017年度			2018年度		
科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率	科目数	実施数	実施率
72	35	49%	73	4	6%	75	13	17%

## 第5節 FD実施経費報告書

令和元年度 各学部・研究科FD実施経費報告書				
部局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金等)	執行額(千円)	FD活動の効果(簡潔に)
共同獣医学部	鹿児島大学共同獣医学部・共同獣医学研究科との合同FD研修会	旅費 24名	925	鹿児島大学と共同でFD研修会を開催することで、両大学教員のコミュニケーションを深め、共通又は個別に抱える課題や問題点を把握することができた。
連合獣医学研究科				
共同獣医学研究科	獣医学特別セミナー	講師謝金・旅費 3名	188	教員・学生が各分野の最先端の研究に触れる機会となり、学部全体の研究力や教育力の向上につながったと考えられる。
<b>計</b>			<b>1,113</b>	

## 第6節 来年度の課題

共同獣医学部は、本年度、欧州獣医学教育認証機構（E A E V E）による認証を取得することができた。持続的に世界標準の教育を担保するため、教育改善を行うとともに、教員の教育力向上のため、鹿児島大学共同獣医学部と合同FD研修会を行ってきた。積極的に対面でのFD研修会を行い、物理的に困難な場合には双方向遠隔講義システムの利用によって研修会の開催を企画している。

学生授業評価及び教員授業自己評価では、それらの結果を教育改善に繋げていく。教員授業自己評価の入力率向上のため、FD担当教員による未入力者への督促等を行い、入力率の向上に取り組む。

授業外学習時間の確保については、クリニカル・スキルスラボを整備したことにより、学生の学習内容・学習環境が改善され、主体的な学習が期待される。

また、適正な成績評価のため、成績評価に関する異議申立制度について、全学生へオリエンテーション開催時に説明を行っている。併せて、授業毎の成績分布状況を全教員が確認し、今後、必要に応じて評価方法の改善等を行うことができるよう取り組んでいく必要がある。



## 第12章 国際総合科学部のFD活動

### 第1節 授業公開

今年度は以下の3回のピア・レビューを実施した。国際総合科学部では、他大学にはないデザイン科学を軸とした文理融合のカリキュラムを整備しているため、各分野から授業を抽出した。授業研究会の冒頭では、川崎教務委員長より、公開授業を見学した教員の気づきを共有するブリーフディスカッションとしたい旨の趣旨説明がなされた。

参加者の間では活発な議論が交わされたが、通常の授業時間割内の実施であるため全教員が参加できないという問題がある。授業研究日は多くの教員が参加できるよう、授業日時の設定に工夫が必要である。またピア・レビューそれ自体への教員の関心も高いとはいえない。ピア・レビューの必要性和有効性を教員が認識するにはどうしたらいいかを検討する必要がある。

#### 第1回 ピア・レビュー

##### 第1部 公開授業

日時： 令和元年7月3日（水）10時20分～11時50分

場所： 共通1番

内容： ピアレビュー（対象授業：「生物多様性Ⅱ」）

担当： 杉井先生

##### 第2部 授業研究

日時： 令和元年7月3日（水）16時00分～17時20分

場所： 大会議室

内容： 授業研究会

参加者：13名

#### 第2回 ピア・レビュー

##### 第1部 公開授業

日時： 令和元年12月11日（水）10時20分～11時50分

場所： 国総403（ワークショップスタジオ）

内容： ピアレビュー（対象授業：「デザイン科学演習Ⅲ」）

担当： クリス先生

##### 第2部 授業研究

日時： 令和元年12月11日（水）15時00分～16時10分

場所： 大会議室

内容： 授業研究会

参加者：10名

#### 第3回 ピア・レビュー

##### 第1部 公開授業

日時： 令和元年 12 月 18 日（水） 8 時 40 分～10 時 10 分  
場所： 国総 403（ワークショップスタジオ）  
内容： ピアレビュー（対象授業：「Comprehensive English of Culture and Society2」）  
担当： ソーレンセン先生

## 第 2 部 授業研究

日時： 令和元年 12 月 18 日（水） 15 時 30 分～16 時 40 分  
場所： 大会議室  
内容： 授業研究会  
参加者： 8 名

## 3回のピア・レビューを通して(総括)

文理融合のカリキュラムは国際総合科学部の特徴である。授業研究は異分野交流の場となるため、教育改善に真剣な教員にとって貴重な学びの場となっていた。研修会に参加する教員は、教育への熱意が高いため、公開された授業をレビューした後に担当教員と熱心な意見交換がなされていた。特に、学部の重点科目であるデザイン科学科目と課題解決科目の関係や履修順序等について、活発な議論がなされた。

特筆すべき点も多々あったのだが、紙面の都合上、いくつか抽出したものを以下に示す。

### ・第 1 回

#### 1) 参考にするべき良い点

写真を使ったスライドは分かりやすく、学生の注意をひきやすい工夫がなされていた。教員の説明は早くなく遅くもなく、適度な速度で、丁寧になされていた。特にすずめの子育ての例は意外な発見があり、学生の興味・関心をひきつけていた。

#### 2) 改善点

教室が大きいので、後方の席からスライドを見づらい。説明をする際は拡大するなど見やすくなる工夫が必要かと思われる。

### ・第 2 回

#### 1) 参考にするべき良い点

学部にとって大事な授業だと思う。丁寧な英語だった。PBL で「課題の発見方法を習っていない」と主張する学生がいたが、デザイン科学演習の授業を見学したところ、習っていることを確信した。前回授業のレビューや場の空気の作り方が上手だと思った。

#### 2) 改善点

定期的に教員向けにもレクチャーがあると良い。学生とのインタラクションを見た限りでは、日本語の方が理解しやすい。

### ・第 3 回

#### 1) 参考にするべき良い点

テーマに UFO を選ぶなど学生への意識づけが面白い。なんでも研究テーマにできることを知るの楽しい。

グループを回るなど、学生へのケアが素晴らしい。

## 2) 改善点

様々な国からの留学生が受講しているため、国によってはUFOのことを知らない学生がいた。  
日本人と留学生との間の交流は、もう少し活発にできるのではないかな。

## 第2節 学部・研究科主催FD研修会

本学部主催のFD研修会は、学部内各委員会・部会が必要に応じて企画・実施するFDと、FD委員会が独自に企画するFDから構成される。本年度の委員会・部会企画は、PBL推進部会と就職支援部会の二つのみであった。今年度が完成年度であることもあり、来年度は振り返りや改革案に関わるFDが多く開催されることが予想される。

### 第1回 国際総合科学部FD研修会

- ・ テーマ：CEFRについて
- ・ 企画・話題提供：学生・国際交流委員会 就職指導推進部会
- ・ 日時 平成31年4月16日15時00分～16時10分
- ・ 場所 大会議室
- ・ 対象 国際総合科学部教員・職員
- ・ 参加者 30名

#### ・ 概要

国際総合科学部の卒業要件のひとつに外部機関の認定する高い語学力がある。学部開設時より5年間はTOEIC L&R テスト730点以上となっていた。しかしながら、学生の留学先は非英語圏が多く、1年間の留学期間中に英会話よりも留学先の第一言語（中国語、韓国語など）での会話能力の方が高くなる学生も少なくないことがわかった。そこで、2020年度入学生より卒業要件を変更し、CEFRを基準に、英語でCEFRのB2レベル以上、もしくは、英語でCEFRのB1レベル以上かつ英語以外の外語で所定の成績（概ねCEFRでA2～B1）を修めることとなった。そこで、国際総合科学部教員及び職員向けに、CEFRの基礎知識から、CEFRの例示的能力記述文を用いた学生の外語能力の判断方法などについて研修会を実施した。

### 第2回 国際総合科学部FD研修会

- ・ テーマ：就職指導について
- ・ 企画・話題提供：学生・国際交流委員会 就職指導推進部会
- ・ 日時 令和元年10月16日15時00分～16時10分
- ・ 場所 大会議室
- ・ 対象 国際総合科学部教員・職員
- ・ 講師 株式会社マイナビ 高出 実
- ・ 参加者 20名

- ・ 概要

国際総合科学部では、4年次に卒業研究の代わりとして「プロジェクト型課題解決研究」を開講している。各プロジェクトの担当教員が主となって配属学生の就職指導を行ない、学生・国際交流委員会就職支援部会がサポートする形となっている。そこで、プロジェクト担当教員向けに、大手就職ナビサイトを運営する株式会社マイナビより講師を迎え、2021年卒学生の就職状況や全体スケジュール等の情報提供、並びに、就活指導における注意点について研修を行った。

崎山就職支援部会長より、今年度の就職実績、傾向分析等を振り返る説明があった。

質疑応答では、学生の就資金の状況、企業が実施するインターンシップと就活の相関の有無等について質問があった。本学部は今年度最初の卒業生を世に出すわけであるが、とにかくデータを蓄積していく必要があるということが確認された。

### 第3回 国際総合科学部FD研修会

- ・ テーマ：地域への貢献や町おこし、地域の課題解決に取り組むにあたって何に注意すべきか
- ・ 企画・話題提供：教務委員会
- ・ 日時 令和元年10月28日12時50分～14時20分
- ・ 場所 共通28番教室
- ・ 対象：国際総合科学部教員・職員・学生  
講師：Izutani FP Office 代表 泉谷 勝敏 氏
- ・ 参加者 90名

- ・ 概要

PBLを進めるにあたり、地域に関連する活動を行う上で学生も指導教員も注意しなければならない点が多くある。一言で「地域」と言っても状況は千差万別で、抱える課題に対する取り組み方も地域によって大きく異なる。本FDでは、自身もIターン者であり周防大島の定住促進協議会のメンバーとしてUIターンの支援をされているIzutani FP Office 代表 泉谷 勝敏 氏を迎え、これまでの大変ユニークな取り組みや他大学とのPBLの実践経験を通じた、地域貢献や町おこし、地域で活動するときに考えなければならないことなどを解説いただく。また同時に、学生および教員との意見交換を目的とする。

- ・ 話題提供

以下の通り、泉谷氏より、PBLに向けての心構えや、学生が抱く疑問など、学生目線での重要なポイントについて講演された。参加者の多くが学生であったため、学生目線でも理解できるような平易な表現で解説する工夫がされていた。

- 1) ポイント

「勉強させてもらう」気持ちが大事。

「課題解決」こそ、現在のAIにはできないことである。

- 2) 課題の見つけ方、決め方、進め方。

パートナー側と相談するのが望ましい。

学生だからこそ気づく課題もある（パートナー側が一番期待するところ）。

2つの目線で考える。

- a) 働いている当事者
- b) サービス利用者

### 3) 課題解決の取り組み方

解決方法に正解はない。

自分のアイディアに酔いすぎない。

できない理由を考えるより、できる方法を考える。

### 4) アンテナの感度を高める方法

ヒントはどこにでも転がっている。

どんなことでも違う角度から見る癖をつける。

四六時中、自分のしたいことを考えていれば自然と関連づける癖がつく。

#### ・ 質疑応答等

既に、過去2年間で1期生及び2期生のPBLが実施されたことから、経験上、明らかになってきた課題（集客のコツ、活動を周知するコツなど）について、参加者から具体的な質問が寄せられた。特に、これからPBLに取り組む学生からの積極性が顕著だった。集客や周知については、講師の泉谷氏より、「これからはSNSを活用するのがいいのでは？」とのアドバイスが得られた。

## 第4回 国際総合科学部FD研修会

- ・ テーマ：国際総合科学部の教育について本音で語り合う会（第2回）：教育における多分野協働について

- ・ 企画・話題提供：学生・国際交流委員会

- ・ 日 時 令和元年11月13日（水） 13:10～14:20

- ・ 場 所 国際総合科学部棟 401 室

- ・ 参加者 13 名

#### ・ 概 要

国際総合科学部は、2018年度に第1期生が卒業し、開設当初のカリキュラムが無事一巡した。学部のポリシーやカリキュラム設計、授業運営上の問題等、様々な課題が出てきている。そこで、コーディネーター星野先生より、今回のFDを実施する趣旨、および、現状本学部が抱える次の課題について議論したい旨の説明があった。

- ・ 検討の必要な課題

① 教員間の機能的な連携をとるにはどうするか

② 専門性の高い教育が困難な状況で、本学部の教育改善を実現するにはどうするか

- ・ 話題提供

杉井先生より関連情報として「山口学」に関する共同研究事例として「ハワイ移民」プロジェクトに関する話題提供があった。文理融合型の本学部でも同様に、各教員の専門性を活かすことで学際的な教育研究に繋がられるのではないかと、との提案があった。

以下、専門分野の異なる教員間の協働に向けて、活発な意見交換がなされた。

- ・ 各分野の特徴は？

- ・ 学際的な教育のあり方は？実現するには？

## 第5回 国際総合科学部FD研修会

- ・ テーマ：PBLの進め方 -新しい構想書の書き方について-
- ・ 企画・話題提供：教務委員会 PBL推進部会
- ・ 日時 令和元年11月27日(水) 12:50~14:20
- ・ 場所 国際総合科学部棟大会議室
- ・ 参加者 25名

### ・ 概要

2018年度に卒業した1期生のPBLを実施する上で明らかになった、改善を要する課題のひとつに構想書が挙げられていた。構想書とは、3年次の第4クォーターにおいて、プロジェクト配属されたばかりの学生がプロジェクトの本格実施に先立って、プロジェクト構想を整理することを目的とするものである。あくまでも予定であり、4年次になってプロジェクトが開始すれば、適宜、内容を見直していくことを前提としている。研修会では、1期生のPBLを踏まえ、寄せられた意見を反映した修正箇所の概要や全体的なスケジュールなどの説明がなされた。

- 1) PBL 主担当教員向けのFD研修
  - 2) PBLの趣旨等の概要説明
  - 3) 構想書の目的
  - 4) 構想書作成までの流れ
  - 5) 構想書記載する内容
- など

## 教育改善FD研修会 (大学教育センターとの共催FD研修会)

- ・ テーマ：「学修ポートフォリオ ～学修者の振り返りと成長のために～」
- ・ 話題提供：林 透 (大学教育センター 准教授)
- ・ 日時 令和2年02月19日(水) 15:00~15:40
- ・ 場所 国際総合科学部大会議室
- ・ 参加者 20名
- ・ 概要

最初に村井FDコーディネーターより趣旨説明があった後に、大教センターの林准教授から「学修ポートフォリオについて」と題した山口大学の新しいポートフォリオシステムについての概要説明があった。その後質疑応答が行われた。

質疑応答では、主に実装の時期や、国際総合科学部独自の学修評価システム(YU CoB CuS)との相違点などについて議論された。

### ・ 話題提供

- 1) 新しい学修支援システムの紹介について(林)

新学修支援システムにeポートフォリオ機能がある。

4年前の実装以来、事情があって運用できていなかった。

国際総合科学部はYU CoB CuSを運用しているので、eポートフォリオ機能を活用した学生指導について話題提供したい。振り返り・リフレクションとは、自らの経験を「再生」することで、経験をより深い学びにつなげることである。振り返りが必要な理由は、省察があって初めて経験が学

びにつながる (Kolb' s Experimental Learning Theory より)。

・ 振り返りの形態

自己による振り返り

集団による振り返り

対話による振り返り

※学生1人の力だけでは深い振り返りは難しい

2) eポートフォリオの実務上のメリットについて (林)

以下の4つのメリットが挙げられた。

・ 4年間ずっと捨てない・なくさない

・ LMS と連動させて使うことができる

・ 教員が検索ですぐに確認できる

・ ショーケース (組織・個人) の役割も果たす

3) 修学支援システム (eYUSDL) の機能について (林)

学生が作成したポートフォリオに指導教員がコメント入力可能である。 教員コメントは指導学生に対してのみ入力可能となっている。(4月より運用開始予定)

YU CoB CuS を通した振り返り・自律的学修は、学年進行、年度により向上した成果が見られる。

・ 主な質疑等

以下の通り、活発な議論がなされた。

1) 川崎先生より

スマホだと修学支援システムが使いにくい。

ポートフォリオ機能が使えるようになってから考えたい。

学生の利用しないものに時間を取られたくない。

シラバスもスマホで見やすくなるようにならないか? (重要項目を大きくするなど)

2) 杉井先生より

リフレクションシートを載せるのは容易だと見ている。

自分は Moodle を利用しているが、ファイルをダウンロードしてから学務係にメール送信するのは不便なので、修学支援システムで機能が補完されるなら利用したい。

現時点では、ユーザインタフェースに難がある。(林)

3) 崎山先生より

使い方のサンプルを示してほしい。

見本となる学生像を明確にしてはどうか。

「学習指導の工夫」として大学全体の評価につながるのか?

成果指標につながる (林)

4) クリス先生より

システム上の問題: ユーザビリティが分かりにくい。





## 第6節 来年度の課題

新型コロナウイルス感染拡大防止を踏まえ、来年度は、大規模な教育改善が不可欠となっている。特に、学生同士の接触感染を防ぐため、対面授業からオンライン授業への切り替えが加速すると見られる。従来、対面授業で学生との相互指導に重点を置いていた教員にとって、オンライン授業への取り組みは心身ともに負担のかかると見られる。一方で、従前より、メディアを高度に活用した教育に力を入れていた教員もいるため、ノウハウの共有等で学部全体の教育改善につなげていく必要がある。

## 第13章 人文科学研究科のFD活動

### 第1節 授業公開

人文科学研究科としての授業公開は実施していない。

### 第2節 学部・研究科主催FD研修会

#### (1) 人文科学研究科（人文学部）FD部会主催による研修会

研修名：「院生指導を考える」

日時：令和2年2月10日

場所：人文学部第3講義室

報告者：FD部会

参加者：17名

内容：

研修会においては、まずFD部会（司会者）より、問題提起として、本研究科A教員から寄せられた院生指導に関するメールを紹介、その後意見交換を行った。参加者のほぼ全員から発言があり、短時間であったが、様々な意見・体験談を共有した（大学院教育と学部教育のバランス、前提知識のない入学者への研究指導、小規模大学院の長所と短所、学部生と院生の繋がり希薄さに伴う問題等）。特に、研究指導や学生との人間関係において、（学生だけでなく）教員側も「孤独」を感じているという報告がなされ、教員同士が情報共有できる仕組みの必要性が明らかになった。今回の研修会で共有された項目は、FD部会によってまとめられ、今後の研究科運営改善のため、学部・研究科教学部長を中心とする組織で精査し、必要な点はさらに議論してもらうこととした。

### 第3節 教育改善に関する活動

人文科学研究科としての教育改善活動は特に実施していないが、後述するように大学院生アンケートを実施している。

### 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

#### (1) 学生アンケート

受講学生数が少ないことから、IYOKAN2を利用した学生授業評価は実施しておらず、人文科学研究科独自の様式による学生授業アンケートを実施してきた。令和元年度もこれを踏襲した。アンケート実施時期については、昨年度の回収率が50%と低かったため、本年度は、指導教員より各院生にアンケート用紙を配付してもらい、実施期間を10日間ほど設け（令和2年1月末日～2月10日まで）、院生室に回収袋を用意した。アンケート提出者は、8名で、回収率は80%と改善された。

アンケートの質問項目と回答は以下の通りである。

(1) 人文科学研究科の授業（講義・演習）について、良いところ、このまま継続してほしい点があ

れば、お教えてください。

- ・教員と学生が講義内で意見を交わしやすい。
- ・学生の意見を尊重する形で、研究をよりよくするための助言がある。
- ・改善してほしい点をその都度教員側に伝えることができる。
- ・教員が授業に熱心また優しい。
- ・少人数制で、きめこまかい指導を受けることができる。授業内容（進行）が受講者に合わせ柔軟に設定されている点（1対1形式の授業は良い）。
- ・他コースの授業も受けられる。
- ・自コース・他コースに関わらず、対象学生の研究に役立ちそうな講義・演習をしてくれた。
- ・発表回数が多い。
- ・「人文科学総論」について：同じ人文科学研究科の他コースの人との交流ができた。外部からの進学者は、人文科学研究科にどのような先生がいるのかよく分からないが、この授業で知ることができた。

**（2）人文科学研究科の授業（講義・演習）について、今後できれば改善してほしい点があれば、お教えてください。**

- ・他の大学の先生や学生を招いて、彼らの研究の話を聞けたら良い。
- ・教員の研究室で授業が行われる場合は、ちゃんとした（きれいな）席と環境を整えてほしい。
- ・共通で履修する講義はあまり必要ないと感じる。それぞれの専門分野に関する知識や能力を身に付けてたくて大学院に進学している人が大半だと思う。
- ・「人文科学総論」：専門外の分野で、課題が続くと大変だった。

**（3）研究環境（例えば、大学院生用研究室など）についてご要望があれば、お教えてください。**

- ・院生研究室のPC・プリンター（故障中）が来年度からなくなると聞いている。PCとプリンターは使用頻度も高く、重宝しているのでなくさないでほしい。PCとプリンターは、1台は院生研究室に設置して自由に使えるようにしてほしい。学部の学生研究室と同程度のスペック機器が導入されると嬉しい。
- ・現在のPCは正規のMicrosoft Officeのソフトが入っておらず、中国語のものになっているので困っている。
- ・コピー機があると良い。他大学の話では、院生にコピーカード（年間1000枚）が与えられているので、山大にもそういった仕組みがあると助かる。
- ・ホワイトボード用のペンはよく出ないので、取り替えてほしい（教室・院生研究室）。
- ・研究環境の悩みを誰に言えば良いかわからない（本音を言えば夏頃から伝えたかった）。

**（4）その他、ご意見ご要望ご感想があれば、お教えてください。**

- ・人文書庫が自由に使えるようになったのは良かった。
- ・充実した2年間であった。
- ・学部の時と比べ切磋琢磨しあえる仲間が減ったことは寂しい。もっと大学院への進学者がいれば良いと感じる。
- ・内部進学者は知っているが、外部進学者は知らないということがいつくかあった。

## **（2）教員授業評価**

人文科学研究科の在籍院生数は少なく、授業数も限られている。令和元年度の実施率は16.7%であ

った。平成 30 年度の 24%と比べると実施率は下がっている。令和元年度は、入力時期にコロナ対策が重なったことも一因ではあるが、令和 2 年度に向けて、入力に関する教員への周知の徹底に工夫が必要と思われる。

## 第 5 節 F D 実施経費報告書

人文科学研究科で実施した F D 活動にともなう経費執行はない。

## 第 6 節 来年度の課題

本年度の F D 研修会での収穫として、小規模大学院としての本研究科の長所と短所が明らかになった。少人数であるがゆえの指導学生との密接な人間関係、きめ細やかな指導による贅沢な研究体制の反面、ほぼ 1 対 1 の指導学生との関係の中での教員の「孤独感」が浮き彫りにされた。来年度に向け、このような問題をそのままにせず、教員間の情報交換・情報共有を可能にする仕組み作りに向けての可能性に関する検討も重ねていきたい。また、院生アンケートを継続させ、院生の要望をよく聴取し、院生の研究や研究環境の充実・改善にむけた提言を行っていくべきである。教員授業評価に関しては、実施率の改善の工夫が必要である。

## 第14章 教育学研究科のFD活動

### 第1節 授業公開

平成28年度から発足した専門職学位過程（教職大学院）教職実践高度化専攻では、原則、すべての授業を公開しており参観を認めている。教職大学院担当教員であれば、その授業担当者に断ってふだんから多数参観をしている。また教職大学院担当教員以外の参観希望者には、3週間ほど前に授業担当者に参観希望を伝え、許可を得たうえで参観してもらうようにしている。

従来の授業公開は、特定の期間、特定の授業を公開するかたちで行われてきたと思われるが、それでは、参観の予定が合わない、ふだんとは違うよそゆきの授業を意識してしまうといったことが生じてしまう。授業公開を日常的なものにすることで、授業者としてのふだんの努力、教育力の向上を、また学生の緊張感維持と学習成果の向上を期待して制度化したものである。

### 第2節 学部・研究科主催FD研修会

#### 第1回FD研修会

「教育・子育てなら山口市 ～第二次山口市教育振興基本計画の展開～」

日時：令和元年11月21日（木）12:50～14:20

講師：中村武司（山口市教育委員会事務局教育総務課長）

参加者 教職大学院関係者等：21名

教職大学院は、高度で専門的な能力をもって学校や地域の教育諸課題の解決に取り組む、山口県教育界において指導的役割を担い得る人材の養成を目的としている。学校改善・授業力向上に資する能力を、山口県の学校や地域の教育課題と連動させて育成することから、教職員が県や各市町における教育諸課題の現状、課題、方向性や教育施策等を理解していることが必要となる。本研修会は、教職大学院等に所属する教職員が、地域の教育諸課題や教育施策等を学ぶことを通して、大学教職員としての資質能力を高めることを目的とする。

#### 研修内容

- (1) 第二次山口市総合計画、教育目標、基本的方向性、プロジェクト事業
- (2) 8つの重点プロジェクト
- (3) 山口市教育委員会
- (4) 山口市立小・中学校の状況
- (5) 第二次山口市教育振興基本計画
- (6) 重点プロジェクト 将来を担う子どもたちを育む「教育・子育てなら山口市」
- (7) 子育て支援（福祉分野）

#### リフレクションシート（参加者の記述内容）

- (1) 参加した目的について
  - ・今後の取組（授業等を含めて）の方向を考えていくため
  - ・山口市における教育諸課題の現状、課題、方向性や教育施策の具体について理解を深めるため
  - ・山口市の教育振興を学ぶことによって、各市町の教育振興の在り方を探るため
- (2) 成果や課題について

- ・成果を何で見るかの確認を何をもって、どの程度などの視点について熟議する必要がある。
  - ・限られた予算を効果的に生かすために、選択と集中が行われており、実態を踏まえた各プロジェクトの具体を学ぶことができた。
  - ・取組の評価をもとに改善がどのように組みれるのか、認識を深めることができた。
  - ・施策の意義を理解した上で現場で動くことが求められると再認識した。
  - ・土地活用と空間のイノベーション（発想と創造）（例）スマートインターチェンジ
  - ・各地域をどのように活性化していくかの構想と実施（都市政策）
  - ・学力学習状況の数値は理解できるが、貧困率、通塾率などとの関連を見てみたい。
  - ・学力向上、グローバル化、安心向上など、どの市町でも取り組む必要がある。
- (3) それぞれのテーマ・内容・運営方法について
- ・評価に係る内容
  - ・行政の施策内容を知り、それを教育現場で生かすべく学習が進められた。
  - ・こうしたテーマは教師（指導）のみならず院生にも役立つものであった。
  - ・運営についても的確であったと思います。

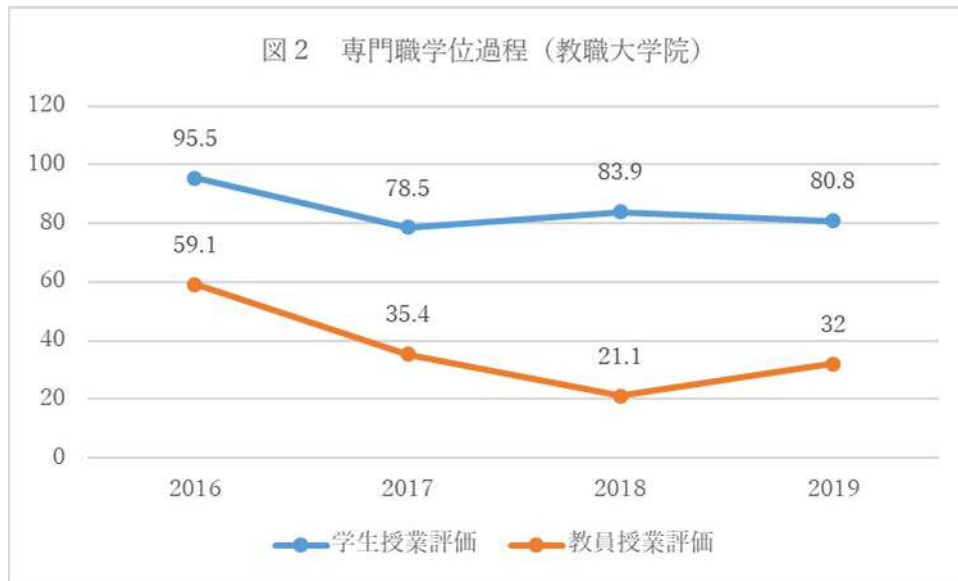
### 第3節 教育改善に関する活動

平成31年4月の教育学研究科の改組にともない、カリキュラムマップを作成した。

### 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

令和2年4月にIYOKAN2システムで確認した過去6年間（専門職学位過程については過去4年間）の学生授業評価・教員授業自己被8八日の実施率を図1、図2に示す。





平成31年度における学生授業評価の実施率は、修士課程、専門職大学院ともに減少している。教員については、教職大学院についてのみやや上向いている。改組後の新しい枠組みで授業評価に対する意識の向上を図る必要がある。また、IYOKAN2 システム等からの情報に基づく、未入力 of 授業担当者への直接実施を促す対策を講じることも必要である。

## 第5節 FD実施経費報告書

平成31年度はFD活動の経費は使わなかった。

## 第6節 来年度の課題

平成31年4月に、教育学研究科は、これまでの教職実践高度化専攻（学校経営コース、教育実践開発コース）、学校教育専攻、教科教育専攻教科教育専修からなる研究組織から、教職実践高度化専攻、学校臨床心理学専攻臨床心理学専修の研究組織に改組した。この変革をふまえたFD研修会開催が必要である。

教員自己授業評価の入力率は、低水準で推移している。入力率の向上に関する組織的な取り組みは、教育学研究科においても大きな課題であり、早急にその原因を特定し、改善策を講ずべき課題である。

## 第15章 経済学研究科のFD活動

### 第1節 授業公開

授業公開についてはそのあり方が議論されることとなり、昨年度に続き、今年度も実施しなかった。従来は、公開希望者を選出、公開当日都合のいい委員が授業を見学し、参加教員が感想を述べるというだけのものとなって実施の形骸化が進んでいた。公開希望者が一巡し、また、参加者の数も減少傾向にあったため、見直しをすることとなっていたが、よりより具体的な改善案が出で来なかった。ただし、一般市民を対象とする公開授業の数を増やすなど必要な努力は続ける。

### 第2節 学部・研究科主催FD研修会

#### 「教員向け英語研修」

経済学研究科の公共管理コースでは、全ての講義を英語で開講している。担当教員を中心にその英語能力を高め、留学生向けの英語授業や留学生とのディスカッションをより円滑にするために同研修を以下通り行った。

#### 第1回 教員向け英語研修

日時：9月17日（火）、10時から12時  
場所：経済学研究科・東アジア研究科棟205号室  
講師：尊田 望  
参加者：6名



#### 第2回 教員向け英語研修

日時：9月24日（火）、10時から12時  
場所：経済学研究科・東アジア研究科棟205号室  
講師：尊田 望  
参加者：6名

#### 第3回 教員向け英語研修

日時：2月13日（火）、10時から12時  
場所：経済学研究科・東アジア研究科棟205号室  
講師：尊田 望  
参加者：4名



#### 第4回 教員向け英語研修

日時：3月18日（水）9時30分から12時  
場所：経済学研究科・東アジア研究科棟205号室



講師：尊田 望  
参加者：5名

## 第5回 教員向け英語研修

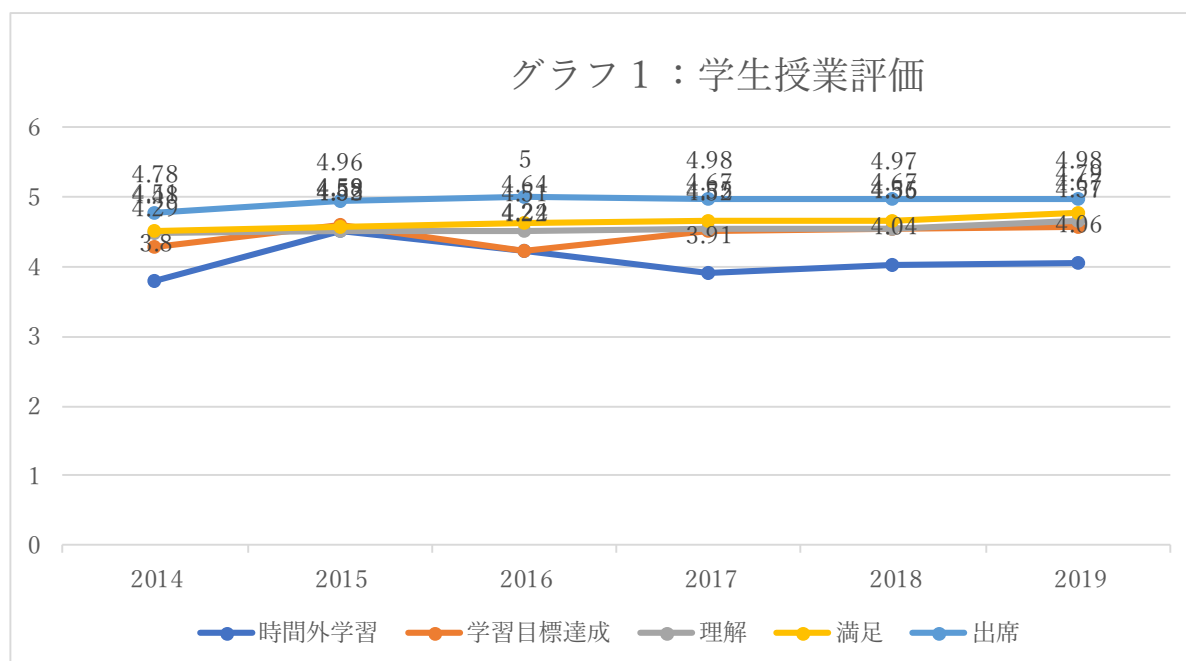
日時：3月19日（木）9時30分から12時  
場所：経済学研究科・東アジア研究科棟205号室  
講師：尊田 望  
参加者：5名

## 第3節 教育改善に関する活動

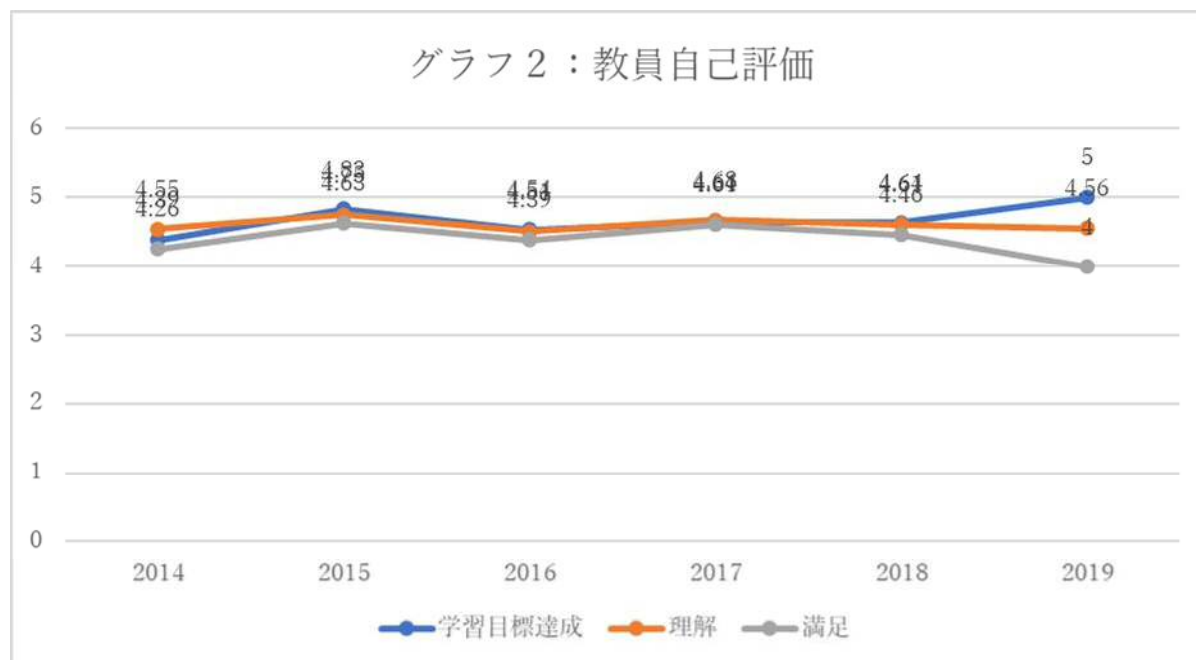
経済学に関する基礎的知識がない学生（特に留学生）の基盤教育をどうすべきかの議論を今年度も継続した。また、公共管理コースにおける英語での授業や指導方法などについても担当教員間で議論した。

## 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

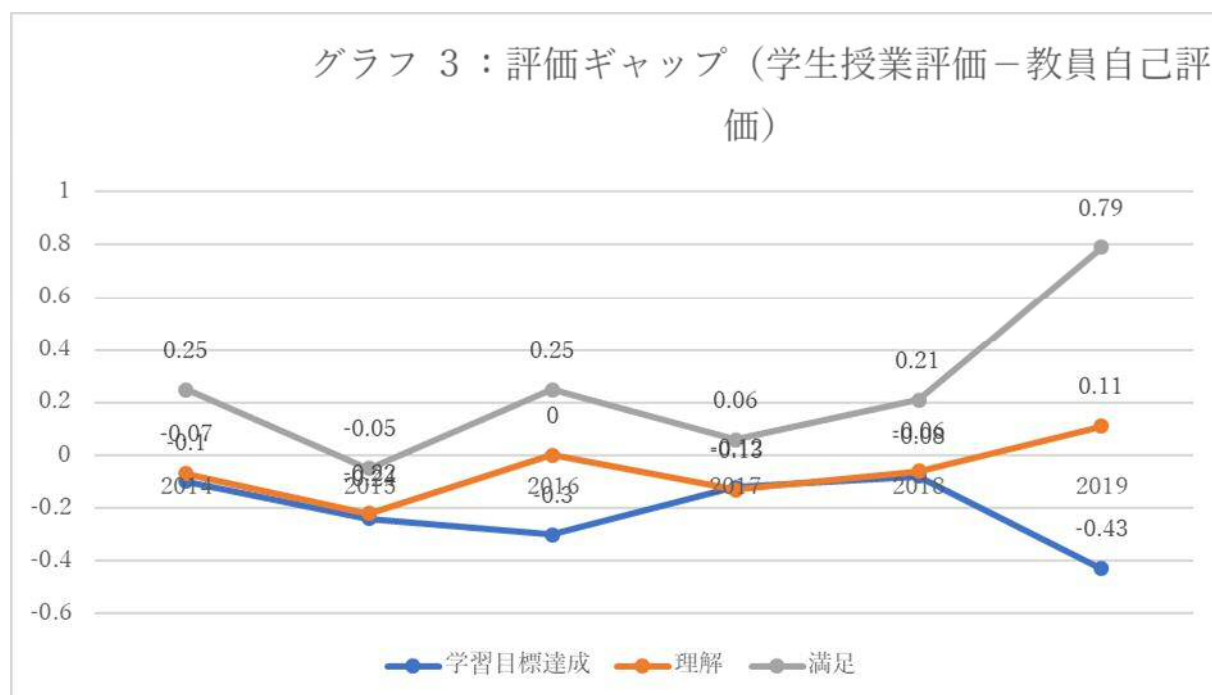
1. 学生授業評価をみると授業時間外学習が2017年度に3点台へと落ち込んだが、2018年度以降に再び4点台となり、2019年度もこれを維持することができた。他の項目（学習到達目標、理解、満足、出席）に関しては、ほとんどの年度において4点台後半から5点満点近く維持しており、質の高い教育が提供できていると思われる（グラフ1参照）。



2. 教員による自己評価においても学習目標達成、理解、満足のどの項目においても4点台後半をほぼ維持しており、質の高い教育を提供できているとの自覚があると言える。ただし、満足に関しては、2019年度に4点ちょうどへと低下している点がやや気になる（グラス2参照）。



3. 評価ギャップ（学生授業評価－教員自己評価）をみると、満足評価に関しては、2015年度を除いてプラスを維持しており、教員よりも学生の満足度の方が高く、より良い教育が提供できていると判断することができる。





## 第16章 医学系研究科のFD活動

平成21年度より、医学部と医学系研究科において「学部と研究科のFD企画をできるだけ相乗りの形で実施する」という方針が定められた。この方針に基づき、医学系研究科所属教員は、それぞれが関連深い（実際に兼担で教育を担当している）各学部（あるいはその上部の研究科）のFD活動に参加する形でFD活動を行った。具体的には医学部の学部教育を兼担している教員は医学部（第8章）のFD活動に、理学部・工学部の学部教育を兼担している教員は理学部（第7章）・工学部（第9章）ないしは創成科学研究科（第17章）のFD活動に、農学部の学部教育を兼担している教員は農学部（第10章）ないしは創成科学研究科（第17章）のFD活動に参加した。具体的活動内容に関しては、それぞれの該当の章を参照されたい。

# 第 17 章 創成科学研究科の F D 活動

## 理学系

### 第 1 節 授業公開

#### 1. 基盤科学系専攻情報科学コースのピア・レビュー

##### (1) 実施科目「情報科学ゼミナール I、II」

###### 1) 概要

①日時： 令和元年 12 月 4 日(水)

②対象学生： M1, M2

③授業概要： 情報科学ゼミナール I, II の履修者が、各自の研究課題に関するポスター発表を行い、同時に他の学生の研究発表を聞き相互に評価し合う。研究発表能力の向上、および聞き手として友人の研究に建設的・批判的にかかわる態度の養成を目指した。

④授業の到達目標：

- ・各自の研究テーマを分かりやすく発表する。
- ・同級生の研究発表を聞き、批判的・建設的に討論を行う。

⑤授業担当教員： 情報分野教員

⑥レビューの方法： 授業に出席の後、授業改善点等について議論する。

###### 2) レビュー結果

###### ①授業内容

・学生を 4 グループに分け、ポスター発表を 25 分間ずつ行った。発表者以外の学生は、レビュアーとして、質疑応答を行った。

・総発表件数と発表スケジュールは以下の通りである。

第 1 グループ： 13:00-13:25 (発表 3 件)

第 2 グループ： 13:25-13:50 (発表 3 件)

第 3 グループ： 13:50-14:15 (発表 3 件)

第 4 グループ： 14:15-14:40 (発表 3 件)

###### ②授業の進め方

・各レビュアーはそれぞれ発表に対して採点を行い、その結果は授業の成績の参考に使う。

・採点では、「ポスターには研究の概要が簡潔、かつ分かりやすくまとめられていたか?」、「説明(話し方)はわかりやすかったか?」、「発表者は研究内容を十分に理解して研究を行っていると思われるか?」の各項目に対して 5 段階評価を行った。さらに、発表の改善点、発表を聞いたコメントを発表者にフィードバックした。

・理学部物理・情報科学科では研究室の仮配属を開始したこともあり、3 年生に対してレビュアーとしての参加を呼び掛けた。3 年生が参加するため、発表者はより分かりやすい説明を心掛ける必要がある。

### ③その他、改善点

- ・昨年度と同様、1グループあたりの発表者を極力少なくし、レビュアーの人数を多くした。
- ・近年は教員が参加しなくても学生間で自由な意見交換が行われている。情報科学ゼミナール I, II を通して M1 と M2 が参加し、より良い議論の場ができあがっていると思われる。
- ・これまでと同様に一人あたりの持ち時間が25分間と若干短めであることから、発表内容によっては議論する時間が少なかったようにも感じられる。ただ、発表時間を長くとるためには発表グループ数を少なくする必要があるため、引き続き、このタイムスケジュールで様子を見たいと考える。

## 2. 地球圏生命物質科学系専攻生物学コースのピア・レビュー

### (1) 実施科目「英語特別演習」

#### 1) 概要

- ① 日時：令和元年6月14日（金）7・8時限 理学部15番教室
- ② 対象学生：創成科学研究科地球圏生命物質科学系専攻生物学コース1年生（13名）
- ③ 授業の概要：履修者が研究発表を英語で行うための、練習と実践を行う。
- ④ 授業の到達目標：履修者が英語による研究プレゼンテーションを行い、英語での質疑応答を行う能力を養う。
- ⑤ 授業担当教員：原 裕貴  
レビュアー：上野 秀一，山中 明，祐村 恵彦（生物・化学科 生物科学分野）
- ⑥ レビューの方法：90分の演習全体を聞いていただき、終了後、指導方法について改善点などを文書で指摘して頂く。

#### 2) レビュー結果

##### ① レビュー対象の講義内容と進め方

今回レビューの対象講義は、「英語特別演習」の第1回目であるため、この講義の目的を説明するイントロとして、英語教育に対する意義を説明し、学習目的の明確な理解を図った（約15分間）。

さらに、次回以降により積極的な講義への参加を促すために、英語を用いた簡単な作業（ワーク：英語での自己紹介）を2回行った。まず作業に先立ち、2人1組のペアを作らせた。その際、ペア決めの際に学生に席を立たせたが、体を動かすという刺激を与えることで、学生の「聞く」から「実践する」ための切り替えと心身のリフレッシュを図っている。その後、学生に自分を示す4つのキーワードを設定させ、それに沿って英語で自己紹介をするための英文を実際に記述させた。実際に英文を記述させることは、講義後の復習への活用や、別の英語を話す機会に応用することを狙いとしている。また実際に自らその場で考え記入させることで、集中力を高めることを狙いとしている。その後、キーワードをペアに示しながら、作成した英文により自己紹介を行わせた。自己紹介後は自由に日本語で、行った自己紹介に関して議論（談話）することで、場の雰囲気を和ませると共に、その後の2回目のワーク（質疑応答）を行うための下地を形成させる狙いがある（1回目のワーク：約30分）。

次に、学生自身が考えるプレッシャーからの一時的開放と、次のワークに繋げるための情報を与えるために、教員より質疑応答の例をスライドにて示した。また、質疑応答時の常套句をまとめたプリントを配布し、次のワークに活かすように伝えた（約10分）。

それらを踏まえ、最後に1回目のワークのペアを「他己」紹介する形で、他のペアの2人へと英語でトークした。トークした後、説明を受けた質疑応答に倣い、英語での質疑応答を行わせた（約25分）。

最後に、次回の講義の為の課題を学生に説明、提示した（約5分）。

## ② 授業に対するレビューアからのコメント

レビューア1：今回は初回の講義であり、この講義の目的から述べられていた。英語が目的ではなく、大学院であれば研究内容を伝えるための手段であることを、サッカー選手のインタビューや教員自身の経験等を踏まえてわかりやすく学生に説明されていた。また、より専門的な生物学的な内容の理解の手助けになるようなサイトの紹介もなされていた。

講義では学生でペアを組ませて、英語で説明する導入として自己紹介（名前、研究、趣味、出身）の形をとって進められていた。その後、小さなグループ間における他者の紹介から、自由に会話してもらう形式に移行していた。学生自身に英語で簡単な説明する経験をしてもらったあとで、質疑、応答の具体的な例を示すことで理解を深める工夫がなされていた。講義の最後では次回の講義において短時間での自身の紹介（研究内容）を行う『elevator pitch』の意味を簡単に紹介し、その準備を次回までの課題としていた。

同講義の以前の内容では、初めから完成形に近い発表を課し、うまくいかなかった点を再度発表させる形式をとっていた。今回の講義では、より発表の手助けとなるような工夫・改善（より簡単な自己紹介による導入、質疑応答の改善の具体例、言い回しの紹介など）が行われていた。

レビューア2：本演習の第1回目の授業であり、本演習のシラバス内容紹介ならびに学習到達目標の説明後、海外留学経験談および動画を交えながら簡潔に「英語で話す」ことの本質を、学生に教授した。

初回であり、定番の「自己紹介」をテーマに授業は展開された。「自己紹介」の内容を4項目設定し、本人が自身の紹介をする場面と本人が友人を他の友人に紹介するというグループワークを行った。

英会話は手段であり、その敷居を下げる視点を学生の感性に絶えず与えた点は非常に良い。受講した学生も躊躇することなく、会話ができたことを実感したと思われる。次回テーマ設定も、学生にとって侮れない良い刺激的な展開が期待される良いものであった。

一点、動画を使用することはよいが、多用することは好ましくない。

レビューア3：

（概要）第1回目の授業だったので、授業内容紹介と学習到達目標の説明が先ずあった。YouTubeなどの動画を使いながら、学生に英語よりも相手に伝えることの大事さを説いた。その後、学生が組みになって英語で自己紹介させることを行なった。最後に「elevator pitch」について説明し、短時間で人の心を掴むための訓練が必要であると説いた。次回の内容と課題が学生に与えられた。

（意見）学生参加型のいわゆるアクティブラーニングになっていて、学生も積極的に参加していたのは良かった。ただ、学生の会話力にも問題はありますが、中学生レベルの英語にとどまっていたので、何かしらの工夫が必要と思う。会話の間の沈黙を作らないための、英語表現をまとめたプリントを配布したのは良かったが、少し内容を説明して学生にその表現を使わせて欲しかった。学生の集中力を上げさせるために、ノートを取るように指示するなどの工夫があれば良かった。

3人のレビューアからのコメントを参考にして、授業の改善に取り組みたい。

2-3割の学生が、講義内容を舐めてかかる傾向があり、真剣に取り組めていない面も見受けられた。本人が英語で話すことを躊躇する認識を拭い切れなかったことが大きな原因であると考えられる。英語を話すことに自然と集中できる、良い雰囲気を作り出す工夫（やる気の満ち溢れた学生と意図的に同じグループに配置する、その学生を講義に取り込むよう、簡単な質問に対する発言の機会を設ける…など）が教員には求められる。全ての回の講義を通して、英語プレゼンが上達する事、自分の発表が変わっていることを実感できる講義を創っていきたい。

## 第2節 学部・研究科主催FD研修会

今年度は、創成科学研究科（理学系）として単独ではFD研修会を実施していない。理学系教員は、理学部で開催された以下のFD研修会に参加した。詳細は理学部第2節のFD活動を参照されたい。

- ・教育改善FD研修会
- ・講師派遣型アラカルトFD研修会「大学生・大学院生の抱えやすい課題と学生相談の現状」

## 第3節 教育改善に関する活動

創成科学研究科（理学系）単独での教育改善に関する活動は行っていない。理学部と共通で活動している。詳細は理学部第2節のFD活動を参照されたい。

## 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

2019年度に創成科学研究科が開設している科目136科目のうち、理学系学生授業評価対象科目は58科目である。そのうち、実際に学生の授業評価を実施したのは40科目で、実施率は73.4%であった。下図は2019年度における学生授業評価および、教員自己評価実施アンケートの年度推移である。創成科学研究科は今年度で創設4年目であるので、4年分のデータを表にしている。

図1から図5までは、学生の授業評価項目である。図1は学生の授業外学習時間の年度推移、図2は学生の授業目標達成の自己評価に関する年度推移、図3は学生の授業理解度についての年度推移、図4は学生の授業満足度に関する年度推移、図5は学生の授業出席の自己評価の年度推移である。図6から図8までは教員側から見た授業自己評価である。図6は教員側から見た学生の授業目標達成の年度推移、図7は教員側から見た学生の授業理解度の年度推移、図8は教員側から見た学生の授業満足度を示す。4年を経過し、ある程度の傾向が明らかになってきている。学生側から見た授業評価は授業外学習時間、出席を除く3項目で僅かではあるが年を追う毎に良化している。対応する項目の教員側からの評価はほぼ変わっていない。この結果をどう捉えればよいのか？教員は実感していないが、FD等による授業改善の効果が少しずつ現れてきていると考えればよいのだろうか？はっきりしたことが言えるまでにはもう少し推移を見守る必要があるだろう。



図1



図2





図 3



図 4



図 5



図 6



図 7



図 8

## 第 5 節 FD 実施経費報告書

今年度は、創成科学研究科（理学系）・理学部ともに、FD 実施経費を使用していない。

## 第6節 来年度の課題

創成科学研究科（理学系）の教員は理学部の教員でもあるため、理学部第6節の課題を創成科学研究科（理学系）の検討事項として掲げる。

# 農学系

## 第1節 授業公開

創成科学研究科（農学系学域）の各教員が、全ての教員と大学院生に対して研究紹介を行い、意見交換等により、各教育研究分野の活性化と分野間の総合理解の促進を図った。

(1) 脂質修飾タンパク質の網羅的探索と機能解析ー オルガネラの形成・分解に関与する*N*-ミリストイル化

タンパク質

日時：2019年4月26日（金）17:00～ 内海 俊彦 教授

(2) メタン発酵における共生的プロピオン酸代謝機構の解析とその展望

日時：2019年5月10日（金）16:00～ 高坂 智之 助教

(3) 豪雨災害軽減のための基礎研究の魅力～雨雪を測る

日時：2019年5月24日（金）15:00～ 鈴木 賢士 准教授

(4) 産業微生物のグルコース代謝に関する研究

日時：2019年6月28日（金）17:00～ 片岡 尚也 助教

(5) 海藻から放出される香り成分とその機能性

日時：2019年10月24日（木）17:00～ 赤壁 善彦 教授

(6) 植物のフェロドキシンとフェレドキシンーNADP<sup>+</sup>還元酵素との相互作用：NADP(H)によるアロステリックな調節

日時：2019年11月22日（金）17:00～ 木股 洋子 准教授

(7) 骨格筋への物理的刺激の功罪

日時：2020年1月23日（木）17:00～ 宮田 浩文 教授

## 第2節 学部・研究科主催FD研修会

創成科学研究科（農学系学域）では、農学部FD研修会と一緒に、各種FD研修会を以下の内容で開催した。

日程 令和元年10月16日(水)  
[吉田地区] 13:30～14:00  
場所 農学部・共同獣医学部大会議室  
(吉田キャンパス)  
講師 岡田 菜穂子  
(学生支援センター 准教授)

田中 亜矢巳  
(学生支援センター カウンセラー)

参加者 26名(アンケート 24 枚回収)

日程 令和元年 12 月 18 日(水)  
[吉田地区] 13:30~14:00

場所 農学部大会議室  
(吉田キャンパス)

講師 林 透  
(大学教育センター)

参加者 26名(アンケート 22 枚回収)

### 第 3 節 教育改善に関する活動

創成科学研究科(農学系学域)は、人類の生存に必要な食料を始めとして、生物機能の開発・応用に関する技術を発展させつつ、各種資源と自然環境との保全・再生との調和を図り、豊かな人間性を醸成する分野といえる。このような広範囲な科学と技術を深化させるために、広範な基礎学力に基づいて高度な専門知識と能力を備えた、豊かな人間性のある科学者、技術者を養成することを目的とし、活動を実施している。

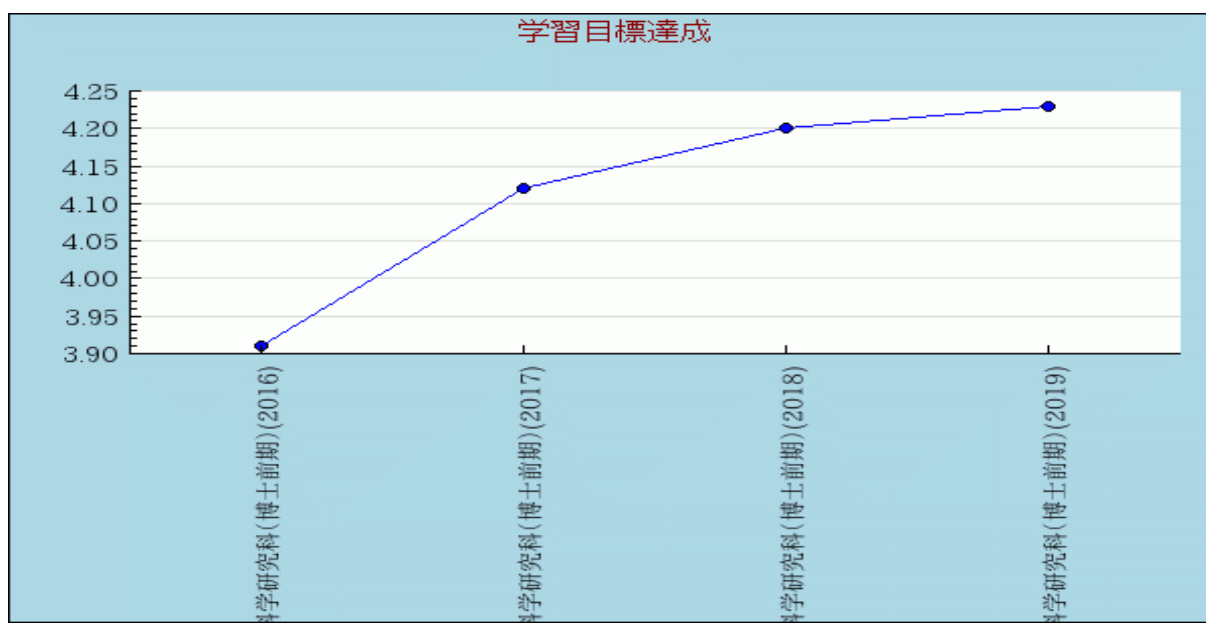
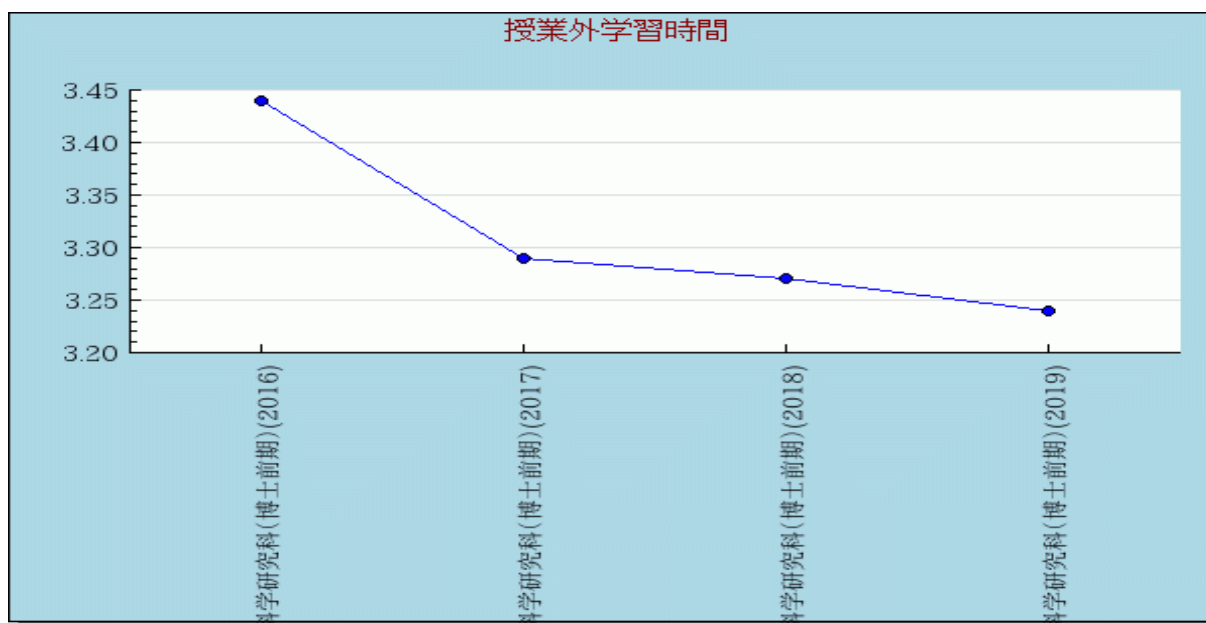
令和元年度に設置申請中のジョイントディグリープログラムによる山口大学・カセサート大学国際連携農学生命科学専攻(仮称)のシラバスなどについての再検討を行った。大学院の授業科目のナンバリングも行った。

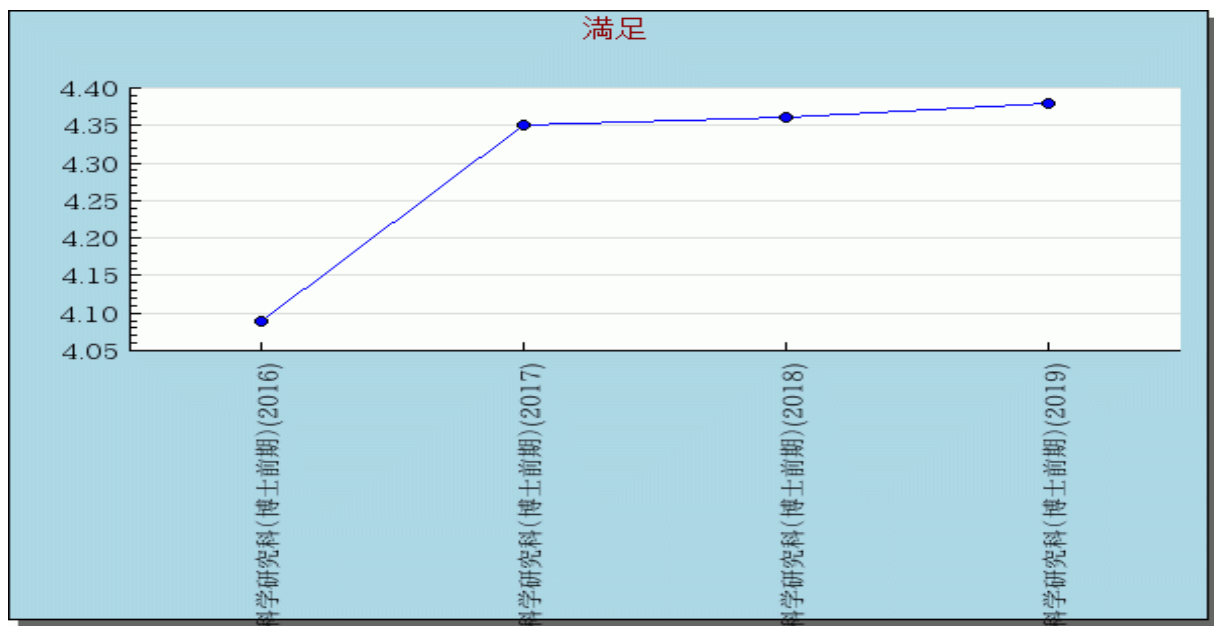
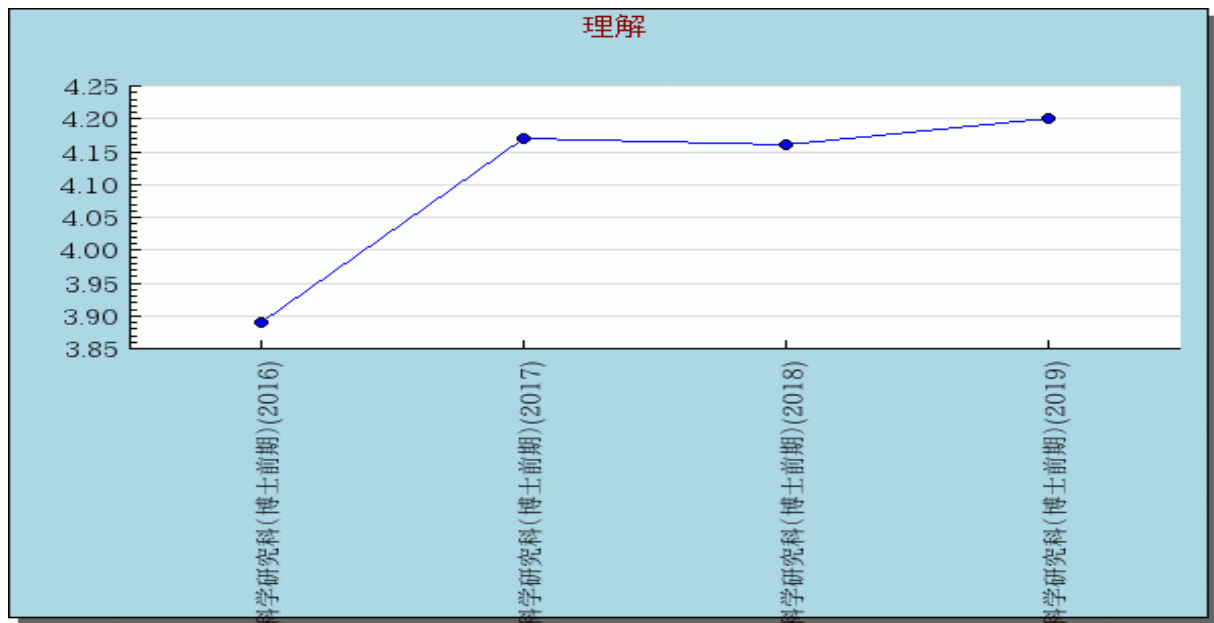
### 第 4 節 学生授業評価・教員授業自己評価

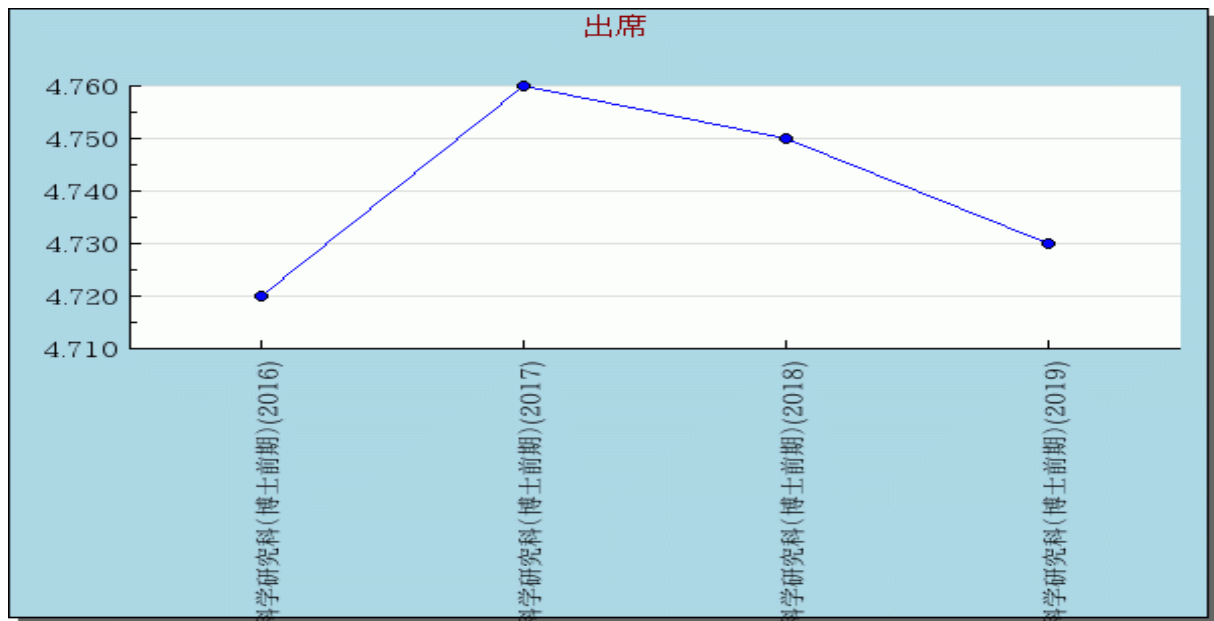
#### 1. 学生授業評価

目標達成、理解度、満足度は高いレベルを維持しているが、授業外学習時間、出席がやや低下している。原因を考慮し、改善に努めていきたい。

	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	語学(人文学部専門)	未指定	合計
大学院創成科学研究科(博士前期)(2016)	244									244
大学院創成科学研究科(博士前期)(2017)	204		28						45	277
大学院創成科学研究科(博士前期)(2018)	396		42							438
大学院創成科学研究科(博士前期)(2019)	386		32						12	430



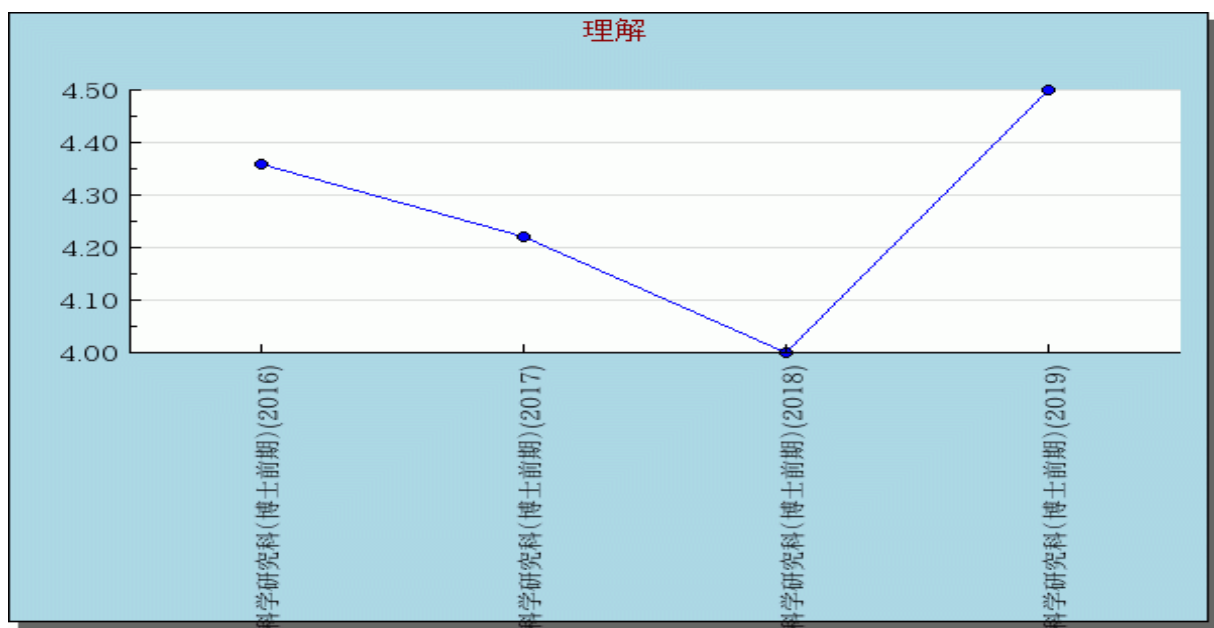
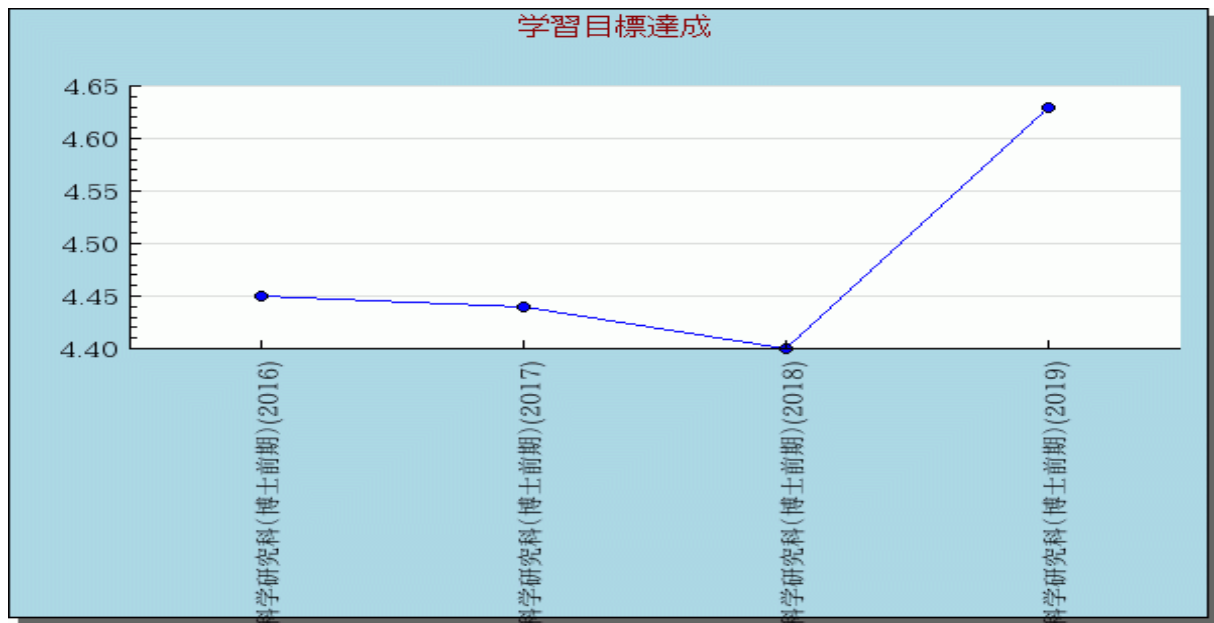




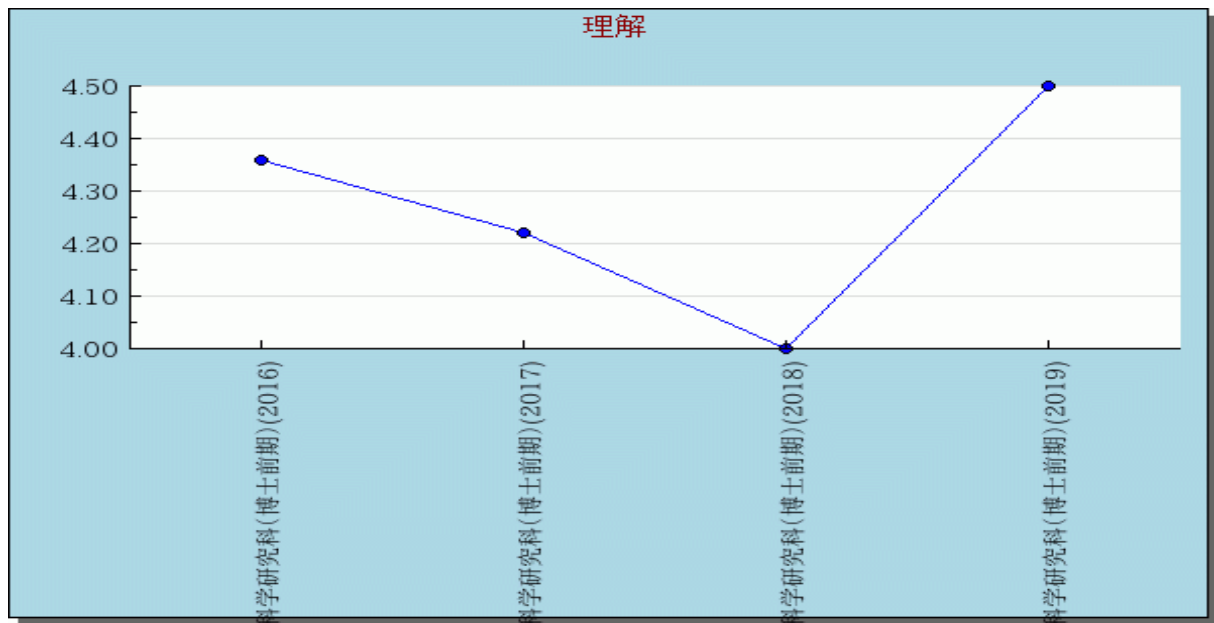
## 2. 教員授業評価

教員自身は授業に対しての意識改革を行うことにより全ての項目で改善できたと感じていることがうかがえる。学生評価との違いを埋めるよう到来年度は授業を進めることとしたい。

	講義	講読	演習	実験・実習	語学(共通教育)	語学(農学部専門)	その他	語学(人文学部専門)	未指定	合計
大学院創成科学研究科(博士前期)(2016)	10		1							11
大学院創成科学研究科(博士前期)(2017)	5		1						3	9
大学院創成科学研究科(博士前期)(2018)	14		1							15
大学院創成科学研究科(博士前期)(2019)	7		1							8







## 第5節 FD実施経費報告書

本年度はFD実施経費の申請はなかった。

## 第6節 来年度の課題

研究科の教育は学部とは大きく異なっており、また研究科間においてもカリキュラムや教育方針が同一でない。このため、FD活動についても研究科独自の取り組みが今後必要になるように思われる。

## 第 18 章 東アジア研究科の F D 活動

### 第 1 節 授業公開

本研究科は基盤及びプロジェクト演習において、多くの教員が参加しているので、これが実質的な授業公開である。詳細は第 3 節で述べるが、そこでお互いの教員の教育方針について議論がなされているので、そちらを参照されたい。

### 第 2 節 研究科主催 F D 研修会：その 1

10 月 9 日の水曜日に学部・研究科主催の FD 研修会として、教員及び学生を対象とした「知財教育に関する教職員・学生向けセミナー」を開催した。担当の講師は本学の国際総合科学部国際総合科学学科の小川明子先生であった。当日の出席者は教員は 7 名で、学生は 37 名であった。



小川先生は非常に熱心に大学における著作権と研究倫理について日本語と英語の両方の言語でわかりやすく講演して頂いた。報告資料のスライドも非常に丁寧に作成されており、イラストをも交えながら視覚的に理解することができるものであった。

特に、本研究科の所属学生の多くは留学生が占めており、著作権に関する知識や概念が乏しい場合がある。そのような状況の中で博士論文を執筆して学位を取得するためには、著作権や研究倫理に対する知識は必要不可欠であり、この FD 研修会は、その構築に大きく貢献したと言える。

当日の小川先生の講演の概要は以下の通りである。

1. そもそも著作権とは？
2. 大学における著作権
3. 著作権侵害とは？

4. 引用
5. 著作権と研究倫理

特に、4. 引用 の項目では、侵害にならない他人の著作物の使い方について丁寧に説明されて頂いたので、学生にとって実用的な観点から見ても有意義であった。

本研究科では著作権に関する教育を非常に重要視しているので、この試みは 2020 年度も継続する予定である。

### 第3節 研究科主催FD研修会：その2

7月24日の水曜日の本研究科の教授会の冒頭の30分の時間を使って、教員を対象とした「科研費申請に関するセミナー」を開催した。担当の講師は本学の人文学部で本研究科の兼任も務めてられる高橋征仁先生であった。



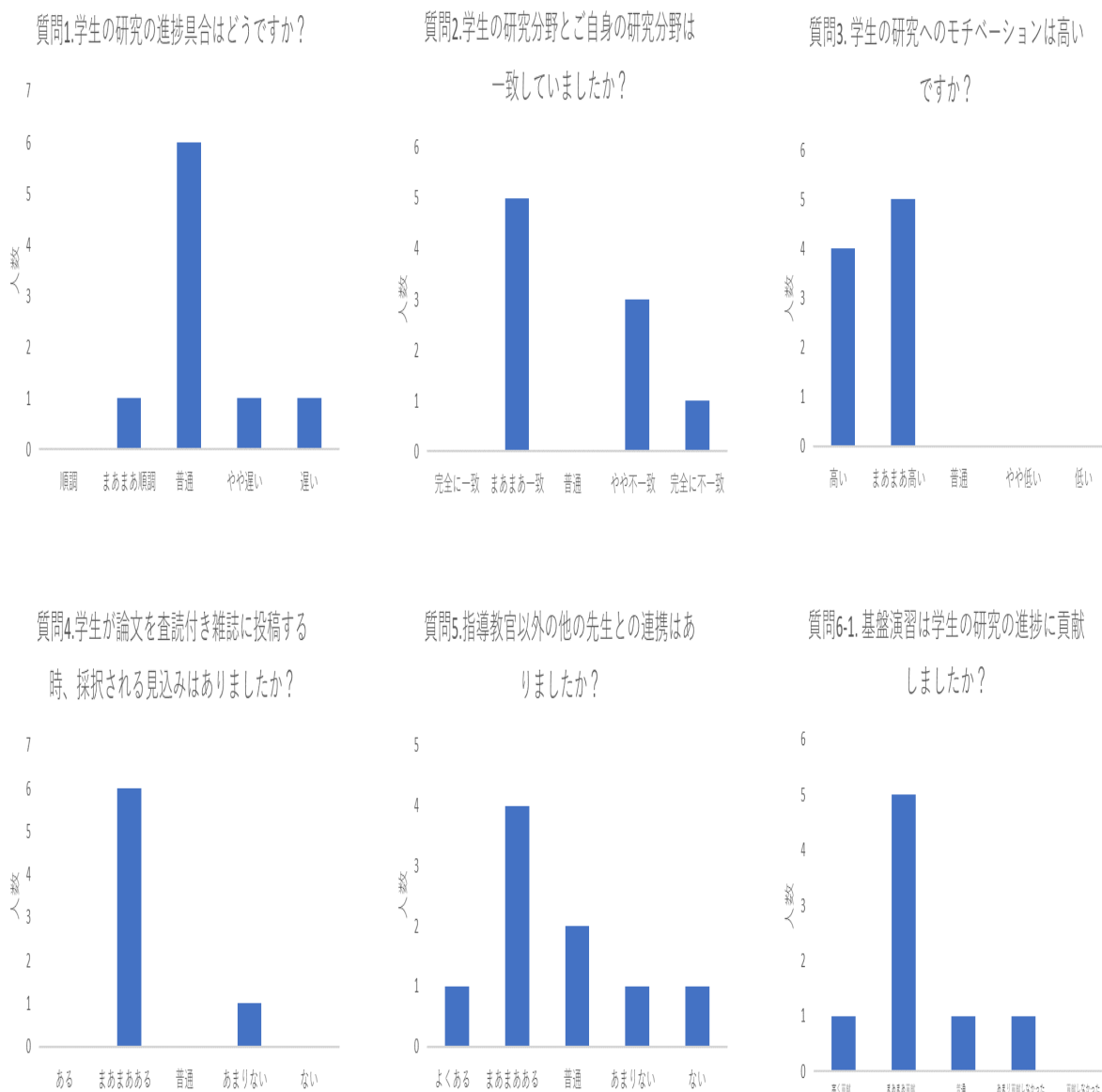
学内の研究教育費は年々減少しており、外部資金の獲得が喫緊の課題となっている。さらには、外部資金の獲得は大学の評価の一つの重要な指標となっており、外部資金の獲得は単に資金を獲得する以上の重要な意味を持っている。同様の試みは経済学部でも既になされており、本研究科もそれに倣って2019年度から試験的に実施した。非常に好評であったので、2020年度も引き続き実施して、外部資金獲得の機運を高めたり、ノウハウを共有したりなどをして、将来の外部資金の獲得の実績に繋げていきたいと考えている。

なお、このFD研修会のポイントは、科研の締め切りが10月であるので、それ以前の時期に実施することが重要である。本研究科は、教育学部、経済学部、人文学部及び国際総合科学部という様々な学部から構成されているので、講師の選定の際に注意が必要である。

## 第4節 教育改善に関する活動及び教員による授業評価

東アジア研究科の教育の主体は主指導教官及び副指導教官を中心とした研究演習である。さらに、初年度には基盤演習、次年度にはプロジェクト演習も加わるように、講義ではなくて演習が主体となっている。そこで、教育改善のためには、これらの演習の質の向上が欠かせない。そこで、現状を把握するためにアンケート調査をおこなった。以下では、その調査結果の概要について述べ、それを基に、教育改善のための提言をおこないたい。

教員に対するアンケートでは9名の方にご回答して頂いた。結果は下の図に示している。





# 第19章 大学院技術経営研究科のFD活動

## 第1節 授業公開

技術経営研究科は社会人大学院生を対象とした大学院であるので、平日は勤務しながら大学院課程を修学できるように授業を週末の二日間に開講している。日本人社会人を対象とした日本語による大学院講義は、広島教室および福岡教室の2教室体制で授業を行っている。また、留学生を対象にした英語による講義は、常盤キャンパス（宇部教室）において平日のカリキュラムにより授業を実施している。これらの講義は、全教員が担当している。本研究科の授業の基本方針として、宇部教室（常盤地区）、福岡教室ならびに広島教室のすべての教室において、全カリキュラムを対面式授業で行うことを基本としている。

令和元年度に実施したピアレビューの評価項目を付記する。

### ◆ 優れていると感じた点について

#### 【説明】

- ・ 声をはっきりとして聞き取りやすいですか。
- ・ 丁寧に講義内容を説明していますか。
- ・ 学生の職務内容を念頭に置いた説明をしていますか。
- ・ 学生が各自の業種に応じて演習課題を展開できるように意図されていますか。
- ・ 専門分野が違う受講者にも理解し易いように説明が工夫されていますか。
- ・ パワーポイントの使い方は適切ですか（文字の大きさ、スライドの送り方など）。
- ・ 動画を使った説明など、学生の興味を引き出す工夫がされていますか。
- ・ 学生が授業内容を理解するペースを考慮して、説明のテンポを調整していますか。

#### 【資料】

- ・ パワーポイント スライドのフォントサイズは適切ですか。
- ・ パワーポイント スライド1枚当たりの時間を十分に設定しますか。
- ・ 講義説明を書き込むのに必要な時間が十分確保されていますか。
- ・ 講義で専用ソフトウェアを利用する際には、操作マニュアルが用意されていますか。
- ・ ニュース・報道・Web情報を引用している場合、引用元を明記していますか。

#### 【教授法】

- ・ スクール形式による説明と、グループ学習や討議などの実践形式による学習がバランス良く取り入れていますか。
- ・ 事前課題を用意していますか。
- ・ 授業の進め方や教材について、創意工夫を取り入れていますか。
- ・ 学生のモチベーションを引き出すような工夫をしていますか。
- ・ 講義の進行に応じて、グループワークやグループ討議が適切に行われていますか。

- ・ 学生から発言を引き出すように授業をリードしていますか。
- ・ 特定の学生の発言回数が増えないように、注意していますか。

◆ 授業を参観し、参考になる感じた点について

【事例】

- ・ 授業の内容を補完するための学習
  - eラーニングを利用して授業の一部を個人学習に割り当てる。
  - 調査に時間を要する内容について、課題レポートとして割り当てる。
- ・ 教材の作成方法
  - パワーポイント教材に図表や写真などを配置し、テキストだけ教材と比較してビジュアル的にアピールする。
  - 参考資料を活用する。
  - ビデオ教材やドキュメンタリー映像などの動画を用いる。

## 第2節 学部・研究科主催FD研修会

令和元年度 教育改善FD研修会の実施（大学教育センターとの共同開催）

### 概要

山口大学では、各学部・学科等の裁量のもと、ポートフォリオの運用を図ってきました。昨今、教育の内部質保証の重要性が叫ばれ、各学部・学科等が定めたディプロマ・ポリシー（DP）に基づく教育・学修の徹底が求められています。学生自身が学年進行に従い、自らの学びを振り返り、担当教員の指導助言を受けながら学修を進めることが大事であり、学びのプロセスを明確化するツールとして「学修ポートフォリオ」が欠かせないものとなってきています。

本年度の教育改善FD研修では、「学修ポートフォリオ」の意義を説明するとともに学習支援システムの学習ポートフォリオ機能を紹介します。「学修ポートフォリオ」の運用の一助となれば幸いです。

日程： 令和2年2月12日（水）[常盤地区] 15:00～16:00  
場所： 大学院技術経営研究科棟 1階 教員会議室  
講師： 林 透（大学教育センター 准教授）  
研修対象者： 技術経営研究科 教職員

### 研修スケジュール

15:00 ～ 15:40（40分） 学修ポートフォリオの説明（大学教育センター）  
15:40 ～ 16:00（20分） 質疑応答・意見交換



## 【★実施内容】教育改善 FD 研修会（技術経営研究科）

日時 令和2年2月12日(水) 15:00～16:00

場所 大学院技術経営研究科棟 1階 会議室

参加者 12名（アンケート回収 11名）

担当者 林 透（大学教育センター准教授）

内容

はじめに技術経営研究科のFDコーディネーターの大島教授から講師紹介と趣旨説明が行われた後、講演に入った。

林准教授からは、最初に、本年度学修ポートフォリオをテーマに掲げた理由が紹介された。3つのポリシーに基づいた教育の内部質保証、教学マネジメントを言われていて、その中で特にDPで掲げられた資質能力に基づいてカリキュラムが運営され学生が成長し資質能力を習得しているかが求められており、そのなかで学修成果を具体的に求められている。それを学生自身と社会に対して見える化しなさいと言われている。大学のイベントからすると2年後くらいに認証評価を控えている中で、その辺りの事も非常に大事になってきている。学修成果だけでなく学修過程も重要になってきて

いて、そのためのツールとして重要になってきているのが学修ポートフォリオとなっているということが一つ目の理由。もう一つは修学支援システムでeポートフォリオを運用することについて部局に話せる状況になったので、出来れば各部局で運用して頂ければというのが本日の後段となると紹介された。

前半では、学修者の振り返り(リフレクション)の重要性について2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)や、Kolbの経験学習の理論、メタ認知能力やベネッセと東大の共同調査(「親子パネル調査」分析結果, 2019)等を引き合いに出しながら解説された。後半では、それを効果的に行うためのツールとしてポートフォリオの機能等について確認が行われると共に、本学修学支援システムにおけるeポートフォリオの準備状況について画面等を交えながら紹介が行われた。

質疑応答

以上のように活発な議論が繰り広げられた。

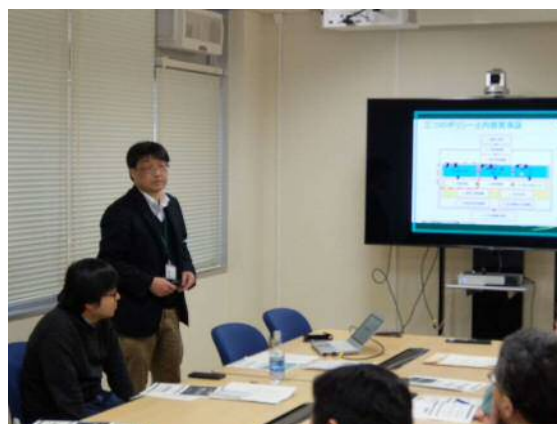
Q: 学生が強制的に書かされるのか自主的に書くのか？

A: 修学支援システム上の運用についてはまずこういう機能があることを説明させて頂いて、実際に運用したいとなった場合、少し要望聞いて部局によるカスタマイズが必要なので、そのためにまずご紹介に上がった。4月から運用できるようになった。世間的に言えば、学修のプロセスの中でポートフォリオが重要になってきているところあるので是非利用して頂きたい。

設問1

研修会に参加した感想はいかがでした？

選択肢	人数	割合(%)
非常に良かった	1	9.1%
良かった	9	81.8%
どちらとも言えない	1	9.1%
あまり良くなかった	0	0.0%
良くなかった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	11	100.0%



Q: 無理やりではないがやってもらいたいと？

A: 組織的には中期計画にもある事項なので、大学としては重要事項ではある。

Q: ポートフォリオの役割は振り返りであると。振り返りは何のためかと言えば、部局ごとに設定されている DP との比較をするためだと理解している。そうするとポートフォリオはある学部学科に属している学生が、出来ればと言ったが、理想的には全員参加していくという形ですよね。それに対して指導教員は範囲が良く分からなかった。研究室配属なのか各科目担当の人は関連の部分見て行けるのか。要するに教員側の閲覧範囲だがどんな感じか？

A: 基本的には個々のクラスの先生が見えるわけじゃなくて、学部だとクラス担任とか研究配属になって研究室の教員が指導教員になっているが、そういう意味では学年全体で見ていく立場の方に設定する形になるかなと。大学院の場合は、指導教員決まるのでそうなるかなと。

Q: それは部局ごとに設定してくれという事ですよね？

A: そう。

Q: 閲覧権限決めるのは教育センターに申請するのか？閲覧権限の割り振りする権限は誰も持っていない。例えば A 先生の指導学生が B 君と C 君ですと言ったときに A 先生には出来ないはず。

A: 大学教育機構の方で、実際には事務方が入ると思う。

Q: それを研究科の範囲で研究科長に権限渡して頂くという事は出来ないのか？

A: 多分、修学支援システムの設定の運営上、その管理権限は…

Q: 修学支援システム全体は知らないけれど、うちの研究科内でのポートフォリオの管理権限、アクセス権限の紐付けについては我々の方でさせて頂きたい。

A: ルール作りは研究科でして頂いて。

Q: そういう相談を今後させてください。別件で質問ですけど、教員が指導している学生の閲覧できるのがメリットだと説明あったが、必ずしもメリットと思わなくて誰にも見せたくないもの上げている人もいます。なので、学生がこれは俺しか見られない、これは公開なり教員と共有してもいいと、2つのカテゴリーを学生自身に選ばせる機能が欲しい。

A: ポートフォリオの持っている機能2つある。今日話したのは割と組織的にやる話。部局が設定する目標決めてやる。それ以外に学生が学んだ成果物をアップするようなボックスの機能もこのシステム持っている。そっちの運用どうするかはまだ決まってないが、基本的にそれはクローズドで指導教員見られない形にする。

Q: それは両方とも一度に用意ドンで機能しないとポートフォリオとして片手落ち。もう一つ大事なところですけど、ポートフォリオに上げたファイルの所有権は誰のものですか？本来学生が自分で上げたものは元々自分の物上げているので僕の持ち物ですとそこまではいいです。でも卒業した後、このポートフォリオはどうなるのでしょうか？

A: それはさっき医学部でも同じ質問頂いたのですが、いくつかの学部でもその質問頂いていて、今のシステムでは在学期間中の運用になっている。本当は、学んだ履歴の所引き出して社会人になっても使いたいというのがある。そういう意味では CSV で引き出して学生個人が保有している機能は持たせたい。

Q: 今、完全な回答をくださいと言うつもりはないが、そこまで見据えた運用が必要ではないかと。一方で、大学としてもそれを教育評価データとして蓄積したいが、一方で学生は個人の物で

しょうというところで、卒業した後の運用の仕方というのは慎重に制度設計をしていかないと、トラブルになるのではないかという危惧を持っていて、最初からそういったところを視野に入れた制度設計を是非お願いしたい。

A: そこは考えさせてください。

Q: 基本的に知財上は創作した人間に電子的権利が帰属するので、学生に何らかの所有権が発生する可能性が高い。それを制限するためには明示的な契約、取り決めを持って大学と学生の間で規定を合意する必要がある。

Q: ややこしいですね？

Q: しっかりやらないと個人情報、人格権の問題も発生するのでリスクが。

A: 今のところは、冒頭にも行ったが、学修目標に対して学生がどう学んでいるかを大学に在籍している期間を見ているところがある。部局に行くのと今の質問頂いているので考えて行きたい。

Q: 継続的に意見交換できると良いと思う。

アンケートの結果として、以下のような内容が見られた。

#### 感想

- ・ Kolb の省察モデルを巧みに用いる企業は Toyota だと思います。企業で実践している case も検討されると良いと思います。
- ・ 修学支援システムの新機能について知ることができた。

#### 希望の研修内容

- ・ 社会人向けリカレント教育について特に留意すべき点など
- ・ テスト理論に関する研修を行って下さい
- ・ 教育システムの AI かなど Digitalization に関わる修学支援システムの有効活用について研修があると良い

#### 参加したくない理由

- ・ 時間的な余裕がないため



以上

山口大学大学院技術経営研究科  
令和元年度 FD 研修

日時

令和2年3月3日 午後1時30分～2時30分

場所

MOT 研究棟 1階教員 教員会議室

タイトル

クロスアポイメント制度にもとづく国際学術交流に関する研修

講師

マラ工科大学

上級講師 ノリザ ヤーヤ

**INTERNATIONAL ACCADEMIC ACTIVITY  
Based on CROSS APPOINTMENT in YUMOT-UiTM**

**3rd May 2020**

**Dr. Norliza Che Yahya**

Faculty of Business and Management (FBM), Universiti Teknologi MARA, Malaysia

**Abstract**

The following are tasks stipulated in the official cross appointment letter:

1. To design a potential research collaboration between faculty members of YUMOT and UiTM (Arshad Ayub Graduate Business School (AAGBS) and FBM).
2. To conduct a Project Based Action Research (PBAR) in the area of Management of Technology (i.e., to understand the challenges and difficulties (e.g., financing structure and in-capabilities) in the management of technology from the context of Malaysian firms).

The following are completed, on-going and future activities during cross appointment:

*Completed Activities:*

1. A research paper – '*Individual investors' sentiment on Japanese IPO aftermarket performance*'. This research paper examines the influence of individual investors' sentiment on Japanese IPO aftermarket performance. The finding of this paper shows that individual investors' sentiment

significantly explains Japanese IPO aftermarket performance.

2. Academic conference registration. – The completed first research paper (*Individual investors' sentiment on Japanese IPO aftermarket performance*) is registered into the 3rd Advances in Business Research International Conference 2020 (ABRIC 2020) for its finding's presentation and sharing. This conference, to be held from 8<sup>th</sup> April to 10<sup>th</sup> April 2020 in Sarawak Malaysia, is mainly organized by FBM. This conference is a plausible platform to present output of the first research collaboration with YUMOT (specifically with Professor Yoshiyuki Matsuura) as the conference participants are primarily academic staffs of FBM. This will offer the staffs as well as other participants a better understanding on the institutional setting of Japanese market (at least from the perspective of Japanese Stock and Initial Public Offerings' market).

*On-going Activities:*

1. A research paper – *'Financial Behaviour and Innovation Strategies'*. This research project will focus on the financing choice-innovation of firms' relationship in the context of Japanese firms. The financial behaviour of firms will be proxied by firms' capital structure (a complex mix of internal (retained cash flow) and external (debts and equity) financial supports). The innovation strategies will be proxied by patent citation as well as patent registration. Other suitable faculty members of AAGBS, FBM and MOT will also be invited to participate in this research.
2. Project Based Action Research (PBAR) - to understand the challenges and difficulties (e.g., financing structure and in-capabilities) in the management of technology from the context of Malaysian firms). This research project, led by Dr. Hadijah Iberahim is now at its initial stage of gathering preliminary information on the adoption of technology in Malaysian firms.

*Future Activities:*

1. Official establishment and registration of Research Interest Group (RIG) in UiTM – the official registration of RIG in Research Management Center (RMC) of UiTM will enable a continuous research collaboration between YUMOT and UiTM with the possibility of funding supports from the Center.
2. Presentation on finding of first research paper to ABRIC 2020.

## **Strengths and Opportunities of Cross Appointment**

*Strengths:*

1. Engagement of faculty members to different working practices, policies and systems between YUMOT and UiTM.

2. Venue for the integration of good practices and new methods into daily professional activities of UiTM.
3. Bridge to feasible and continuous international collaborations (academic programs and researches).
4. Visibility of YUMOT and UiTM through the promotional activities potentially initiated and sustained in both institutions.

*Opportunities:*

1. Self-development (improve competences, link to professional profiles).
2. Promotion to a more dynamic, committed and professional environment in UiTM through the integration of good practices built during the cross-appointment term.
3. Continuous strategic collaborations for researches at the individual and universities' interest.
4. Potential enhancement in the universities' reputation through number of staff's mobility, student's mobility and research partnerships.

  
**CROSS APPOINTMENT ACTIVITIES**  
**YUMOT-UTM**  
**3rd May 2020**  
 Faculty of Business and Management (FBM)  
 Universiti Teknologi Mara (UTM), Malaysia  
**Dr. Norliza Che Yahya**

1

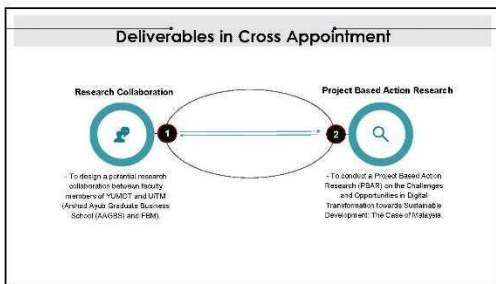
**Introduction**  
  
 Faculty of Business and Management  
 UNIVERSITY TEKNOLOGI MARA  
 40450 Shah Alam, Selangor  
 03-5107 2000  
 www.utm.edu.my/fbm/

**DR. NORLIZA CHE YAHYA**  
 SENIOR LECTURER  
 Department of Finance and Insurance (DIFIN)  
 Faculty of Business and Management (FBM),  
 Universiti Teknologi Mara (UTM)

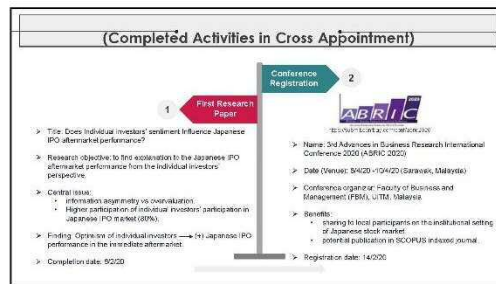
**CONFERENCE PRESENT**  
 • National Level  
 • Topical/Current Knowledge  
 • Current Issues  
 • Practice Management  
 • Impact on Practitioner

**POST-ACADEMIC PROJECTS/WORKS**  
 • Journal Article  
 • Conference Paper  
 • Book Chapter  
 • Edited Book  
 • Monograph  
 • Research Report  
 • Technical Report  
 • Patent Application  
 • Intellectual Property  
 • Creative Commons License  
 • Open Access  
 • Creative Commons License  
 • Intellectual Property  
 • Creative Commons License

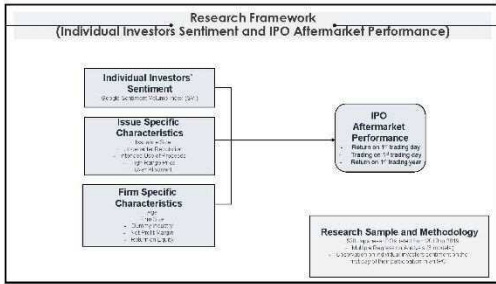
2



3



4



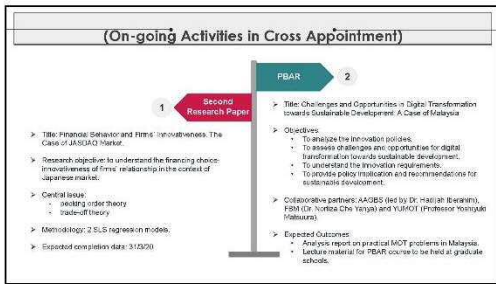
5

**Research Finding Summary (Individual Investors' Sentiment and IPO Aftermarket Performance)**

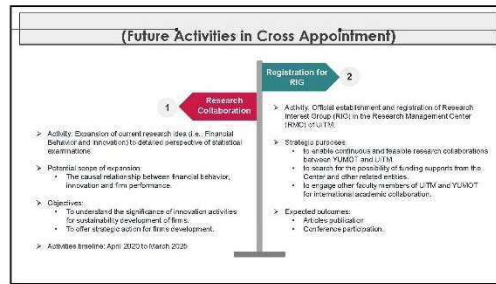
Independent Variable	Dependent Variable	Hypotheses (H)	Results (Significant/Insignificant)	Support to Hypotheses (Yes/No)
Individual Investors' Sentiment (INVSENT)	Return on 1 <sup>st</sup> trading day	Positive relationship	Significant (95% confidence level)	Yes
	Trading volume of 1 <sup>st</sup> Trading day	Positive relationship	Significant (95% confidence level)	Yes
	Return on 1 <sup>st</sup> trading year	Negative relationship	Insignificant	No

The main findings of this study reveal that individual investors' sentiment is positively and significantly related to returns and trading volume on the first trading day. The trading volume is also significantly related to the return on the first trading day. The results of the regression analysis indicate that the regression coefficients are positive and significant. As such, following the increased volume of the shares, higher return and share turnover on the first trading day is found. Additionally, however, the return of individual investors' opinion on the long term aftermarket performance is positive on the first trading year in either context, and weaker, at least from the perspective of JIPMs issued in Japanese market during the sample period.

6



7



8

### (Future Activities in Cross Appointment)

**3** **Instructional Manual Development**

- Activity: Development of lecture material for PSAR course to be held at graduate school (AGBS).
- Instructional Manual Contents:
  - What is project based action research (PBAR)?
  - Project members participation and engagement
  - Benefits of PBAR
  - Research ethics in PBAR
  - Planning a PBAR project - research process model
  - Quality
  - Resources and references

**4** **Module Development**

- Activity: Development of module for short course (or workshop) on Financial Innovation in FBS, UTM.
- Strategic purposes:
  - To further promote the understanding of innovation with in the finance field.
  - To develop faculty members as experts in the area of financial innovation in UTM.
  - To enhance and sustain its visibility and good values of academic program in UTM.
  - To further consolidate the multidisciplinary aspiration among academic members of UTM.

9

### Cross Appointment (Strengths and Opportunities)

**Strengths**

- Engagement of faculty members to different working practices, policies and systems (between YUMOT and UTM).
- Value for the integration of good practices and new methods into daily professional activities of UTM.
- Bridge to feasible and continuous international collaborations (academic programs and researches).
- Viability of YUMOT and UTM through the international activities periodically initiated and sustained in both institutions.

**Opportunities**

- Self development (improve competences, link to professional profiles).
- Adaptation to a more dynamic, committed and professional environment in UTM through the integration of good practices built during the cross appointment term.
- Continuous strategic collaborations for researches at the individual and universities' interest.
- Potential enhancement in the universities' reputation through number of international students mobility and research partnerships.

10

### Cross Appointment (Personal Deliberations)

**Current state**

- welcomed by the host/universities (e.g. administrative assistance, fruitful academic discussions, conducive working stations) provided by MOT and its members.
- Adaptation to the environment, in particular the weather.
- Language barrier.
- Time constraint (only 4 months) for a more in depth discussion on academic collaboration in MOT.
- Optimised with continuous research collaborations considering progress on current research collaboration.

**Expectations**

- A closer attachment to MOT with faculty's members and faculty's activities for a better understanding on its policies, systems and operation.
- More opportunities to participate in teaching or researching activities.
- Continuous strategic collaborations for researches at the individual and universities' interest with other members of MOT.
- To be an accelerator for other possible collaborations between UTM and YUMOT in the future.

11

### Personal Visits and Experience

12

**Faculty of Business and Management  
Universiti Teknologi MARA**

13

### The beginning...

- 1990: Creation of the Faculty of Business and Management (FBS) at UTM.
- 1990: Transformation of Faculty of Business and Management (FBS) to Faculty of Business and Management (FBM).
- 1991: Approval of the Faculty of Business and Management (FBM) by the Ministry of Education.
- 1993: Establishment of the Faculty of Business and Management (FBM) at UTM.
- 1995: Approval of the Faculty of Business and Management (FBM) by the Ministry of Education.
- 1996: Approval of the Faculty of Business and Management (FBM) by the Ministry of Education.
- 1998: Approval of the Faculty of Business and Management (FBM) by the Ministry of Education.
- 2008: Approval of the Faculty of Business and Management (FBM) by the Ministry of Education.

14

### cont...

- 2000: Approval of the Faculty of Business and Management (FBM) by the Ministry of Education.
- 2003: Approval of the Faculty of Business and Management (FBM) by the Ministry of Education.
- 2004: Approval of the Faculty of Business and Management (FBM) by the Ministry of Education.
- 2005: Approval of the Faculty of Business and Management (FBM) by the Ministry of Education.
- 2006: Approval of the Faculty of Business and Management (FBM) by the Ministry of Education.
- 2007: Approval of the Faculty of Business and Management (FBM) by the Ministry of Education.
- 2008: Approval of the Faculty of Business and Management (FBM) by the Ministry of Education.
- 2009: Approval of the Faculty of Business and Management (FBM) by the Ministry of Education.
- 2010: Approval of the Faculty of Business and Management (FBM) by the Ministry of Education.
- 2011: Approval of the Faculty of Business and Management (FBM) by the Ministry of Education.
- 2012: Approval of the Faculty of Business and Management (FBM) by the Ministry of Education.
- 2013: Approval of the Faculty of Business and Management (FBM) by the Ministry of Education.
- 2014: Approval of the Faculty of Business and Management (FBM) by the Ministry of Education.
- 2015: Approval of the Faculty of Business and Management (FBM) by the Ministry of Education.
- 2016: Approval of the Faculty of Business and Management (FBM) by the Ministry of Education.
- 2017: Approval of the Faculty of Business and Management (FBM) by the Ministry of Education.
- 2018: Approval of the Faculty of Business and Management (FBM) by the Ministry of Education.
- 2019: Approval of the Faculty of Business and Management (FBM) by the Ministry of Education.

15

### Facts...

- 01** The largest business faculty in Malaysia **FACT**
- 02** 28,404 active students >100,000 alumni worldwide **FACT**
- 03** 280 academic staff **FACT**

August 2019

16





17



18



19

### Executive Management

Faculty of Business and Management

20

### International Recognition

- Best Islamic Finance Qualification for BBA (Hons) Islamic Banking by Global Islamic Finance Awards for two consecutive years, 2018 and 2019.
- Award for Best Education Institute in Banking and Insurance by The Golden Globe Tiger 2019 (Education Leadership) on 23 April 2019 at Pullman KL City.
- Award for Best Education Institute in Retail by The Golden Globe Tiger 2019 (Education Leadership) on 23 April 2019 at Pullman KL City.
- Winner in the category Best Educator Award at ASEAN Tech Awards 2020 on 6 December 2018 at Indonesia.

Faculty of Business and Management

21

### Strategic Partnership

MOUs Between UiTM and Other Local and Foreign Institutions

Move in tandem with current academic trends and innovations.

Academic, cultural, scientific thought and personnel exchange

Establishing co-operative academic and research activities

Faculty of Business and Management

22

- ### Conferences
- 3<sup>rd</sup> Advanced in Business Research International Conference will be held on 8-10 April 2020 at Hilton Hotel, Kuching Sarawak
  - The Asian Business and Economics International Conference 2019 on 25-27 April 2019 was held at Kangwon National University, South Korea (Co-organizer)
  - The 9<sup>th</sup> International Institute of Management Sciences International Conference was held on 1 - 3 December 2019 at Hanoi Industrial Garment and Textile University, Vietnam (Co-organizer)
- Faculty of Business and Management

23

Universiti Teknologi MARA  
Fakulti Pengurusan dan Perniagaan

Thank you

Faculty of Business and Management

24

### 第3節 教育改善に関する活動

平成 32 年度のカリキュラム改正に向けて、教員懇談会を実施し、大学院技術研究科の教員による新しいカリキュラムの編成について議論した。

教員懇談会

令和元年 7 月 9 日（火） 午後 3 時

令和元年 9 月 10 日（火） 午後 3 時

令和元年 11 月 12 日（火） 午後 3 時

### 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

授業評価アンケートは社会人学生に対して基本的にすべての科目において実施しているが、対象とする社会人学生の学習意欲は高く、「学習目標達成」、「理解」、「満足」のいずれの項目においても、高い評点となっている。

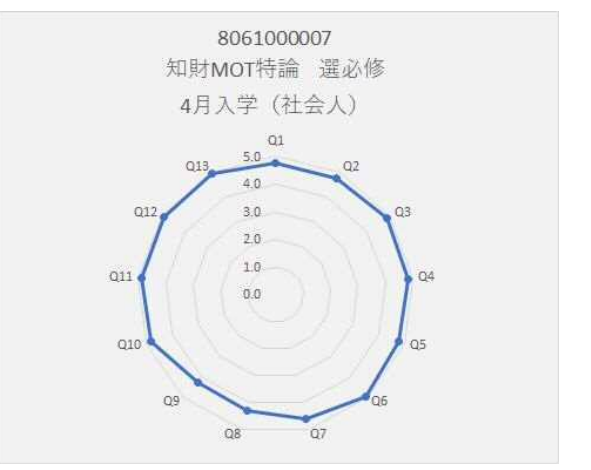
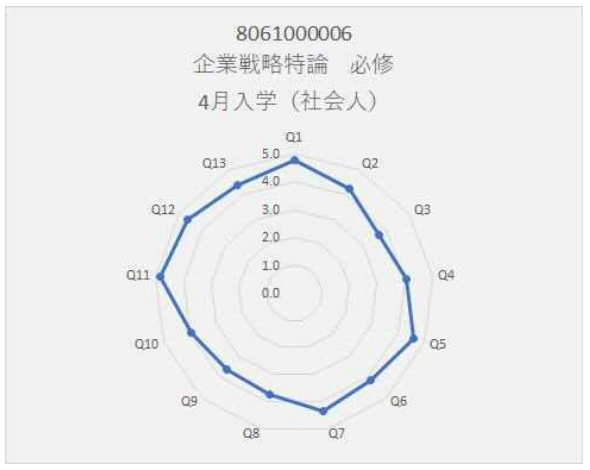
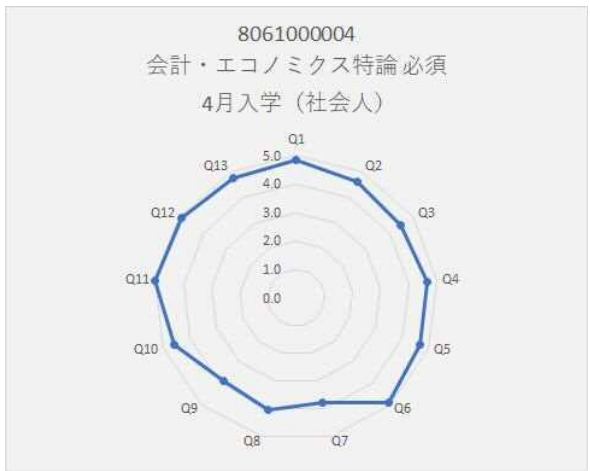
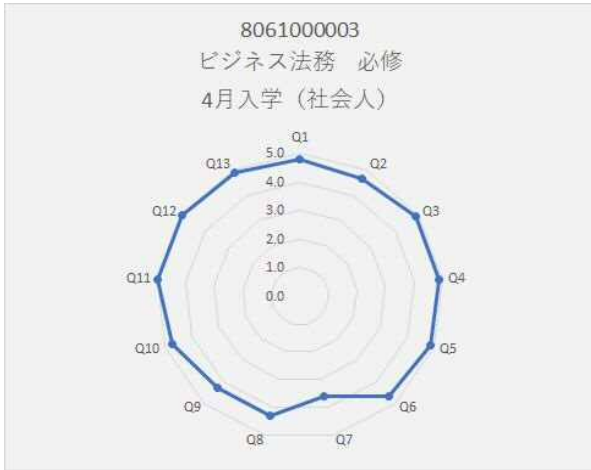
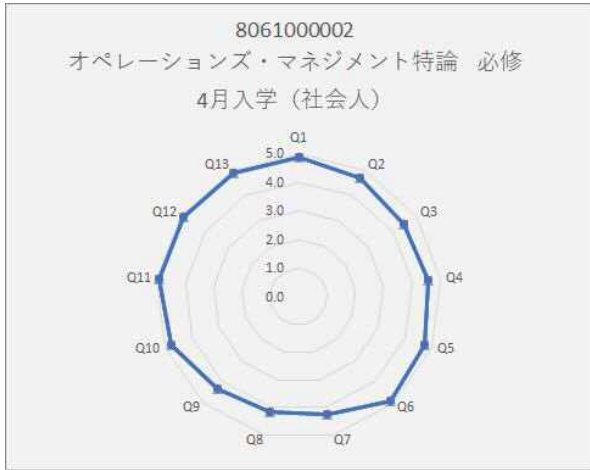
※今年度の状況および経年変化に関する分析

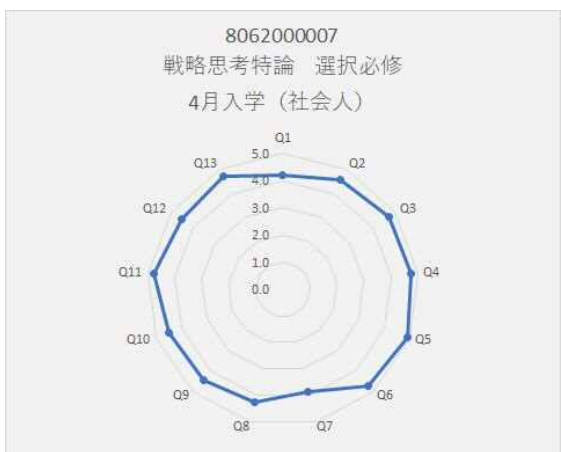
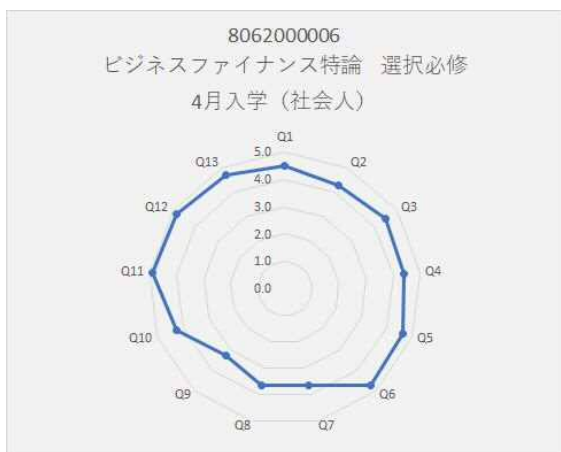
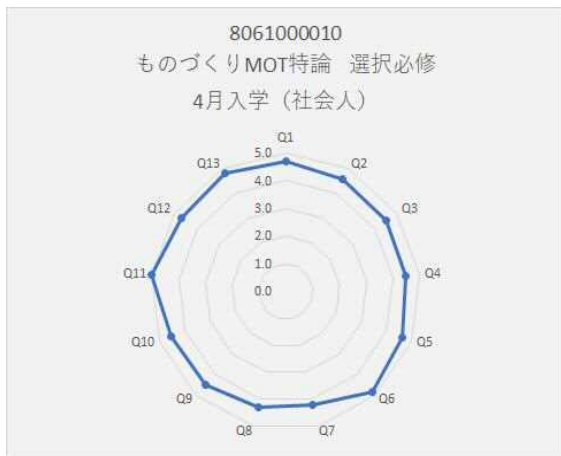
科目毎の授業アンケート結果を次に示す。

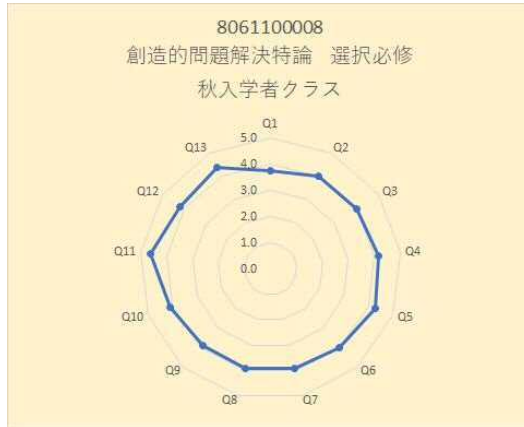
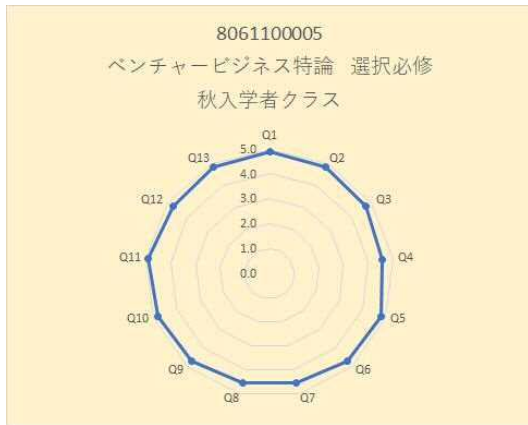
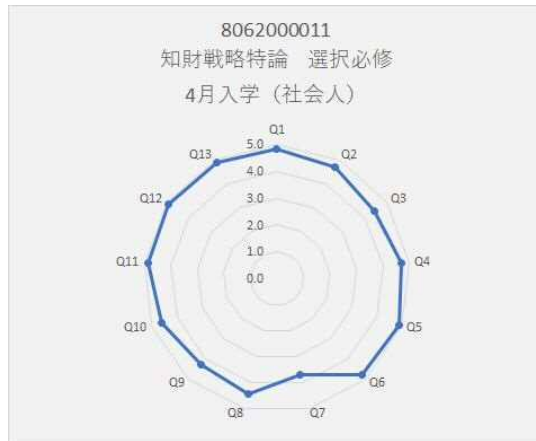
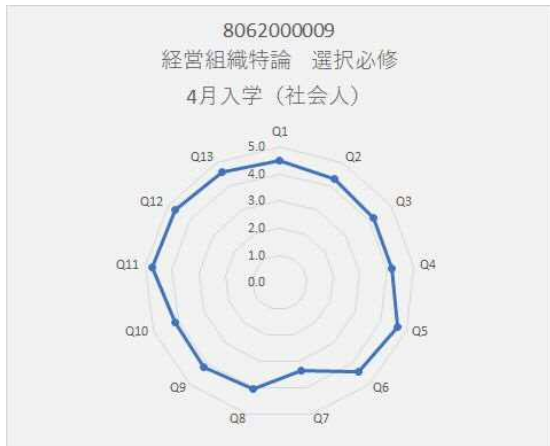
アンケートの設問内容は、表 1 に示すとおりである。

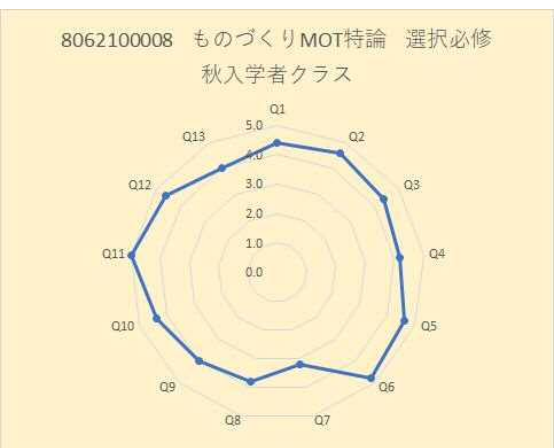
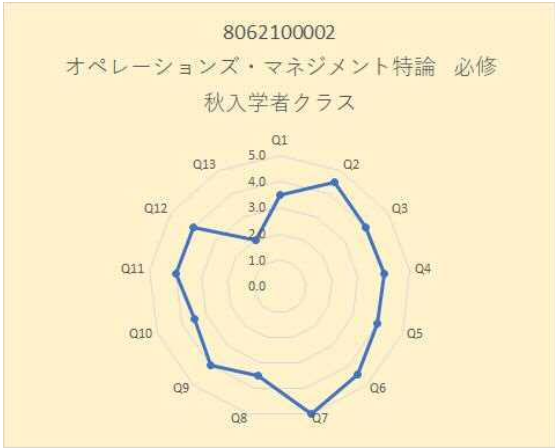
設問番号	設問内容
q01	教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？
q02	理論や考え方、専門用語などが、わかりやすく説明されたと思いますか？
q03	教材、板書、プロジェクターなどに授業の理解を促す工夫がなされていたと思いますか？
q04	練習問題、課題・宿題、参考文献の例示など授業外での学習を促す工夫がなされていたと思いますか？
q05	学生の疑問・質問への対応が十分であったと思いますか？
q06	担当教員の熱意を感じましたか？
q07	あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどのくらい行いましたか？総時間を平均して、授業 1 回あたりの時間に換算してお答えください。
q08	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？
q09	あなたは、授業の内容を理解できましたか？
q10	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？
q11	あなたは、この授業にどのくらい出席しましたか？（括弧の数字は 15 回授業の場合の出席回数参考値です）
q12	この授業は、大学院レベルの内容であったと思いますか？
q13	この授業は、社会的ニーズに対応していたと思いますか？

時間割コード	科目名	単位数	区分	対象	開講 曜日・時限	受講者数	回答者数	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13
8061000002	オペレーションズ・マネジメント特論	2	必修	4月入学(社会人)	土1~6	19	19	4.9	4.7	4.5	4.6	4.7	4.9	4.3	4.2	4.3	4.8	5.0	4.9	4.9
8061000003	ビジネス法務	2	必修	4月入学(社会人)	土7~12	20	20	4.8	4.7	4.9	4.9	4.9	4.7	3.6	4.3	4.3	4.8	5.0	5.0	4.9
8061000004	会計・エコノミクス特論	2	必修	4月入学(社会人)	土1~6	20	19	4.8	4.6	4.5	4.6	4.7	4.9	3.8	4.1	3.9	4.6	5.0	4.9	4.8
8061000005	テクノロジ・マーケティング特論	2	必修	4月入学(社会人)	土1~6	19	19	5.0	4.8	4.7	4.7	5.0	4.8	3.8	3.8	4.3	4.7	4.9	5.0	4.8
8061000006	企業戦略特論	2	必修	4月入学(社会人)	土7~12	19	19	4.8	4.2	3.7	4.1	4.6	4.2	4.4	3.7	3.6	4.0	4.8	4.6	4.4
8061000007	知財MOT特論	2	選必修	4月入学(社会人)	集中	18	16	4.8	4.8	4.9	4.8	4.8	4.9	4.6	4.3	4.3	4.8	4.9	4.9	4.9
8061000008	グリーンMOT特論	2	選必修	4月入学(社会人)	集中	17	17	5.0	5.0	4.9	4.9	5.0	5.0	4.1	4.6	4.7	4.8	4.9	5.0	5.0
8061000009	ライフサイエンスMOT特論	2	選必修	4月入学(社会人)	集中	15	15	4.9	4.5	4.8	4.8	4.9	4.9	3.8	4.4	4.1	4.5	4.9	5.0	4.9
8061000010	ものづくりMOT特論	2	選必修	4月入学(社会人)	集中	18	16	4.7	4.6	4.5	4.5	4.6	4.8	4.2	4.3	4.5	4.6	5.0	4.7	4.8
8061100005	ベンチャービジネス特論	2	選必修	秋入学者クラス	集中	11	11	4.9	4.8	4.7	4.6	4.8	4.7	4.6	4.6	4.7	4.8	4.9	4.7	4.8
8061100008	創造的問題解決特論	2	選必修	秋入学者クラス	金1~4	11	11	3.7	4.0	4.0	4.2	4.3	4.0	3.9	3.9	3.9	4.1	4.6	4.2	4.4
8061100010	リーダーシップ論	2	選必修	秋入学者クラス	水1~4	10	10	3.7	4.0	4.4	3.6	4.5	4.5	3.4	4.1	4.0	3.9	4.8	4.3	4.2
8061100012	国際知財法務特論	2	選必修	秋入学者クラス	水1~4	11	11	4.8	4.9	4.9	4.5	4.9	5.0	3.9	3.9	4.3	4.5	5.0	4.6	4.4
8062000004	マーケティングリサーチ特論	2	選必修	4月入学(社会人)	土1~6	33	32	4.9	4.8	4.8	4.8	4.9	4.9	3.9	4.4	4.3	4.8	4.8	4.9	4.8
8062000006	ビジネスファイナンス特論	2	選必修	4月入学(社会人)	土7~12	28	26	4.5	4.3	4.5	4.4	4.6	4.8	3.7	3.7	3.3	4.3	4.9	4.8	4.7
8062000007	戦略思考特論	2	選必修	4月入学(社会人)	土1~6	29	26	4.2	4.5	4.7	4.7	4.9	4.7	3.9	4.3	4.4	4.5	4.8	4.5	4.7
8062000009	経営組織特論	2	選必修	4月入学(社会人)	土7~12	21	21	4.5	4.3	4.2	4.2	4.7	4.4	3.3	4.1	4.2	4.1	4.8	4.7	4.6
8062000011	知財戦略特論	2	選必修	4月入学(社会人)	土7~12	36	34	4.8	4.7	4.4	4.7	4.9	4.8	3.7	4.5	4.3	4.6	4.9	4.9	4.9
8062100002	オペレーションズ・マネジメント特論	2	必修	秋入学者クラス	水1~4	2	2	3.5	4.5	4.0	4.0	4.0	4.5	5.0	3.5	4.0	3.5	4.0	4.0	2.0
8062100004	会計・エコノミクス特論	2	必修	秋入学者クラス	火1~4	2	2	5.0	5.0	4.5	4.5	5.0	5.0	4.5	4.5	4.5	5.0	5.0	4.5	4.0
8062100006	企業戦略特論	2	必修	秋入学者クラス	木1~4	2	2	4.0	5.0	5.0	4.5	5.0	5.0	4.0	4.0	4.0	4.5	5.0	4.5	4.0
8062100008	ものづくりMOT特論	2	選必修	秋入学者クラス	集中	5	5	4.4	4.6	4.4	4.2	4.6	4.8	3.2	3.8	4.0	4.4	5.0	4.6	4.0
8062100009	MOTビジネス・ロー	2	必修	秋入学者クラス	木1~4	2	2	5.0	5.0	5.0	4.5	5.0	5.0	2.5	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.0

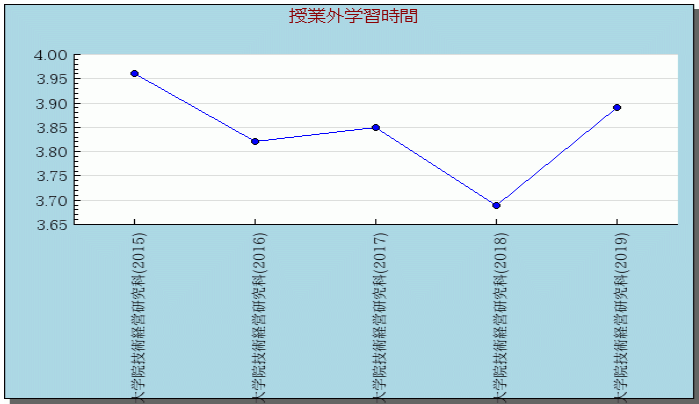
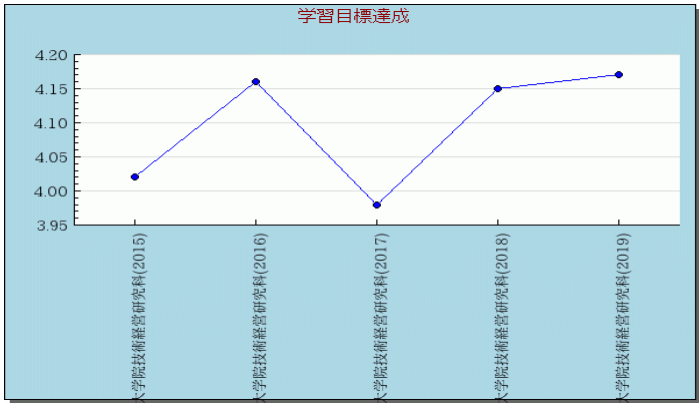
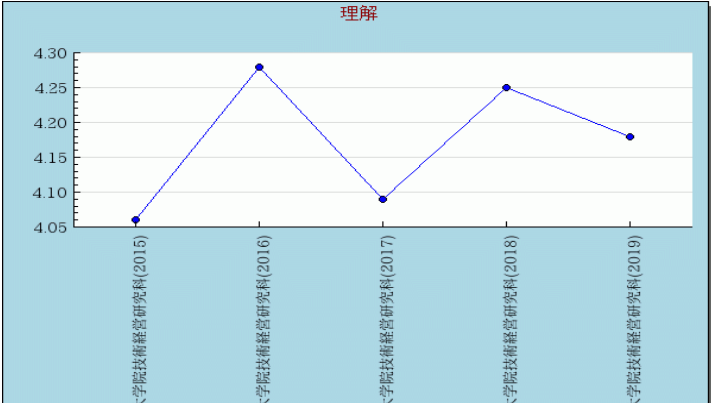






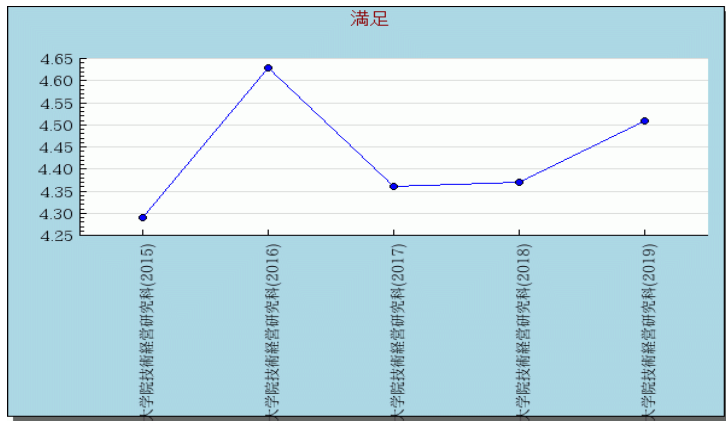


学生\_授業外学習時間等集計データ

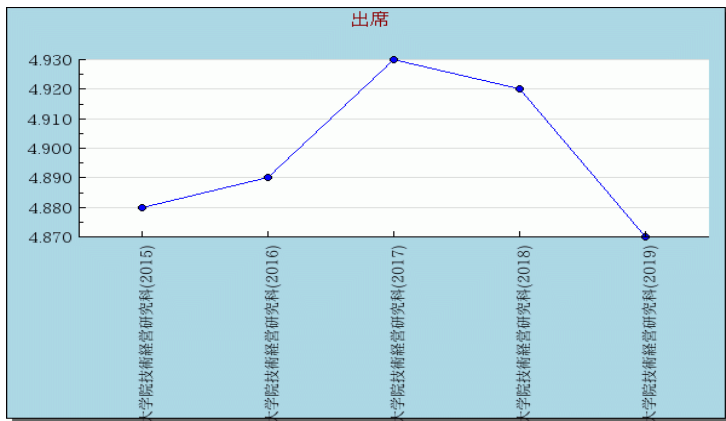
<p>学生_授業外学習時間 経年変化</p>	 <table border="1"> <caption>授業外学習時間</caption> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2015)</td> <td>3.96</td> </tr> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2016)</td> <td>3.82</td> </tr> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2017)</td> <td>3.85</td> </tr> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2018)</td> <td>3.69</td> </tr> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2019)</td> <td>3.89</td> </tr> </tbody> </table>	年度	値	大学院技術経営研究科(2015)	3.96	大学院技術経営研究科(2016)	3.82	大学院技術経営研究科(2017)	3.85	大学院技術経営研究科(2018)	3.69	大学院技術経営研究科(2019)	3.89
年度	値												
大学院技術経営研究科(2015)	3.96												
大学院技術経営研究科(2016)	3.82												
大学院技術経営研究科(2017)	3.85												
大学院技術経営研究科(2018)	3.69												
大学院技術経営研究科(2019)	3.89												
<p>学生_学習目標達成 経年変化</p>	 <table border="1"> <caption>学習目標達成</caption> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2015)</td> <td>4.02</td> </tr> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2016)</td> <td>4.16</td> </tr> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2017)</td> <td>3.98</td> </tr> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2018)</td> <td>4.15</td> </tr> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2019)</td> <td>4.17</td> </tr> </tbody> </table>	年度	値	大学院技術経営研究科(2015)	4.02	大学院技術経営研究科(2016)	4.16	大学院技術経営研究科(2017)	3.98	大学院技術経営研究科(2018)	4.15	大学院技術経営研究科(2019)	4.17
年度	値												
大学院技術経営研究科(2015)	4.02												
大学院技術経営研究科(2016)	4.16												
大学院技術経営研究科(2017)	3.98												
大学院技術経営研究科(2018)	4.15												
大学院技術経営研究科(2019)	4.17												
<p>学生_理解 経年変化</p>	 <table border="1"> <caption>理解</caption> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2015)</td> <td>4.06</td> </tr> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2016)</td> <td>4.28</td> </tr> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2017)</td> <td>4.09</td> </tr> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2018)</td> <td>4.25</td> </tr> <tr> <td>大学院技術経営研究科(2019)</td> <td>4.18</td> </tr> </tbody> </table>	年度	値	大学院技術経営研究科(2015)	4.06	大学院技術経営研究科(2016)	4.28	大学院技術経営研究科(2017)	4.09	大学院技術経営研究科(2018)	4.25	大学院技術経営研究科(2019)	4.18
年度	値												
大学院技術経営研究科(2015)	4.06												
大学院技術経営研究科(2016)	4.28												
大学院技術経営研究科(2017)	4.09												
大学院技術経営研究科(2018)	4.25												
大学院技術経営研究科(2019)	4.18												



学生\_満足  
経年変化



学生\_出席  
経年変化



## 第5節 FD実施経費報告書

部 局	FD研修・FD活動の内容	経費の用途 (購入物・旅費謝金)	執行額 (千円)	FD活動の効果 (簡潔に)
技術経営研究科	2020年02月12日 山口大学教育改善FD研修会		0	技術経営研究科教員全員が本研修を受講し、技術経営教育において「学修ポートフォリオ」が教育支援ツールとして重要であることの認識を深めた。
	2020年3月3日 クロスアポイントメント制度にもとづく国際学术交流に関する研修	講師謝金・旅費 1名	80	クロスアポイントメント制度における知的財産データベースの活用について研修を実施した。
		計	80	

## 第6節 来年度の課題

当研究科は社会人学生を対象としていることから、入学時の面接試験で双方向型の授業が可能かどうかを個別に判定しており、一般の学部学生への対応とは異なる面が多く、同一の方針での扱いには困難な点がある。また、教育プログラムについては同一の内容を日本語と英語の両方で実施しているが、対象とする学生の違いが大きく、授業の実施方法や成績評価においても同じ基準での対応には困難な点がある。このことから、当研究科の実態に即した授業改善に資する研修会やコンサルテーションを企画・実施していく必要があると考える。

## 第 20 章 共同獣医学研究科の F D 活動

共同獣医学研究科のFD活動は、共同獣医学部のFD 活動に参加する形で活動を行った。  
具体的活動内容に関しては、第11章共同獣医学部のF D活動 を参照されたい。

## 2019年度 山口大学 教学委員会 名簿

部局名	職名	氏名	任期	備考
	副学長（教育学生担当）	福田 隆 眞		大学教育機構長
大学教育機構	大学教育センター長	菊 政 勲		
〃	学生支援センター長	横 山 和 平		
〃	保健管理センター所長	奥 屋 茂		
〃	大学院教育センター長	上 西 研		
人文学部	教授	De Boissieu Michel	30.4.1～32.3.31	
〃	教授	和 田 学	31.4.1～33.3.31	
教育学部	教授	高 橋 俊 章	30.4.1～32.3.31	
〃	教授	木 谷 秀 勝	31.4.1～33.3.31	
経済学部	教授	成 富 敬	31.4.1～32.3.31	
〃	教授	武 本 Timothy	31.4.1～33.3.31	
理学部	教授	宮 澤 康 行	30.4.1～32.3.31	
〃	教授	山 中 明	31.4.1～33.3.31	
医学部	教授	河 野 裕 夫	31.4.1～32.3.31	
〃	教授	伊 東 克 能	31.4.1～33.3.31	
工学部	教授	佐 伯 隆	30.4.1～32.3.31	
〃	教授	赤 田 倫 治	31.4.1～33.3.31	
農学部	教授	竹 松 葉 子	30.4.1～32.3.31	
〃	教授	小 崎 紳 一	31.4.1～33.3.31	
共同獣医学部	教授	西 垣 一 男	30.4.1～32.3.31	
〃	准教授	下 田 宙	31.4.1～33.3.31	
国際総合科学部	教授	崎 山 智 司	30.4.1～32.3.31	
〃	教授	北 西 功 一	31.4.1～33.3.31	
事務局	学生支援部長	出 雲 武		
〃	学生支援部教育支援課長	福 田 孝		
〃	学生支援部学生支援課長	梅 木 哲 也		

2019年度 山口大学 学部・研究科FDコーディネータ 名簿

部局等	職名	氏名	備考
人文学部 人文科学研究科	教授	上田 由紀子	
教育学部 教育学研究科	教授	飯寄 信保	
経済学部 経済学研究科	教授	有村 貞則	
理学部 創成科学研究科(理学)	教授	宮澤 康行	
医学部(医学科) 医学系研究科	教授	藤宮 龍也	
医学部(保健学科) 医学系研究科	教授	堤 雅恵	
工学部 創成科学研究科(工学)	教授	柳原 宏	
	教授	佐伯 隆	
農学部 創成科学研究科(農学)	教授	小崎 紳一	
共同獣医学部 共同獣医学研究科	准教授	下田 宙	
国際総合科学部	准教授	村井 礼	
東アジア研究科	准教授	山本 周吾	
技術経営研究科	准教授	大島 直樹	

## 2019 年度 山口大学 大学教育センター 名簿

部 局 名	職 名	氏 名	備 考
大学教育センター	センター長	菊 政 勲	
//	主 事	猫 田 和 明	
//	主 事	上 野 秀 一	
//	主 事	高 橋 肇	
//	准教授	木 下 真	
//	准教授	林 透	
//	准教授	藤 原 勇	
//	講 師	岡 田 耕 一	
//	助 教	ADAMS KIRA LA MARRA	
//	助 教	KATERYNA OLHA	
//	助 教	渡 邊 裕 子	

令和元年度 山口大学 FD 報告書「山口大学の FD 活動」

令和 2 年 11 月発行

編集・発行 山口大学教育・学生支援機構、山口大学教学委員会

山口市吉田 1677-1

TEL (083) 933-5060 (学生支援部教育支援課)